宮遺跡

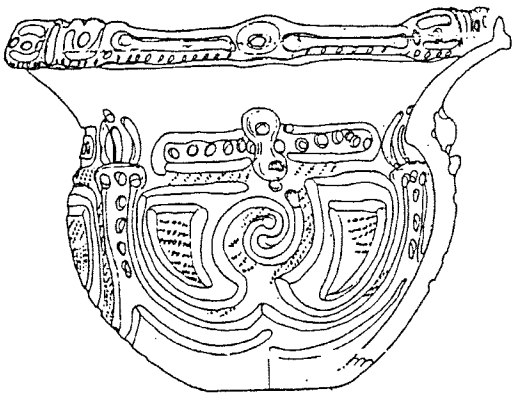
——中部高地の縄文晩期抜歯人骨・攻玉工房遺跡の研究——

1993・3

中条村教育委員会

宮遺跡

——中部高地の縄文晩期抜歯人骨・攻玉工房遺跡の研究——



1993・3

中条村教育委員会

序

昭和48年（1973）８月を中心に，米山一政先生及び小林孚先生の努力を持ってして宮遺跡の学術発掘調査がなされました。地権者宮尾正徳氏の情熱もあって，当時の中条村教育委員会教育長松本憲治氏の力に負うところが大きく，その基底には森嶋稔先生と当時の中条中学校山崎元先生との人間的交情もあって，村あげての文化事業としての調査でありました。調査には家庭に事情がありまして，ほとんど参加できなかったと言われる森嶋先生に変わって，若い学生のみなさんが向学の想いを燃して参集し，青春の日々の努力を重ねていただきました。

思えば宮遺跡は，昭和初期中条小学校に在職中の金井喜久一郎先生に注目され，当時小学生だった地権者の宮尾氏にそれは受けつがれて，昭和43年に始まった上水内郡誌の調査へと展開した。その中で重要な遺跡として信州大学医学部の鈴木誠教授と宮尾氏との共同調査もあって，昭和48年の調査を迎えることになりました。

おびただしい石器類と土器片との採集は，小中学生にとっては日常的な事であったし，村内に17個所にのぼる遺跡の中でも最大規模と思われるものでした。加えて土尻川ぞいの平地では最も良好な地形上の遺跡であってみれば自づから縄文の先住民も選んだことであろうと思われます。期待にたがわず遺跡の調査によってその価値は更に高まったのであります。

そして今日，遅ればせながら本報告を上梓するはこびとなったことも，御寛容願うと同時に心から喜ぶものであります。関係者皆様の並みならない努力に感謝の意を申し上げると共に，本書が広く活用され郷土の歴史を知る一助になることを願うものであります。

1993年１月16日

中条村教育委員会

教育長　石坂秀俊

例　　言

1．本書は1973年７月29日より８月11日まで14日間行った長野県上水内郡中条村大字中条字宮本2114番地（地権者　宮尾正徳　住所中条村大字中条2334番地―１）を中心として存在する宮（みや）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は中条村教育委員会の委託により，米山一政を団長とする宮遺跡発掘調査団が実施した。

3．本発掘調査報告書作成にあたっては，次のように分担した。

○遺構実測　小林　孚　小林秀夫　広瀬忠好　福島邦男　百瀬新治　矢口忠良　森山公一
矢島宏雄　原田勝美　中山　晋　佐藤信之　大久保邦彦

○遺物整理　小林　孚　下田由人他　須坂高等学校郷土班員　倉見　渡　鈴木　誠　西沢寿晃
（信州大学医学部第二解剖学教室）

○遺物実測　小林秀夫　百瀬長秀　森山公一　森嶋　稔

○写　　真　森山公一　森嶋　稔

4．本書の執筆は，記録を尊重し，一部手を加え本文として，文末に責任者の氏名を記した。遺物関係は百瀬長秀，森山公一，森嶋　稔が分担し行った。

5．本書の編集は千曲川水系古代文化研究所が行った。

6．本調査の調査資料，出土遺物，執筆出版関係資料等はすべて中条村教育委員会に保管，保存されている。

7．本調査並びに本報告作成にあたって，以下の方々から援助をうけた。記して深甚なる謝意を表したい。

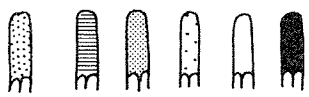
山崎　元　郷道哲章　翠川泰弘　小川忠博　児玉卓文　平林　彰　島田哲男　青木和明

凡　　例

1．縄文後・晩期の土器の表示は以下の通りである。

●遺物番号のうち○囲みは赤色塗彩，□囲みは黒色塗彩を示す。

●断面図のうち，１はローリングを受けた黒色砂粒を顕著に含む後期土器
２は灰白色～黄白色で混入鉱物をほとんど含まない晩期土器
３は石英粘を顕著に含む晩期土器
４は石英と雲母を顕著に含む晩期土器
５は胎土は在地的に見えるが他地域産の可能性ある土器
６はこの遺跡に一般的な胎土の土器である。



2．実測・拓本について　下平博行，田中正治郎，西香子の各氏に援助を願った。記して感謝したい。

本文目次

序
例言
凡例

第1章　調査の概要……1

第1節　調査に至る経過……1
第2節　調査の経過……1
第3節　調査の概要……2
1．調査の組織……2
2．調査区の設定と調査の方法……2
第4節　調査日誌……3
1．調査日誌の概要……3
2．検出遺構……3

第2章　宮遺跡の位置……6

第1節　地理的環境……6
第2節　歴史的環境……7

第3章　調査……8

第1節　検出遺構及び遺物……8
1．住居址……8
(1)　第1号住居址　(4)　第4号住居址
(2)　第2号住居址　(5)　第5号住居址
(3)　第3号住居址　(6)　第6号住居址
2．墳墓址……25
(1)　第1号墳墓址　(3)　第3号墳墓址
(2)　第2号墳墓址　(4)　第4号墳墓址
3．集石址……31
(1)　第1号集石址
4．土壙址……32
(1)　第1号土壙址

第２節　包含層出土の遺物 ……33
１．縄文時代の遺物……33
(1)　縄文中期の土器
(2)　縄文後晩期の土器
(3)　縄文時代の土製品及び石製品
(4)　縄文時代の石器
２．弥生時代の遺物……71
(1)　弥生後期の土器
３．古墳時代の遺物……72
(1)　古墳時代の土器
(2)　古墳時代の鉄器

第４章　宮遺跡調査からの課題 ……73

第１節　遺跡の構造……73
１．包含層資料からみる遺構の所属時期について……73
２．各遺構の時間的な位置と構造……74
３．第１号墳墓址の提起するもの……76
(1)　宮遺跡第１号墳墓址出土人骨について
(2)　第１号墳墓址をめぐって
第２節　遺物群をめぐる課題 ……81
１．攻玉工房遺跡として……81
２．宮遺跡の石器群と石器素材の搬入について……83

第５章　総　括 ……83
――宮　遺跡の構造と性格の変遷――
（付稿）遺跡で拾った緑の石―宮　遺跡の翡翠―……87
参考文献
付　　宮遺跡試掘調査報告書

表　目　次

第１表　宮遺跡の遺構と時間的位置……74
第２表　宮遺跡出土土器の変遷……75
第３表　人骨計測表……79
第４表　宮遺跡の石器点数と石器素材……84

挿図目次

第１図　宮遺跡の地形と調査位置……4
第２図　宮遺跡及び宮本地籍全景……4
第３図　宮遺跡調査遺構全体図……5
第４図　宮遺跡の地形……6
第５図　宮遺跡の周辺の地形と遺跡分布……7
第６図　第１号住居址……8
第７図　第１号住居址出土の土器……9
第８図　第１号住居址出土の石器……9
第９図　第２号住居址……10
第10図　第２号住居址出土の土器……11
第11図　第２号住居址出土の石器……11
第12図　第３号住居址……12
第13図　第３号住居址出土の土器……13
第14図　第３号住居址出土の石器……14
第15図　第４号住居址の埋甕……15
第16図　第４号住居址……15
第17図　第４号住居址出土の石器……16
第18図　第５号住居址……17
第19図　第５号住居址の埋甕……18
第20図　第５号住居址出土の石器①……19
第21図　第５号住居址出土の石器②……20
第22図　第５号住居址出土の石器③……21
第23図　第６号住居址と第１号壙址……22
第24図　第６号住居址の埋甕……24
第25図　第６号住居址出土の石器……25
第26図　第１号墳墓址……25
第27図　第２号墳墓址……27
第28図　第２号墳墓址出土の石器及び土偶……28
第29図　第３号墳墓址と出土遺物……29
第30図　第４号墳墓址及び埋甕……30
第31図　第１号集石址……31
第32図　包含層出土の土器①……37
第33図　包含層出土の土器②……38
第34図　包含層出土の土器③……39
第35図　包含層出土の土器④……40
第36図　包含層出土の土器⑤……41
第37図　包含層出土の土器⑥……42
第38図　包含層出土の土器⑦……43
第39図　包含層出土の土器⑧……44
第40図　包含層出土の土器⑨……45
第41図　包含層出土の土器⑩……46
第42図　包含層出土の土器⑪……47
第43図　包含層出土の土器⑫……48
第44図　宮尾正徳氏表採資料①……49
第45図　宮尾正徳氏表採資料②……50
第46図　包含層出土の縄文中・後期の土器……52
第47図　宮尾正徳氏表採資料③……53
第48図　包含層出土の縄文晩期の土器……54
第49図　宮遺跡出土の土偶……54
第50図　包含層出土の土製品……55
第51図　包含層出土の石製品……57
第52図　包含層出土の石器①……59
第53図　包含層出土の石器②……60
第54図　包含層出土の石器③……61
第55図　包含層出土の石器④……62
第56図　包含層出土の石器⑤……63
第57図　包含層出土の石器⑥……64
第58図　包含層出土の石器⑦……65
第59図　包含層出土の石器⑧……66
第60図　包含層出土の石器⑨……67
第61図　包含層出土の石器⑩……68
第62図　包含層出土の石器⑪……69
第63図　包含層出土の石器⑫……70
第64図　包含層出土の弥生時代後期土器……71
第65図　包含層出土の土師器及び鉄鏃……72
第66図　第１号墳墓址出土の第１号人骨……77
第67図　第１号人骨の抜歯……80
第68図　球状土製品集成……82
付図　宮遺跡　緑の石拾集点分布図……91

図版目次

図版１　宮遺跡の地形
（手前土尻川，遺跡段丘上北方より）
宮遺跡の全景（南方より）
図版２　調査地区（南より）
調査地区（北より）
図板３　宮遺跡東側丘陵（赤松下，古墳）
東丘陵の宮の古墳
図版４　宮遺跡調査区全景
図版５　第２号住居址
第２号住居址の石囲炉
図版６　第６号住居址
第６号住居址の石囲炉
図版７　第２号住居址の埋甕
第３号住居址の埋甕
図版８　第４号住居址の埋甕
第５号住居址の埋甕
図版９　第６号住居址の埋甕
第２号住居址出土の土器
図版10　第１号墳墓址の調査状況
第１号墳墓址と第１号人骨出土状況
図版11　第１号墳墓址の蓋石
第１号墳墓址と第２号人骨出土状況
図版12　第１号人骨近影
第２号人骨近影
図版13　第２号墳墓墓址
第２号墳墓址の土偶出土状況
図版14　墳墓・集石址群全景
図版15　第３号墳墓址
第３号墳墓址の土器片円板出土状況
図版16　１形土器　石剣　石錘　分銅形土製品
調査風景
図版17　鉄鏃の出土
土師器の出土
図版18　調査開始風景
現地説明会風景（中条小五・六年生）
図版19　縄文中期初頭の土器
縄文中期中葉の土器
図版20　縄文中期後葉の土器①（表）
縄文中期後葉の土器①（裏）
図板21　縄文中期後葉の土器②（表）
縄文中期後葉の土器②（裏）
図版22　縄文中期後葉の土器（表）
縄文中期後葉の土器③（裏）
図版23　縄文中期末葉の土器①（表）
縄文中期末葉の土器①（裏）
図版24　縄文中期末葉の土器②（表）
縄文中期末葉の土器②（裏）
図版25　縄文中期末葉の土器②
縄文中期末葉の土器②
図版26　包含層出土の土器（縄文中後期）
図版27　縄文後期・注口土器の注口
縄文後期・網代底
図版28　縄文後期・網代底
図版29　縄文晩期・条痕文土器
弥生後期・箱清水式土器
図版30　耳飾り
分銅形土製品
図版31　土偶片　ミニチア土器　土器片円板
敲石など
図版32　石冠　独鈷石　石剣
石棒　石弾　石錘
図版33　縄文時代の石器①打石斧
図版34　縄文時代の石器②磨石斧
砥石，石錐，楔形石器
図版35　縄文時代の石器③横刃　周刃石器　掻器
図版36　縄文時代の石器④石鏃
図版37　縄文時代の石器⑤石鏃
図版38　各種磨石
図版39　翡翠原石など

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

昭和30年代の末から始まった上水内郡誌原始古代編の調査は，40年代前半期まで郡内の悉皆調査を行った。その中でいくつかの重要遺跡が浮上し，その調査研究が志向された。その中の一つに，中条村宮本にある「宮遺跡」があった。昭和43年８月５，６日と試掘調査が行われたが，残念ながら本調査には至らなかった。試掘調査の動機となったのは，地主の宮尾正徳氏の採集し保管されていた遺物であった。その多数の土器片や石器類は瞠目させられるものであった。又中条中学校資料室にも注目すべき資料があって，上水内郡誌原始編の充実のためには目逃すことのできない遺跡であったためである。だが諸般の事情のため俄かには実現しなかった。

その後年，中条中学校長の山崎　元氏がこの遺跡をたびたび訪れ，資料の採集に努められ，とりわけ翡翠（ヒスイ）の攻玉製品や半製品など原石が注目された。宮遺跡は翡翠の工房遺跡としての性格が加わったからである。中条村教育委員会との調整が行われ，同教育委員会を主体者として地主及び多数の村民の皆さんの応援を得て調査は昭和48年夏に行われることとなった。しかし山崎　元校長はすでに退任し，再度の動機を与えた方は不在の調査となったのも印象的であった。

第２節　調査の経過

諸準備が整って調査の段階になり，森嶋の参加が可能でなくなった。母の結腸手術の為である。急ぎ団長を米山一政氏に依頼し，調査主任を小林　孚，副主任を小林秀夫として編成を整えた。調査員には千曲川水系古代文化研究所の所員，信州大学，立正大学の学生，須坂高校郷土部員，長野吉田高校地歴班員の生徒をあて，調査協力として地元の教育委員，文化財調査委員，公民館関係者が日割りで出動することとなった。宿舎は地元の公会堂をあて，賄は地元の婦人会があたってくださることになった。体制が整い調査が実施にこぎつけたのは，昭和48年７月29日で，14日間（２週間）が計画された。それは暑い真夏の太陽の下での作業であった。

調査は難行した。縄文後晩期の遺跡の通常性を見るように，炉址はまず検出されても黒色土の中の床面，壁面の検出は容易ではなかった。張り床をたよりにその限界をさぐり続け，又集石址に悩まされることになった。しかし中条小学校生を中心とした見学会を行ったり，若い調査員の努力が重ねられ当初の目標に迫った。調査の最終段階で縄文晩期と見られる墳墓址が検出されるに及んでにわかずいた。蓋石があり，一部平石を用いた半組合式箱形石棺で，頭蓋骨のみ上部位と下部位に２個体出土し一驚した。さっそく信州大学の鈴木誠先生に連絡し調査を願った。宮遺跡の価値を一層高めるものとして貴重な収穫であった。調査は多くの知見を得て８月11日すべてが終了し，整理研究のため須坂高校郷土部室へ搬ばれ，現場作業はすべて完了した。　（小林秀夫）

第3節　調査の概要

1．調査の組織

発掘調査の主体者　中条村教育委員会　教育長松本憲治（長野県上水内郡中条村大字中条2549-2）

調査団の構成

団　　長　米山一政（日本考古学協会員　長野県文化財専門委員）

調査主任　小林　孚（日本考古学協会員　長野県須坂高校教諭）

副 主 任　小林秀夫（日本考古学協会員　下水内郡栄村堺中学校教諭）

調 査 員　森嶋　稔　原田勝美　矢口忠良　広瀬忠好　福島邦男　中山　晋　百瀬新治
森山公一　矢島宏雄　広瀬敏和　若槻隆雄　大竹俊正　原山　誠　斉藤保雄
鈴木　宏　藤本　宏　大久保邦彦　須佐安登　小林竜起　佐藤信之
須坂高校郷土部　下田由人他13名
長野吉田高校地歴班　新井和利他11名

特別調査　鈴木　誠（日本考古学協会員　信州大学医学部第二解剖学教室教授）
西澤寿晃（信州大学医学部第二解剖学教室助手）

調査協力　窪田一司　酒井秀蔵　早川知典　白沢幸正　岡村　茂　中沢保雄　山野井文雄
宮尾達雄　新井盛登　宮脇良治　本道　元　酒井昭義　小林富栄　大日方元芳
宮尾吉司　児島千弘　高山昆男　宮尾好郎　海沼勅夫　宮下俊三　松本賢一郎
大西清貴　北沢　亘　大内茂人　山本孝子　宮沢要　久保田千春　山野井辰雄
大久保尊　竹内　登　大日方栄三郎　　宮尾正徳（地権者）

事 務 局　松本憲治（教育長），酒井　武（次長），北沢信彦（主事），宮尾芳雄（主事補）

2．調査区の設定と調査の方法

調査の対象となる遺跡の所在地は――長野県上水内郡中条村大字中条字宮本2114番地――であり，所有者は宮尾正徳氏である。昭和43年（1968）8月5，6日に行った試掘調査結果を参考に，昭和48年（1973）7月29日より8月11日まで本調査として次のように調査区を設定した。

磁北から東西にA～Oとアルファベット区をふり出し，南北方向に1～16へと2m間隔にグリッドを設定した。東西およそ20m，南北および32mの（600m²）の範囲をカバーした。したがって調査はグリッドによる平面発掘調査法とした。遺構の計測は平板測量と簡易遺り方測量を併用した。

標準層序は，上層から耕作土（20cm），黒色土（15cm），褐色土（8cm），段丘礫を含む黄色粘土である。遺構は黒色土中に黄色土の張り床，又は褐色土を掘り抜いていた。

調査結果，調査面積は905m²であった。　（小林秀夫）

第４節　調査日誌

１．調査日誌の概要

７月29日　調査開始式。地区設定，表土はぎ。調査区南西側から礫群が検出されるが性格不明。地形測量開始。

７月30日　（１時雨）礫群東側の精査。礫群を整理していくと，14基のピット状の遺構としてまとまる。

７月31日　地形測量完成。ピット内を掘り始める。浅いピットもあり，遺構としてまとまるもの８基。各地区から土器片及び石製品多数出土。

発掘全区へ広げる。

８月１日　前日に続いて，各調査区の掘り下げを行う。

南半地区から多数土器片出土する。

８月２日　層序確認のためトレンチを入れる。３層に分層されることが判明する。第１層は，表土層，第２層は，黒色土層で，土器が包含されている。第３層は，黒褐色砂質土層で遺構掘り込み面である。第４層は明褐色粘土を含む段丘礫層である。

８月３日　Ｊ―14地区に集石遺構が２基検出される。遺構内から骨片，土器片，土製円板が出土した。

８月４日　Ｉ－４区から炉址が検出される。

８月５日　前日検出された炉址周辺を中心に，調査区を拡張するが住居址と明確にならない。

耳栓，土錘等出土する。

８月６日　住居址が３基判明する。ピット群を中心に外１号住居址，炉址を中心に第２号住居址調査地南西側に，円形のプランが確認された住居址を第３号址とした。出土した遺物から，第１号住居址，第２号住居址は，縄文時代後期及び晩期，第３号住居址は，縄文時代中期と推定される。また，Ｉ―15区，Ｋ―15区から石剣が出土した。前日発見されている特殊な遺物や，集石，配石などの検出状況から，縄文時代後期の集石遺構と思われる。

８月７日　前日明確となった，第３号住居址の掘り下げを行う。Ｋ－５，６区，Ｌ－５，６区を中心に，炉址，柱穴が検出され第４号住居址とする。その北側に第６号住を確認した。

８月８日　調査区北端中央部から，平板石を組んだ墳墓祉が検出された。石棺内から人骨が上部と下部に２体分が出土した。

Ｋ－７，８区，Ｌ－７，８区からほぼ円形のプランを持つ第６号住居址が検出された。

８月９日　各遺構の掘り上げと，遺構の実測，写真撮影。

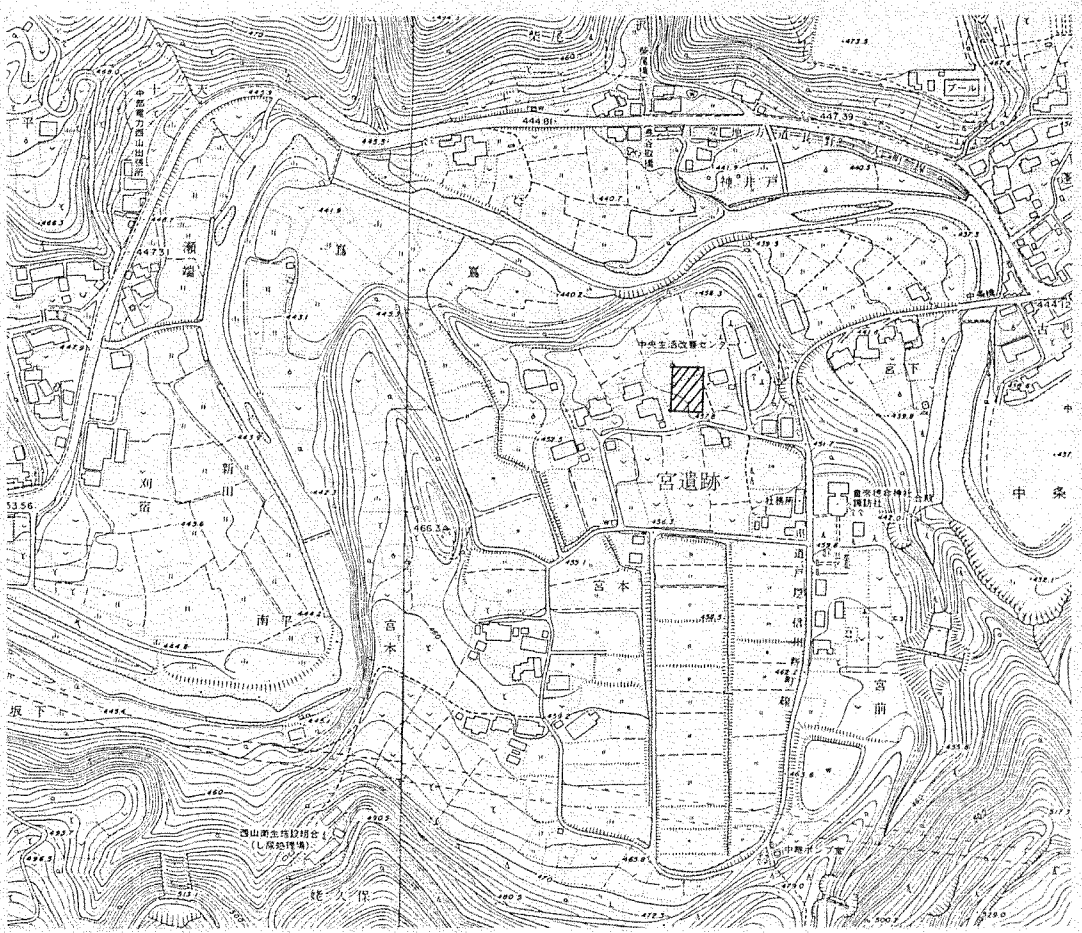
８月10日　信州大学医学部，鈴木誠教授，西沢助手による人骨の取り上げと，鑑定が行われた。

２．検出遺構

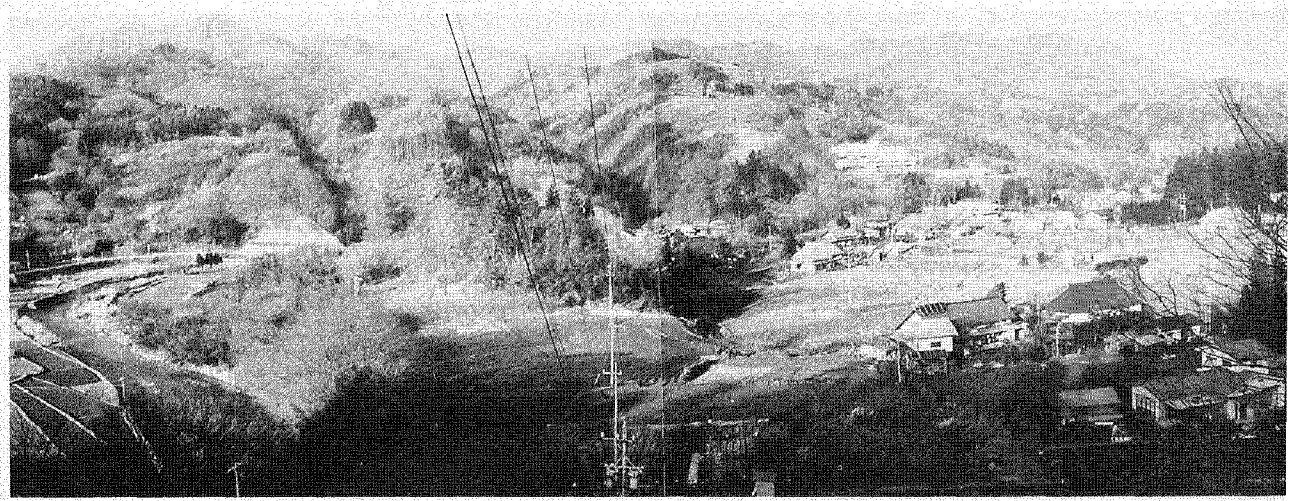
調査によって検出された遺構は，次の通りである。

縄文時代住居址　６基　　墳墓祉　４基　　集石址　１基　　土壙祉　１基

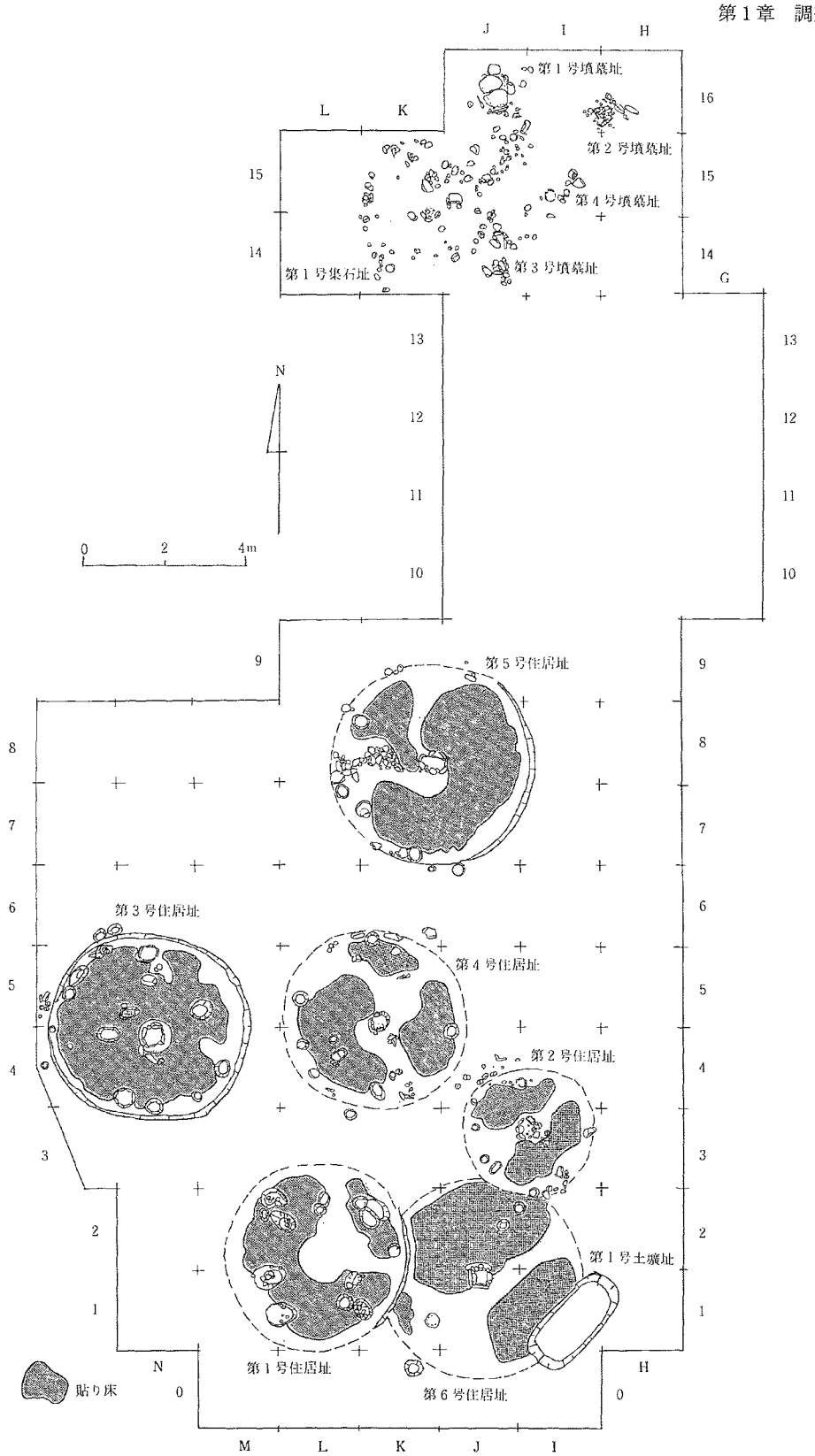
（小林秀夫）



第1図　宮遺跡の地形と調査位置



第2図　宮遺跡及び宮本地籍全景



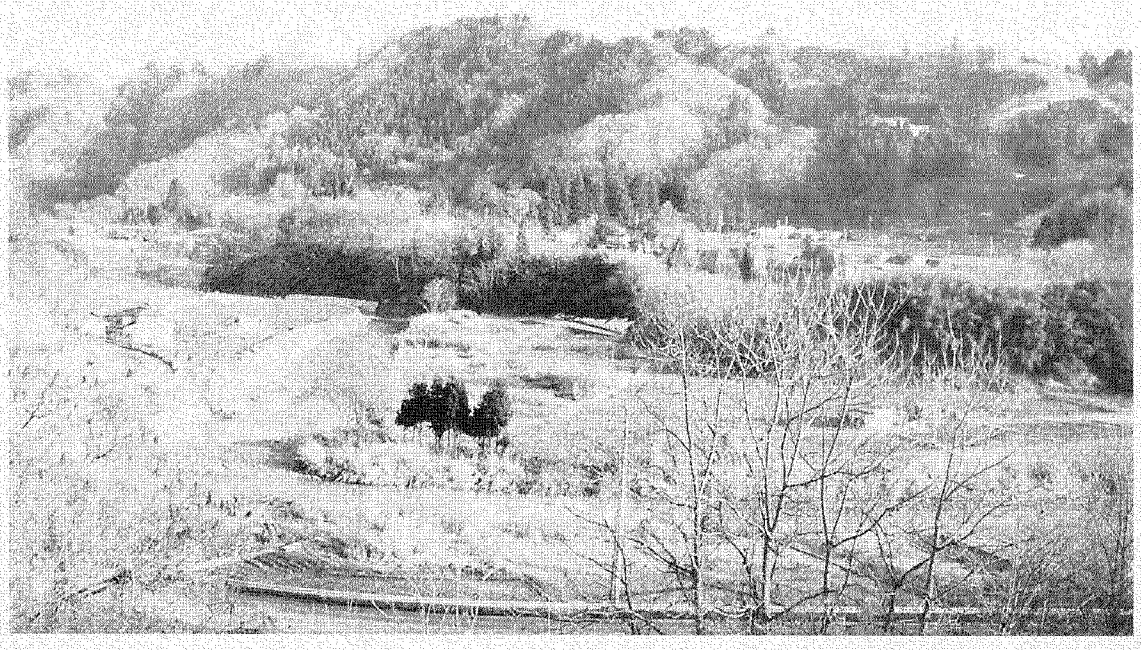
第３図　宮遺跡調査遺構全体図

第2章　宮遺跡の位置

第1節　地理的環境

宮（Miya）遺跡は長野県上水内郡中条村大字中条字宮本2114番地に存在する。この地域は通称西山地方と呼ばれているがそれは善光寺平からの呼称である。基本的には中部高地信濃の中南信と東北信をへだてる背稜山地で，中央山地の北部に位置している。基盤は第三紀の小川層に属し中新世末に堆積したまだ若い地盤である。方々の露頭には魚類，貝類の化石や哺乳類の化石，自然の渚の波紋や軟体生物の生紋も見られる主として砂岩質の隆起準平原地帯であると言うことができる。したがって基盤は軟弱で風化浸蝕がはげしく小さくても急傾斜面の谷を形成し，風化表土の通常的な地辷り地帯を構成し地域住民を悩ましている。

その山地を東流する代表的な河川は犀川であるが，その犀川の支川土尻川によってこの地域は浸蝕構成されている。宮遺跡の存在する宮本地籍は土尻川の大きく曲流するほぼ一辺が400m程の約16haの段丘状台地で，皇足穂命神社がある。宮遺跡はその中央北の段丘縁辺に近く，微高地上に位置している。東に低い丘陵があり，古墳かと見られる小円丘もある。　（小林　孚）

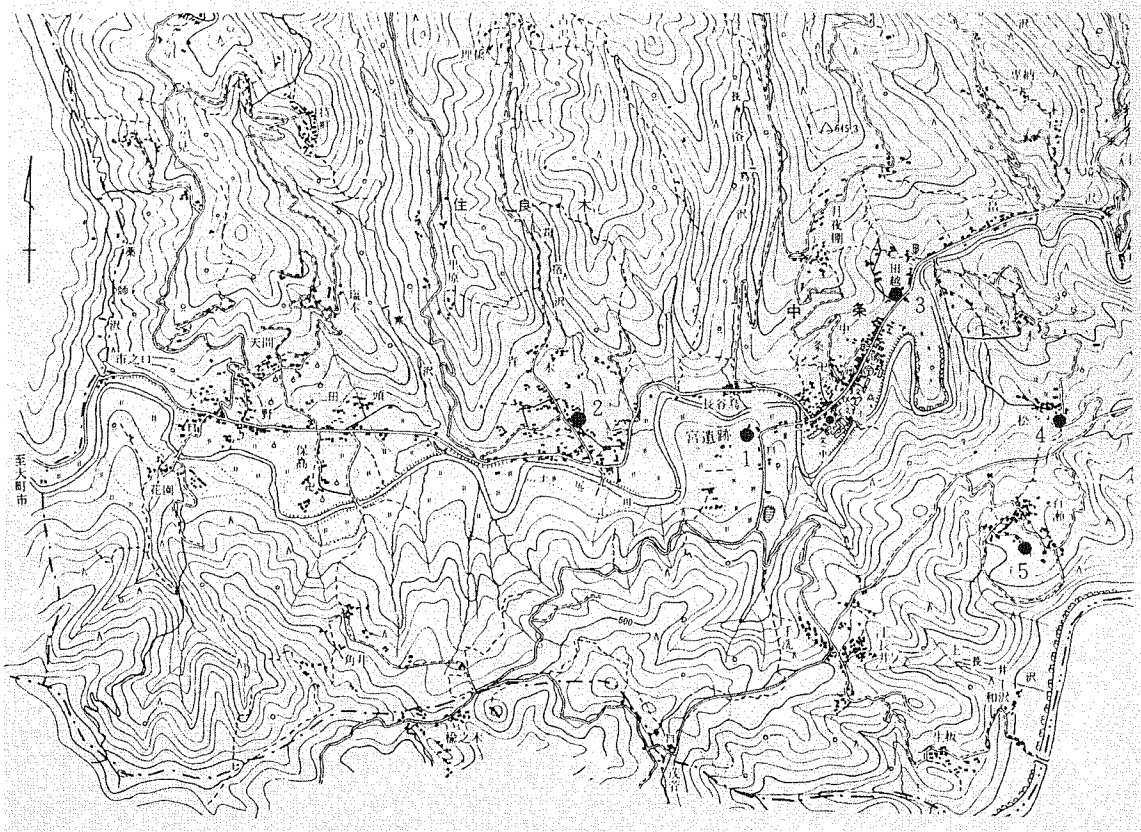


第4図　宮遺跡の地形（中央の段丘上・手前は土尻川，県道長野大町線）

第2節　歴史的環境

宮遺跡周辺の歴史的環境について見ておきたい。宮遺跡では現在までのところ最も古い資料は縄文前期のものでこれは散見する程度のものである。しかし縄文中期後葉から資料が増加し，後期から晩期にかけてその頂点に達する。また5世紀代に始まり6，7世紀代の古墳時代土師器から10世紀代の古代に属する土師，須恵器なども得られているのを注目しておきたい。

地理的環境でもふれたようにこの地域は常習的な地辷り地帯である。したがって確認できる遺跡はすくなく，長野県史地名表に記載されているものは17遺跡である。そのほとんどは縄文時代に属する遺跡で，5遺跡のみで土器資料が採集されているが，8遺跡は打製石斧だけの採集にとどまっている。これは母村集落的遺跡に対して，出作り小屋的遺跡，焼畑的遺跡と遺跡構造をも示唆するもので，縄文中期以降の生業とのかかわりを無視しがたい在り方である。後晩期の資料を出す遺跡は今のところ宮遺跡のみであるが，土尻川の縁辺段丘上で水とのかかわりにおいても良好である。又，宮遺跡からは翡翠（ひすい）の攻玉関係資料が採集されているが，北陸地方の原産地と千曲川水系を結ぶ遺跡点としても注目される。それは組合式箱形石棺とみられる墳墓址出土の第1号人骨抜歯例と共に，地域間交流を表現する検討課題の中に大きく位置づいているものである。（小林　孚）



第5図　宮遺跡の周辺の地形と遺跡分布　1．宮　2．青木　3．処崎　4．松之木　5．百瀬

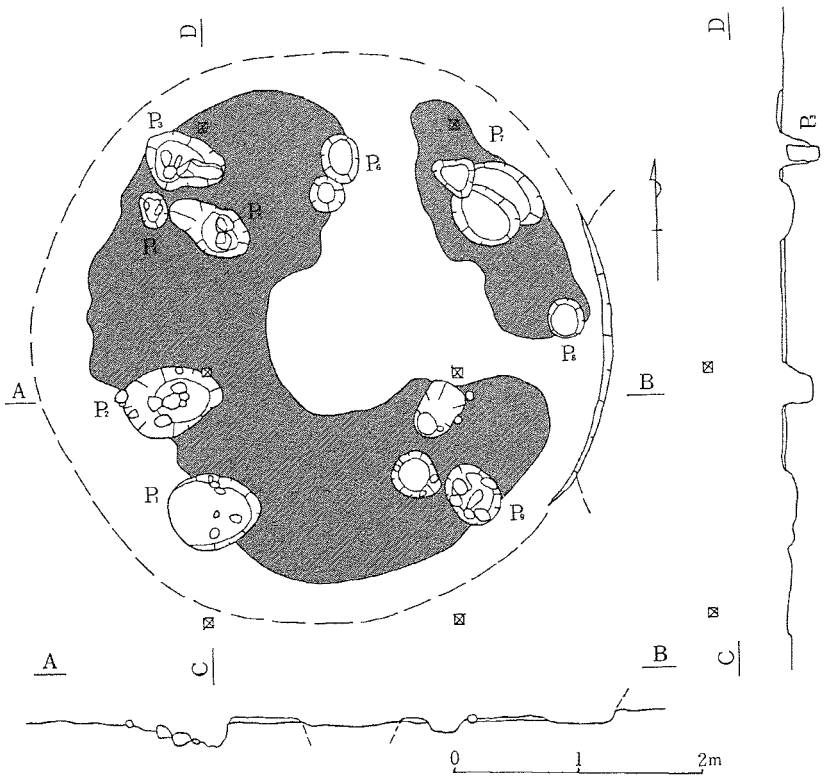
第3章　調　　査

第1節　検出遺構及び遺物

1．住居址

(1)　第1号住居址（第6，7，8図）

遺構　第1号住居址は調査区の南端域L—2を中心に検出された。ほぼ直径4.5mの円形プランと見ることができるものである。壁面は東壁の一部が孤状に検出されたのみで6分の1を除いて他は検出できなかった。この6分の1の東壁によって，第6号住居址プランを切断し，第1号住居址がより新しい構築であることが判明する。床面は耕作による破壊が進んでおり，全体には確認できなかったが黄褐色の砂質粘土による貼り床が行われており，かなりの部分残存していた。炉の位置はほぼ中央であるらしいが，焼土や灰，炉縁石などまったく残存しなかった。柱穴は9個所程円形配置に認められたが，礫石の混入もあって確認することは出来なかった。



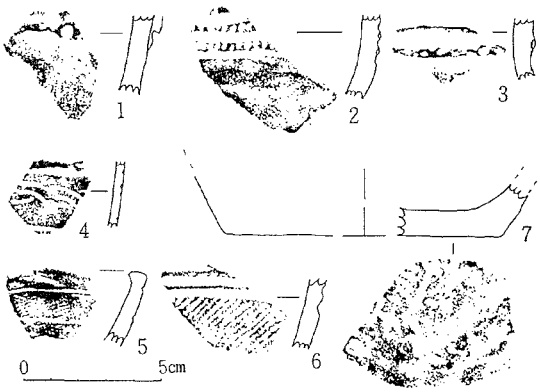
第6図　第1号住居址

遺物の出土状況は，覆土中に縄文中期末から後期にかけての資料が混在して出土し，この住居址の時間的位置を早急に決定することが困難であった。

しかし第6号住居址よりも新しいという新旧関係を考慮に入れると，第6号住居址の埋甕が中期末と思われるものより新しいとする以外そ

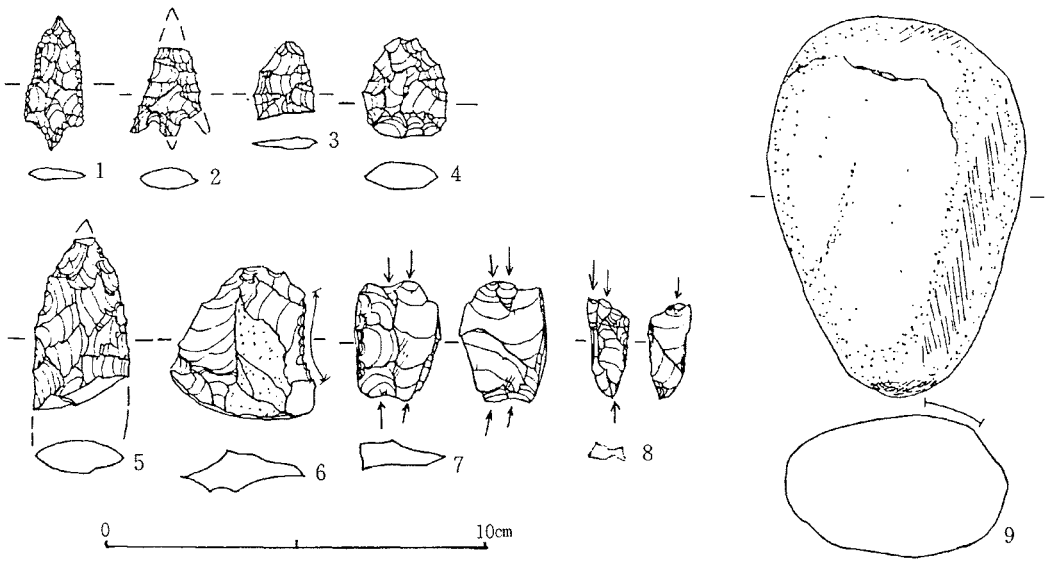
の時間的位置を知ることはできない。したがって第1号住居址の時間的位置を，最も新しい資料である後期堀之内期と仮定しておきたい。（森山公一）

遺物　土器と石器の概要にふれておきたい。土器群は堀之内Ⅰ期が最も新しい所属時期である。無文の深鉢粗製土器群の多さに比べて，精製土器群の量がきわめてすくない。図示したのはその一部であるけれど，粗製の深鉢群は7のように底面に網代痕がほぼ例外なく行われているのが普遍的である。精製土器は小形から中形の深鉢が多く，注口土器もある。細い隆線に特徴的な刻み目と眼鏡形の貼付文の土器もみられる。沈線と縄文の組み合わせた土器は特に小粒で整った単節縄文が行われている。



第7図　第1号住居址出土の土器

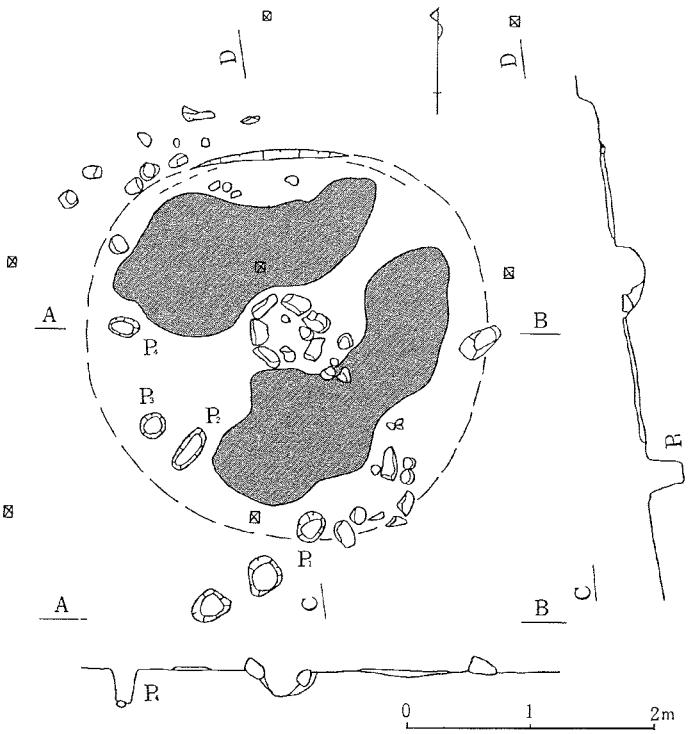
石器は石鏃（1～4）石槍（5）掻器（6）楔形石器（7，8）磨石がある。石鏃は珪岩製のものが多く，図示したものはその例である。他に頁岩製のものが若干ある。有脚鏃が圧倒的に多く，無脚鏃はすくない。未製品もみられる。5は頁岩製の石槍で基部を欠いている。この時期の資料としては多くないものであって貴重である。6は珪岩製の掻器であるが，刃部は内弯する抉入状掻器である。刃部に入念な掻刃部を構成している。楔形石器は二点とも頁岩製である。上下両端からの剝離が入る良好な資料である。砂岩製の磨石が得られている。第三紀の砂岩転石であろうが，硬度は高い。周辺に擦痕がある。石材中，黒耀石は量的にすくないが多く剝片である。



第8図　第1号住居址出土の石器

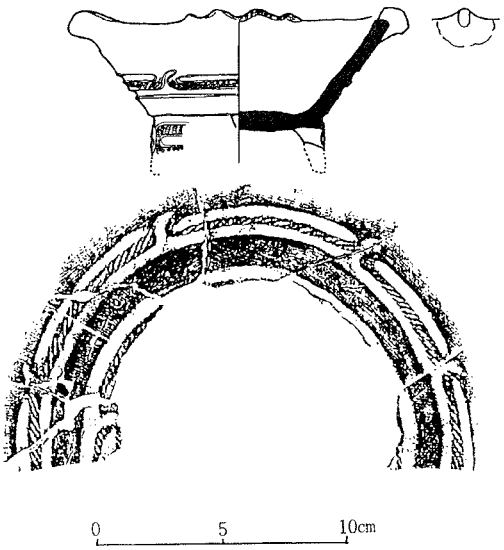
(2) 第2号住居址（第9，10，11図）

遺構　本住居址はI－3グリッドを中心に，I－4，J－3，4に及ぶものであった。7個と推測される炉縁石を中央に据えた円形プランと思われ，直径は3.2m程のものである。北側に一部壁高10cmの壁面を残しているが，7分の1程度の孤状である。南側で一部第6号住居址の貼床と思われる部分を切っているので，縄文中期末よりは新しいプランである，新旧関係はその一点のみの所見であって，他に遺構の切り合い関係はない。炉はすでにふれたものであるが7個の炉縁石と推定されるが，南側の石一個分が欠失している。したがって残存するのは6個で，人頭大よりやや小ぶりの安山岩質のものが5個と砂岩質のものが1個である。そのうち安山岩質のもの1個は火熱を受けて3個に破壊しており，その半分位を欠いている。炉内部はしたがって強い火熱を受けており，焼土が残存していた。木灰類，炭化物は検出されなかった。炉に用いた砂岩礫は近くで調達できたとしても，同質の安山岩礫は求められずすくなくとも犀川流域からか，大町からの持ちこみを必要としている。床面は黄褐色の砂質粘土で貼床されていたと見られ，段丘礫層上の黒色土内に残存していた。柱穴とするものは，南西側に数個見られるが，主柱穴とすることはできない。この住居址には従って主柱穴を確認することはできない。3.2mという小形の住居址であることも考慮に入れると，柱を持たない垂木を寄せた構造を想定させる。残存する北側の壁面と，第6号住居址を切る南側の貼床面から，ほぼ3.2mプランの住居址と求められるが，充分な必要条件とは言いがたい。若干不確定な要素を持つ住居址である。遺物の出土状況は，第1号住居址と同様であるが，貼床面上から図示した土器及び石器が検出されている。晩期前半期の時間的位置を与えることができる。（福島邦男）

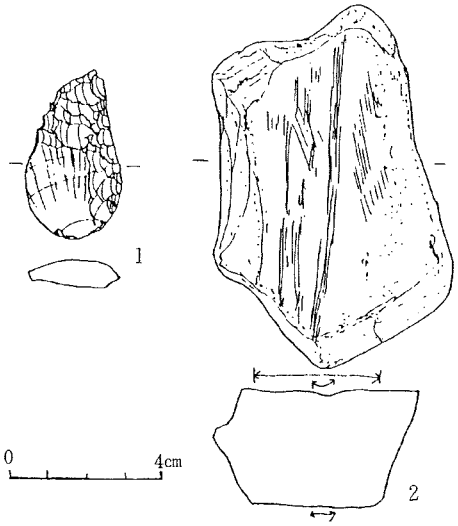


第9図　第2号住居址

遺物　第2号住居址出土の土器を代表させるのはなかなかに難しい作業であったが，床面出土の遺物をもって代表させることとした。なお石囲炉の構造が晩期前半期と同様であることも根拠としている。戸倉町円光房，長野市宮崎遺跡例をあげることができる。図示し



第10図　第2号住居址出土の土器



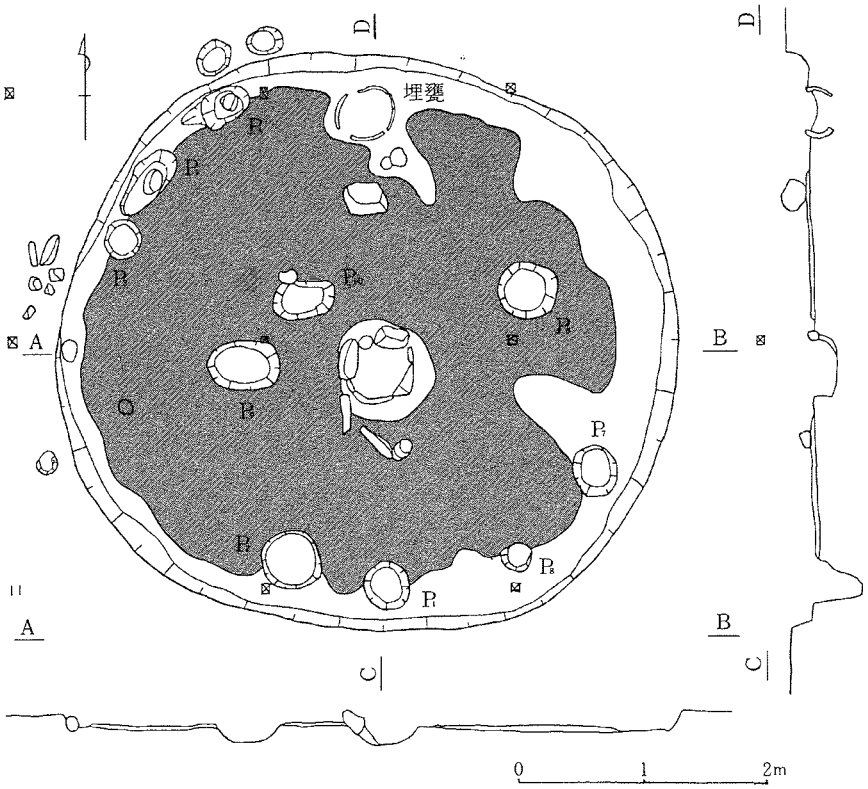
第11図　第2号住居址出土の石器

た土器の1点は高台付の皿形土器である。三叉文状の沈線を組み合わせ縄文を充填するもので，前出の宮崎遺跡第2号住居址の出土例に最も近い。精製の黒色土器で佐野Ⅰb期に入るものと言える。縄文晩期前半期の良好な資料で，ほぼ住居址をこの期としてよい。なお包含層遺物中には凸帯文系の土器をはじめ，かなりこの期の土器がまとまって出土していることも留意されねばならないところである。

第11図は積極的にこの期の石器と言える床面出土のもののみにとどめた。1は緑色凝灰岩製の石槍様の石器未製品であろう。製作途上の中間製品であって，他にも石鏃など，珪岩製，頁岩製の未製品も本住居址の覆土内から得られているが割愛した。2は砂岩製の砥石である。明確な凹みが表裏に一条ずつあり，他にも若干の凹みがある。啄製で成形したものとみられ，荒砥ぎ調整の上研磨用の砥石としている。丸味を帯びた条痕からみれば，攻玉用の砥石であろう。この資料が包含層出土の球状土製品や翡翠の原石の存在などと加わり，翡翠の攻玉工房址の時間的位置となり得るであろうか。課題として残されている。

(3)　第3住居址（第12，13，14図）

遺構　本住居址は，N—4を中心にO—4，M—4，O—5，N—5，N—5グリッドに検出された切り合いのない単独の住居址である。石囲炉を中心に置き，直径約5mの円形プランである。約15cmと切り込みのすくない壁面が全周に認められ，床面はやや荒れているが黄褐色砂質粘土による段丘河床礫上に行われた貼床である。床面施設として，北壁に埋甕が一点認められた。柱穴は9個見られるが，壁面にそったものと石囲炉の近くのものがあり，やや規格性がない。炉は数個の炉縁石をのこすのみであるが，ほぼ50cm四方の大形のものであったものと見られる焼土が残されていた。東南側の石は抜かれていて存在しない。安山岩を用いたものである。埋甕は先にもふれたよ



第12図　第３号住居址

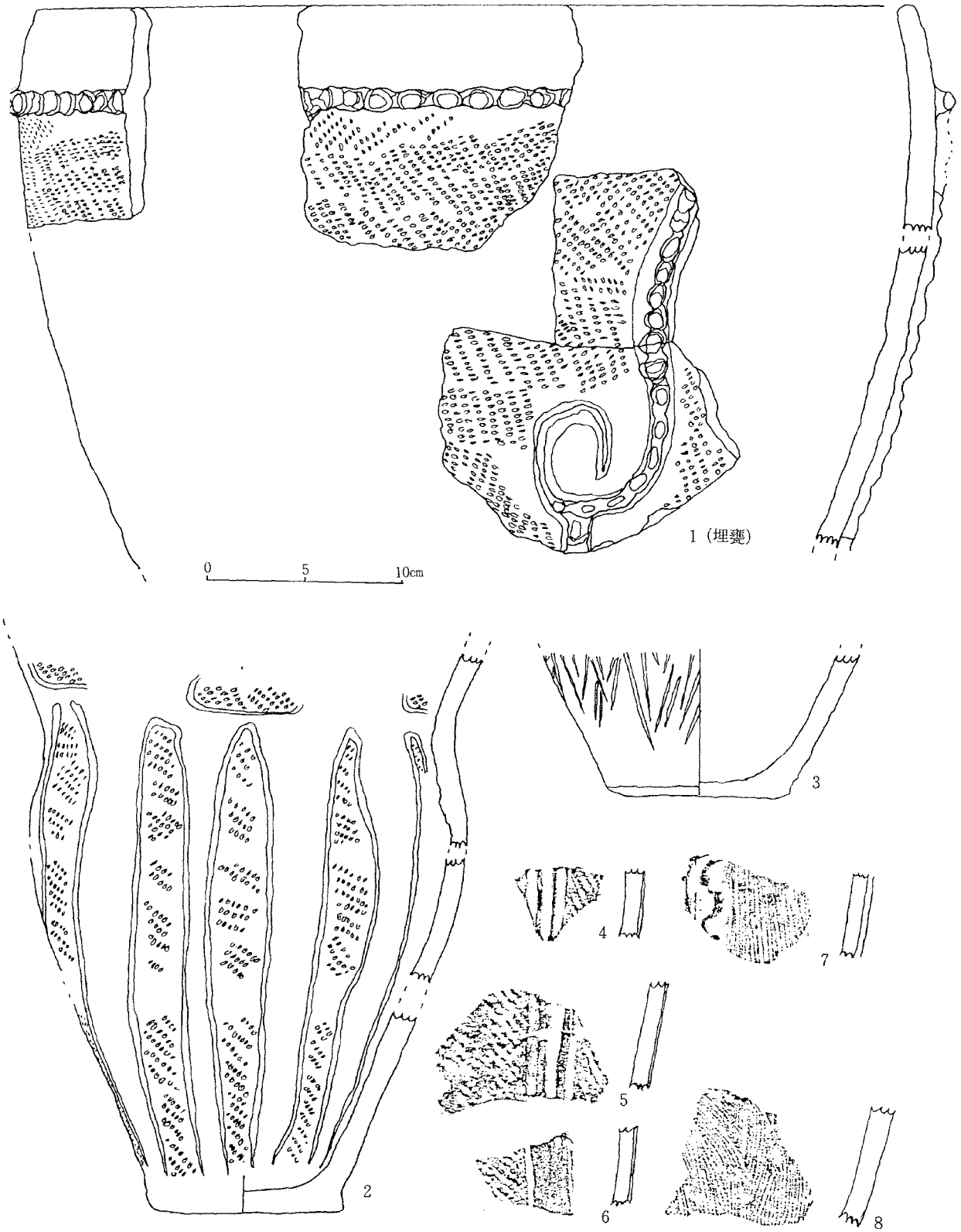
うに，床面下施設として床面において検出されたもので，積極的にこの第３号住居址築造の時期にかかわるものであることが注目される。

遺物の出土状況は埋甕と同様にして，縄文中葉末葉の土器が床面直上に集中し，覆土中には縄文中期末葉の土器と後晩期の土器が混在して出土した。耕作による攪乱である。石器類は豊富に床面で検出された。

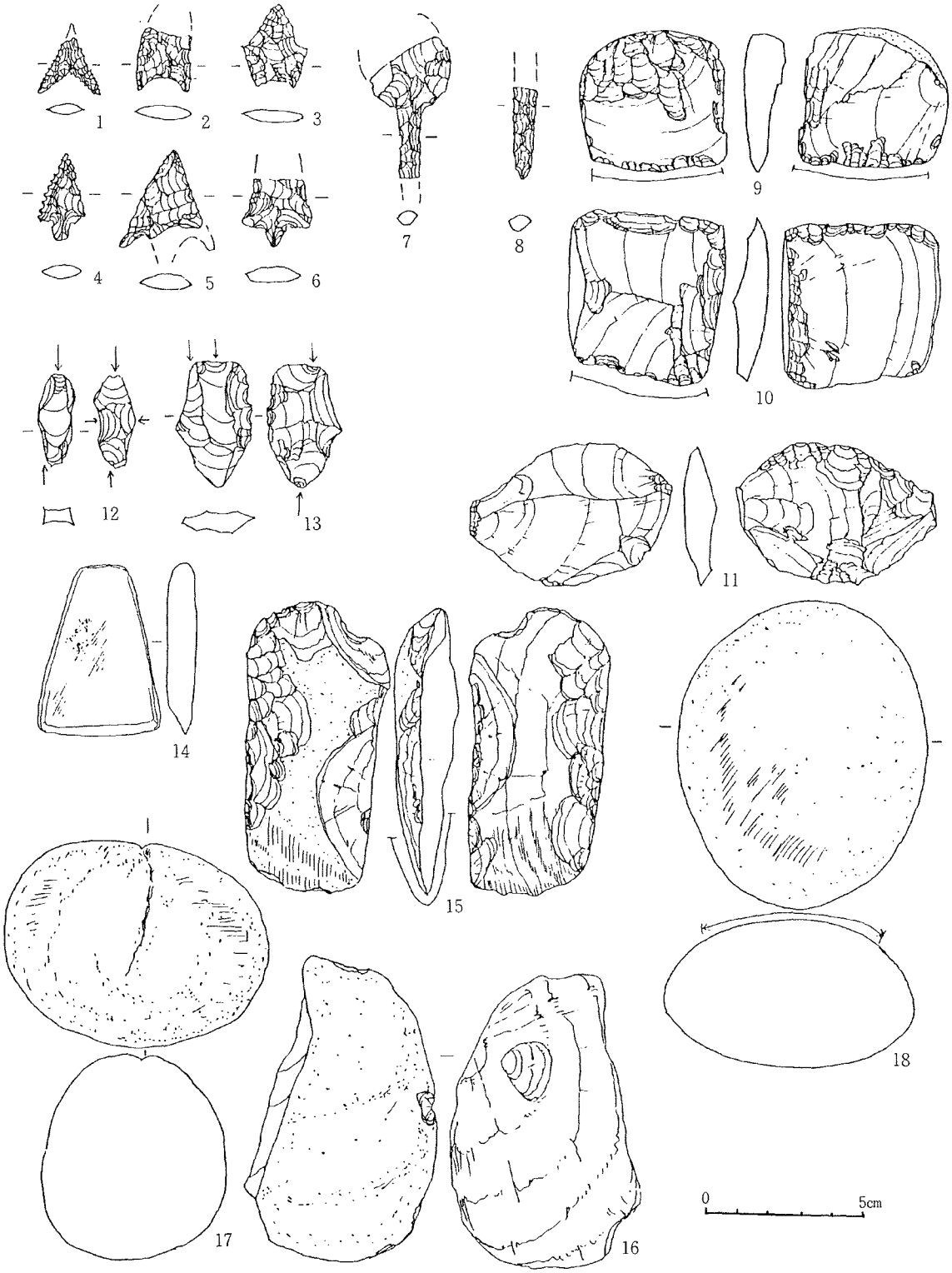
（森山公一）

遺物　土器は第12図に示した。１は埋甕である。残念ながら整理中からその後の処理中に一部を残して逸失したが，ほぼ全容を知ることができた。口唇部に平行する刻み目の行われた太い隆線と，垂下する同様隆線が渦文を描くものであって，地文に荒く大きめの単節縄文をややアトランダムに入れたもので，器形は口縁部に向って内弯する深鉢であり，中期末葉の普遍的な器形である。埋甕は胴下半部を欠いていた。床直上の資料に第13図２～８がある。２はやや広めの沈線によって区画を８個行い，その中に単節縄文を充塡する。若干性格の弱い土器である。３はヘラ状工具による綾杉状沈線を縦に行った底部，４～６は巾広の沈線と縄文の組み合わさるものである。７，８は櫛歯状施文具による条痕文であって，７は小隆線の蛇行垂下文が加っており，８はやや交叉する綾杉状になったものが認められる。ともに縄文中期末葉の土器群である。

石器（第14図）は量的に多かった。石鏃（１～６）石錐（７，８）掻器類（９～11）楔形石器（12，13）磨製石斧（14）打製石斧（15）磨石（17，18）などが検出され，代表的なものを図示した。１，５は頁岩製（他に４点）２，３は黒耀石製（他に５点）４は珪岩製（他に６点）６は下呂石である。有柄鏃が70％をしめている。石錐は頁岩製で，つまみ部の破片が他にある。尖端は磨耗している。掻



第13図　第３号住居址出土の土器（１，埋甕）

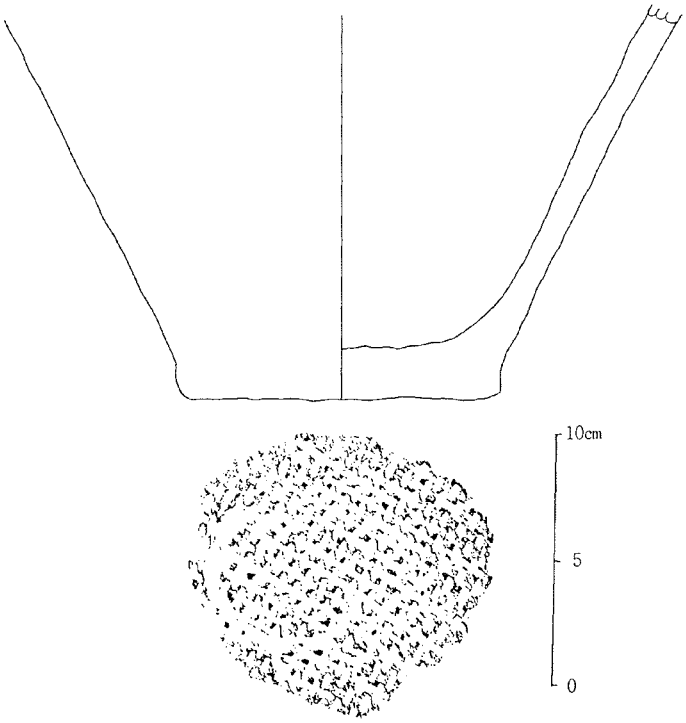


第14図　第３号住居址出土の石器

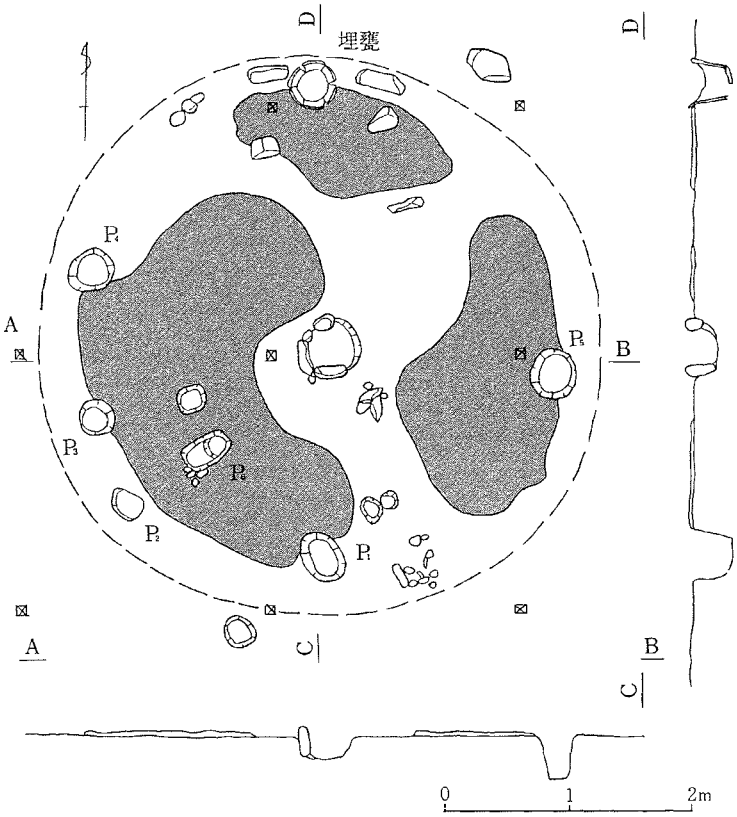
器類は注目される。9は珪岩，10，11は頁岩製である。9は転石面，10は摂理面を一部に残している。3点ともに直線状あるいは曲線状に刃部を構成している。蛇斑岩製の片刃状の磨製石斧が1点（14）ある。又安山岩製の転石面を持つ打製石斧（15）があり，他にも半欠品が1点ある。磨石（18，19）は共に玢岩製で，使用による磨耗痕が認められる。

(4) 第4号住居址（第15，16，17図）

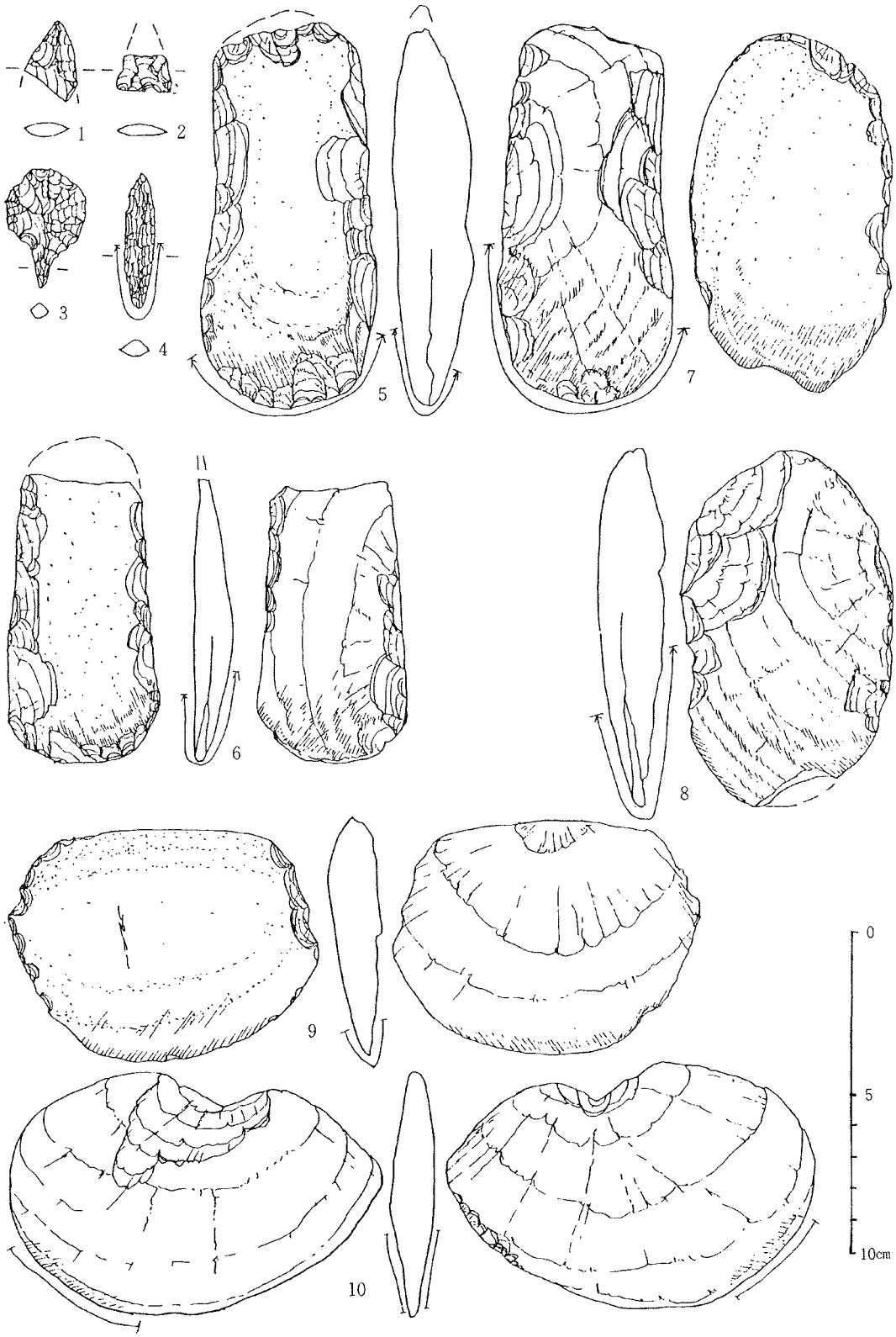
遺構　本住居址は，K—5を中心に，L—5，4，K—4とその周辺に存在する。中央に石囲炉を持ち，約4.5m程の円形プランと見られるが，耕作の為か壁面はどの個所にも検出されなかった。段丘河床礫の上に黄褐色粘土の貼床を一部に認めその床面の範囲を確め得たのみである。他の遺構との切り合い関係はまったくない。北側の壁面と思われるところに，埋甕が1点存在した。石囲炉は東側炉縁石を欠失しているが安山岩の河床礫による30cm程の良好な炉であったと見られる。



第15図　第4号住居址の埋甕



第16図　第4号住居址



第17図　第４号住居址出土の石器

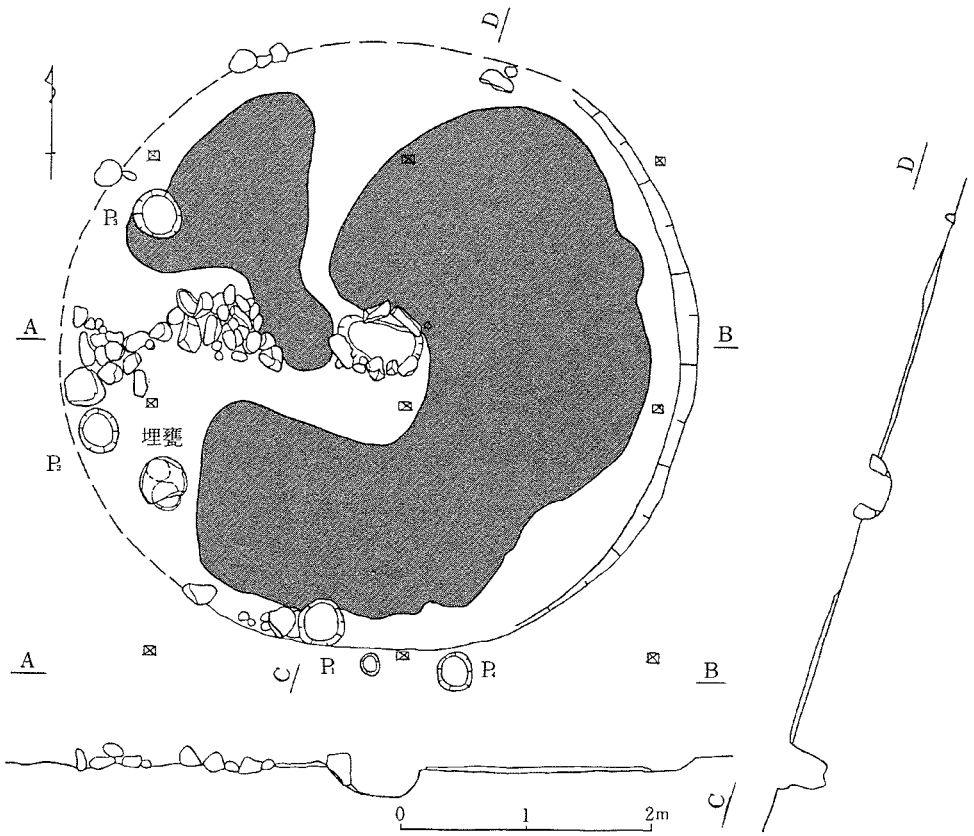
焼土が若干残されていた。柱穴は壁面と思われる近く円周上に並び，北側を除き，概して良好である。遺物の出土状況は耕土である覆土が浅く，時期の異るものが混在しておりにわかに決定しがたい。埋甕をもってこの住居址を代表させておきたい。（百瀬新治）

遺物　埋甕は第15図に図示したものであるが，無文粗製の深鉢形土器で，底面に網代痕がある。この種の土器は時間的巾が大きく特定する時期を決め難いが，縄文後期に属するものであることは間違いない。後期も堀之内期から加曽利B期の土器片を覆土に検出するのでその時期であろう。

石器類は第17図に示した床面出土のものに限定した。珪岩製の石鏃（1）黒耀石製の石鏃（2）頁岩製（3，4）の石錐が小形の石器としてあるのみである。石鏃は未製品であり，製作途上のものであった可能性が強い。4の石錐には回転使用の磨耗が観察できる。他は安山岩の転石による打製石斧（5～8），横刃の扇状石器（9，10）である。

(5)　第5号住居址（第18，19，20，21，22図）

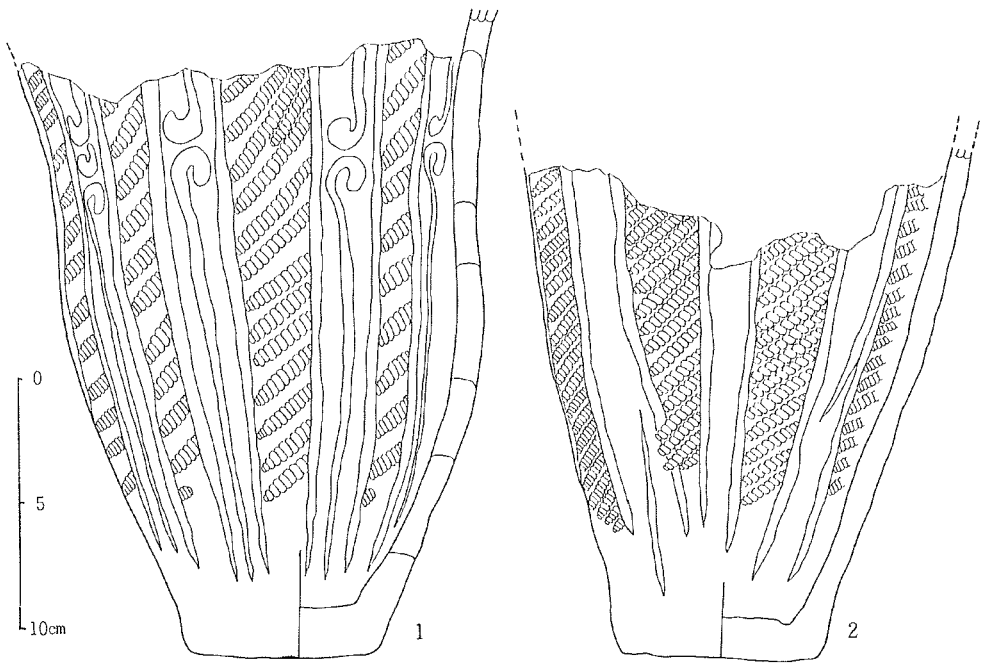
遺構　第5号住居址はK—7，8，J—7，8グリッドを中心に構築された住居址で，これも又他の遺構との重複関係はまったくない。炉は石囲炉でK—8に位置する。平面プランは円形で直径約5mの規模である。壁面は東側のみ残存し，全周の約3分の1の孤状である。壁高は10cm内外で



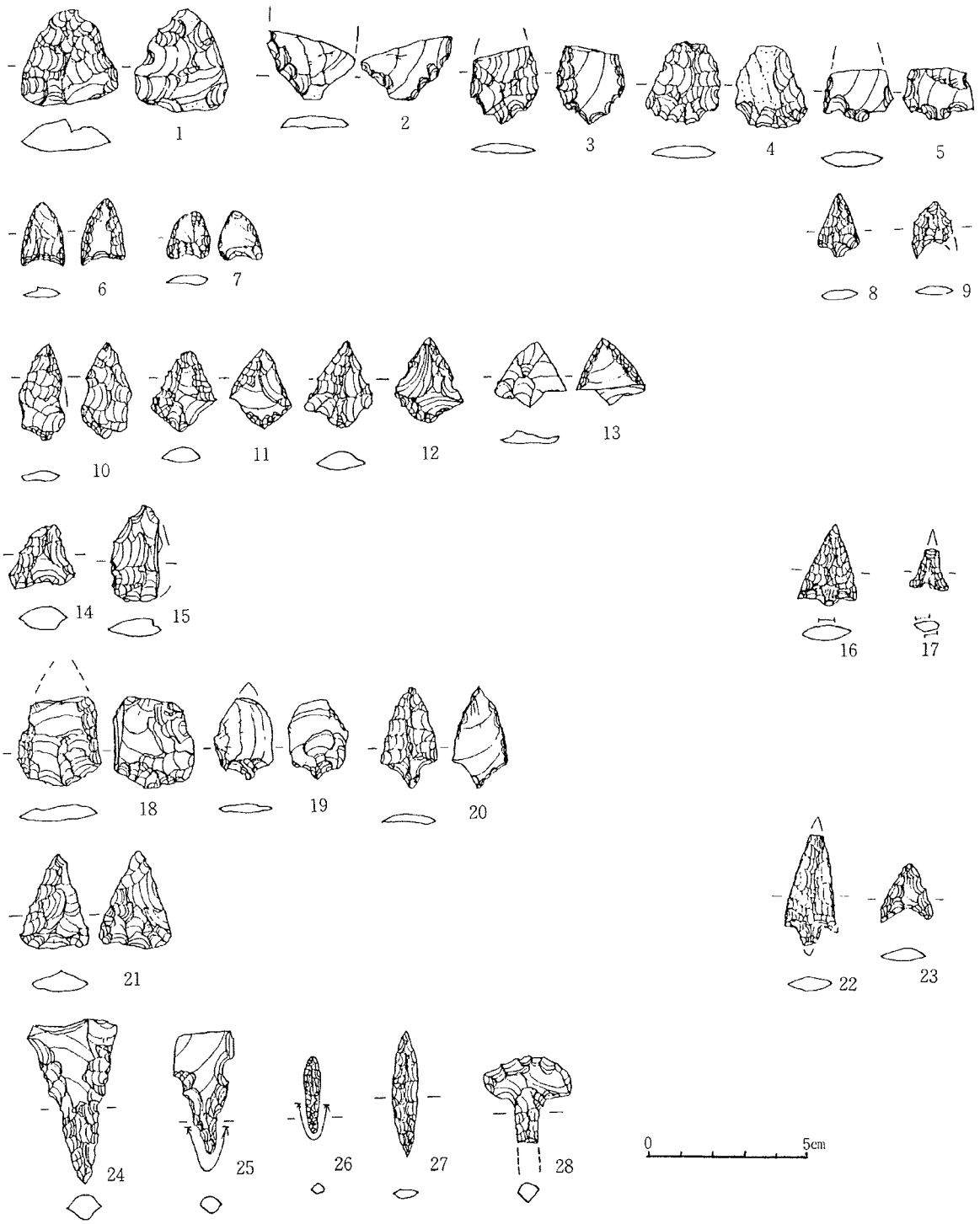
第18図　第5号住居址

ある。床面は他の住居址と同様にして黄褐色砂質粘土による貼り床である。その一部が残っていた。床面はやや荒れていて礫石の投入が多く，特に西半に多かった。附属する柱穴は住居址の南西部壁面内側にのみ検出しれていて，北東側には検出されていない。石囲炉は安山岩の転石を用いたもので，50×30cmと長方形を呈したものであろう。比較的小ぶりの石を用いており，約3分の1を欠失している。南西位の壁際に埋甕があった。第22図3を蓋石とし，第18図1，2をその蓋石の下に正位に2点とも埋設されており，この住居址の時間的位置を確定している。埋甕内からは何も検出されなかった。他の遺物の出土状況は，他の住居址と同様にして，各時期のものが混在した。しかし，とりわけ縄文晩期前半のものが覆土中に多く，ここが晩期前半期における土器集積址と呼ばれる土器捨て場状の遺構として用いられていた可能性が大きい。あるいはまだ縄文中期末に属するこの第5号住居址が埋まってしまい切らず，凹地として残存していたかにも見受けられる。しかし，定かではあり得ない。 (矢島宏雄)

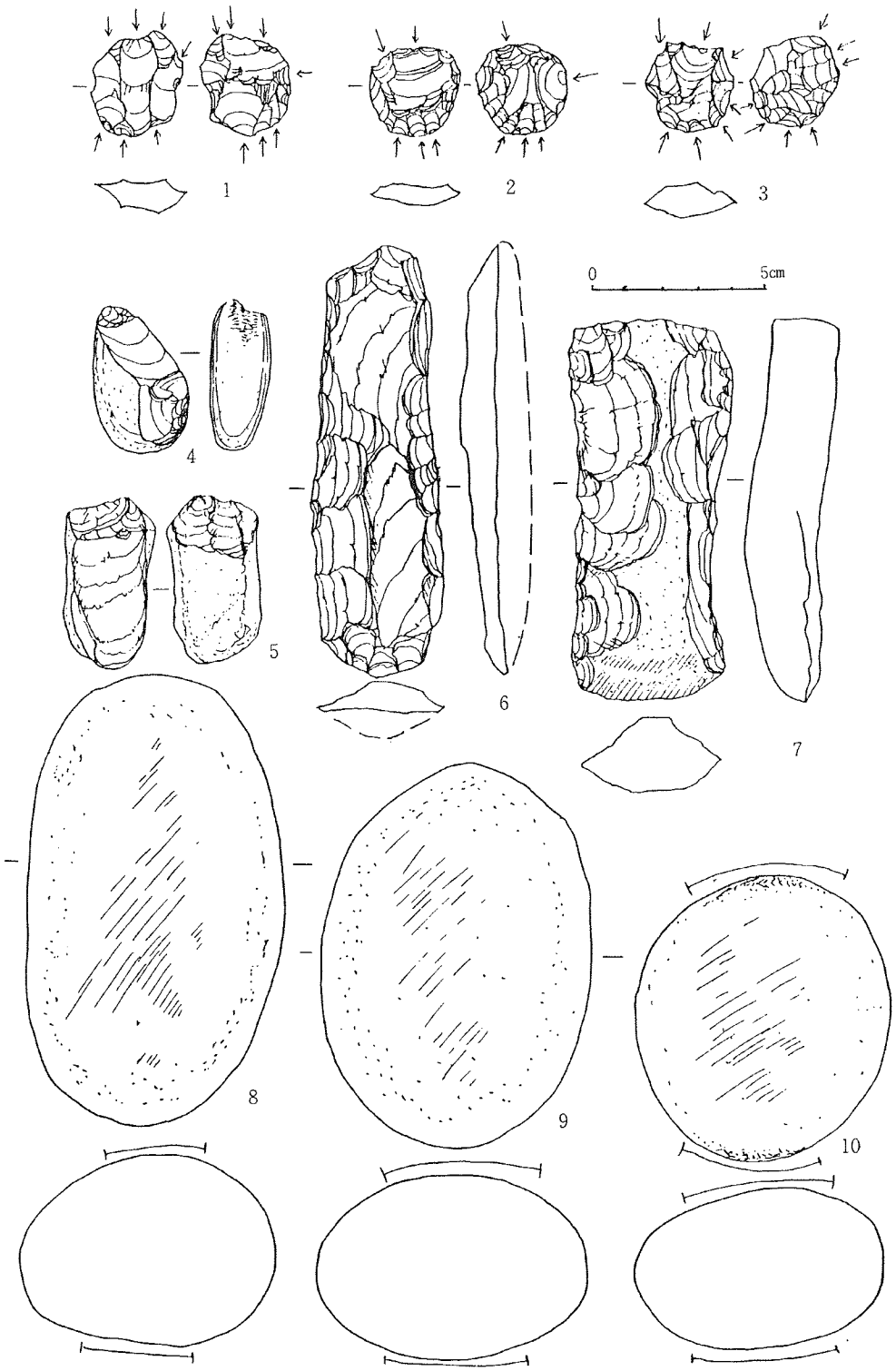
遺物　本住居址の築造期に属すると理解される埋甕2点をもって代表させ，その時間的位置としておきたい。図示した2点はまったく同時期のもので，縄文中期末葉の土器である。おそらく口縁横帯文は一本に沈線化し，縦に行われた浅く巾広の沈線の垂下区画を8個とし，区画内に大きめの単節縄文を充塡したものである。区画間に蕨手状沈線文を入れるもの（第19図1）と無文になるもの（2）とがある。曽利Ⅳ期からⅤ期の関東加曽利E系の土器である。他に後晩期の土器群が集中して見られたことはすでにふれたが，後晩期の土器捨て場址的な機能を持った地点であるものかとも理解される。しかしいずれにせよ，本住居址の所属時期は縄文中期末葉としておきたい。



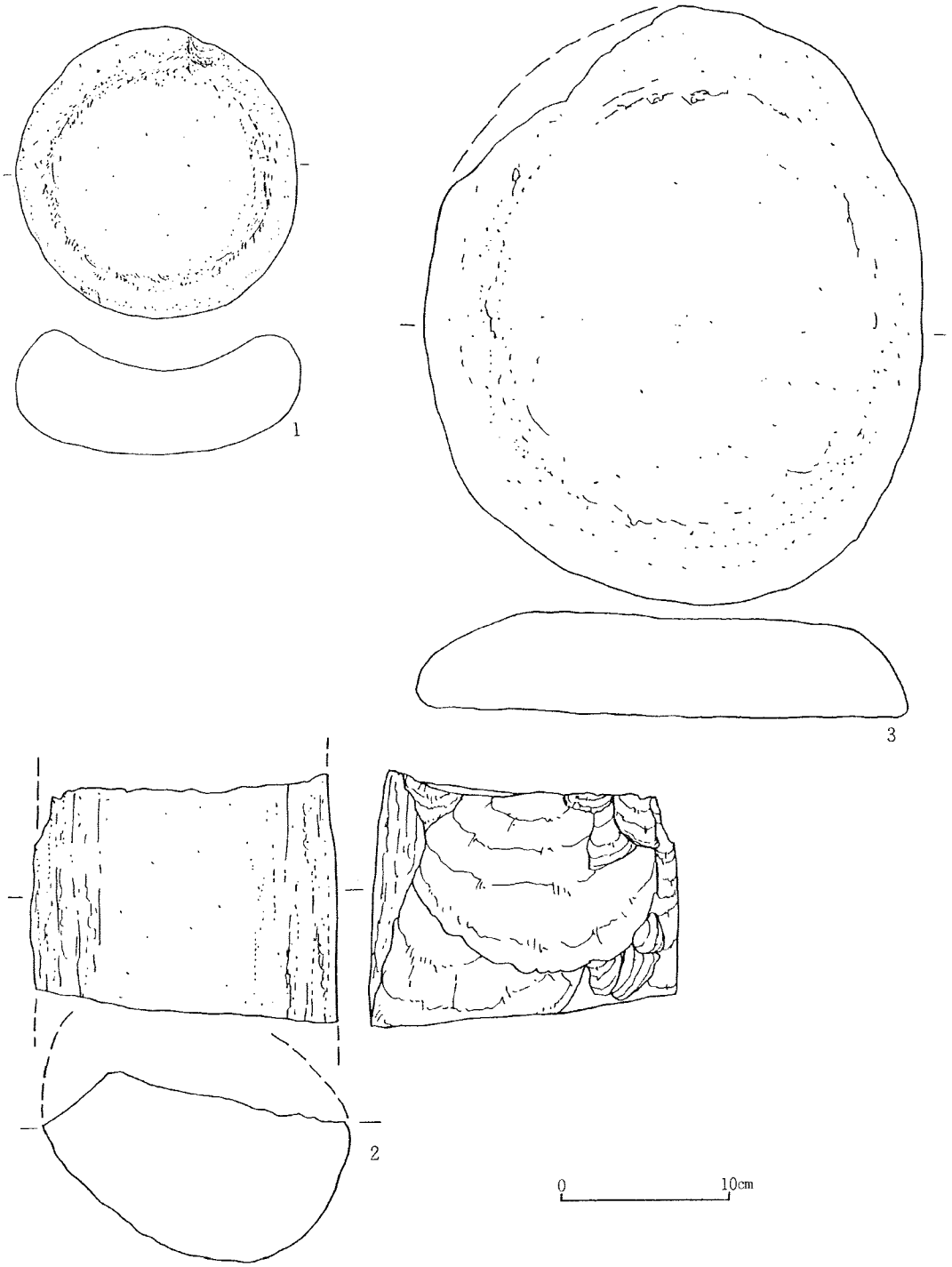
第19図　第5号住居址の埋甕



第20図　第５号住居址出土の石器①
（１～９珪岩，10～17黒耀石，18～23岩）



第21図　第５号住居址出土の石器②

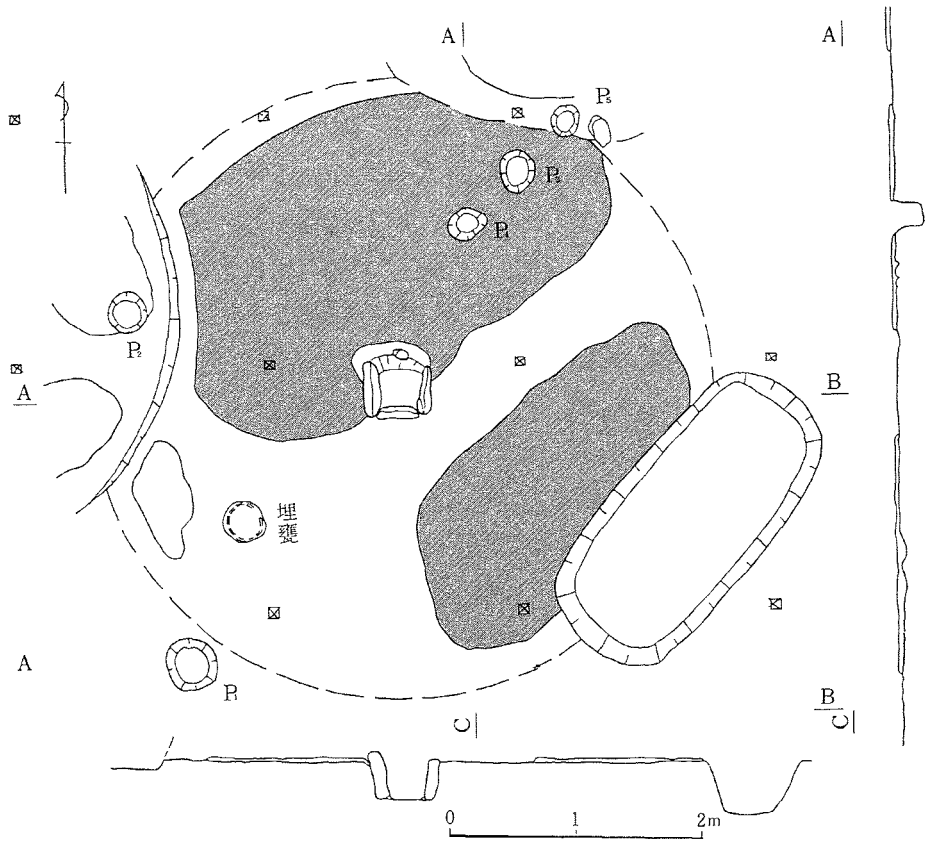


第22図　第５号住居址出土の石器③

石器類（第20～22図）は非常に多数にわたって出土している。第20図は石鏃と石錐を集成したがその一部である。1～9は珪岩製，11～17は黒耀石製，18～23は頁岩製である。各石材とも上段に有柄鏃，下段に無柄鏃，そして下段右隅に完成度の高い石鏃をそれぞれ配列した。概して珪岩を素材としたものが多く，黒耀石，頁岩がそれに続いている。未製品が多く，完成品はすくない。ここが石鏃の工房遺跡として製作されていたことを示している。黒耀石製の2点（16，17）は共に基部片面に研磨痕が見られる。単に偏平にするため行ったものでなく細い棒状砥石などで行った凹み部にも食入る研磨であることが注意される。24～28は石錐である。珪岩と頁岩製が半ばしている。磨耗痕を尖端にもつものが多い。第21図1～3は周刃石器である。すべて珪岩製で入念につくられている。その刃部構成の調整痕は全周縁に及んでいる，4，5は珪岩の敲石である。一部にこまかい打痕が見られる。6は蛇斑岩製で縦に半割した打製石斧，7は転石面を持つ安山岩製である。他に半欠品が安山岩製8点，頁岩製2点，蛇斑岩製1点ある。他に玢岩製の磨石が5点ある。そして第22図1は多孔質安山岩製の石皿，2は安山岩製石棒状石器で啄製研磨痕が観察される。3は砂岩製の加工痕のある埋甕の蓋石である。

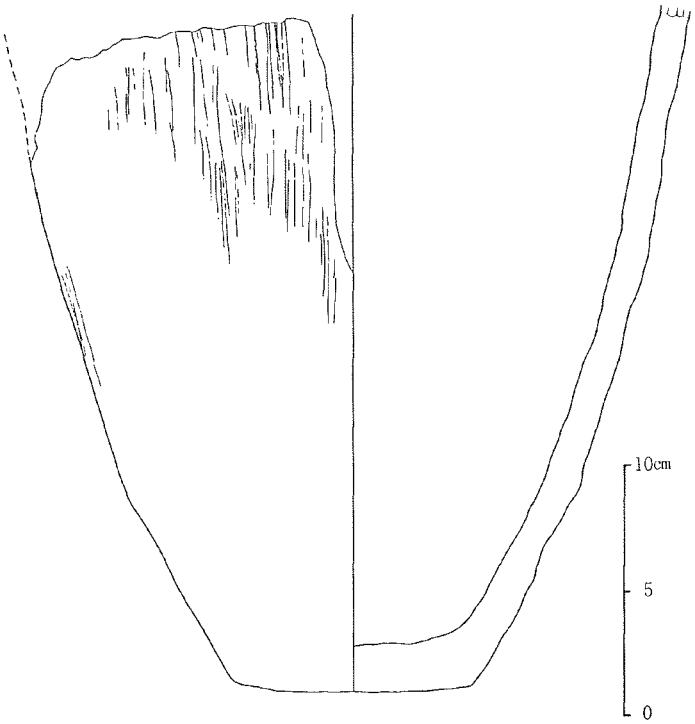
(6) 第6号住居址（第23，24図）

遺構　J－1を中心に，J－2周辺に及んでいる。第1号住居址に西側を，第2号住居址に北側



第23図　第6号住居址と第1号壙址

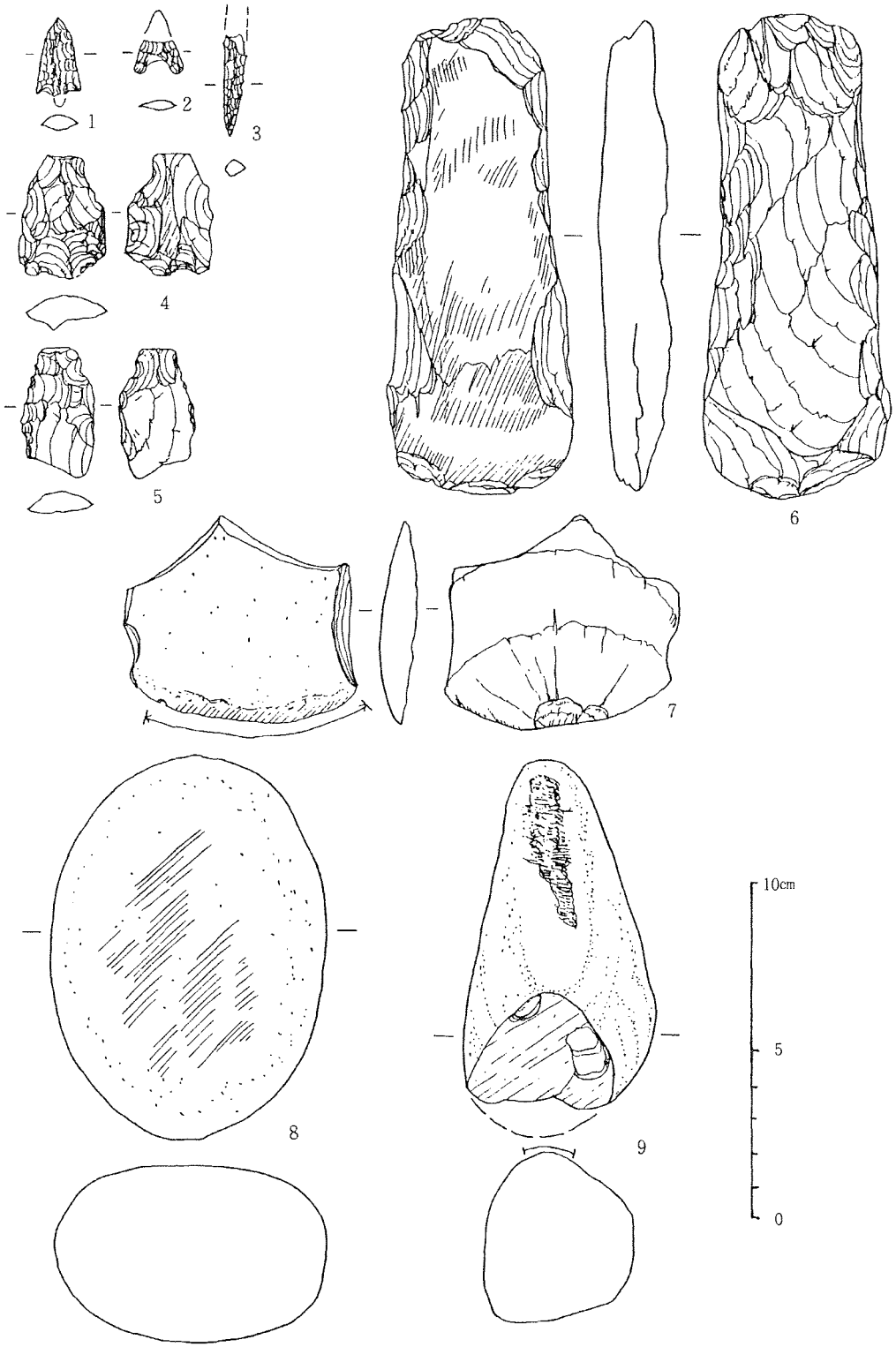
の一部が破壊されている。又第1号土壙址に南東側を切られているためこの遺構が最も古い時期に構築されたことがわかる。石囲炉を中心にほぼ円形プランの住居址と見られ，直径は5m内外である。3つの遺構によって破壊されていてその全容は明らかでないが，壁面はまったく検出されなかった。柱穴は4個程確認できたが，この住居址で果した役割に疑問は残る。積極的に第6号住居址の主柱穴とすることはできない。石囲炉は30cm四方の大きさで，板状の石4枚で構成されていてすべて残されている。西側の炉縁石は安山岩であるが，他は土尻川流域の第三紀砂岩であって，風化する直前である。強い火熱を受けており安山岩炉縁石はひび割れが見え，焼土が残存した。南西壁に近いとする位置に埋甕が一点検出されたので，この埋甕をもって第6号住居址の時間的位置とすることができる。遺物の出土状況は他の住居址と同様混在が激しく，埋甕及び床直上以外の遺物を包含層出土の遺物とした。　(福島邦男)



第24図　第6号住居址の埋甕

遺物　第24図は第6号住居祉の埋甕である。器面に櫛歯状施文具によって縦位の条痕文が行われているものである。網代痕はない。この種の土器は，縄文中期後葉から客体的土器として，北まわりの一群に加えられているが，後期の前半まで残存するかと把握される。したがって時間的位置を確定することは難しいが，①網代痕がない。②堀之内期とされる第1号住居址に第6号住居址が切られている。以上の理由をもって縄文中期末葉を下らないとするべきであると見ておきたい。胴部上半から口縁部にかけて，櫛歯状条痕文の土器は隆線文と組み合わせて構成され，直線だけでなく曲線や時に波状になるものも存在するが，本例では明らかにならない。本遺跡の包含層出土例もその参考資料である。

石器も床直上のものに限定した。小形の石器は頁岩製の石錐（3）を除いてすべて珪岩製である。石鏃も他に類点ある。4，5は石鏃の未製品と思われ，剝離途上の例品であろう。他にほかの住居址同様剝片類はやや多めに存在する。6は床直上の蛇斑岩製の打製石斧である。磨耗痕が見られ，使用痕であろう。7は安山岩製の転石面をもつ横刃石器か扇状石器である。刃部に磨耗が残っている。8は石英粗面岩製の磨石，9は安山岩製の敲石である。一部に打痕がある。



第25図　第６号住居址出土の石器

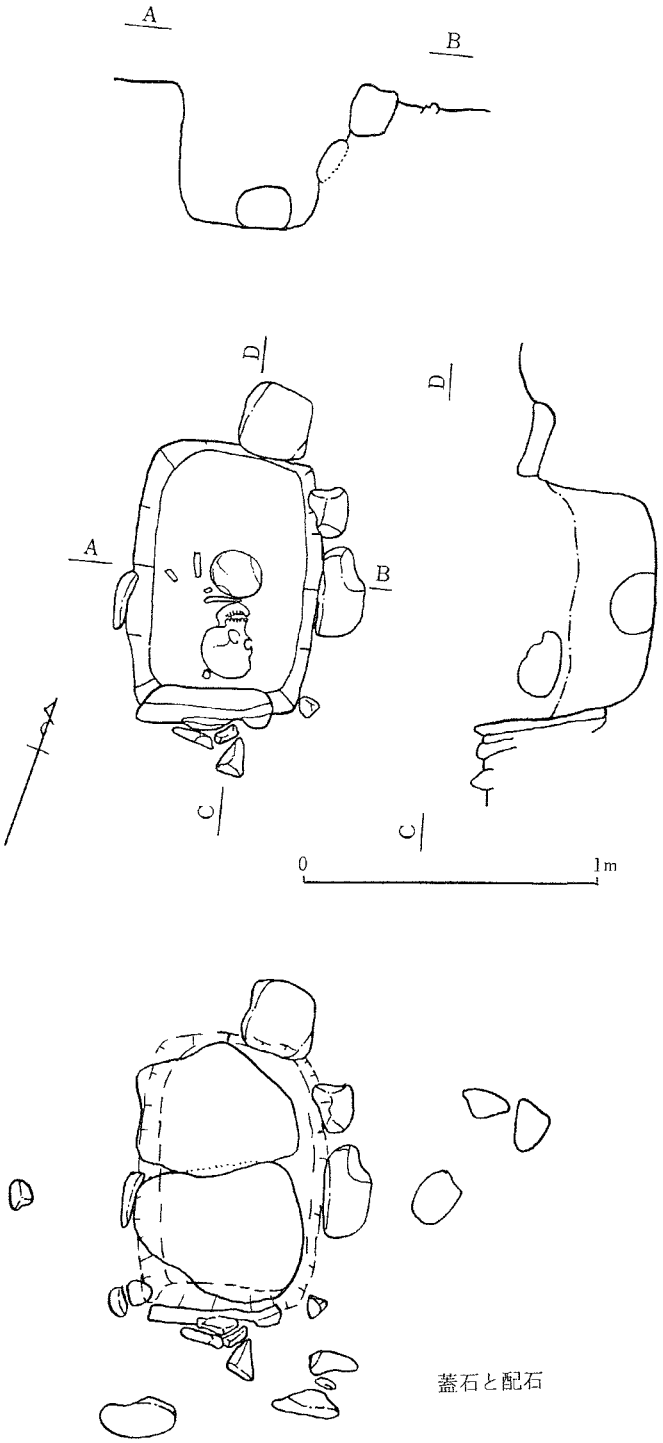
２．墳墓址

(1)　第１号墳墓址（第26図）

遺構　本遺構はＪ―16グリッド中央に検出されたものである。耕作表土の下部に安山岩の礫石と共に，周辺河床で得られる砂岩の板石が２枚並べられて敷石状に検出された。これが本遺構の蓋石であった。

本遺構は組合式箱形石棺に類するものである。蓋石は長辺約60cm短辺40cm内外のもので，長辺を横にわたすような構造であった。下部構造の施設である箱形石棺及至土壙より蓋石の方がやや小さめであることが判明したけれど，蓋石はほぼ水平であって，内部への傾斜は見られなかった。これは結果的には棺内内容物が緊迫していたかと感ぜられるものであった。耕作による破壊を受けずに検出されたことは僥倖であった。

石棺の側壁は南側のみであったが，他は確かではない。とするのは南側壁石は蓋石同様にして第三紀小川層の砂岩製であって，非常に風化が進んでおり，一部はすでに砂か土に還ってしまっていたからである。調査所見からすれば側壁石は検出できなかったことになるが，同様砂岩製とすれば，風化消滅の可能性も皆無ではない。構造的に組合式箱形石棺であってみ



第26図　第１号墳墓址

れば重要な所見である。従って東西，北壁石は検出されなかった。掘り込まれた土壙は，長辺を南北とし0.9m，巾0.65mで，深さ0.6mである。長軸はやや東西に片寄るが南北である。

人骨は二体分検出された。棺内を10cm程掘り下げた南側壁に近い位置から第1号人骨が，頭頂を南にし仰臥屈葬位という在り方で確認された。抱石はなかった。人骨は頭蓋と鎖骨の一部のみのようであるが，五体そろっていたと見るべきであろう。その下部の棺内中央に第2号人骨が検出された。第2号人骨はほぼ頭蓋骨のみで碗を伏せるように出土し，他の部分は欠失していて，確認することはできなかった。しかし，棺内における出土状況には，この人骨の性格に関する若干の考慮が必要かと思われる。①には当初から頭部のみの埋葬であったのか。②五体そろった屈葬人骨が二次的に移動し結果的に第1号人骨同様の頭部のみとなったのかである。③すくなくとも出土状況からすれば第2号人骨の方が時間的に早い埋葬であることは自明であるが，その時間差にどんな意味があるであろうか。④また，2体埋葬の意義については，どのようなものを想定できるであろうか。

第1号人骨の特徴は，信州大学西沢寿晃氏によると①上下顎両側犬歯の生前抜歯の個体，②壮年男子骨であるという。それに対し第2号人骨は①抜歯はみられないようである。②第1号人骨より若年の男性骨であるとされている。従ってこれによると，両人骨は男性であること，第1号人骨の方が壮年であり，抜歯習俗が見られる。第2号人骨の方が年が若く，抜歯は見られないということである。

埋葬形式は，頭蓋骨の位置や，遊離した骨片の存在からして，屈葬位の埋葬と考えられるという。これは第1号人骨第2号人骨に共通するもののようで，頭頸部のみの埋葬は考えられないということである。また酸性化した土壌の性質からして，地下式墳墓に埋葬された人骨は，床面に接した部位から腐蝕による溶解現象を起こすとの事で，四肢，軀幹の骨は消失する場合が多く，頭蓋骨のような表面積の大きい骨は比較的保存のよいものという。上記の見解によって判明する部分は多いのであるが，第1号人骨が壮年で抜歯の習俗があって，第2号人骨はやや若年であって抜歯習俗を見られないとの差が残されている。それは恐らく年齢差によるものと考えられ，第2号人骨が――冠状縫合は未だ癒着しない――との事であるので，男性であるが成人とは言いがたい。したがって抜歯が健康な歯を抜き取るという男性成人への通過儀礼の習俗との一般的理解を補強できる。春成秀爾の2C型（上下犬歯4本抜歯）に属し，東海に普遍的なタイプであることも重要な所見である。この人骨がほぼ縄文晩期に位置づくであろうことも，状況資料からうかがうことができる。

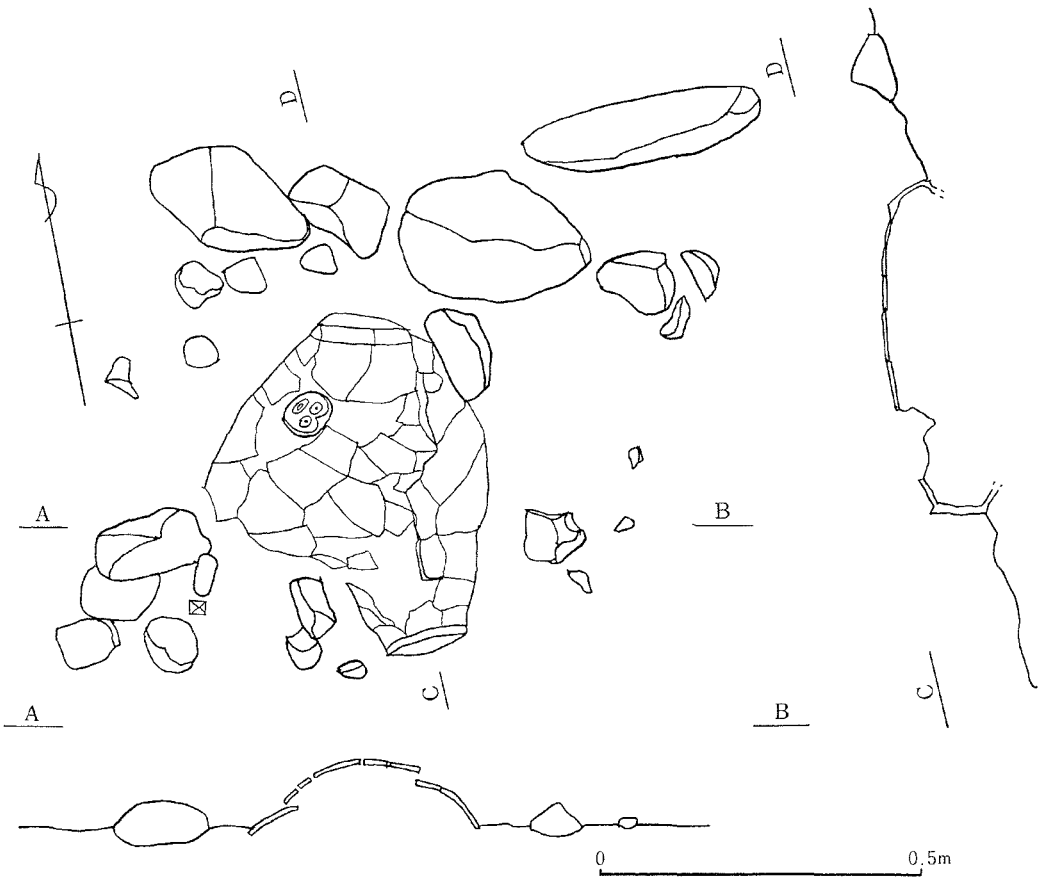
（広瀬忠好）

遺物　遺物の出土状況は，墳墓内から縄文後期の土器片小量，石鏃，獣骨片，赤色塗彩の骨角器が出土している。しかし残念ながら逸散して確認することはできない。縄文後期の土器片小量については，時間的位置をあらわすと言うよりは，時間的下限を表わすものであろう。換言すればその縄文後期の土器の示す時間的位置より新しいことを示していると見るべきである。赤色塗彩の骨角器や石鏃は，副葬品の可能性が高い。従って縄文晩期に属するものであろう。

(2)　第2号墳墓址（第27，28図）

遺構　本遺構はH—16グリッドを中心に検出された。人頭大から掌大の礫石を配し，無文の深鉢を会わせ口状に合体させ，土器棺としたもののようである。第3層内で検出されたが，土壙状の遺構内に存在したと言うことは明らかでなかった。恐らく何等かの遺構である土壙状の掘り方を持ち、その中に一連の行為の結果として埋納（埋設）されたものと考えられるが，その土壙は明らかでない。北側と西側に人頭大の礫石を配しているので，これをもって一種の墓壙とすることもできる。むしろ積極的には，石列墓壙と認められるものである。東側と南側には礫石は散見する程度で整っていない。かりに石列墓壙と認めるとして，ほぼ一辺が1m弱となる。すると，1m弱の方形石列墓壙の内に合せ口甕棺状の土器棺をもつのが，第2号墳墓址ということになる。出土遺物として取り上げることのできるものは，網代底の二点の無文粗製深鉢形土器と，1号深鉢に接して出土した土偶頭部である。土器棺内部からは，骨粉様の残存物を検出したが，人骨と同定できるものはなかった。

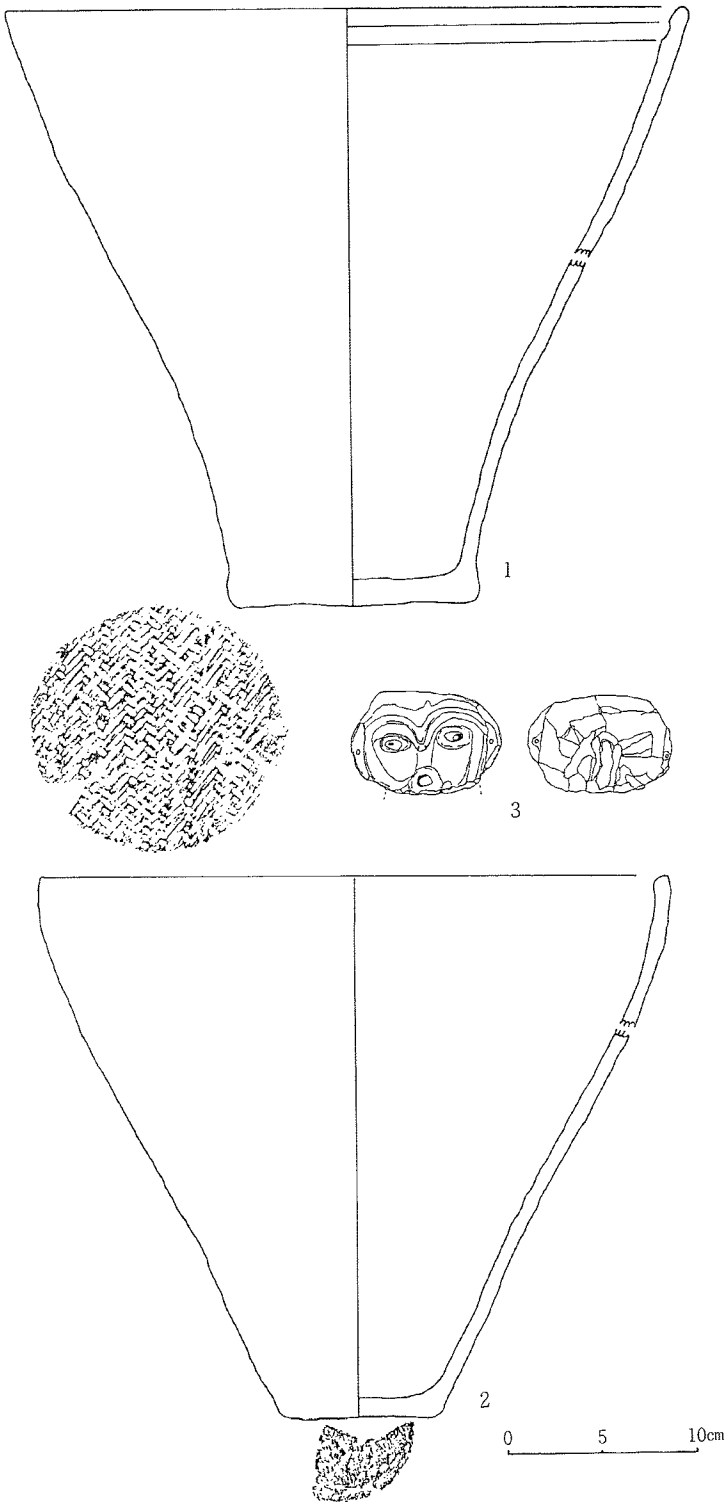
（矢口忠良）



第27図　第2号墳墓址

遺物　2点の深鉢と土偶頭部片についてふれておくことにする。第27図1は第1号深鉢で，2は第2号深鉢である。第1号深鉢は底部の径12cm，上部口径36cm，器高32cmで入念に編み上げられた網代底である。器形は底部からしまる様に立ち上がり，開口するが，口縁部はやや内弯する。口縁部の内側に一条の広目の沈線がめぐらされている。第2号深鉢は底部の径8cm口径32cm器高29cmである。器形は底部から開いて高ちあがるが若干しまり，やがて口縁部に至ってしっかりと内弯する。底面はやや不鮮明ながら網代である。ともにまったくの無文で，第1号深鉢の方が焼きしめが良好である。

3は土偶頭部片である。眉状隆線の中央先端には小さい刺突による鼻孔が2つあり，目口ともに粘土粒貼付の上，切り込みを入れて目，口の表情としている。耳部には一孔づつほそい貫通がある。やや偏平であって，頭頂部を欠いており不明である。なお顔面裏は剝離しているものと思われる。



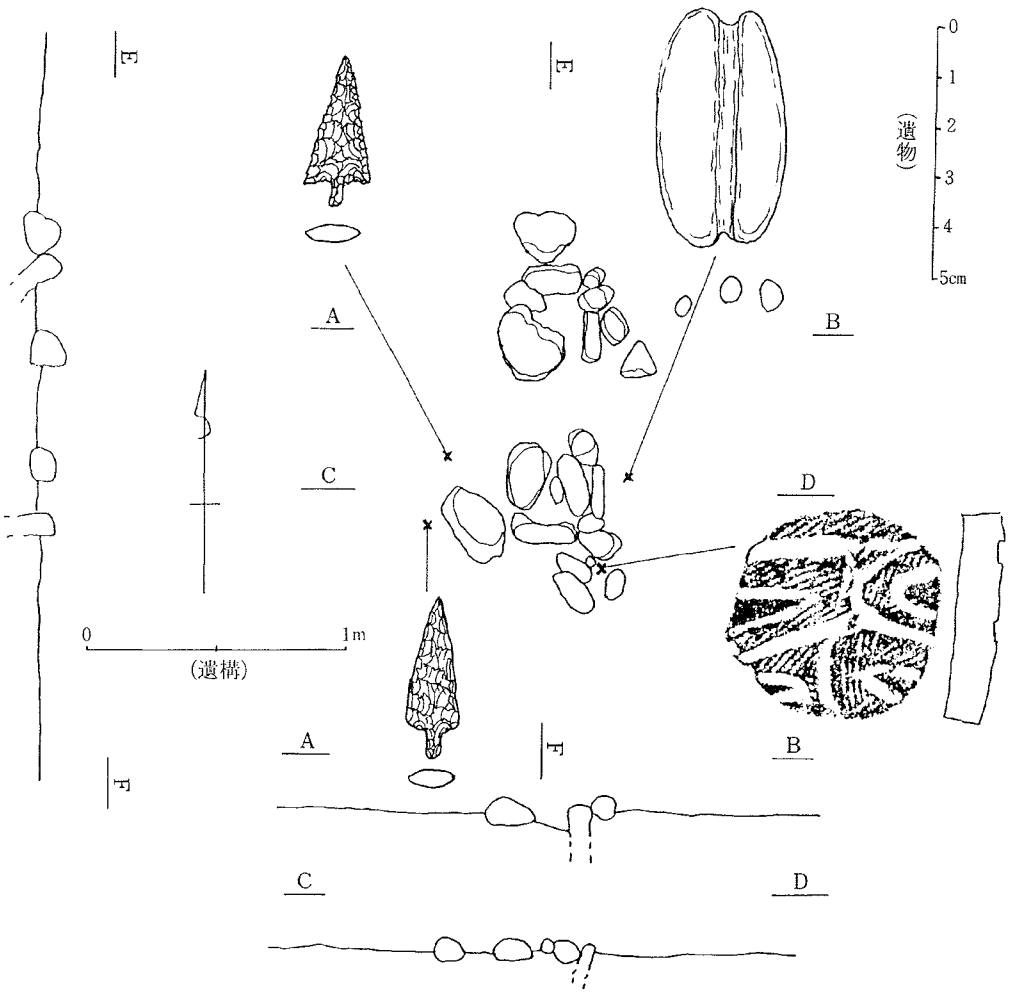
第28図　第2号墳墓址出土の石器及び土偶

後期前半の一般的な土偶である。

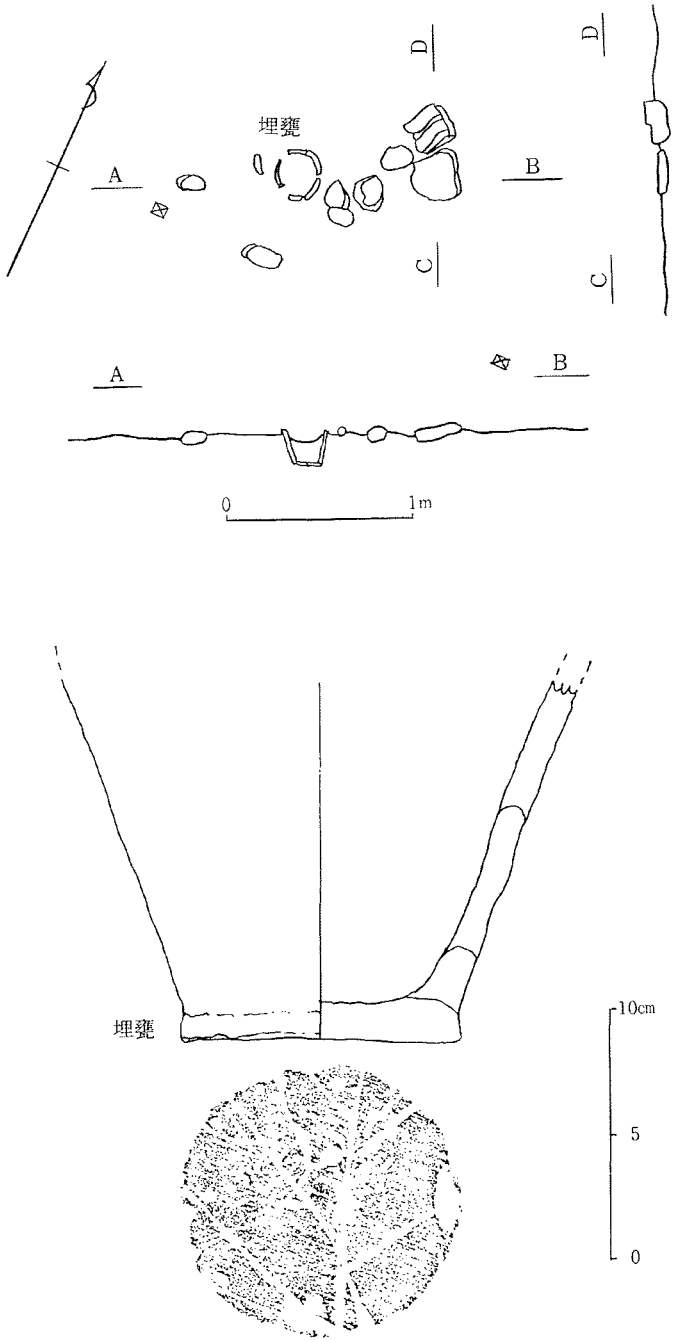
第２号墳墓址の例は，石列墓壙合口土器棺墓址と呼ぶことも出来るが，縄文後期の一般的な埋葬遺構とは言いがたい。土器棺の２点については，無文，内側沈線，網代底，器形からして，縄文後期の加曽利Ｂ期に属するものかと把握され，土偶は後期中葉より前半期のものかと思われる状況である。したがってこの遺構はほぼ後期中葉の遺構例かと見受けられる。

(3)　第３号墳墓址（第29図）

遺構　本遺構はＪ―14グリッドの中央に検出されたものである。日程の都合上上面のみの検出で完掘できていない。上面において組合式箱形石棺状の石組みが見られた。南北壁及び東壁の一部であって，それに附属する人頭大から掌大の礫石である。同検出面下より，石鏃２点，石錘１点，土器片円板１点が検出された。共に完形品である。　（原田勝美）



第29図　第３号墳墓址と出土遺物



第30図　第４号墳墓址及び埋甕

遺物　頁岩製の有柄石鏃の良品２点，砂岩製の表裏に溝の彫られた石錘が１点と，土器片を再利用した円板が１点出土している。やや巾広の沈線と縄文の行われた文様を残し，晩期前半佐野Ｉ期の所産であろう。

(4)　第４号墳墓址

（第30図）

遺構　Ｉ―15グリッドに検出された。正位に行われた埋甕を中心に人頭大から掌大の礫石を配している。この種の遺構は埋甕址として分離してもよいが，戸倉町円光房遺跡例などをみると墓域の埋甕が配石墓址等に附属する可能性が高い。この宮遺跡においても，墓域と思われるエリアの本遺構を，一応墳墓址として把握することとしておき，今後の類例の増加を待ちたい。特に後晩期に属する遺構としてその在り方を重視しておきたい。

（中山　晋）

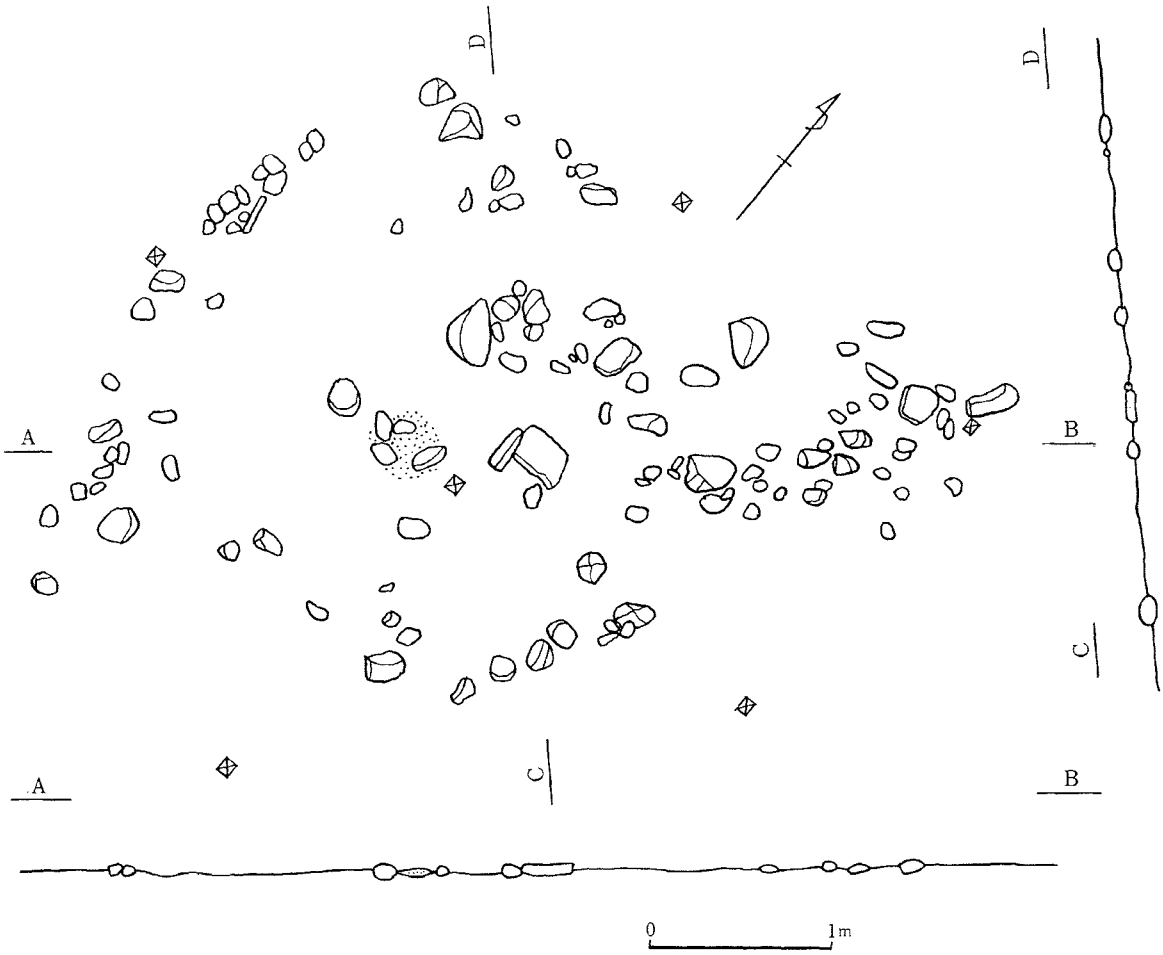
遺物　遺物として取りあげることのできるものは，埋甕の一点のみである。無文粗製深鉢の埋甕は，底面に木の葉の圧痕文を残している。木の葉文を残すものはこの宮遺跡では必ずしも多くないが，縄文後晩期の資料であることは言うまでもない。とりわけ後期に属するものかと見られる。

３．集石址

(1)　第１号集石址（第31図）

遺構　本遺構は，Ｊ―15，14，Ｋ―15，14グリッドを中心に散在する礫石群をもって把握されるが，その性格も含めて，単一のものであるかどうか俄かに確定し難い。しかしその上なおその性格を推定できる可能性もあって，流動的であると言わざるを得ない。

人頭大及至掌大の礫石およそ約20～30個をもって構成し，東西約3.5m，南北約5.5mの範囲に散在している。その散在の仕方はかなりアトランダムであるが，強いてみれば南西側と東側が列石状で礫石は小さく，内側の方が大きい。Ｊ，Ｉの14，15のグリット杭に近く，わずかに焼土が残っているのが注意される。これらの石列のほぼ中央である。なおそれより北東に向って小礫の張り出し部分があって，同じ平面上に展開している。特にピット状の遺構は附属していない。中央焼土の個



第31図　第１号集石址

所は，礫石４個がその上部にのっているが焼けていない。焼土の生成以後の移動によるものであることは明らかである。なお焼土面は第３層中の礫石群とフラットで，ピット状の内部あるいは炉址状の廃棄によるものとは受けとれなかった。

仮りに焼土面を炉址とすると，礫石の配置がやや柄鏡状の分布となることも留意しなければならない。敷石と思われるものは一個も存在していないけれど，あるいはその可能性もないわけではあり得ない。敷石住居址の廃絶が，敷石の移動を伴っていることは普遍的であって，それが一部分である場合と全部である場合とがあるかと思われる。炉址は基本的には石囲炉であるが，まだ移動使用に耐え得るものは持ち去ったと思える所見であるから，必要条件は自づから明らかである。炉縁石の移動，敷石の必要数（１部～全部）移動は，住居址の新設↔移動↔廃絶にとっての新設条件に従ったものと考えてもよい。その新設個所が遠方であれば自づから条件は小さくなり，近距離では大きくなるかともとれる。（なお敷石等の完全な残存は，おそらく特殊な条件下で起きたことであって普遍的ではない。）敷石が黒色土中に多くは構築されていて，敷石下の調整も黒色土で行われているので，すべての敷石の移動が図のようなものになる可能性もまったくないわけではない。小礫が敷石のすきまやつめ石でなかったとも言えない。もう一つ敷石の周堤部は礫石で覆れていたものと見られる多くの事例が留意されているが，住居址の最終的な廃絶に伴う行為として，旧住居空間へこの周堤礫投入があったともとれる遺構が多く検出されていることをふまえると，礫石列は投入残存，内部のものは投入とすることができる。したがって第１号集石址は，柄鏡形の敷石住居址ではないかとする見解ものこされている。だがその結論を導くには諸データの不足は否めない。又，墳墓址の集積個所ではないかとの見解も存在する。しかしこれも集石等に単位性がすくなく，多くその配列はアトランダムにすぎるように思われる。類例の増加を待ちたいところである。

遺物の出土状況は更に規則性がないが，縄文後期後半の資料が多い。しかしこの遺構の時間的位置を決めることはできない。出土状況は包含層との所見にとどめておきたい。　（佐藤信之）

４．土壙址

(1)　第１号土壙址（第23図）

本土壙址はＩ－１グリッドを中心に検出されている。長軸を北東へ45°振ったもので2.5m，短軸は1.1mの長楕円形である。土壙の深さは約0.4mである。第６号住居址の南東辺を大きく７分の１程を切っている。底面は比較的安定しており凹凸のないフラットである。この覆土から遺物は比較的多く検出されたが，その検出状況は他の遺構同様特に縄文後晩期の資料が混在していた。上下関係もふぞろいで，この遺構の性格や所属時期を特定することは可能でない。すくなくとも切り合い関係で縄文中期以降とするのみである。長軸2.5mという大型の土壙は，かなり近世の所産かとも見られるが，その新しい資料は検出されていない。後晩期の資料を出す土壙址とのみ提示するにとどめておくことにする。　（広瀬敏和）

第2節　包含層出土の遺物

1．縄文時代の遺物

(1)　縄文中期の土器

A　縄文中期初頭の土器（図版19，上）

半截竹管による平行沈線文を多用する土器である。区画の外画は半隆起線文となり，その内側に格子目文が充填される。一部に半截竹管によるU字状文も見られ，北信濃，北陸南部の系列に入る新保，新崎系の土器である。近くは小川村筏遺跡に類列がある。

B　縄文中期中葉の土器（図版19，下）

斜行沈線文などを主体とする土器である。ヘラ状施文具による波状文や斜行沈線文が多用されていて，隆線と円文が特徴的である。又，阿玉台系の土器の影響を受けたと見られる指頭圧痕文の土器もあり，北信濃から奥信濃に分布する土器である。

C　縄文中期後葉の土器①（図版20）

唐草文を多用し，胴部が綾杉文とならない一群を把握しておいた。区画内の沈線，キャタピラ文も残る。粘土紐の貼付による構成も盛行する。北信濃に分布する。

D　縄文中期後葉の土器②（図版21）

中部高地に特徴的な土器であるが，北部に偏在する曽利系の土器である。加曽利E系の影響下で生成したものと見られる口縁横帯文と唐草文とが組み合わさる。区画内は斜行沈線文，平行沈線文，綾形状沈線文となり多様である。

E　縄文中期後葉の土器③（図版22）

小川村筏遺跡で，筏式土器と呼んだ土器である。唐草文を多用し，地文に綾杉状沈線文を持つもので，越後南部域から北信濃，中央山地のルートぞいに分布し，甲府周辺まで達している。前項の土器群と組成しており，概して大形の土器はすくない。ほとんど縄文を用いない。把手は一対を基本としていて，北信濃周辺に核のある一群と見られる。

F　縄文中期末葉の土器①（図版23～25）

縄文中期末葉の土器は，隆線の行われている一群と沈線の行われている土器群とに大きく分離される。この群は前者である。指頭等による大まかな刻み目のある隆線は多くは粘土紐の貼付によるものであろうが，口縁横帯文は後退し，一本の隆線化する。2～4条が器面を対称に垂下させ，末端は渦文となり，唐草文の名残りとなっている。中には図版26－1のように特殊な耳状渦文となるものもある。地文が縄文のものと，櫛描き条痕文のものとがある。

G　縄文中期末葉の土器②（図版23～25）

隆線が沈線文化したものである。沈線による縦区画が8単位化し，縄文が多用される。器形は深鉢に収斂され，一部に両耳の土器が残るのみとなる。中期的土器の終焉である。櫛描条痕文の土器

は，変化のすくない縦位のもののみとなるがまだ残って行くものとみえる。　（森嶋　稔）

(2)　縄文後期・晩期の土器（第31～44図）

今回報告の対象となったのは，発掘資料のうち選択済みの有文土器と，地権者である宮尾正徳氏の表採資料である。諸般の事情から全資料を実見する機会が無く，検討も十分でないので，遺漏が多いことを恐れる。また発掘調査後年月を経ており，出土状況や遺構との関係等不明な点が多い。状況復元に役立てばと考え，図版は出土地点別に作成した。少々繁雑ではあるが，大まかな分類に従い，時期別に資料を概観して報告に代えたい。尚，26，27，43，55，56等中期末の資料及び土製円板（65，199），土偶（372），土錘（371）が図版に加わっていることをお断りしておく。

A　後期前半の土器

28，102，168，169，284等は称名寺式の範囲内と思われる。火山灰や火山岩に起因する鉱物・岩片が混入しており，後期的な胎土となっている。

251は三十稲場式に関連する。胎土や整形は他と差がない。爪による刺突の可能性があるが断定はできない。

48，61，101，256，257，285，286等は堀ノ内式の精製深鉢。101は口縁部突起付近が外方に張り出しており平面形は角張っている。成形時から意図された上，内面はケズリによって稜がさらに強調されている。24，25，29，46，47，57～60，62，103～106，170，171，207，252～255，287～299等は堀ノ内式の範囲内であろう。103は大量の石英が混入され，他にない特徴となっている。63，64は同時期の注口土器の破片である。30，31，45，172～174，258，259，300～303等は，大きな把手がつくことが多く，体部の磨消縄文や内面施文の発達などを特徴とする精製土器で，加曽利B1～B2式の範囲内にある。また35は同時期の注口土器かと思われる。

B　後期中葉以降の土器

66，67，175，264，304，306，307，309等は口縁部が内窟して文様帯を形成し，体部に羽状沈線文を持つ平口縁土器で，体部も屈曲する。66，304と67，175，306，307等とは構図が異なり，系譜の差は明らかである。306等は長野県南部～山梨県でよく見かける。349はこれらとよく似た文様帯構成をとる大きな波状口縁土器である。261，308は口縁部文様帯のない平口縁土器のグループである。以上の土器の体部は69，70，72，178，263，265，312等であろう。一方体部破片でも71や260のグループや209などはやはり別系譜であろう。尚66と308は胎土に多量の石英を含んで異質である。69と178，261，308はローリングを受けた砂粒を多量に含みやはり異質である。以上体部の羽状沈線文を特徴とする土器は加曽利B2～B3期の所産であろう。

後期後葉には前記した体部の羽状沈線文を特徴とするグループが展開する。口縁部文様帯の硬直化，羽状沈線の退化傾向などが特徴である。176や211は瘤を中心にして直線的な磨消縄文が描かれる。213，214，311は沈線間隔が狭く沈線帯に近い。この差異は時間差と考えられる。波状口縁の土器もよく似た状況で，262は前者に，219は後者に近い。267は後者に含めたいが系譜は別だ。以上の土器の体部は73，75，177，266，312などであろう。74，76，350等はこの時期の注口土器であ

ろう。

後期末葉の土器は同後葉の土器の系譜上に成り立つが，体部の無文化傾向が著しい。平口縁の44は口縁部の屈曲を失いかけている。112は楕円構図を持ち，あるいは晩期初頭に下るかもしれない。波状口縁では216のように楕円構図が出現し，隆帯も付される。111は沈線が痕跡的になり，口縁部文様帯に低い隆帯の貼付が目立つ。前者を古相，後者を新相と考えられないだろうか。83，84，110，162，217などは波状口縁の頂部で，高く突出し，細い隆帯を用いた加飾が目立つ。77，78は注口土器で，関東地方の影響がありはしないか。85は東北地方の張り瘤土器と関わるだろう。351は器表をケズらず内面は指によるオサエが看取できる。文様，技法とも東海西部との関連が深い。尚，179は沈線底に擦痕状の痕跡が残る。宮滝式に関係するかもしれない。

C　晩期前半～中葉の土器

大洞式に関連する土器には搬入品（東北地方からとは断定できないが）が存在しそうで注意される。268は精製の鉢で大洞B式に関連する唯一の資料だが，胎土は在地的である。88，152，181，271，353などは羊歯状文を特徴とする。353は注口土器，他は鉢とみられる。胎土は在地的で彫刻的でなく，稚拙な模倣品が多いと言えようか。182，185，222，273，等は雲形文を特徴とする鉢や浅鉢である。灰白色で混入鉱物が少ない独自の胎土をもつため，搬入品の可能性がある。126，127も同様で黄白色で雲母の多い胎土をもち，別の地域からの搬入品かもしれない。一方52，89，186，221，316等も彫刻的な雲形文が施文される。胎土は在地的で，壺形もしくは口縁部が大きく屈曲する鉢が目立つ。

隆帯文のグループのうち平口縁の土器では50が古相を示す。口縁部の屈曲が強く，隆帯もまだ貼付されないが，文様帯は後期末の112に比べて狭少化している。22，23はヘラ状工具による刻みを加えた隆帯，154は指頭圧痕による隆帯が付される。中南信地域以外では指頭圧痕の使用頻度が下がるので，両者は必ずしも時間差を示すとは言いきれない。波状口縁の土器は頂部が低く加飾も消失する。後期末の111に連なるのは口縁部文様帯が残る113や115で，隆帯1条に退化した51，183，315は新しい様相だろう。249は東海西部に関わりを持つかもしれない。

佐野Ⅰ式やそれに先行する土器は北陸地方との関連が深い。225，270，317～319は三又文をもつ鉢や浅鉢，4，5は同様の高台脚部である。10，13，119，122，224等は渦状の構図をもつ。これらは全体の構図が不明だが相互に組み合わさることもあり得る。118，165，190，269，358，362等は皿又は楕円形の大形皿で，底外面全体に施文される。三又文，渦文，弧線文，雲形文の変形等多様で，文様帯の制約がある程度取り払われるため，奔放な構図となっている。

佐野Ⅰ式関連の土器の中で注目しておきたいのは弧線文を軸にした文様構成をとるグループである。355は向かい合う弧線と渦巻を併用，356は半単位ずれて背中合わせの弧線を軸に三又文が併用される。弧線のみの327，弧線が分断された上に多段化する227，360などは宮崎遺跡（長野市）で注目された3，132，277などとよく似た構成となる。すなわち比較的単純なモチーフが繰り返され，時に多段化するのである。332は弧線を裏返した楕円構図とも言えようか。一方7，8，14，191，

228，229，278，326など弧線が単独で用いられたり三又文等と併用される場合はより奔傚で把握が難しい。南久和氏の刺枝文についての北陸側からの提示が待たれるところである。

153，240は口唇部を肥厚して施文する大形浅鉢である。133，192，233，239，364等は鍵ノ手文の仲間，124もその変形かと思われる。100，125，188，329，330，337，338等は沈線間の列点文で晩期中葉に広汎に用いられる補助的文様とされる。200は大粒の石英や砂粒を含む緻密な胎土を持ち，搬入品の可能性が高いが，直線的な構図に沈線間列点が併用される。12，117，121，134，184，198，230，234などは縄文帯を持つ，単純な構図で時間幅があると考えた方がよかろう。

D　晩期中葉以降の土器

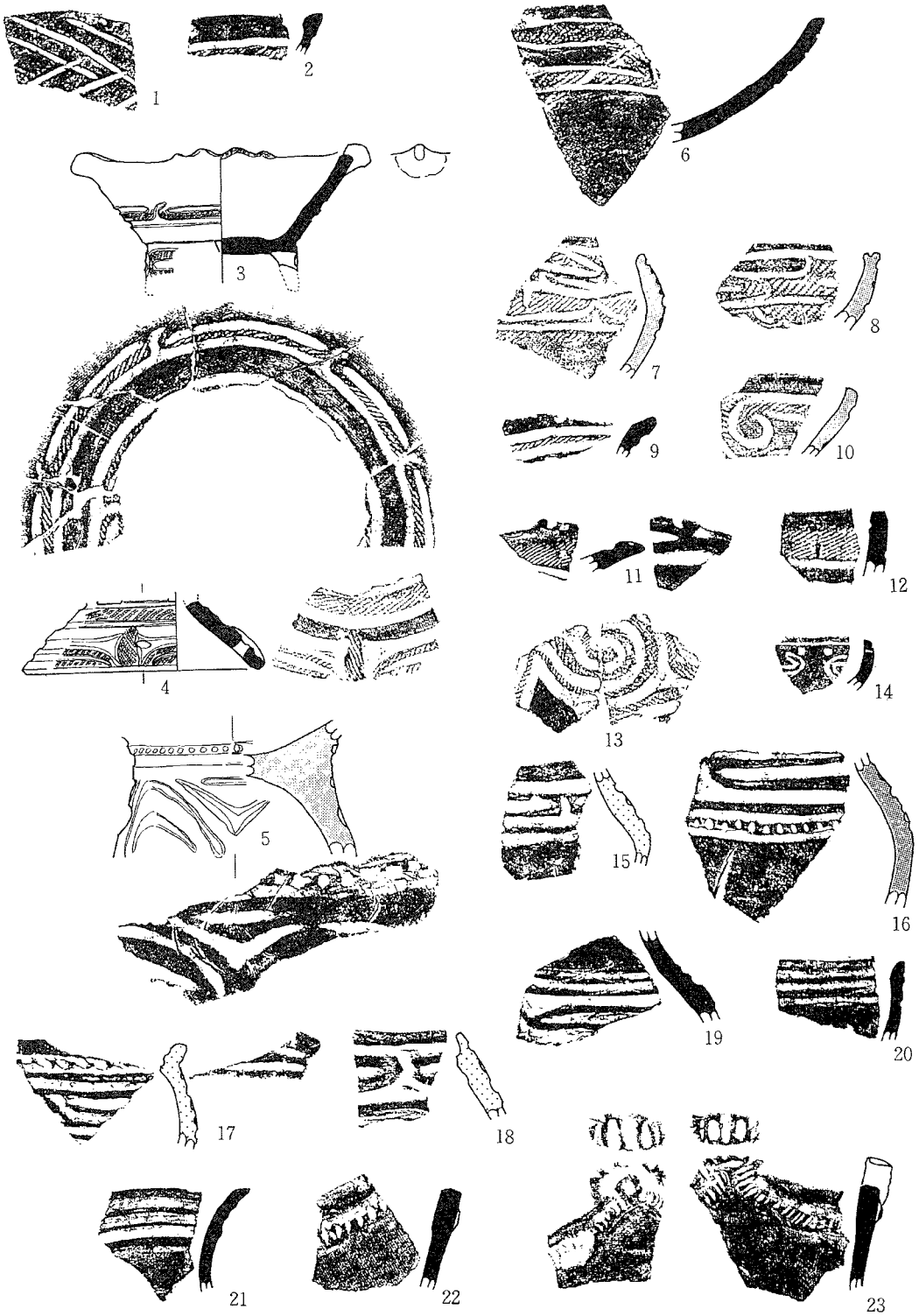
193はかなり退化した雲形文の破片である。37は工字状のモチーフをもつ台付鉢脚部で，三又状の彫去手法が顕著だが，彫去を忘れた区画も存在する。基本的には大洞C_2式前半期の影響下にあるが刺突の多用など安行Ⅲ式との関わりも考慮しておかねばならない。

粗大な工字文を持つ土器は，胎土に強い共通性があることが早くから指摘されていた。それは，石英と雲母を多量に含み，ザラザラした質感でミガキが効果的でないといった特徴である。宮遺跡出土土器にも若干の例外はあるもののこの極だった特徴を指摘できる。晩期初頭～中葉にかけて見られる石英粒が顕著な土器と技術的に関連する可能性を考えている。さて，369は三又状の構図ではなく，その一部分はむしろ鍵ノ手文に近い。15は三又状文の構図で，242，368も同様の可能性がある。16，18，36，38，39，243～246は長楕円の構図になりはしないか。99，150，167，204～206，245，346等は胎土や整形からみてこのグループの無文部分と思われる。

粗大な工字文とは異なり隆線表現が確立した工字文の仲間がある。隆線部分は細く，沈刻部は面取りがなされるが，ミガキが不十分な個体もある。胎土は石英や雲母を全く含まず，むしろ氷Ⅰ式に似る。工字状のモチーフをもつ19，247，279，340，楕円モチーフをとる344，隆線帯をもつ20，21，166，244，342，343などがある。282，370はいわゆる女鳥羽川段階の土器で，このグループの中では少々異なっている。（百瀬長秀）

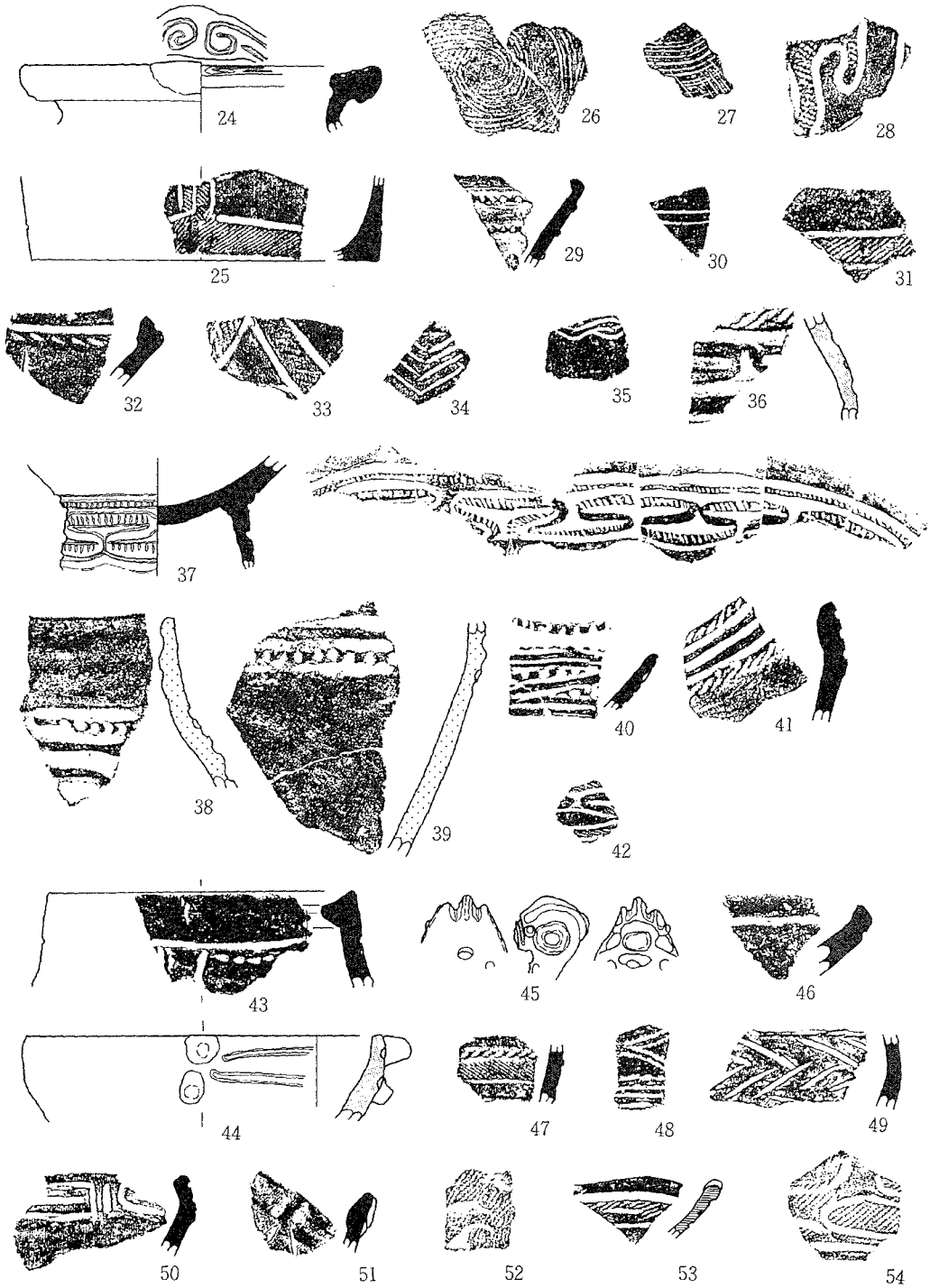
E　晩期の条痕文土器（第48図，図版29上）

宮遺跡の表採資料中に，晩期後半期に入る氷式に属する浮線網状土器が若干得られているが，これらが縄文晩期終末を色どる土器群である。その中に一点東海系列の条痕文系の土器が包含層からの出土として把握されている。図示したものがそれである。頸部をわずかに残し，球胴となり，底部でこけて立ち上がる。恐らく細くならないややすんぐり形の長頸壺となるものと思われる。全面に斜行したり横位の条痕に覆われていて，一部器内底部に近くにも条痕が見られる。底部径は6.5cm，胴部最大径は約25cm，頸部までの器高は約27cmである。他に宮遺跡では類例はみられないが，東海系の水神平系条痕文土器である。所属時期は縄文晩期である。樫王期のものであろうか。上記したように浮線網状文系の土器と組成し，信濃では氷式土器と呼ばれている。縄文時代終末期の土器である。



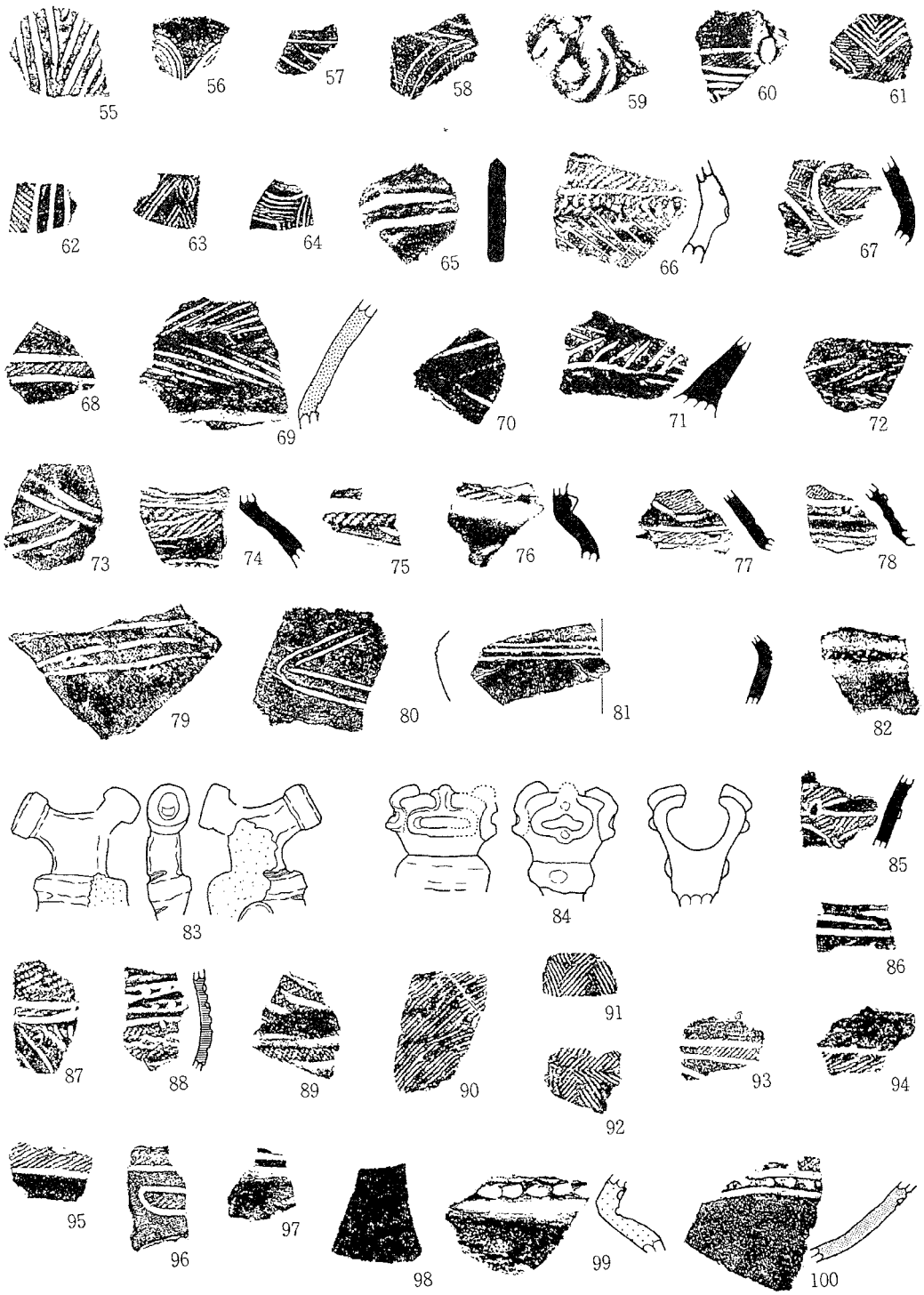
第32図　包含層出土の土器①

（1，2：1号周辺，3：2号住，4～23：2号住周辺）

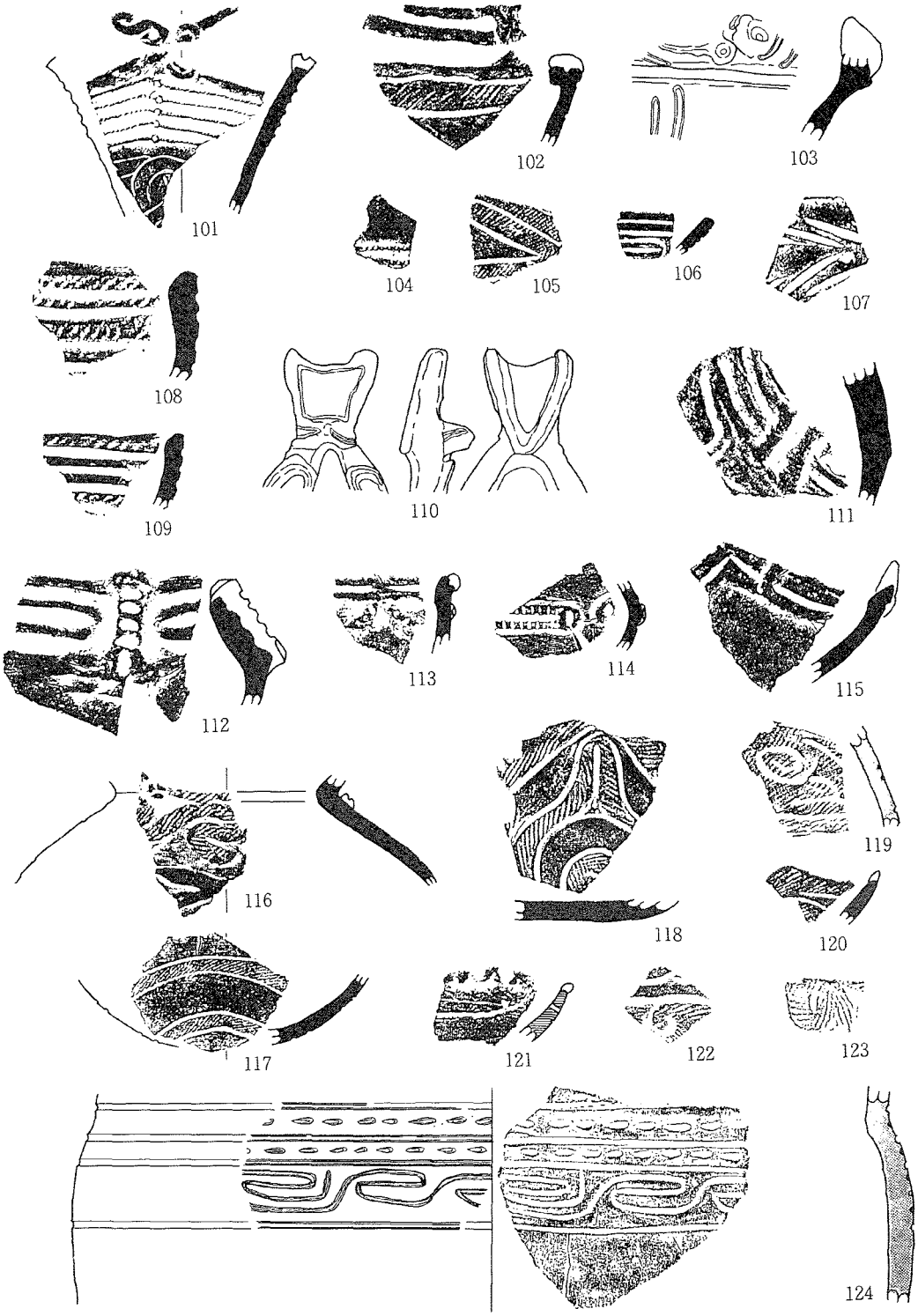


第33図　包含層出土の土器②

(24～34：2号住周辺，35～36：3号住周辺，37～42：4号住周辺，43～54：2，4号住周辺)

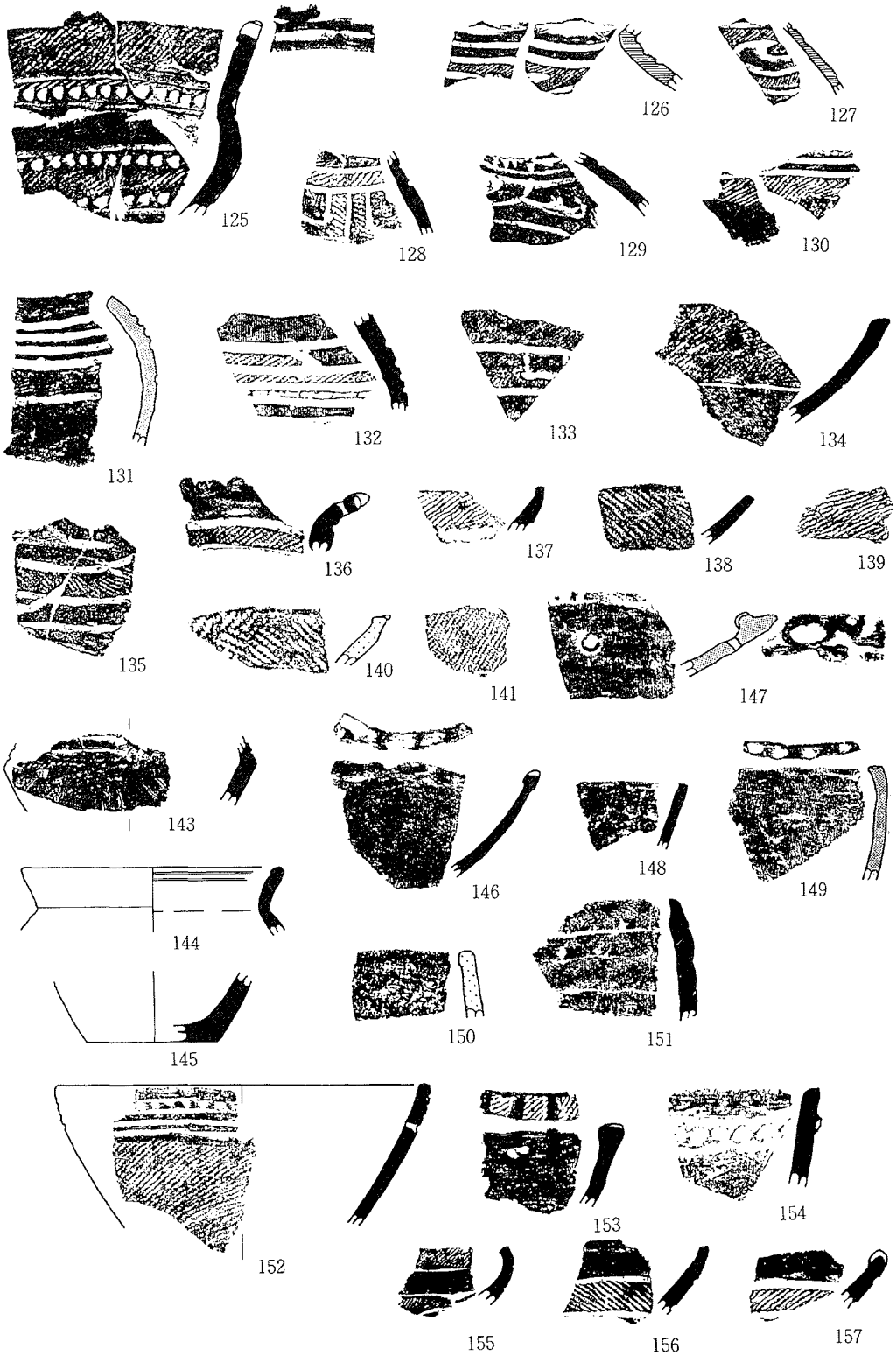


第34図　包含層出土の土器③
（55～100：5号住周辺①）



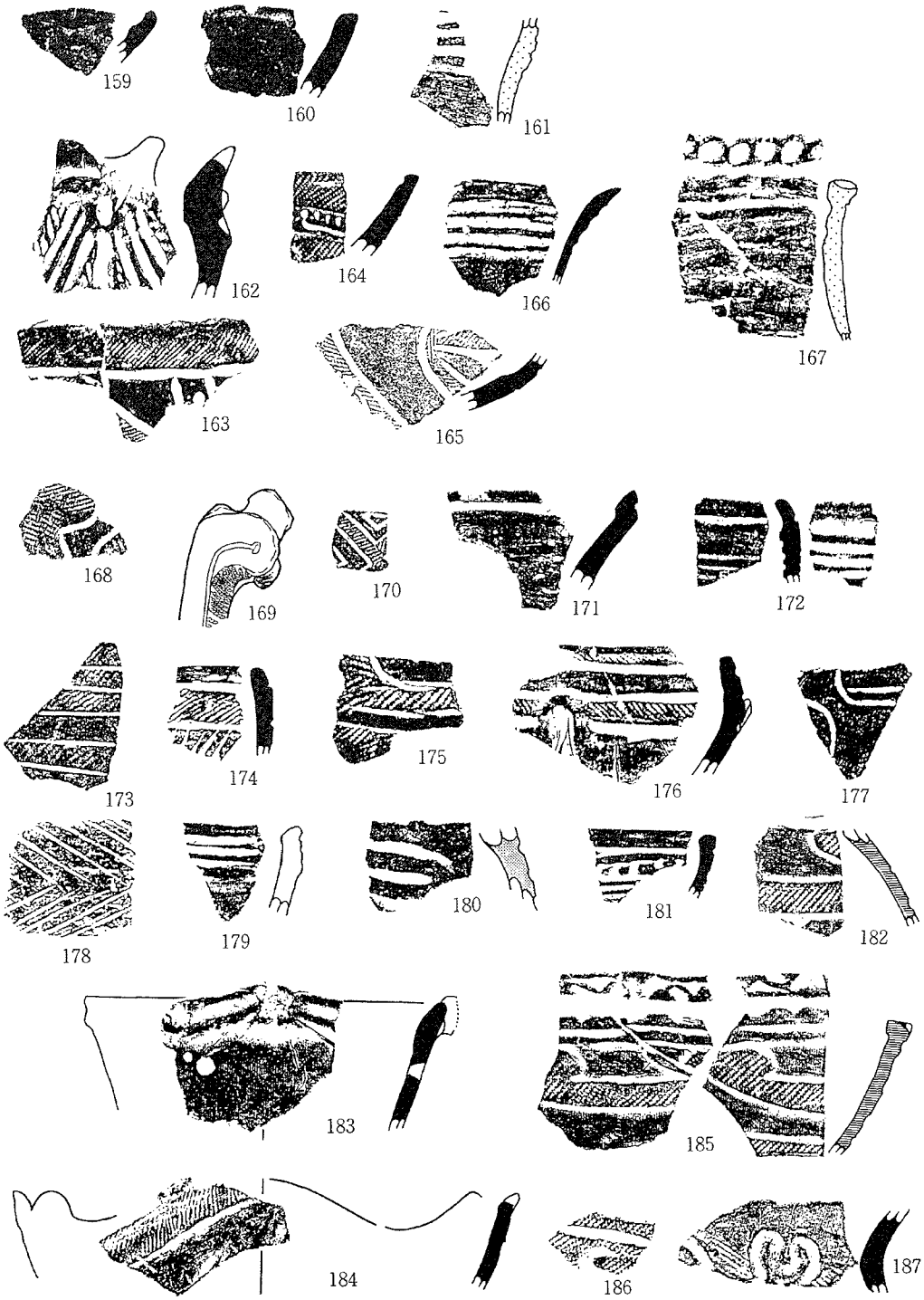
第35図　包含層出土の土器④

（101～124：５号住周辺②）



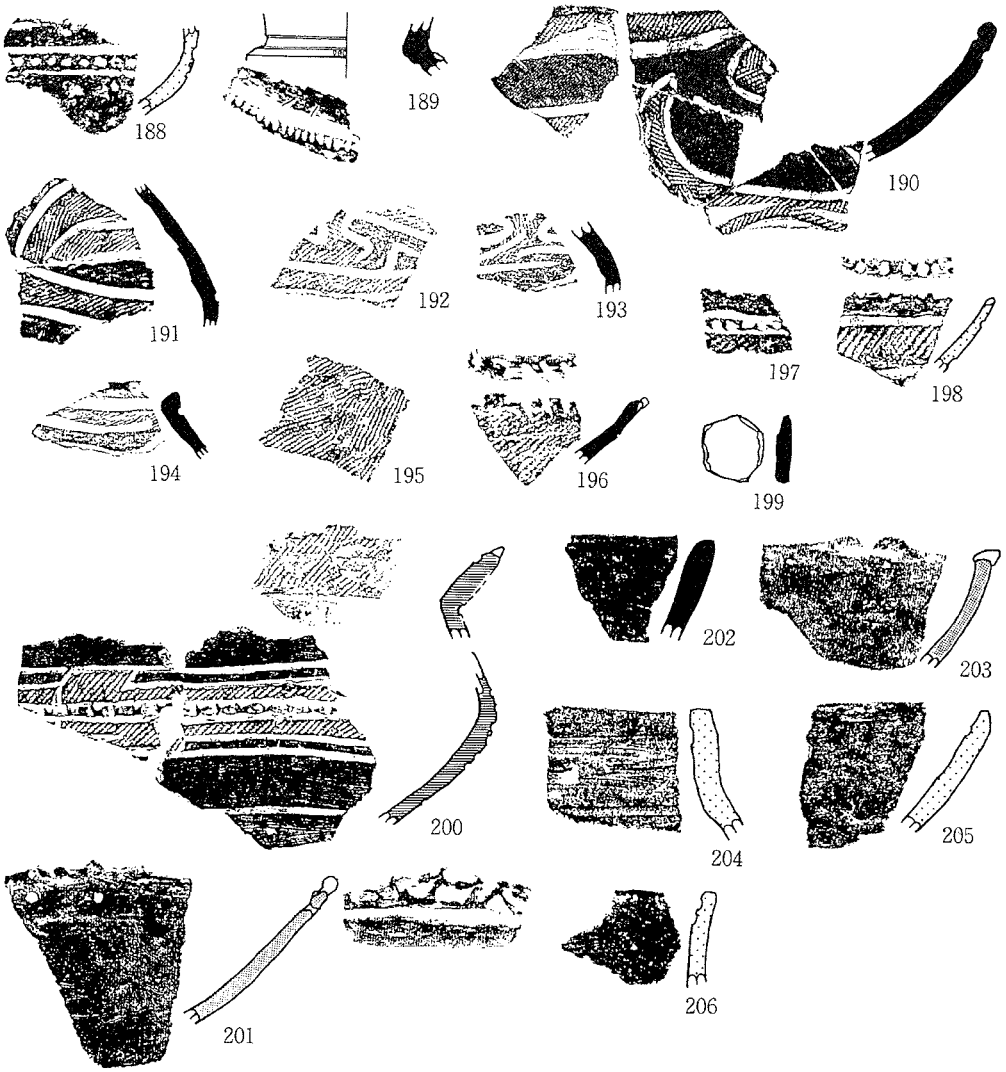
第36図　包含層出土の土器⑤

（125～151：５号住周辺③，152～157：４，５号住周辺）

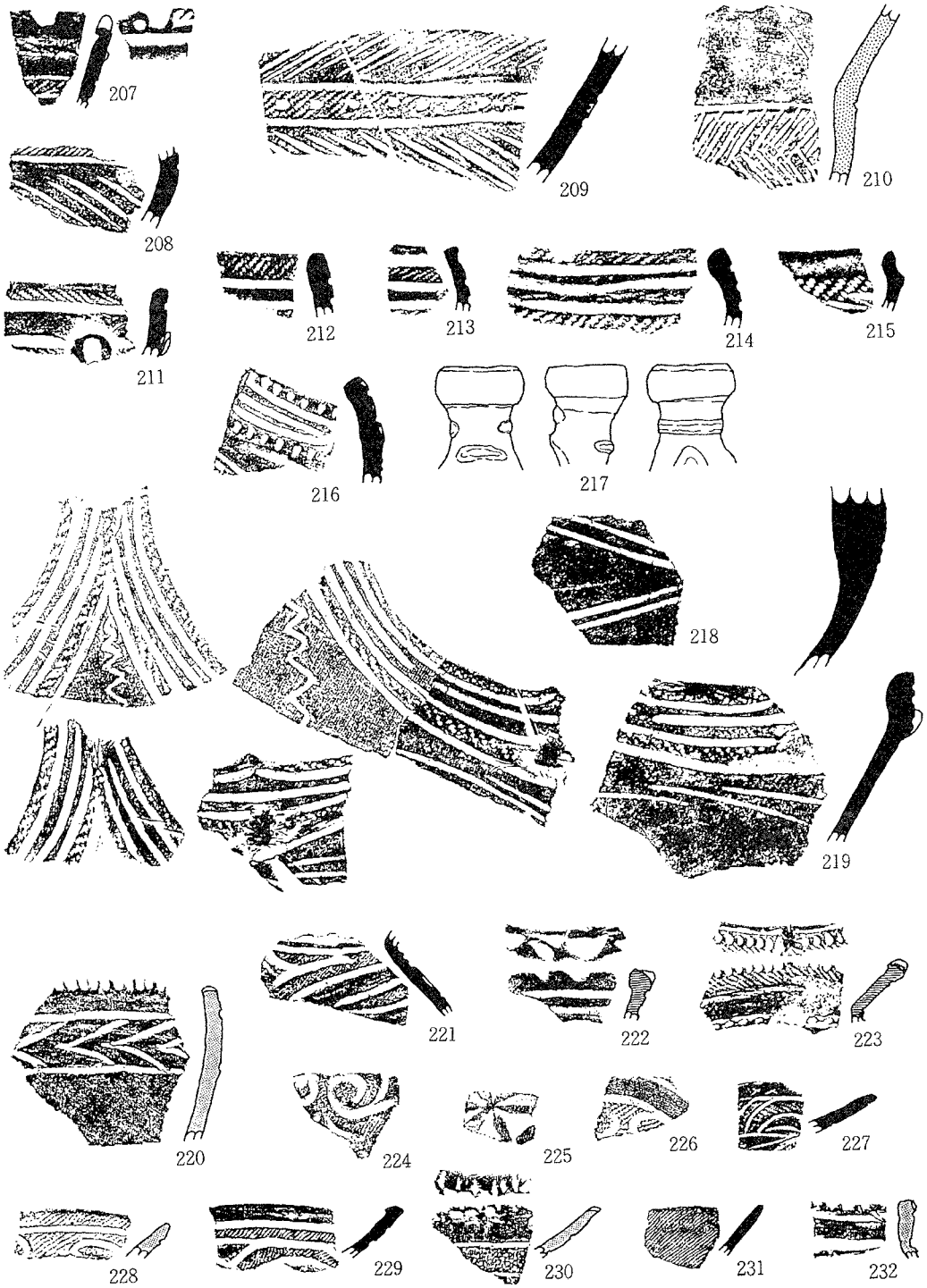


第37図　包含層出土の土器⑥

(159～161：6号住周辺，162～167：1号墳墓周辺，168～187：1号集石周辺①)

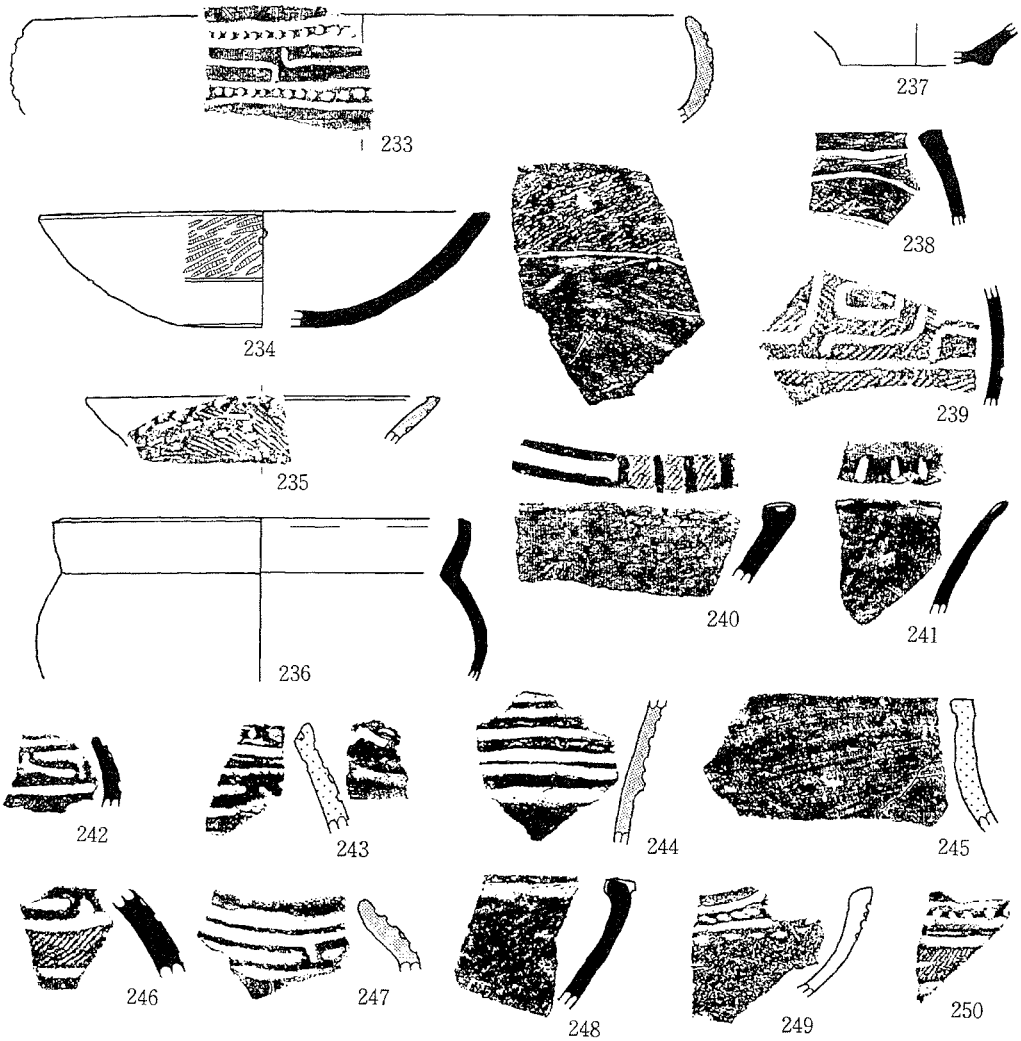


第38図　包含層出土の土器⑦
(188～206：１号集石周辺②)



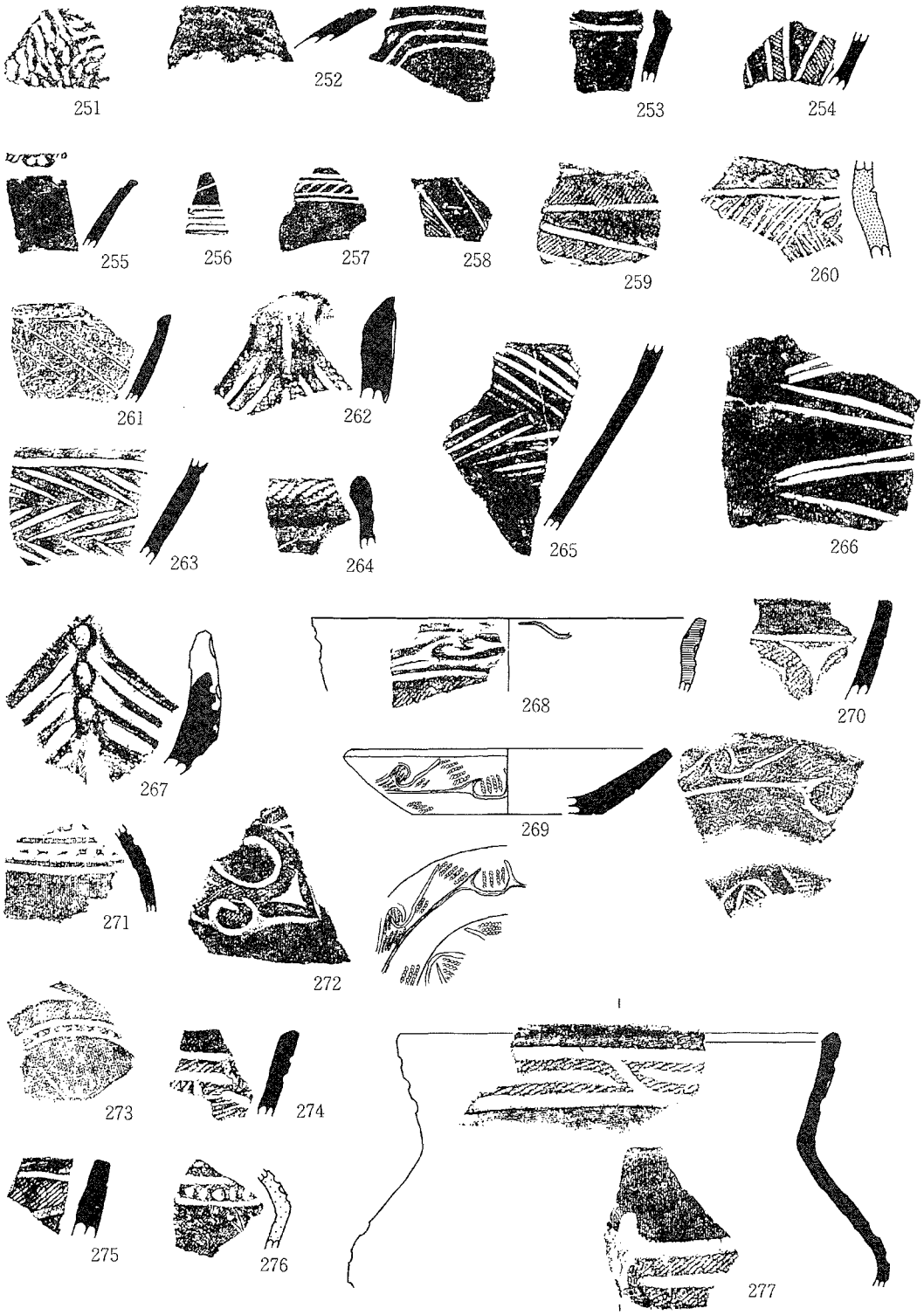
第39図　包含層出土の土器⑧

(207～232：２～４号墳墓周辺①)



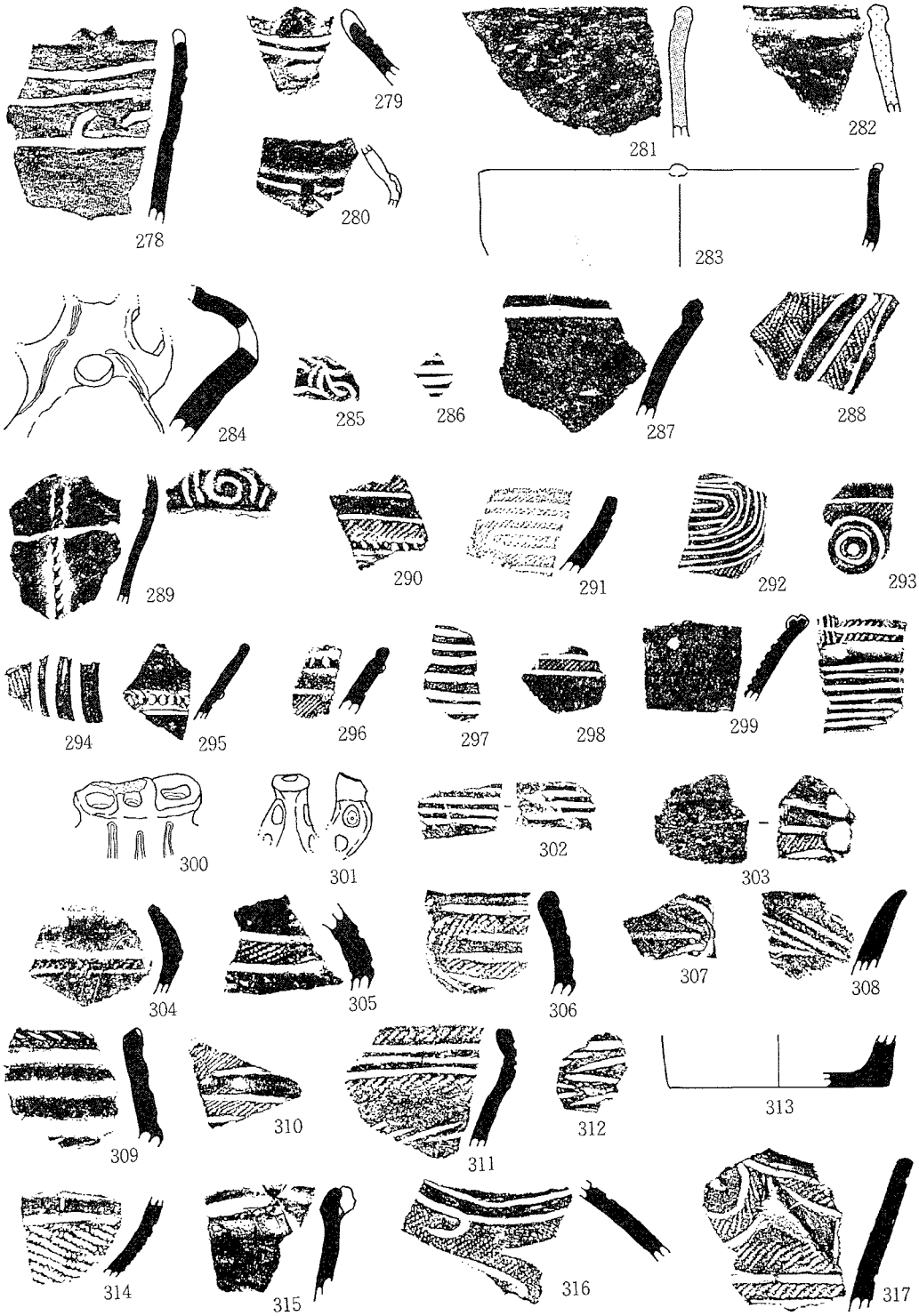
第40図　包含層出土の土器⑨

（233～248：２～４号墳墓周辺②，249～250：１号土壙周辺）



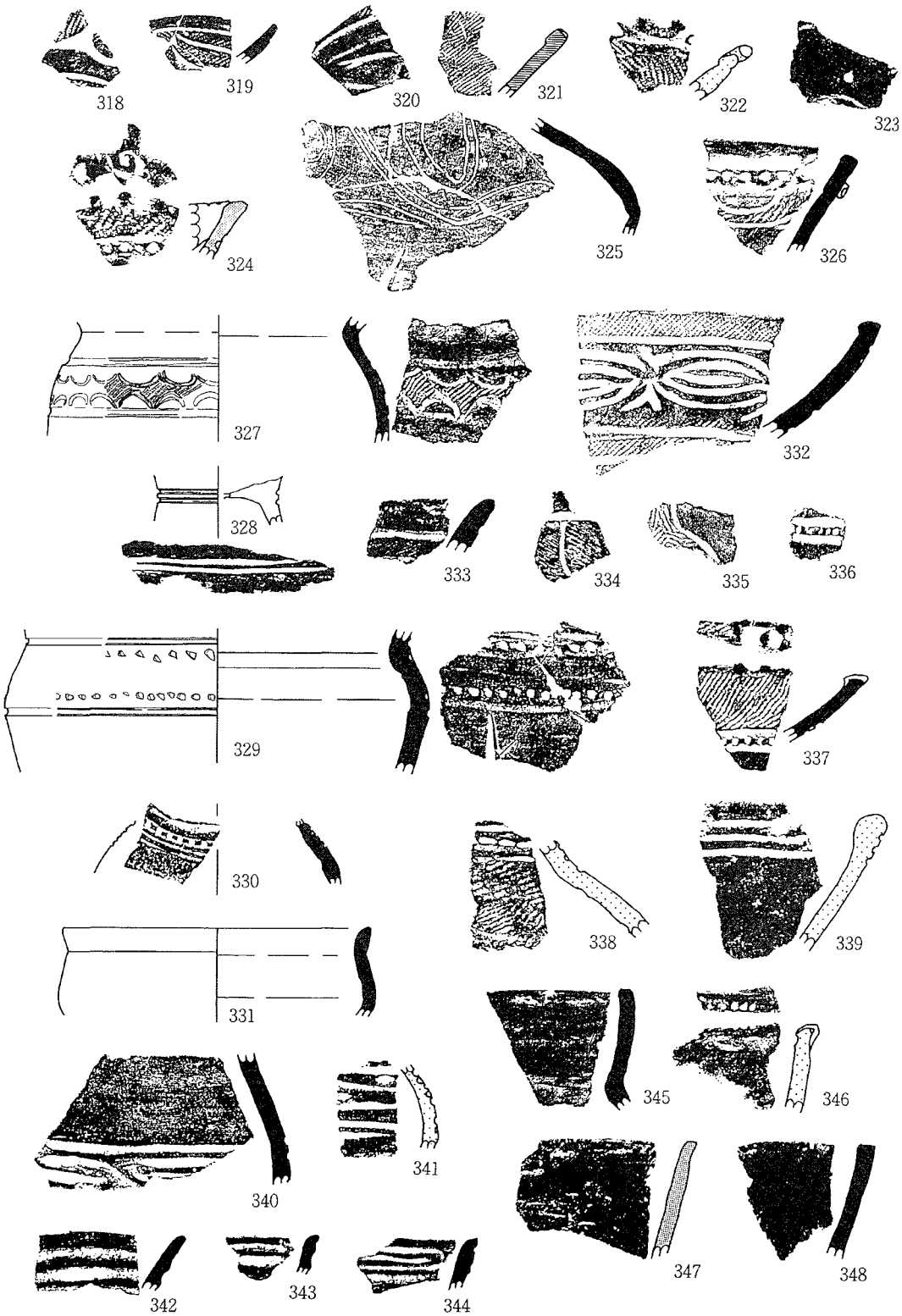
第41図　包含層出土の土器⑩

（251～277：１号集石西側①）



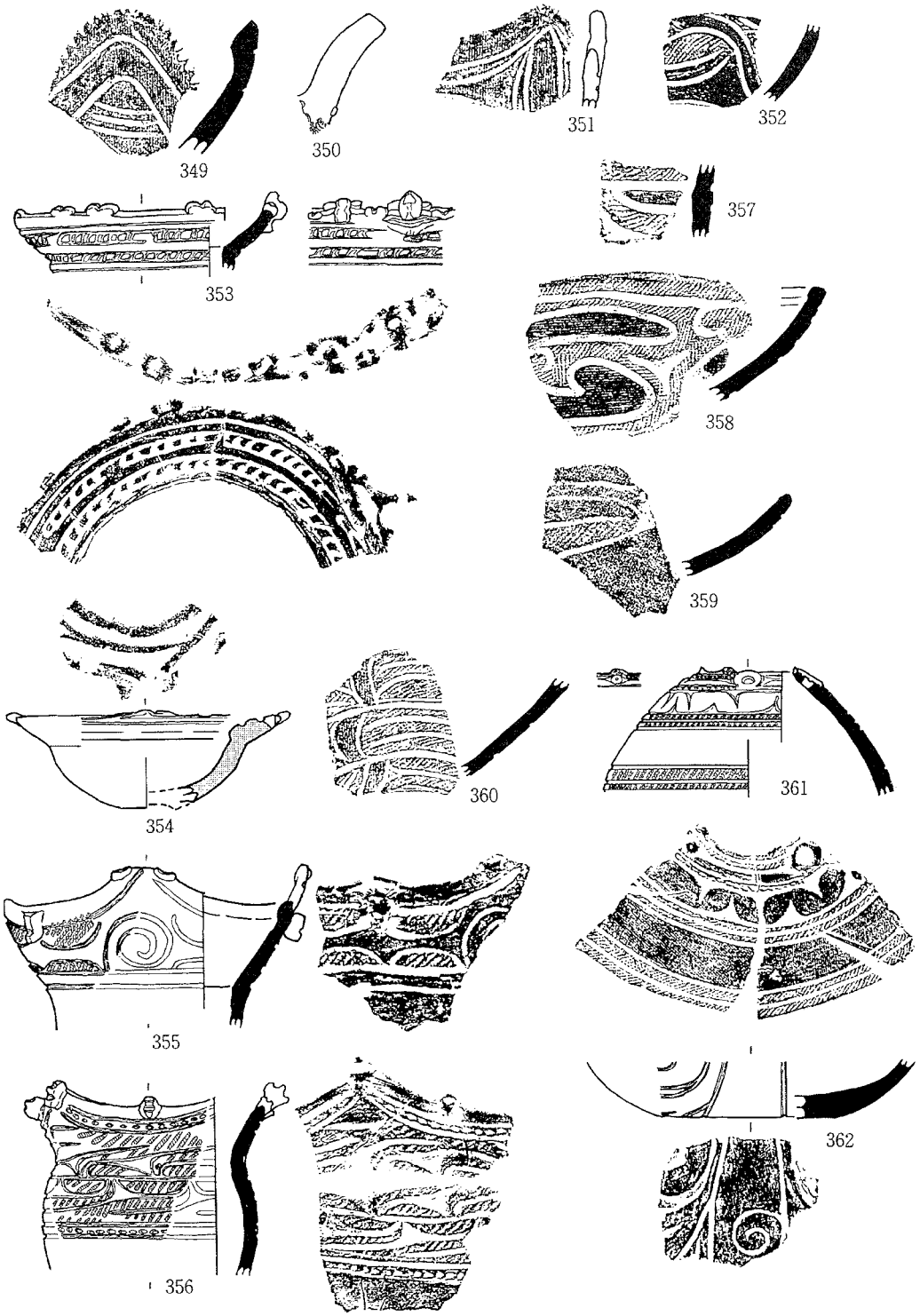
第42図　包含層出土の土器⑪

(278～283：4号集石西側②，284～377：その他グリッド①)

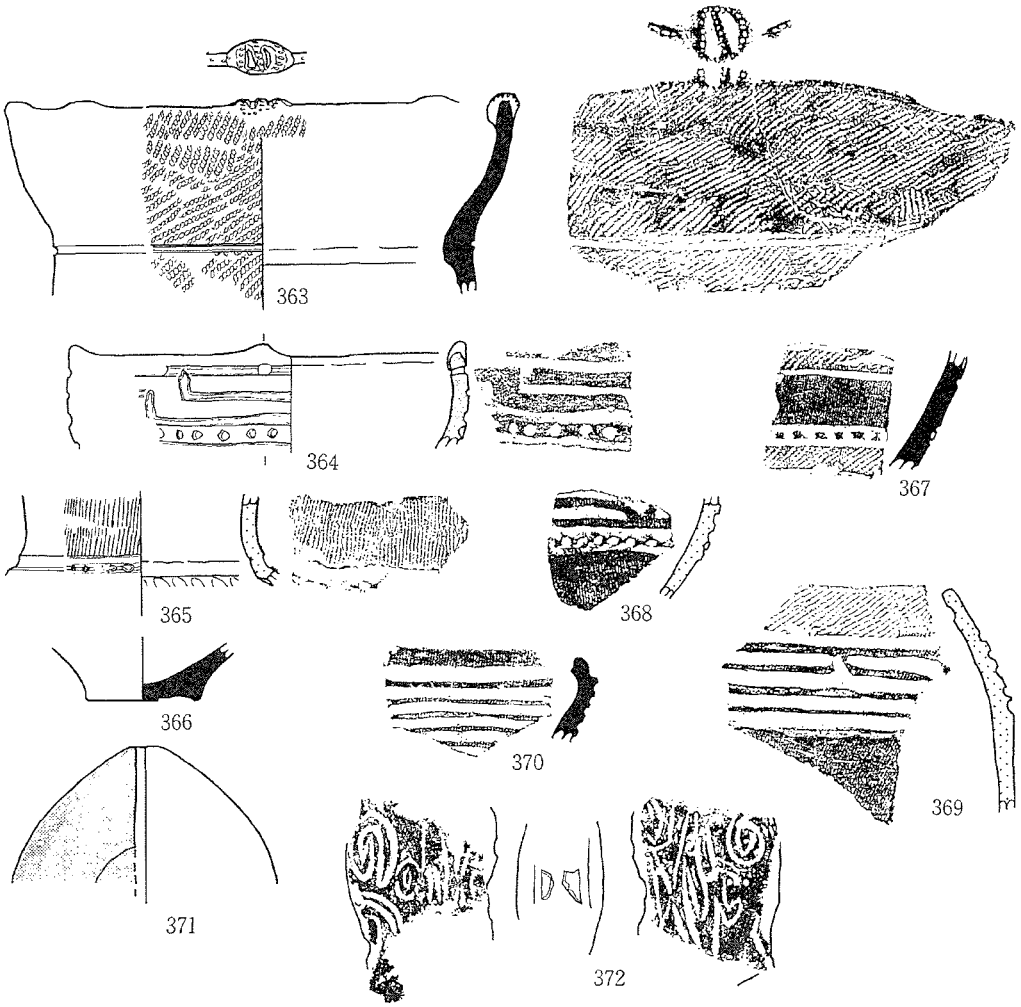


第43図　包含層出土の土器⑫

(318～348：その他グリッド②)



第44図　宮尾正徳氏表採資料①



第45図　宮尾正徳氏表採資料②

(3)　縄文時代の土製品及び石製品（第49～51図）

A　土偶（第49図）宮遺跡の土製品は必ずしも多くない。土偶もその一つであるが頭部破片を含めて８点検出されている。１は第２号墳墓址の合わせ口土器棺とも見られる深鉢上から検出したもので，眉状隆線と目，口などを貼付刺突する後期の特徴的な土偶である。２も同様眉状隆線を直線的に組み合わせ，目，鼻孔を刺突し構成し，口の表現は見当らない例品である。同様後期の土偶である。３も同様モチーフにあって，半欠品であるが眉や鼻をＴ字状に貼付し，目，口を刺突によって表現したものである。耳状隆起に正面から一孔があったと推測される破片である。なお凹部に赤色顔料が残存しているので，部分的か全体かは明確でないが，赤色塗彩されていたことがわ

かる。4は明瞭ではないが土偶の胴部破片であろう。不明確な沈線による文様が行われている。5～8は後期土偶の脚部片である。これらの土偶はすべて破片であり，土偶祭祀のあり方を窺い知れる資料である。1のように墳墓址の副葬品かともとれる資料もあって，類例の増加を期待したいものである。

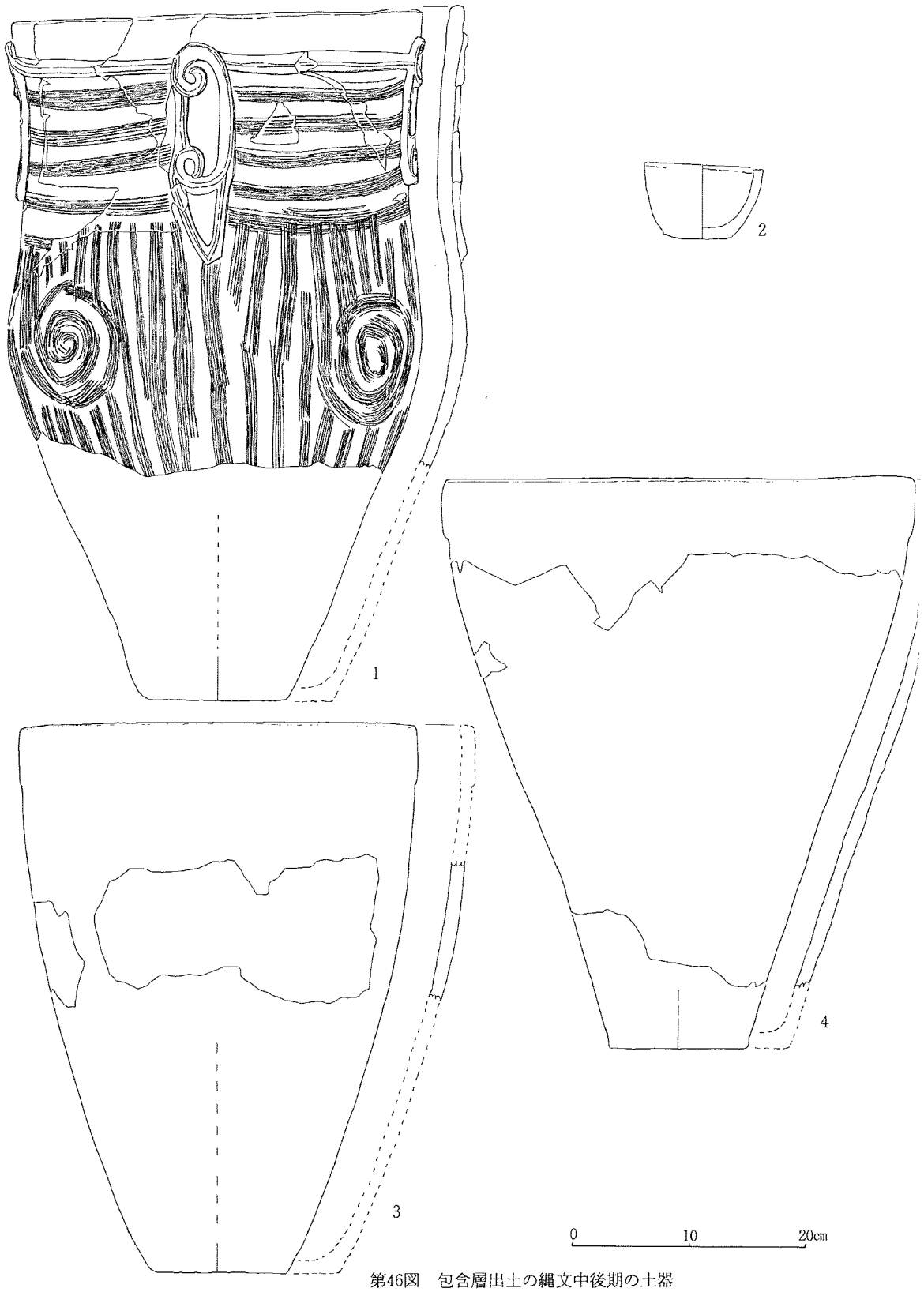
B　**土製耳飾り**（第50図1～4）4点検出されている。しかしおそらくこの時期のものとしてかなり多数遺跡に存在したものであろう。1，2は薄手の環状耳飾りである。2には赤色塗彩がみられる。3は内実の滑車形耳飾りで，4は中央に一孔のある臼形の耳飾りである。いづれも精製の粘土を用いたもので良品である。

C　**ミニチュア土器**（第50図5）1点検出されている。手づくねの焼成のよいものでほそい沈線で，平行沈線，鋸歯文を施しており，手づくね痕が残る。口唇部に一対2孔の貫通孔が行われている。何等かのものに装着し，緊縛した部品かもしれない。

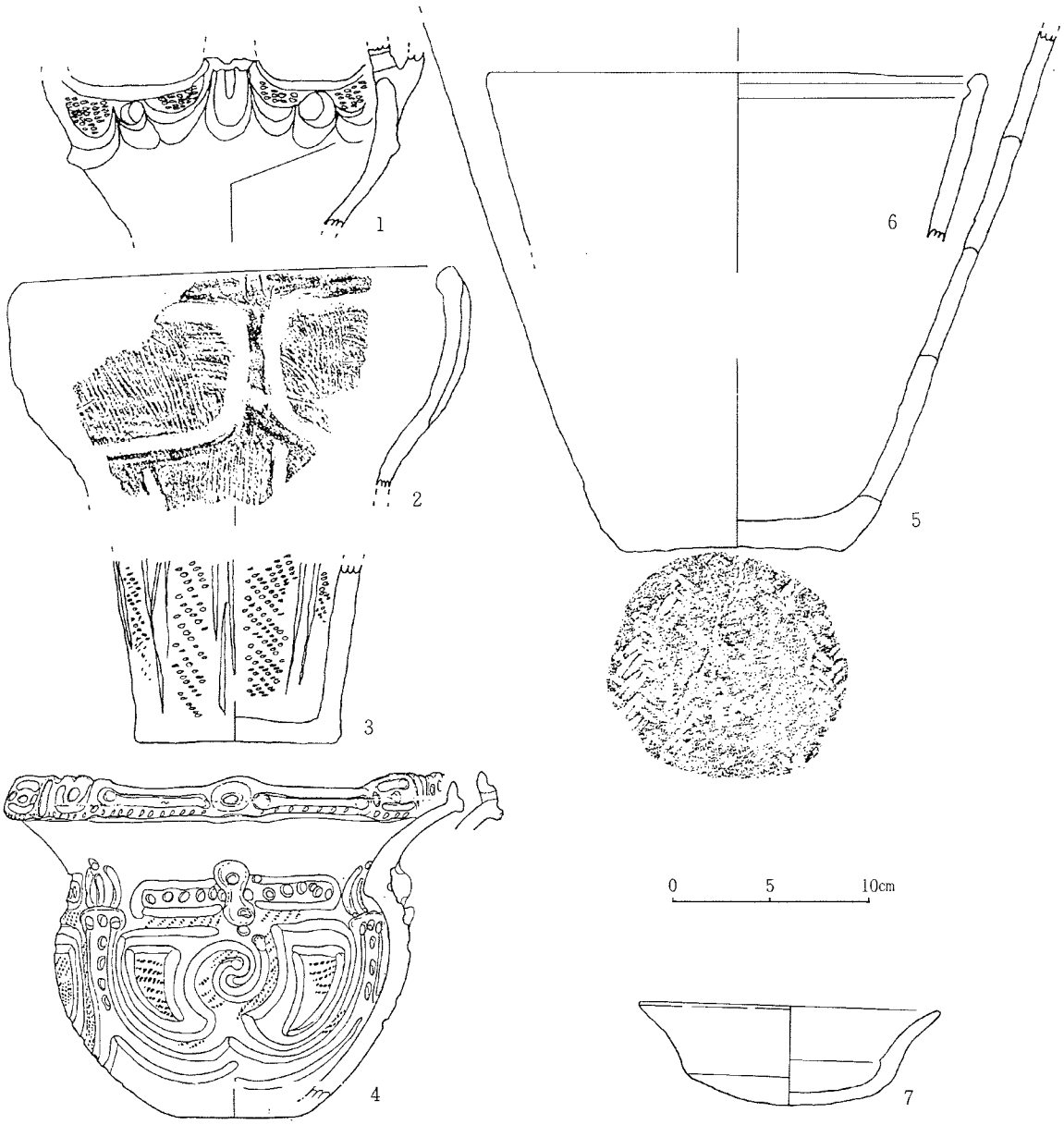
D　**球状土製品**（第50図6～9，図版30）4点検出されている。6は半欠品であるが，まったくの球状と思われる。中心に8㎜の真すぐな貫通孔がある。管竹状の軸を中心にして製作されたかのように均一な貫通孔であるのが特徴と言える。直径約8㎝で，貫通孔のまわりに同じ円状に2条の沈線，胴部に丸い点のほか，かすがい状の縦形の沈線文がある。他は不明。7は同様8㎜の貫通孔を持ち，下ぶくれのした逆漏斗状をしていたものと見られ，大町市一津遺跡，戸倉町円光房遺跡に類例がある。器面はよく研磨されており，全面に赤色塗彩されたものとみられる。8は同様半欠品であるが，貫通孔は同じく8㎜で原形は下部に最大径がある卵形である。大町市一津遺跡の類品（同報告書104ページ13）と酷似し，器面に細い沈線文があり，構成もほぼ同様であるのが注意される。9は無文の一例である。ほぼ半欠品で，貫通孔は7㎜でやや細い。しかしその貫通状況は同じであって，原形は卵形である。この種の土製品を，大町市一津遺跡例にならって，「球状土製品」としておきたい。同土製品は，北陸地方縄文時代からの攻玉遺跡から検出例が多く，信濃でも大町市一津遺跡で15例，戸倉町円光房遺跡で1例，上田市下前沖遺跡で1例が知られている。中条村宮遺跡においては5例を知ることができた数すくない資料と言うべきである。これらの遺跡は同様にして縄文後期から晩期の良好な遺跡であって，攻玉の未成品や完成品，原石を出していることも留意すべきである。

「長野県史」（考古資料編・遺構遺物）828ページ――土鈴――の項のうちに，卵形の球状土製品と思われるものが多数含んでいることに注意したい。同図4，5（穂高町離山）は明らかに類品と見られ，9（松本市内田城）10（塩尻市柿沢東）なども類品であるかもしれない。こうしてみるとこの種の土製品はかなり増加できるのではないだろうか。機能的には攻玉用舞錐の弾み車（勢車）とするのが穏当であろう。

E　**土器片円板**（図版31）従来土製円板と呼ばれたものを，こう呼んでおくこととする。粘土から目的的に作り焼いたものでなく，土器片の再製作利用だからである。小量だが検出される。一孔を穿ったものもあるが，恐らく紡錐用の弾み車（勢車）として用いられたものであろう。

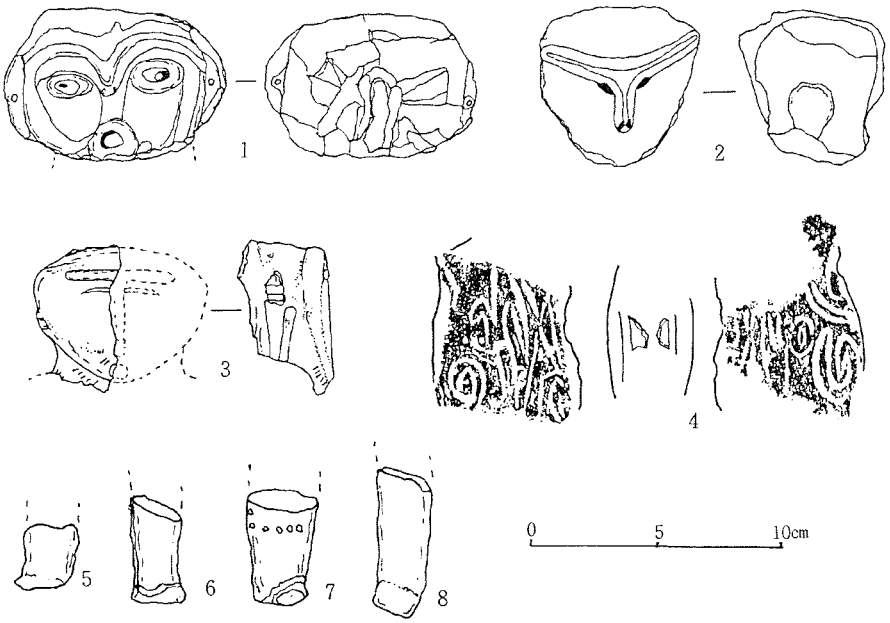


第46図　包含層出土の縄文中後期の土器

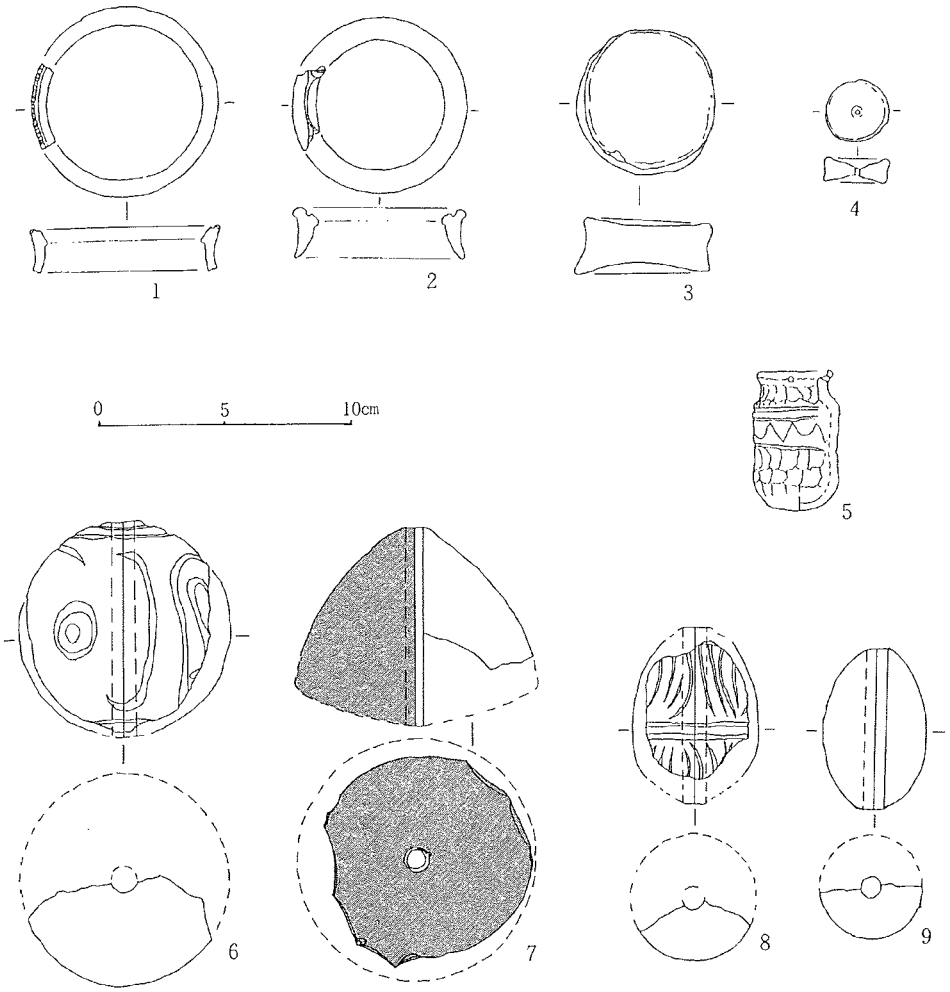


第47図　宮尾正徳氏表採資料③
（1．2．3．縄文中期，4．5後期，6．晩期，7．古墳後期）

第48図　包含層出土の縄文晩期の土器



第49図　宮遺跡出土の土偶
（1．第2号墳墓，2～8包含層出土）



第50図　包含層出土の土製品
（１～４耳飾，５小形壺，６～９球状土製品）

F　石冠（第51図１，図版32）石冠は飛騨地方に核があり，東日本に分布する石製品である。４形態を知られているが，球頭型の整った石冠が宮遺跡から出土しているので図示する。緑泥片岩製の全面にわたり研磨製された優品で，重量は290ｇである。頭部が半球状で笠状に頸部に接続するように作り出され，頸部は細く基底部に向って三角形状に広がる。基底部は直線状でなくやや内反りになり３㎜程中央部で上がり，底面も凸レンズ状にふくらみを持っている。基底の長さ11.4cm，幅4.3cm，中央部の高さ約８cmである。半球状頭部径は4.6cm，頸部最小径は2.4cmを計測する。石冠，独鈷石，御物石器等用途不明の石器は縄文後晩期に属するものとされていて特殊な石製品である。県下では宮遺跡例との類例品は，松本市原度前，三郷村内，富士見町割畑，南木曽町太田垣外，上田市下前沖，望月町中道遺跡など７例程が知られている。石冠は男性人骨の頭部に接して出土し大

正時代からそう呼ばれているが，用途は不明である。概して軟質の石材を用いており着柄等打撃用には適していない。仮器か儀器用のものとするのが適当であろう。

G　**独鈷石**（第51図２，図版32）独鈷石はその形が，密教法具の独鈷に似ているところからそう呼ばれた。もちろん機能的な命名ではないので歴史的呼称に石冠同様従っている。４形態を知られ，縄文後期から弥生中期まで存在する。本，宮遺跡例は，石材に石英閃緑岩を用いている。全体を啄製の上研磨によって作られているが，器体中央に頸れ部をつくり，両端は斧状である。斧状刃部と思われる両端はたたき痕によってつぶれていて丸味を帯びている。各所の断面は楕円形である。独鈷石には両頭石斧との名称もあるが，その名称にふさわしい。石材は弥生中期に多用されたものと共通するが，その所属時期は確かではない。340ｇである。東日本に偏在する資料である。

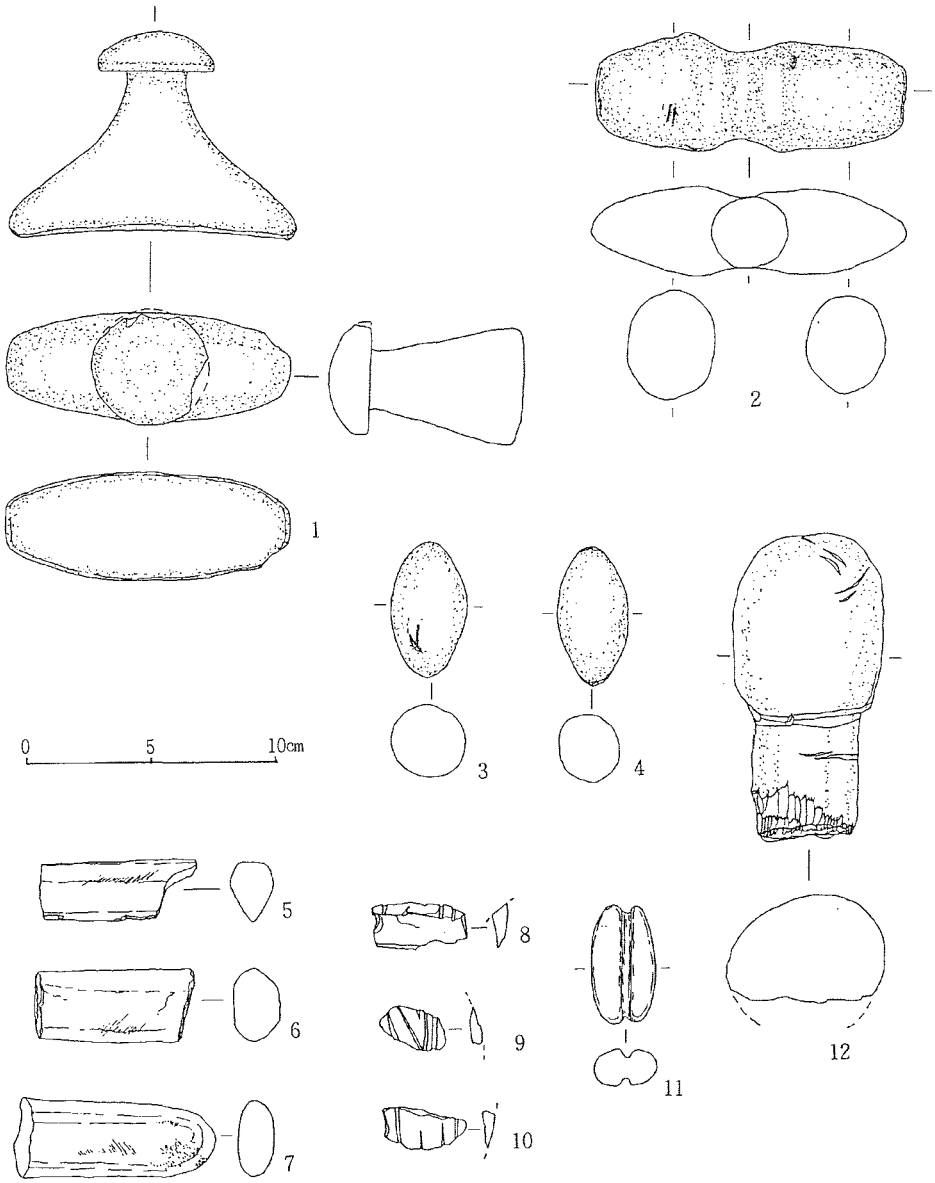
H　**石弾**（第51図３，４，図版32）宮遺跡から採集資料に石弾が２例あるのが注意される。石製投弾とも言われ，縄文後晩期から弥生初頭のものが知られている。平面形は長楕円のラグビーの球状である。長さ5.5cm程で，幅は３cm，断面は円形である。重さは３が45ｇ，４が40ｇである。３は安山岩製，４は砂岩製で啄製研磨されている。帯状の投擲具にはさみ遠心力を利用して投擲し，戦闘や狩猟の武器とする民族例は多い。西日本に多い資料である。

I　**石刀**（第51図５～10，図版32）石刀，石剣の類が検出されている。縄文中期に盛行した大形石棒が，後期になって石棒の機能に分解がみられ，大形石棒と小形石棒に分離する。小形石棒は，彫刻有頭石棒から石刀，石剣形へと晩期には変容して行く。大形石棒を祭祀形態とすると，祭祀儀礼は権力儀礼へと展開するかに見える。石刀は多く内反りで，内反り側に鋭角な刃部構成をし，刃区（はまち）を作り出し，柄部と区別したものもある。

完形で検出されるのは稀れで，多く破壊され断欠となっている。宮遺跡でも10例程見られるが，すべて破片である。ほとんどが粘板岩製で，時には熱変成を受けたホルンフェルス製のものや，緑泥片岩製のものも見られる。５は明らかに刃部をつくり出している。８～10は彫刻が見られ，全容はわからないにしても柄尻の有頭部破片である。墳墓址，集石址などに伴って出土する場合が多く，具体的な機能と共に更に検討を必要としている。しかも石刀がほとんど内反で有頭を示めすのは，大陸との関係を示唆していることに留意させられる。

J　**石錘**（第51図11，図版32）平面形が楕円形の有溝石錘が２点検出されている。砂岩製である。意外と宮遺跡ではこうした関連資料がすくない。

K　**石棒**（第51図12，図版32）緑泥片岩製の石棒で，頸部下半を欠失している。啄製の上研磨が行われている。くびれ部は彫り出したかのような痕跡が見られ，製作の際か古い筋状のきずがある。縦位に３分の１を欠失している。同石材による石棒は縄文中期にはほとんどその例がなく，その点，後晩期にみられるものである。一方が石棒状であるのに対して，一方が有頭の石刀，石剣などに分解していく好例と言える。宮遺跡では他に類例は検出されていない。　（森嶋　稔）



第51図　包含層出土の石製品
（１石冠，２独鈷石，３・４石弾，５～10石刀，11石錘，12石棒）

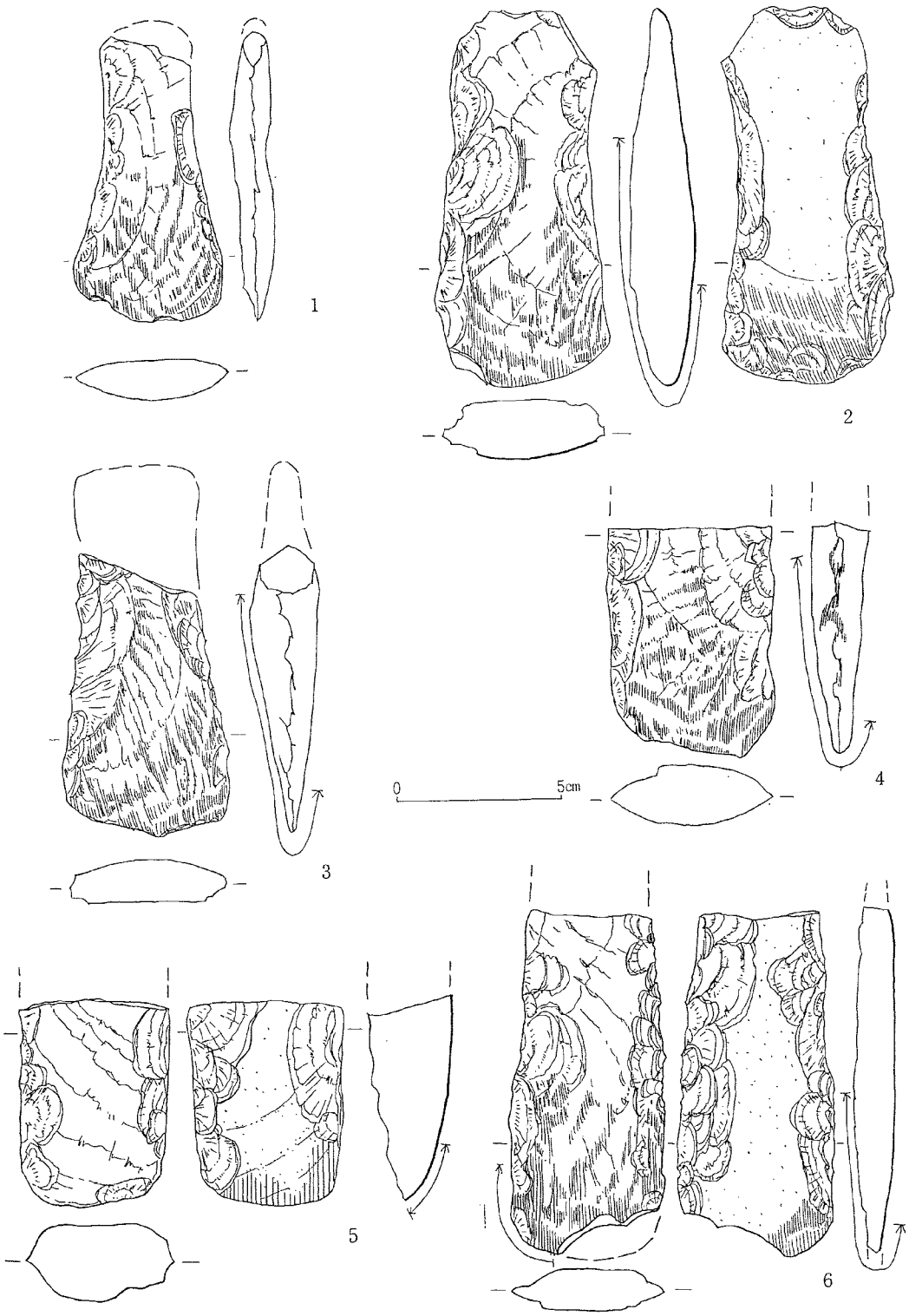
(4) 縄文時代の石器（第52～63図）

石器類は非常に多数にわたって出土している。第52～54図は主に安山岩の転石を剝いだ転石面を残す典型的な犀川中流域に偏在する打製石斧である。刃部に磨耗痕が見られるものがほとんどで，その使用目的は土掘り棒の先端か，鍬先としての機能とみることができる。刃部は表裏ともに過度の使用による磨耗痕が著しく観察できる。とりわけ表裏面での磨耗範囲の異なりが見られて注目される。第55，56図は磨製石斧で石材のほとんどを蛇紋岩に求めている。全て定角式で乳棒状のものはみられない。撥形で扁平な加工用の横斧と思われるものもみられる（第55図３～８，第56図７～10）。検出された磨製石斧及び宮尾正徳氏表採資料は，頭部もしくは刃部に何等かの破壊痕を持っている。頭部もしくは頭部破損面に激しいたたき痕のあるものが多く，割り斧か楔として使用されたものと考えておきたい（第55図６，第56図１，４）。また使用による刃部の損傷も激しく，破壊したもの，刃こぼれしたもの，刃部剝離し，過度の衝撃によって磨耗しているもの（第56図２，３）などがみられる。こうして頭部や刃部が器体中央部附近で破損した磨製石斧は，遺棄されるものもあるが，ある種のものは再利用されたように見受けられ，主として楔としての機能をうかがわせるものがある。

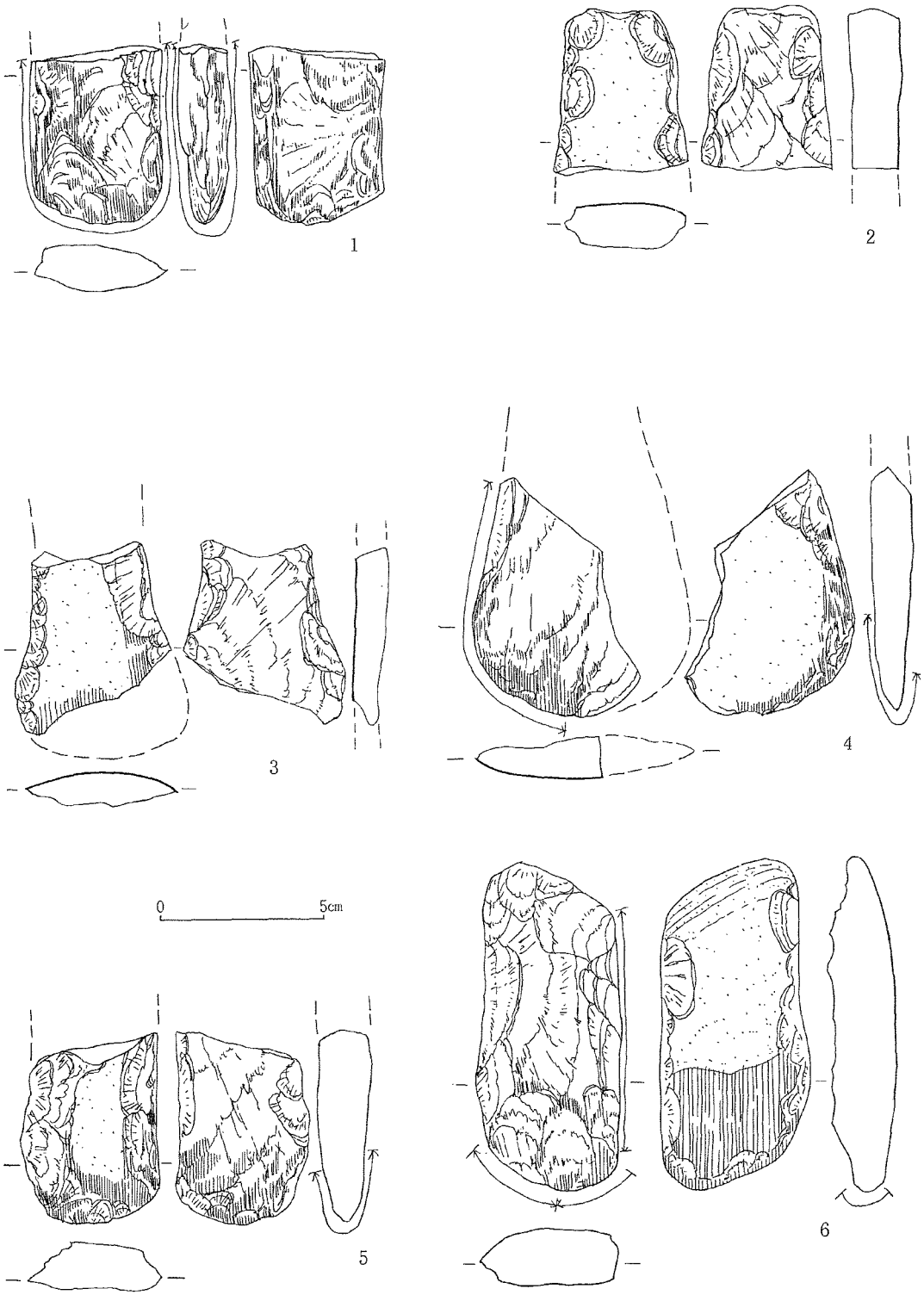
第57図１～５は横刃石器である。打製石斧と同様に安山岩の転石面を残した横長の剝片を用いている。使用痕はあまりみられないが，５は着柄のためと思われる抉入部を作出している。第58図１～４は周刃石器で，縄文後期の石器群にかなり特徴的なものとしてこの種の石器が組成される。１は両面加工，２～４は素材面を片側に残すもので，平面形はほぼ円形である。周辺加工が全周に及ぶように行なわれ，機能については明らかではないが刃部断面は凸レンズ状のため掻器的なものかとも思われる。５，６は素材面をそのまま残し，大きく打ち剝いだだけのもので若干周辺部に調整剝離を加えてある。孤状刃部を特に使用したとみられる刃こぼれと磨耗痕もみられる。７，８は砂岩製の砥石の破片である。９～14は２～３稜をもつ石刃状剝片で連続剝離技術により剝出されている。

第59図１～14は楔形石器である。ほぼ二形態に分類でき，いわゆる柱状をなすＡタイプ（１～３，７～12）と，板状をなすＢタイプ（４～６，13，14）とにである。本遺跡ではＡタイプの多面体の柱状タイプのものが多い。この種の石器は旧石器時代から縄文時代を通して確実に存在することが明らかになりつつある。このような小形の石器の機能はどのようなものであったであろうか。かなり細い作業を可能とし，その上，刃部再生の繰り返しが打点転移のなかで行なわれたもののようである。15～23は両面加工石器である。二形態に分類でき，Ａタイプは器体下半部に最大幅をもち尖頭状のもの（15～20）と，Ｂタイプは楕円状のもの（21～23）がある。前者は石鏃の未製品とも考えられるがそれには大きすぎ，中形の尖頭石器としておきたい。数は少ないが，Ｂタイプの楕円状両面加工石器は断面が凸レンズ状をなしており，刃部の作出に入念さがみられる。

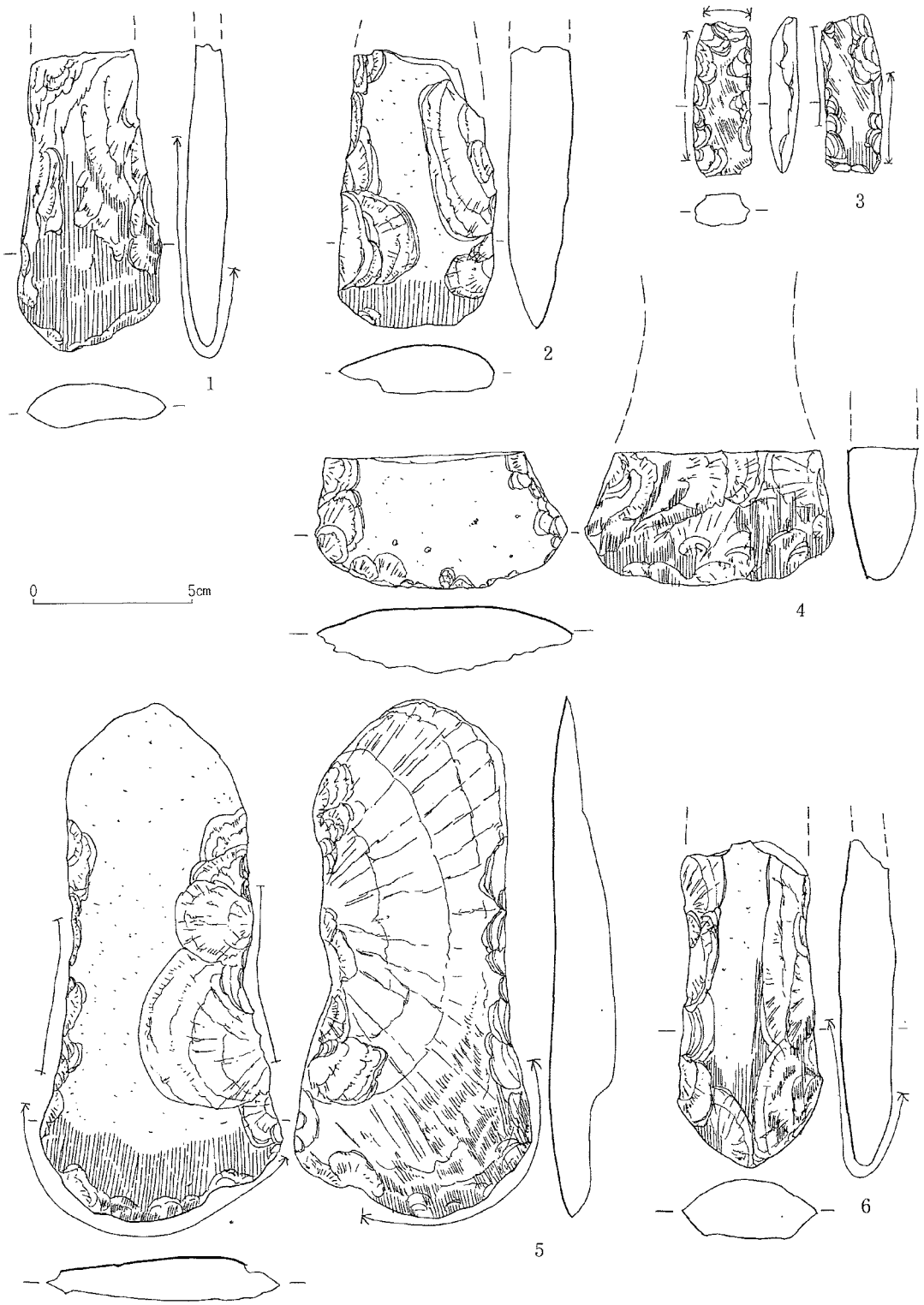
第60図１～15は石錐で二形態に分類できる。有摘石錐とされるもの（１～８）と，棒状石錐



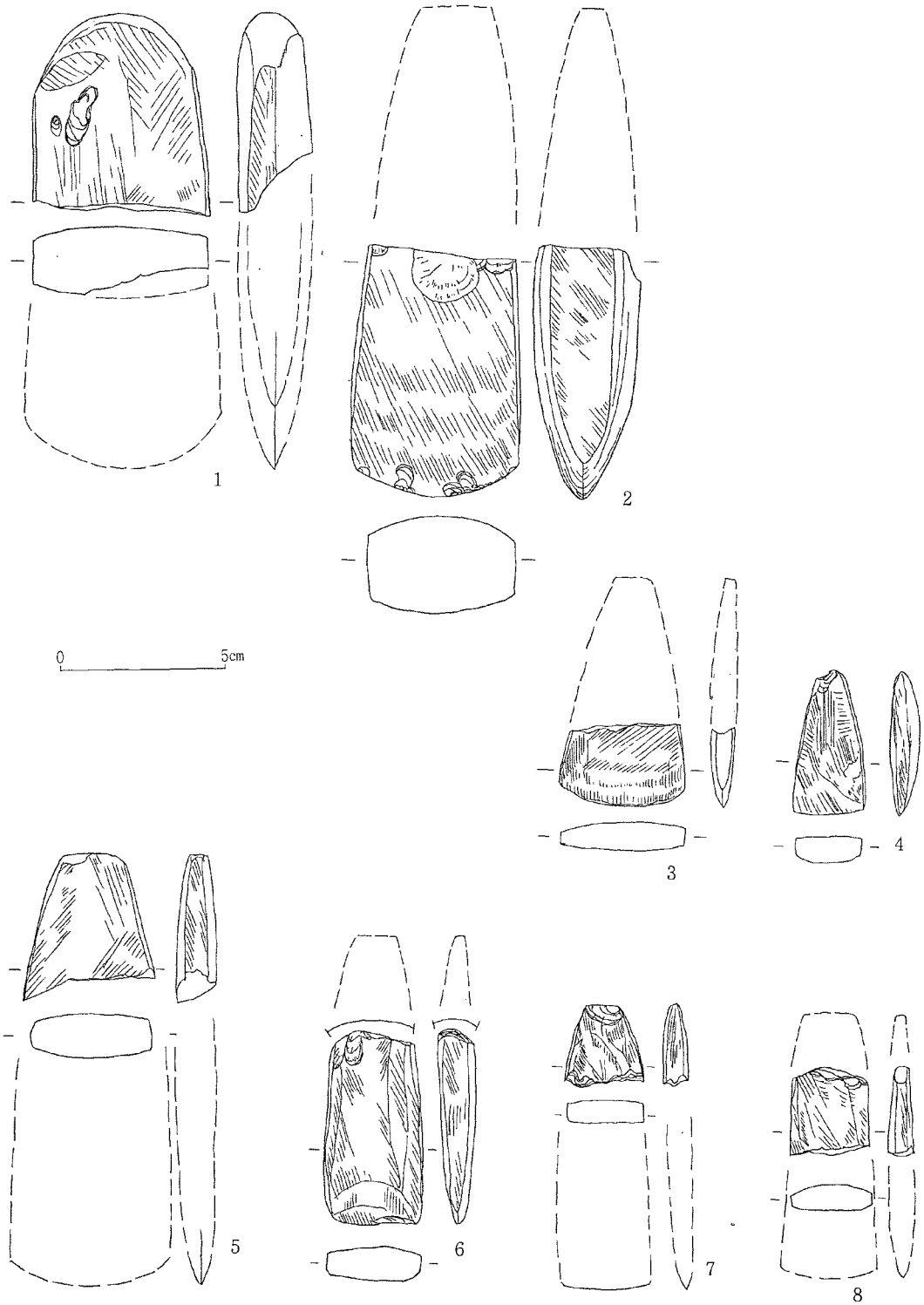
第52図　包含層出土の石器①（打製石斧1）



第53図　包含層出土の石器②（打製石斧２）

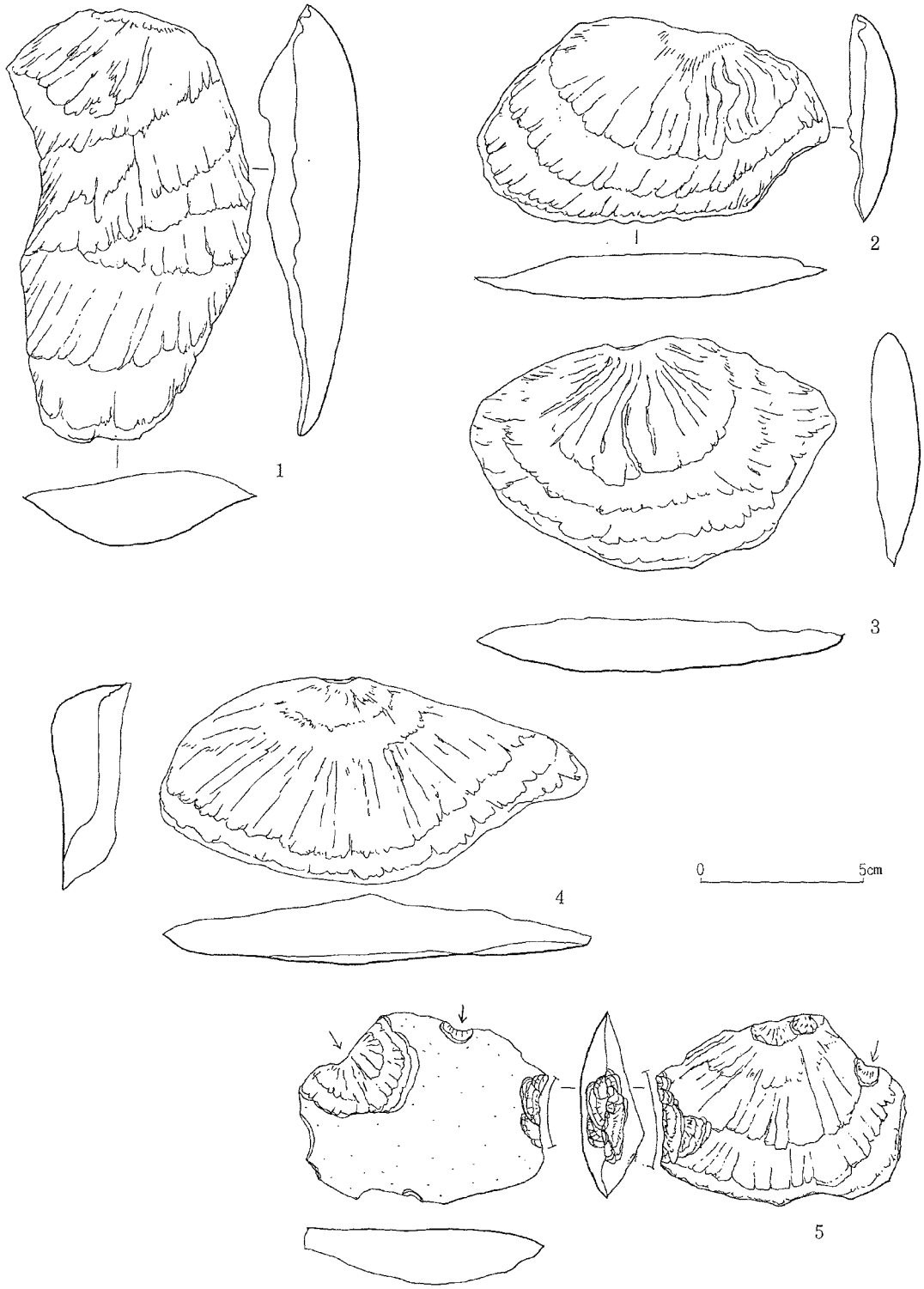


第54図　包含層出土の石器③（宮尾正徳氏表採資料の打製石斧）

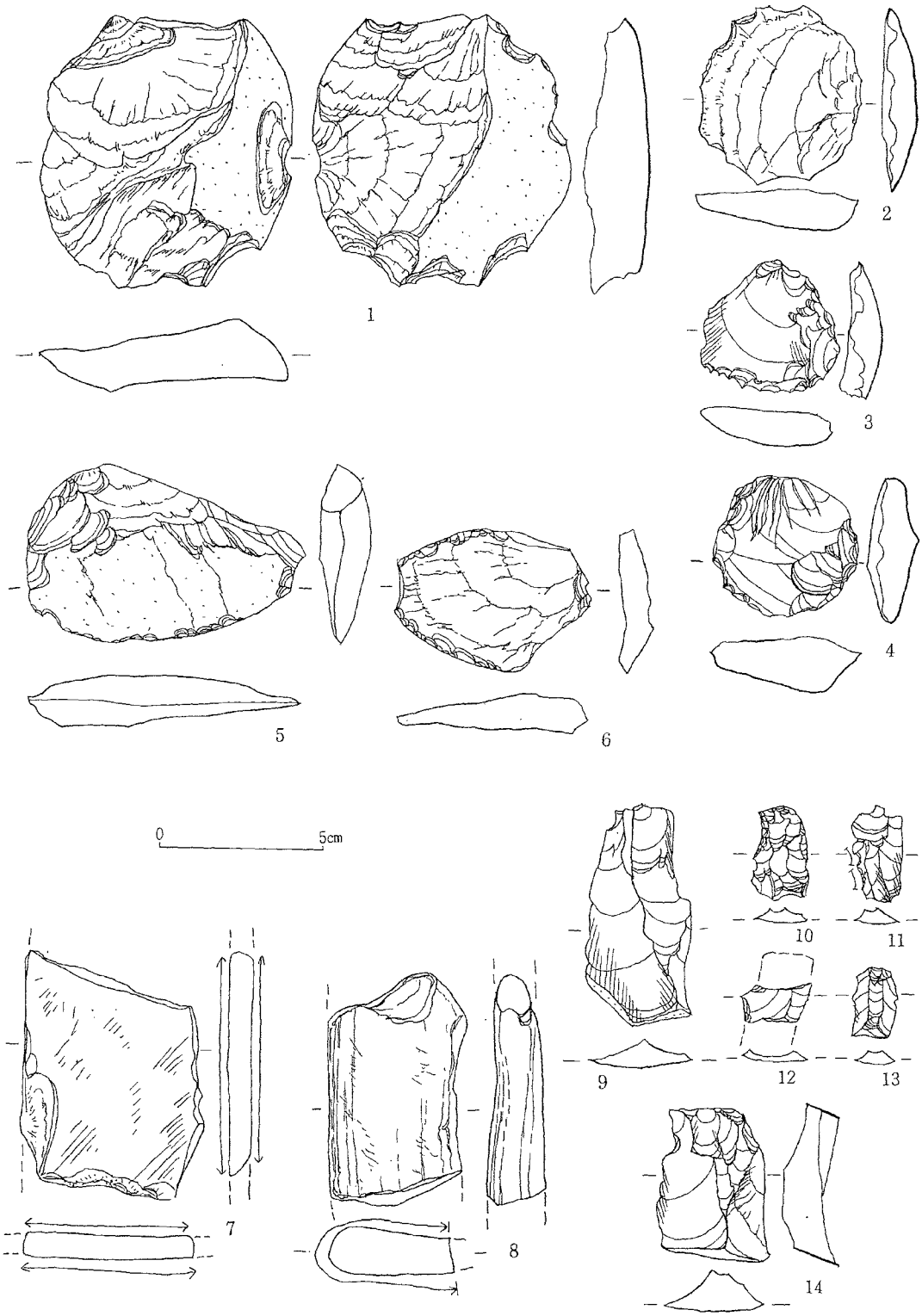


第55図　包含層出土の石器④（磨製石斧）

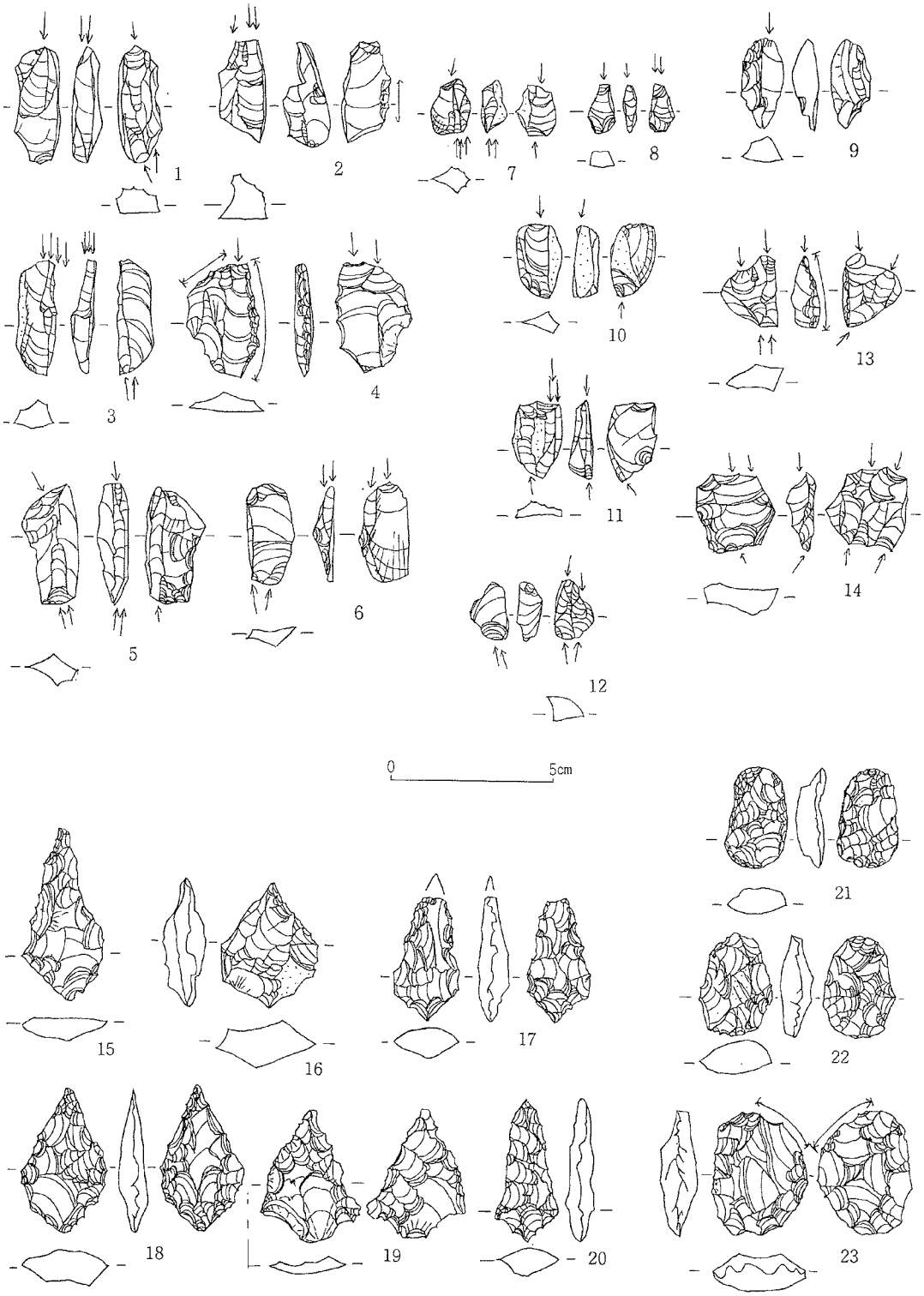
第56図　包含層出土の石器⑤（宮尾正徳氏表採資料の磨製石斧）



第57図　包含層出土の石器⑥（横刃石器）

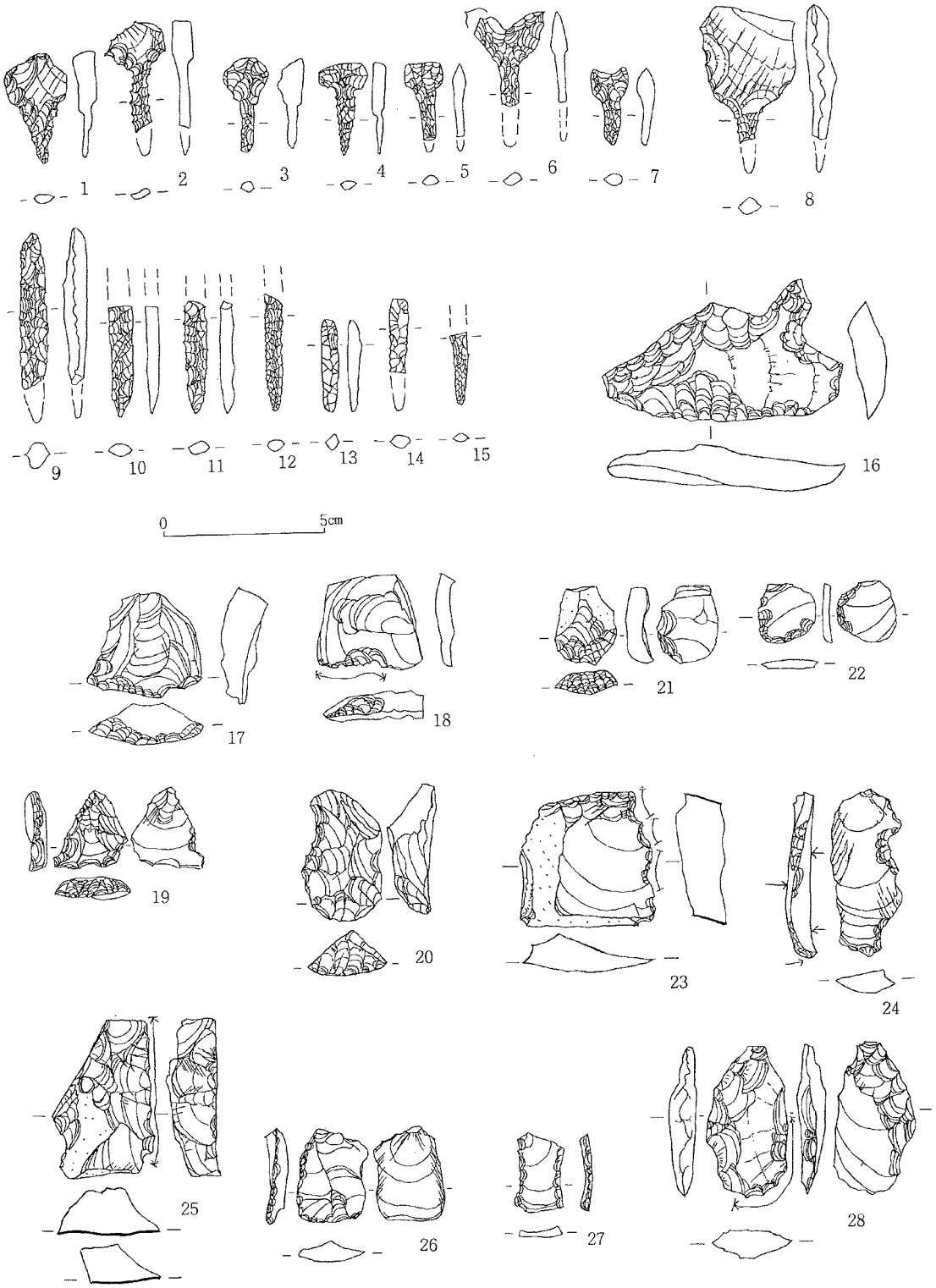


第58図　包含層出土の石器⑦
（1～6周刃石器，7・8砥石，9～14石刃状剥片）

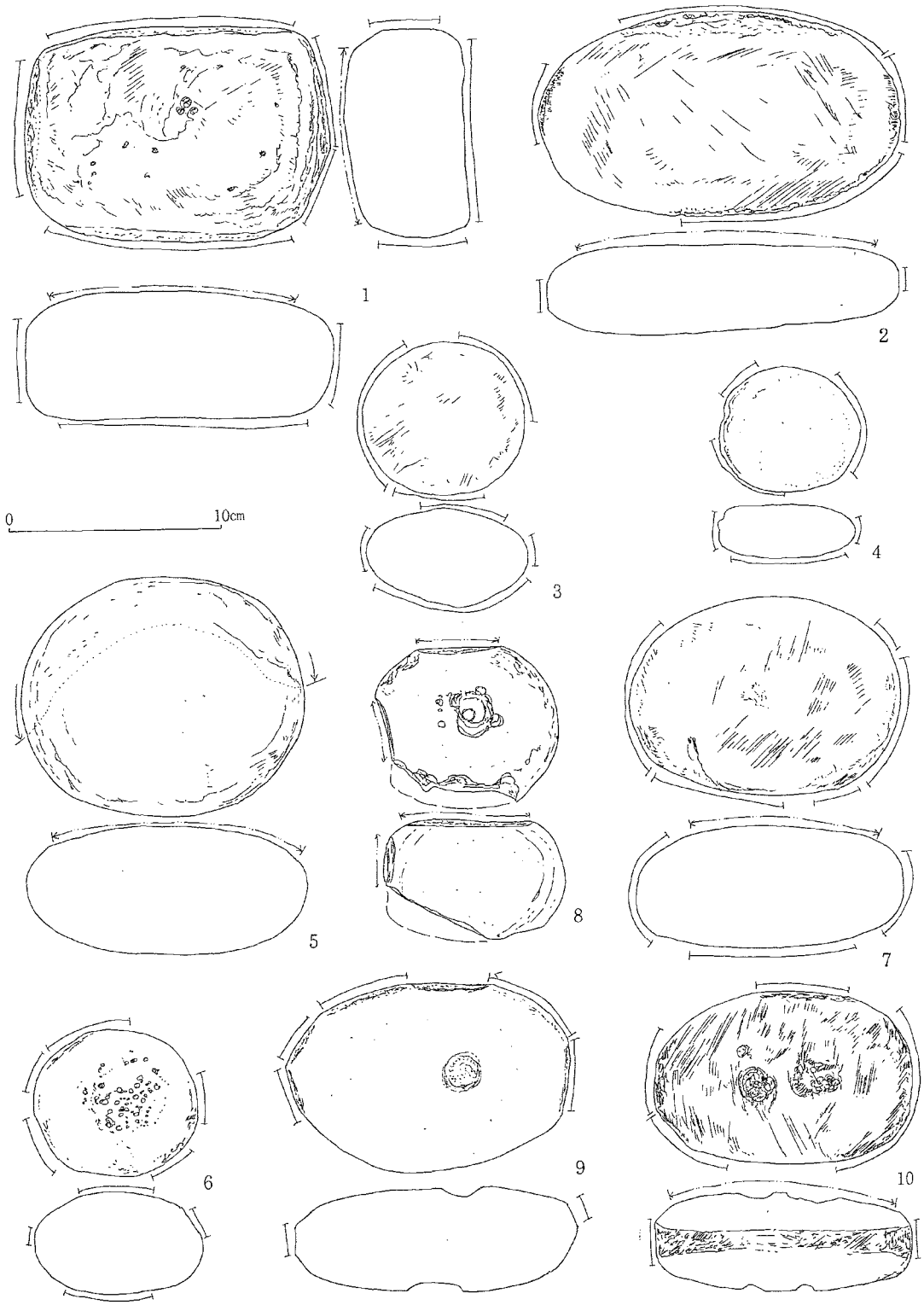


第59図　包含層出土の石器⑧

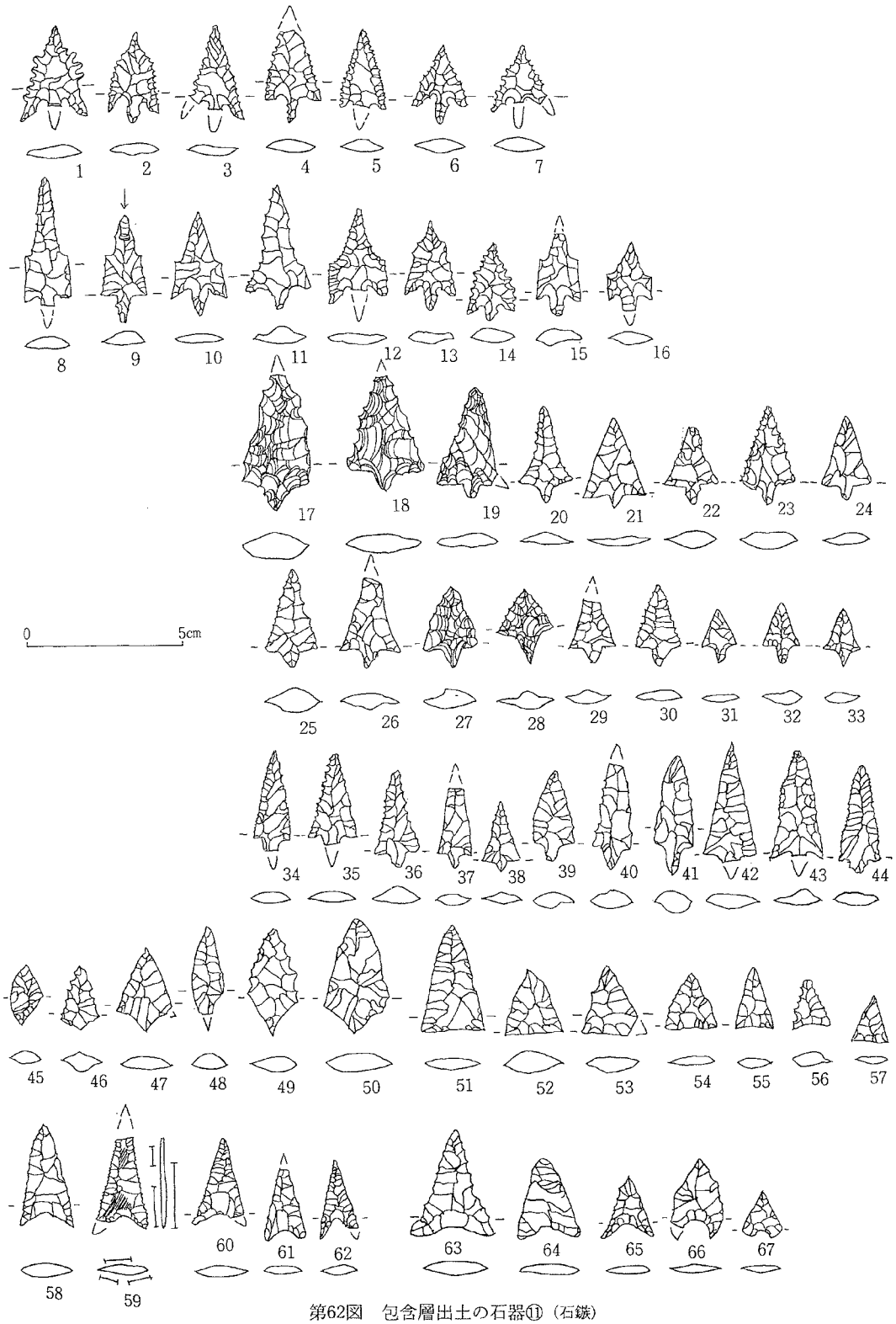
（1～14楔形石器，15～23両面加工石器）



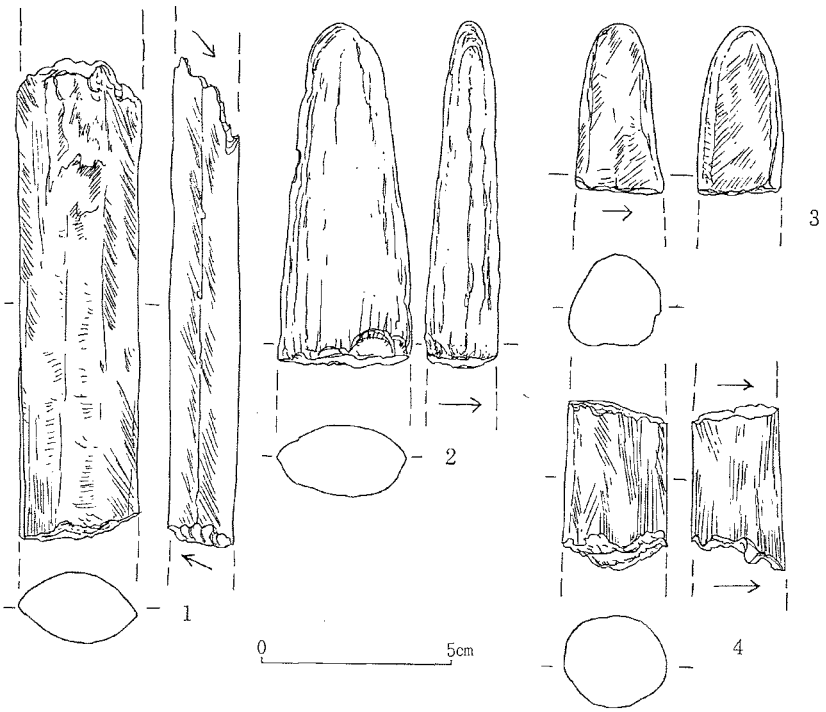
第60図　包含層出土の石器⑨（1～15石錐，16～28掻器）



第61図　包含層出土の石器⑩（1～7磨石，8～10凹石）



第62図　包含層出土の石器⑪（石鏃）



第63図　包含層出土の石器⑫
（宮尾正徳氏表採資料１～３石剣，４石棒）

（9～15）とにである。いずれも錐部の断面は菱形を呈する。

16はいわゆる横形石匙と分類できるものが１点検出されており，犀川中流域では出土例が少ない石器といえよう。

縦長剥片の一縁に掻刃部を作出したものを掻器状石器として分類し，二形態みられる。17～22は先刃掻器とされるもので刃部が直線的な（18，19）ものと，曲線的な（17，20～22）ものとがある。特に20は片面を入念に調整し彎曲した刃部をもつ。23～28は側刃掻器と分類できるもので，23，24は抉入部を作出する。25，26は片側縁を，27は両側縁，28は，ややレンズ状に両側縁に掻刃部を作出する。

第61図１～７は磨石である。砂岩を面取りし箱形に研磨した(1)と，花崗岩の円礫に研磨耗痕をもったもの（２～７）とがあり，いずれも側面部に打痕が顕著に観察できる。また(5)は器体の半分ほどに火熱を受けている。８～10は凹石である。８，９は砂岩製で１凹，10は花崗岩製で２凹をもつ。特に10は両面に研磨痕が顕著にみられ，側面部には打痕が著しい。

第62図は石鏃である。石鏃は非常に多く654点を数え，その一部を図示したものである。未製品と破損品が多く完形品のものはすくない。先端部のみの破損品が104点もあり，ここが日常的に石鏃の製作工房遺跡であったことを示している。51は玉ずい製、特に59については頁岩の剥片を偏平に両面研磨したあと剥離調整をしている。第５号住居址出土の黒耀石製石鏃にも基部に研磨痕が見られが，本例は研磨の後に剥離を行っていることに注意される。

第63図は宮尾正徳氏表採資料であるが，横断面が紡錘形をなす石剣（１，２）と円形をなす石棒（３，４）とに分類した。共に緑色の緑泥片岩製である。縦断面図に矢印で折れの方向を示した。面側からの折れはなく，全て側縁方向からの折れであることに注意したい。あるいは，意識的に折ったものかもしれない。

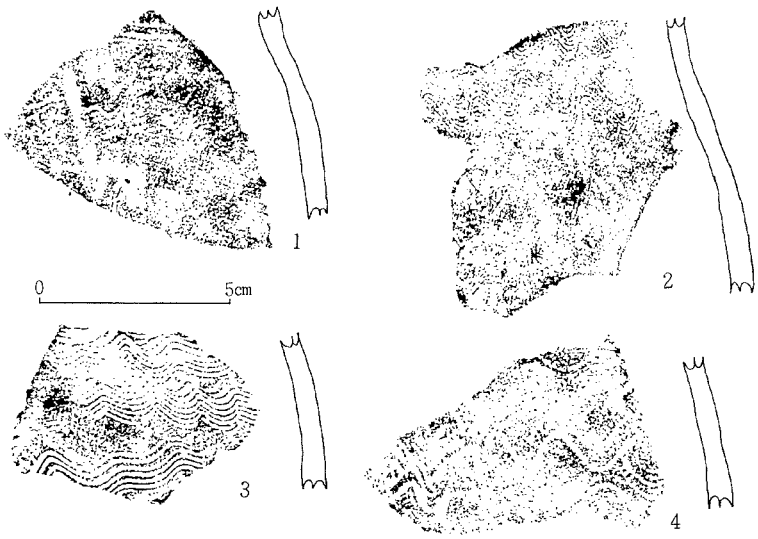
（森山公一）

2．弥生時代の遺物

(1)　弥生後期の土器（第64図，図版29）

宮遺跡から弥生式時代の遺物として，弥生後期の土器が検出されている。中部高地千曲川水系を主としたエリアとする箱清水式土器の甕形土器片である。検出されているのはその胴部破片である。1のみ上部に櫛描簾状文の一部が観察されるので肩部から頸部破片であって，他は櫛描波状文の行われた胴部破片である。箱清水期の甕は煮沸形態の土器であって，火にかけられ，煮炊きをしたものである。口縁部と胴部に櫛歯状施文具による波状文を，頸部に簾状文を施文するのが一般的である。それも中部高地型櫛描文と呼ばれ，土器面一周を右上がり5単位前後とするもので，特徴的である。図示した4点もほぼ同様な状況の内にある。しかも検出されているものは煮沸形態の甕片のみとするのも異例である。4点は器体の胎土の観察によると同一個体ではないので，すくなくとも4個体は存在したことになる。

箱清水期の土器はおよそ3世紀代の土器とされる。他に貯蔵形態の土器として壺形土器があり，供献形態のとして高坏形土器がある。又，什器形態の土器に小形の坏，皿，碗類がある。煮沸形態の土器甕形土器以外は，器面に丹彩が行われているのが特徴である。この時代千曲川水系に一分布圏，天竜川水系に一分布圏の弥生王国が存在した可能性認められ，宮遺跡も千曲川の支流犀川に対してその更に支支流土尻川水系域は，当然千曲川水系箱清水王国文化圏内である。弥生箱清水期の主とする生産は稲作であることは当然であるが，宮遺跡が，後背湿地及び土尻川河床に水田可耕地を求め定着することは困難のように見受けられる。この地帯の洞窟遺跡等も加え，弥生箱清水期の資料を出すところは多いが，それは年間における生産サイクルの中に位置づけが必要である。年間にの生産サイクルは，温帯としての季節労働を基本としている。稲作農耕をはなれ，又，はなれる必要のある季節生産について考慮することが肝要である。労働用具としての石器類とも重なって重要な課題と言える。宮遺跡の弥生時代資料の在り方が注目される。　（森嶋　稔）



第64図　包含層出土の弥生時代後期土器

3．古墳時代の遺物

(1) 古墳時代の土器（第65図１～３）

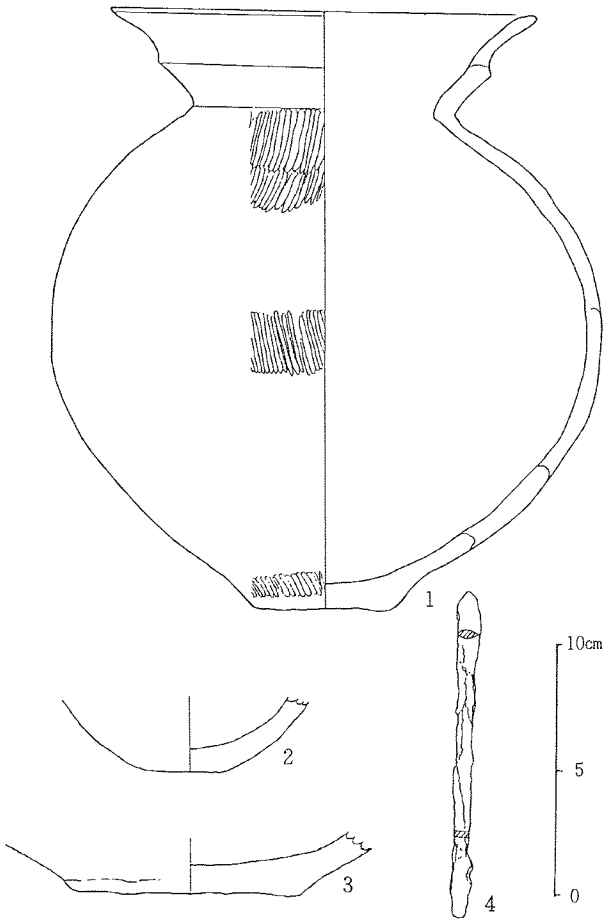
宮遺跡から得られている古墳時代土器を図示した。H－２グリッドからまとまって出土したが，遺構等明確なものには伴わなかった。附近や土器に接して石鏃類も出土したけれど，もとより伴出物では有り得なく，古い時代の資料が散在，共存していたに過ぎない。

土師器は５世紀代のもので，有段口縁，球形胴の甕形土器である。器面を入念に研磨してあって，混入物のすくない黄褐色で焼成の良好な土器である。一個体分を復元可能な一括資料で，原位置は動いていないものと思われる。２，３もほぼ同様な時期のものであるが出土地点は若干異っている。したがって同一状況の中で把握することはできない。調査による古墳時代の遺構などは調査範囲からはまったく検出されていない。

調査時，東側丘陵上にある小円墳「宮の古墳」あるいはその東側丘陵斜面から道路拡張の際に出土したと伝えられる直刀等と関連して考えたが，時間的に前後関係があって同一視することはできない。

単独出土の５世紀代の土師器をどの様に理解すべきであろうか。

皇足穂命神社西側の水田造成の際，土師器を集中して出土したと伝えられる地点や教員住宅試掘地点の土師，須恵器群と共に，山間地域の次ぎの課題と言えるものであろう。



第65図　包含層出土の土師器及び鉄鏃

(2) 鉄製品（第65図４）

鉄鏃が１点出土している。狭鋒，尖根式の長脚鏃である。約13cmで後期古墳時代の一般的な鉄鏃である。時間的位置は６，７世紀であろうか。宮の古墳を最終末の古墳とすると時間的に重なることもあり得るものと言える。勿論詳細は不明である。　　（小林秀夫）

第４章　宮遺跡調査の課題

第１節　遺跡の構造

１．包含層資料からみる遺構の所属時期について

遺物の出土状況が明らかでない中で，各遺構の時期を追究するのは難しいことである。しかし土器群から見た所属時期の可能性についてふれておきたいと思う。遺跡は耕作の影響が深刻で，掘り方を持つはずの遺構のほとんどが，床面又は底面でないと確認できなかったと言われている。とすれば住居址等遺構出土として取り上げられた遺物は，その床面又は底面附近から出土したとも考えられる。一方グリッド遺物は遺構覆土内あるいは包含層内とみてよい。こうした認識のもとに各遺構周辺出土の遺物を概観し，各遺構の所属時期について検討の一助とすることとしたい。

第１号住居址（第32図１，２）　出土土器はなく，周辺グリッド出土の２片の土器片のみである。１は後期後葉，２は晩期前半～中葉に属する。時期決定には貧弱に過ぎる資料である。

第２号住居址（第32図３）　ここからは完形に近い土器が１点出土した。３は長野市宮崎遺跡で注目された土器のグループで，佐野Ⅰ式の範囲内である。附近のグリッドからは晩期前半～中葉の土器が多量に土している。特に佐野Ⅱ式や工字文を持つ土器片が注目され，３とは時間的にずれが生じる。床面出土の可能性の高い３を持って，第２号住居址の時期としておきたい。

第４号住居址（第33図37～40）　本址からは37～40の４点の土器片が出土している。40を除き大洞C_2式～佐野Ⅱ式に属し，同住居址周辺や２号住居址との境界域のグリッドからも42，54など近い時期の土器片が出土している。晩期中葉に属する可能性もあると見られる。

第５号住居址（第34，35，36図55～151）　出土した埋甕によって，縄文中期末とされるが，床面出土とみられる相当量の土器片が存在する。55～100がそれで中期末～晩期中葉までの土器が混在する。また周辺グリッドからは101～151の土器が検出されているが，これらは晩期前半が主体である。第５号住居址自体は中期末に属するとしても，戸倉町円光房遺跡の第１号土器集積址に類似した遺構の可能性が考慮される。

第１号墳墓址（第37図162～167）　周辺グリッドからは162～167の土器片が出土した。いずれも破片で副葬品や供献品の可能性はない。１点毎に時間差があり，後期末～晩期後半の幅をもつため，これらからは時期を追究することはできない。

第２・４号墳墓址（第36，38図168～206）　周辺グリッドからは168～206の土器片が出土している。後期初頭～晩期中葉まで幅があり，晩期前半の土器片が比較的多い。しかし時期決定の資料とはならない。

第３号墳墓址及び第１号集石址（第39，40図207～248）　周辺のグリッドからは207～248の

土器片が出土している。後期後葉～末，晩期中葉の資料が比較的まとまっている。しかし状況は不明瞭で，時間的位置の追究は困難である。

第１号土壙址（第40図249～250）　ここからは249，250の２点が注目される。249は晩期初頭，250は晩期中葉に属するものであるが俄かに所属時期について言及することはできない。なお第40，42図251～283は第１号集石址より西側のグリッドより出土した。後期末～晩期の遺構が存在したかもしれない状況である。又，200と219は調査資料と宮尾正徳氏採集資料とが接合した興味ある例である。

（百瀬長秀）

２．各遺構の時間的位置と構造

包含層資料を補助的資料とし，埋甕や遺構に伴う資料をもって基本資料とした。その上に立って各遺構の時間的位置を示すと次表のようになる。縄文中期に属する遺構は，５号住→３号住→６号住となり，同時存在性と時間的推移を若干考えてもよい状況である。それも時間的には中期末という時間帯であり，同時存在性の方が可能性が高い。しかしこの時期の墳墓址と思われるものは検出されていない。多くの場合段丘崖に近く住居址が営まれ，その後背である台地の内陸側に墳墓址の土壙群が行われるという遺跡構造となっている場合が他の遺跡に一般的に見られることを思うと，恐らく宮遺跡も同様構造をなしているものと推測される。したがって調査範囲では墓域は検出されていないのが肯定できる。

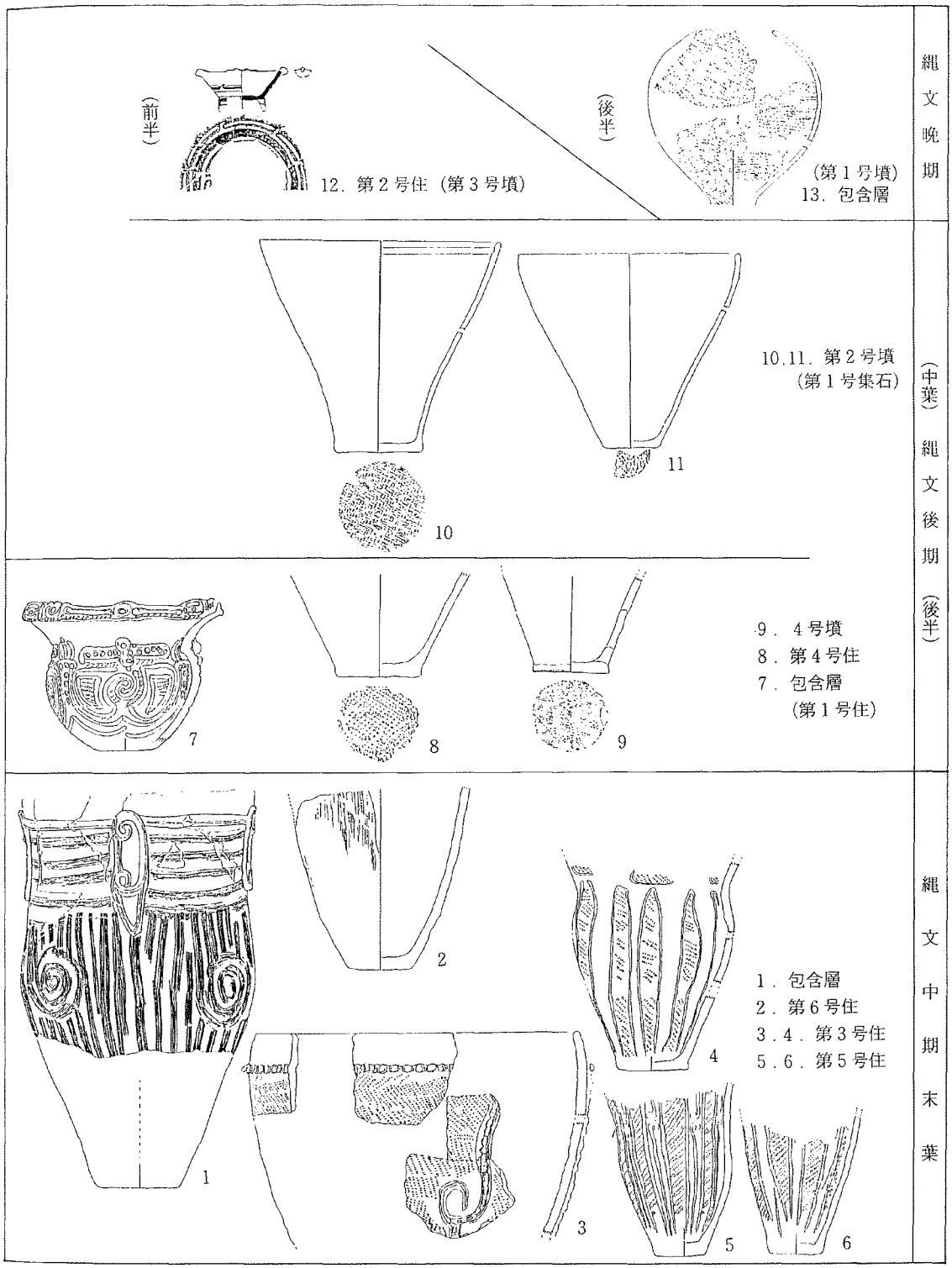
縄文後期前半に属する住居址に，１号住と４号住をあげられる。４号墳墓址はこの時期のものとしてよいが，住居域からはなれて段丘崖に近く営まれていることがわかる。ここに中期と後晩期との空間構造の異質性が読みとれる。すでに後晩期と指摘したが，晩期前半の住居址の位置も依然として動いていないが，墳墓域のみは，内陸側から段丘崖側へ移動していることがわかる。遺跡空間における専地については，多様な問題を内蔵しているかに見受けられるが，ここに一つの専地構造の変化としての事例を明らかにすることが可能である。

紀文	時期	住居址	その他の遺構
晩期	後半		第１号墳墓址
	前半	第２号住居址	第３号墳墓址
後期	中後半		第２号墳墓址 第１号集石址
	前半	第４号住居址 第１号住居址	第４号墳墓址
中期	末葉	第６号住居址 第３号住居址 第５号住居址	

第１表　宮遺跡の遺構と時間的位置

墳墓の型式も合せ口土器棺墓址から組合式箱形石棺墓址に至る系譜も明らかであり，縄文中期の単なる土壙墓址あるいは集石，立石墓址からの変化でもあるかと見られる。後晩期にも立石を伴う箱形石棺墓址も知られていて，その系譜を知る上で重要である。その中で１号墳墓址に葬られていた人骨の抜歯例が，東海タイプであることも注目される。まずは時間的位置と空間構造の変化の言及に止めたい。

（森嶋　稔）



第２表　宮遺跡出土土器の変遷

3．第1号墳墓址の提起するもの

(1) 宮遺跡第1号墳墓址出土人骨について

西沢寿晃　高橋　譲（信州大学医学部第二解剖学教室）

中条村教育委員会より信州大学医学部第二解剖学教室への依頼により，8月10日遺跡に赴き，人骨の出土状態の観察を行ない，復原処理と計測のため，当研究室に一時保管した。当日発掘し取り上げたものを第1号人骨とし，後日，同教委より研究室に届けられたものを第2号人骨と呼称した。

第1号人骨：石棺内の上方約三分の一の部分に，頭蓋骨，脊椎骨の一部，鎖骨の一部が検出された。発掘された当初，残存したものは以上の部位の骨のみであり，上肢，下肢，胸廓等はまったく認められなかった。わずかに石棺の下部に骨片の散布があり，位置的には大腿骨頭の部分に疑せられたが，明確な存在として認められなかった。頭蓋骨はやや右側に向き，石棺長軸に平行しており，上下顎は大きく開口していた。これは以後のクリーニングの際，口蓋内部頬，骨弓内などに土器片が陥入し，また歯牙の一部が頸椎部分に附着するなど，軟部腐蝕の進行にともなう土圧によるものと思われる。石棺内に充溢していた硬い粘土質の土壌に取り込まれていたため，露出した際，比較的良好な保存状態を示していた各骨も，極度に脆弱な骨質のため，多く細片化してしまった。

頭蓋骨は顔面部を主として残す。これに前頭骨，左右側頭骨の一部が残り，他は殆ど骨片状となっていた。それぞれ色調は茶褐色，外板は風化により粗糙で土砂の附着が多い。前頭骨は眼窩縁を残すが内部は欠く。頭頂縁において離脱するが，冠状縫合の一部に僅かな癒着痕がある。縫合部はほとんど破損している。最少前頭幅は89.0㎜を示す。前頭結節，眉上弓は共に弱い。眼窩上孔は破損のため存否は不明である。

後頭骨は後頭隆起の部分を残すが，内外板は腐蝕により海綿質が露出している。その他に細片状の骨片を残すが接合は不可能である。また底部もわずかに残る。

左右側頭骨は主に乳突起部と岩様部を残すのみである。外耳孔は楕円をなし，外縁は消失する。乳様突起は中等度，乳突切痕弱である。

上顎骨は細部を欠くが，ほぼ完形を保つ。切歯窩の後方に弱い口蓋隆起を認める。口蓋棘も強い。切歯縫合は存在しない。

下顎骨の下顎骨体は厚く，全体に頑丈である。下顎角はやや外弯し，底線はほぼ直線状を呈する。下顎歯幅に対し，下顎枝高が大きく，したがって下顎枝示数は小さい。下顎最小枝高も下顎枝垂直高，筋突起高も大きい。頤隆起，結節ともに明瞭である。頤孔は左側は第2小臼歯下にある。顎下線窩，舌下線窩は中程度であり，咬筋粗面の発達は強い。筋突起は鋭く，下顎切痕は浅い。下顎枝内面の量，溝はそれぞれ明瞭で発達はよい。

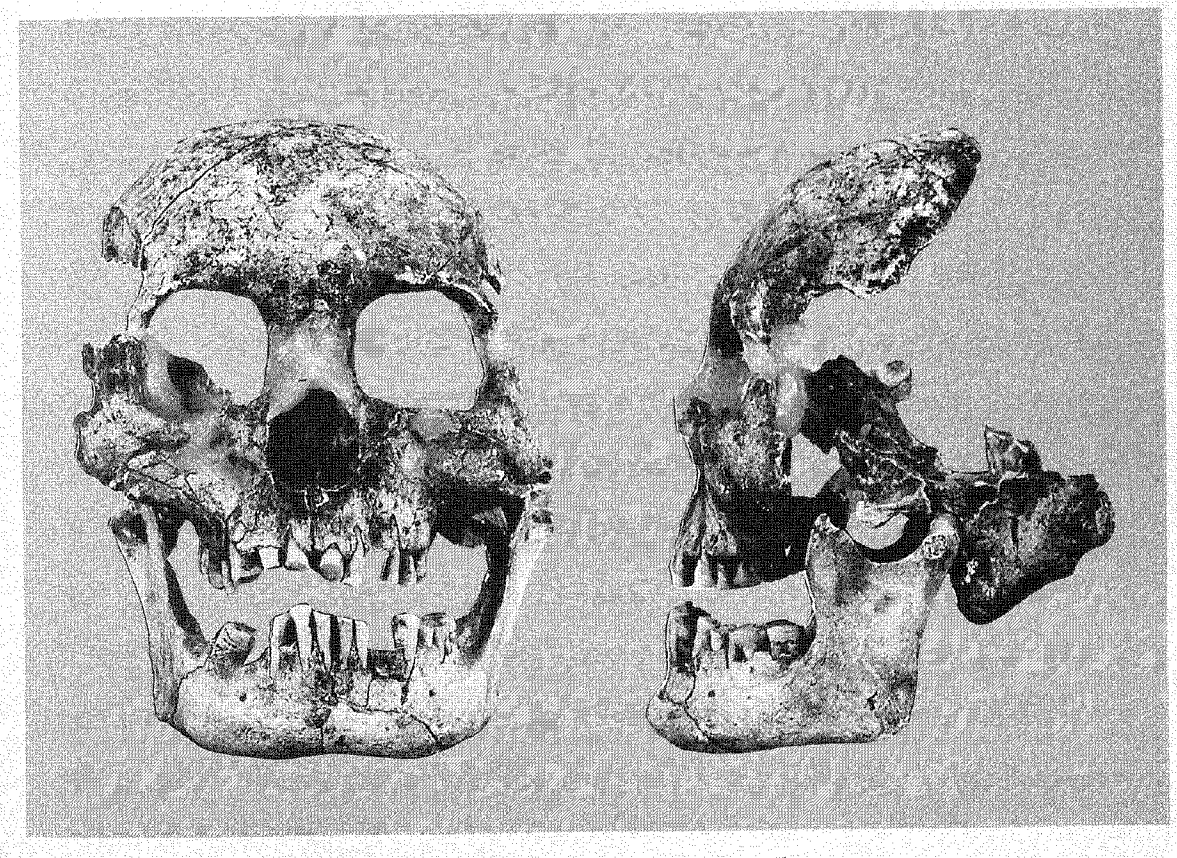
上下顎の犬歯および上顎右第二切歯が欠失している。これらの各歯種の歯槽は萎縮閉鎖し，歯槽線は鋭く，軽い凹線状をなしている。同じく脱落している上顎左第2大臼歯，下顎右第2小臼

歯，第１大旧歯の閉鎖している歯槽が，歯槽壁の吸収にも拘らず，陥凹した粗糙面をなすのと対象的である。故に上記５本の歯は，成長期において抜歯されたものであると考えられる。またこれに伴う現象と解されるものに，上顎右第１，左第１，２切歯，下顎左右第１，２切歯が特異な磨耗形態を示している。すなわち抜歯により，対応する噛み合わせが失なわれたため，咬合面がそれぞれ抜歯側へ傾斜をなす形態であり，高年齢者にみられる傾向である。また咬合型の変化として，下顎右第１小旧歯は隣接する犬歯が欠失したため，近心側へ捻転傾斜し，ほとんど間隙を残さない。上顎左第１切歯は舌側へ，下顎左第２切歯は唇側へノミの刃状に磨耗されている。（註１）旧歯はすべて，切葉も含め，水平に又は刳られたような過度の磨耗を示し，そのため各歯種における咬耗の程度は，それぞれ異なる。歯石の沈着，う歯は認められない。咬合型は鉗子状をなすものとみられる。

M_2	M_1	P_2	P_1	⊗	⊗	I_1	I_1	I_2	⊗	P_1	P_2	M_1	○
M_2	○	○	P_1	⊗	I_2	I_1	I_1	I_2	⊗	P_1	P_2	M_1	M_2

⊗：抜歯
○：脱落歯

第１号人骨歯式



第66図　第１号墳墓址出土の第１号人骨

脊椎骨は錐体の残存状態からみて，第１頸椎から第６までを算える。すべて骨片となるが，土中に包埋されていた状況では，各頸椎間と頭蓋骨の連結は自然位を保ち，人為的な移動は認められなかった。第６頸椎以下は全たく遺存せず，切痕なども見当らない。

鎖骨は右側のみであり，胸骨端は欠け，肩峰端は烏啄粗面部を欠く。筋附着部は粗糙で，鎖骨舌筋溝は浅い。

その他に左右不詳の撓骨骨体の一部がある。

以上本人骨は欠損部分が多く，確定的な計測値に欠けるが，壮年の男性骨と推定される。

第２号人骨：第１号人骨と同様に頭蓋骨と頸椎の一部のみを残す。保存状態は悪く，特に顔面部はすべて失なわれている。脳頭蓋部は頭頂骨を中心に，ほぼ復原したが，他はほとんど細片化し，左側頭骨の一部が接合できる程度である。色調は黄褐色。前頭骨表面はやや滑沢なるも，後方は粗糙である。両眼窩の上縁まで残り，グラベラから眉上弓の隆起は第１号に比べて強い。上顎骨は口蓋，歯槽縁の一部を残すのみで破砕が著しい。冠状縫合は未だ癒着しない。

下顎骨も骨体部の大部分を破損するが，一見下顎体は頑丈だ。下顎棘の発達も強い。頤高30㎜。歯牙は上下顎共に風化による離脱し，歯根は多く歯槽内に残るが，歯頸部において，歯冠は剝離する。残存する下顎右第２，３，左第１，２の各大旧歯には特殊な咬耗はみられず，咬耗度もBrocaの１度程度である。第１号より若年の男性骨とみられる。

第１，２号人骨とも，局所的な観察におわり，全般的な形質の記載を得られなかったのは残念であった。元来，古人骨類の保存は，その環境条件に大きく左右される。その存否は酸性土中における骨類の無機質および有機質の溶解現象と解される故である。長野県の場合，高地丘陵地形による特殊性からの酸性化した土壌成分と，この土中への直接的な埋葬例などから，極度にその遺存例は少ない。同時に，例えば後代に現われる地下式古墳に埋葬された人骨は，床面に接した部位の腐蝕の進行が著しく，四肢，軀幹の骨はまったく消失する場合が多い。反面，頭蓋骨のように表面積の大きな骨は比較的保存がよいという。（註２）本例の場合，頭頸部のみの埋葬も考えられたが，頭蓋骨の位置やわずかながら遊離した骨片の存在から，屈葬位による埋葬が推考されよう。

第１号人骨に特徴的にみられる抜歯例は，従来日本においては縄文後晩期より弥生時代にかけて施行された習俗の一つである，種々の目的をもって行なう身体加工の一例である。生前特定な健康歯を，一定の年齢時に抜去するもので，出現は広くハワイ諸島より環太平洋地域を含め，中国，朝鮮に及んでいる。日本では青森より琉球に至る各地よりの出土人骨に多くの例数の報告があり，発生の理由，抜歯形式の分化，伝播，盛行より消滅期などについて，系統的な意義づけが試論されている。

長野県内に於いては，伊那市野口遺跡の墳墓址よりの11例の集中的な出土例を始め（註３），木曽郡大明神，埴科郡保地，更埴市生仁，佐久市前山月明沢（註４）等の各遺跡に，複数又は単数の

出土人骨からその類例の増加がみられる。本例の上下顎両側犬歯（上顎右第2切歯）の抜歯型式は，東海地方の多くの貝塚遺跡より発掘調査された抜歯例中に，殆ど一般的にみられる型式（註5）であり，その影響下にあるものと考えられる。

本人骨を伴なう遺構，遺物の考察は，当地方における文化動態を解明する重要な根拠となるであろう。

本稿の歯に関する事項について，ご教示いただいた藤朝五，田中実両氏，人骨研究の機会を与えられた中条村教育委員会に，厚くお礼を申し上げます。

註1　小松　虔他（1970）「縄文人のふるさと」『国土と教育』No. 4 築地書館
　栃原岩陰遺跡（縄文早期）出土の人骨も臼歯部が過耗し，上顎前歯部がノミ状に磨耗していた。この様な極度な局部的磨耗の原因として，繊維か皮革様のものを習慣的に噛み砕き，又は梳いていた極端な作業の結果が考えられる。

註2　坂田邦洋（1974）『大萩遺跡』「人骨の埋葬方法について」宮崎県教育委員会

註3　生仁遺跡第1次発掘調査（1969）の際出土した人骨中に抜歯例が検出されたが未報告である。

註4　佐久市前山月明沢遺跡（1976）にて弥生式土器を伴なう抜歯人骨例がある。未報告。

註5　鈴木　尚（1938）「人工的歯牙の変形」『人類学・先史学講座』11巻雄山閣

第3表　人骨計測表（第1号人骨、下顎骨）

〔65 (1)〕 筋突起幅		104	〔70 (1)〕 筋突起高	r	66
				l	68
〔66　〕 下顎角幅		98	〔71　〕 下顎枝幅	r	30
				l	30
〔67　〕 前下顎幅		51	〔70 (a)〕 下顎最小枝幅	r	29
				l	30
〔68　〕 下顎体長		72	〔71 (1)〕 下顎切痕幅	r	30
				l	33
〔68 (1)〕 下顎長		95	〔70 (3)〕 下顎切痕高	r	12
				l	13
〔69 (1)〕 下顎体高	r	—	〔79　〕 下顎枝角	r	113°
	l	31		l	118°
〔69 (3)〕 下顎体厚	r	12	〔79 (3)〕 筋関節突起の傾斜角		75°
	l	12			
〔69 (2)〕 下顎体高（M_2）	r	29	〔79 (4)〕 下顎基底角		73°
	l	29			
下顎体厚（M_2）	r	16	〔71〕／〔70〕 下顎枝示数	r	46.15
	l	16		l	46.15
〔70　〕 下顎枝高	r	65	〔70(3)〕／〔70(1)〕 下顎切痕示数	r	40.00
	l	65		l	39.39
〔70 (2)〕 下顎最小枝高	r	55	〔69(3)〕／〔69(1)〕 下顎体高厚示数	r	—
	l	55		l	38.71
〔70 (3)〕 下顎枝垂直高	r	60			
	l	63			

（単位　mm）

（第1号人骨、上顎骨）

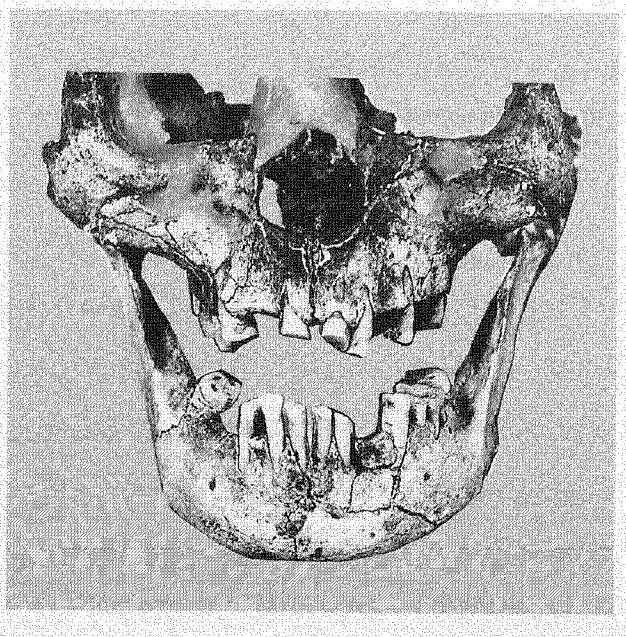
〔61〕 上顎歯槽幅	65
〔62 (1)〕 前上顎口蓋長	30

計測方法はR.Martin（1928）による。

(2) 第１号墳墓址をめぐって

第１号墳墓址は組合式箱形石棺墓に類するものである。遺構記述の中でふれたように偏平な砂岩質の石材によって造られ，側壁の一部蓋石が残存していた。側壁の欠失部位は当初から割愛したか，風化したかによるものであって，掘り方土壙は長方形の箱形を意識したものであった。

前項でも報告されたように，第１号人骨と第２号人骨の二体が検出された。二体は同一水準への埋葬でなく，第２号人骨を下部に第１号人骨を上部に検出した。これは同時であるか，あるいは時間をへだてた追葬のようなものであったかは定だかではない。しかし屈葬によるものであることをみれば，同時埋葬と理解した方が自然である。第２号人骨の主を葬って後に，第１号人骨の主を，同時に内容して葬ったことになる。第２号人骨が「冠状縫合が未だ癒着しない」若年男子のものであって，第１号人骨は壮年男子のものとの事である。その内には年齢による社会的序列のようなものがあっての埋葬結果であるかどうか，興味ある事例と言える。そして更に下部の若年男子である人骨にはどうやら抜歯は認められず，上部の壮年男子人骨には抜歯が認められている。単にそれぞれ一例のみで予断は許るされないが，抜歯儀礼が成年男子の通過儀礼ではないかとの考察を補強しているかのようにも思える。あるいは抜歯人骨の主が何等か特殊な社会的地位や仕事にあったかとの考察も可能であるが，同時埋葬の屈葬における上下関係がもたらす意味が注目される。又抜歯は明らかに健康な永久歯を抜き取ることであって，第１号人骨例では明らかに，「上下犬歯４本抜歯」であると言う。人為的抜歯は歯冑の閉塞と隣りの歯の傾斜を伴い，疾病による脱落は歯骨の吸収を伴っていて明らかであると言う。（死後脱落は歯槽に脱落の穴がある）



第67図　第１号人骨の抜歯

春成秀爾の２ｃ型で東海地方に多いタイプであるとしている。又夥しい人骨を出した縄文後期の明科町北村遺跡では平林彰によると不規則な位置で２例のみであるとのことである。他に信濃の範囲では，木曽谷で芝垣外，大明神，天竜川水系で野口，千曲川水系では保地，生仁，月明沢，深町，宮崎，当の宮遺跡が知られているが，かなり規則的な習俗として行われるようになったのは縄文晩期から弥生時代までであったものと見られる。宮遺跡例はその内で東海地方型を呈していること，又晩期の条痕文土器の存在ともまったく無縁でなかったかもしれないのである。

（森嶋　稔）

第２節　宮遺跡の遺物をめぐる課題

１．攻玉工房遺跡として

球状土製品が攻玉用舞錐の弾(はず)み車（勢車）であるとするのは，妥当な認識であろう。まだ一津遺跡資料については詳報に接していないが，原石，石屑，未成品，玉砥石に加え工具の一部品としての球状土製品が15例出土している。内陸部における攻玉遺跡として注目されたところである。所属時期は俄かに決定し難いとしてもほぼ縄文晩期は動かないところである。一津遺跡は木崎湖にのぞむ緩傾斜地で，とりわけＡ地点は湖に張り出す湖岸沖積地である。硬玉，軟玉ともどもの加工品を手がけたものらしく，その多様な資料は高い評価を受けている。

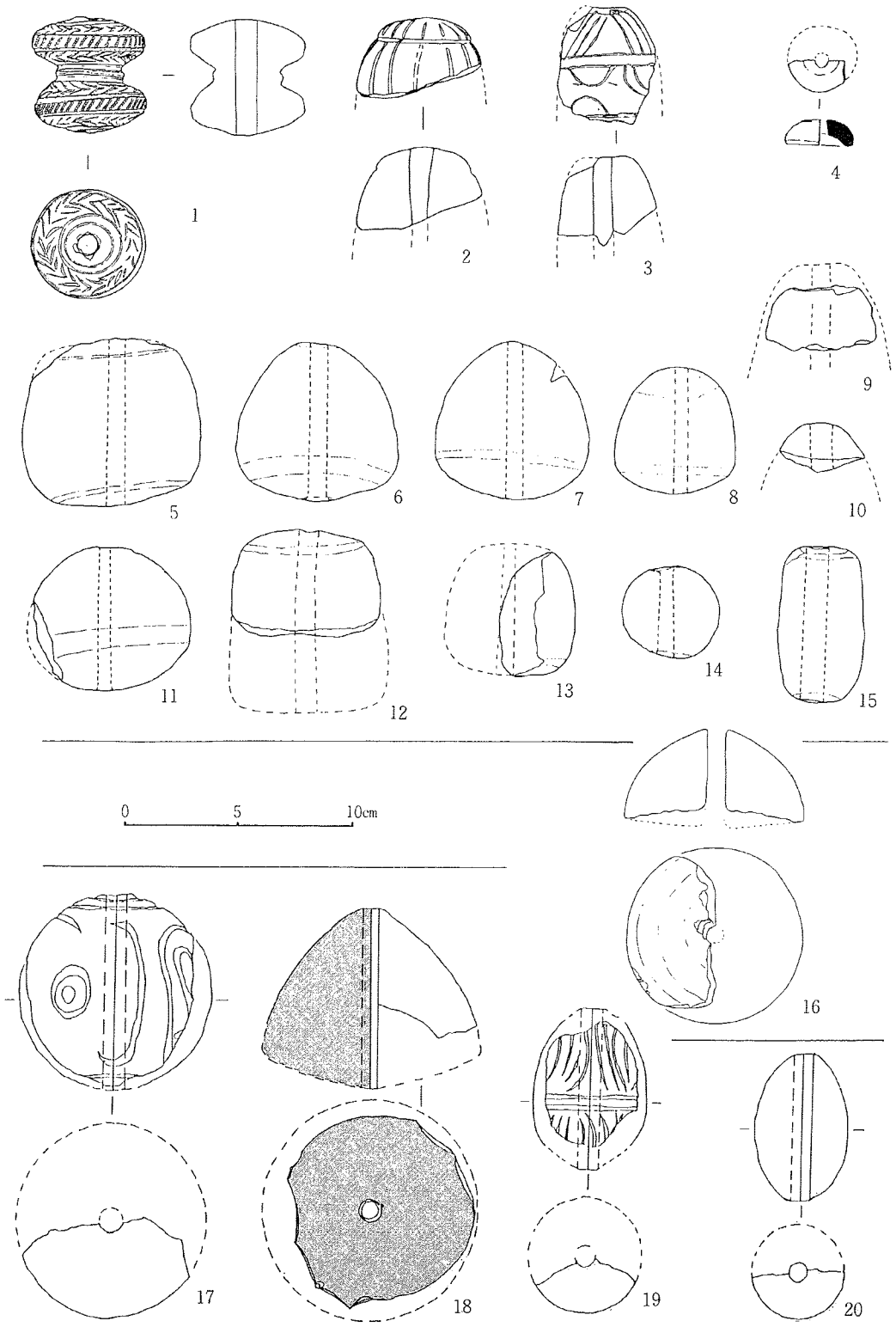
戸倉町円光房遺跡や上田市下前沖遺跡からも球状土製品が検出されている。ここでも攻玉関係の資料とみられる翡翠の原石や半製品，製品が出土していて，この球状土製品が同様舞錐の弾み車（勢車）であるものとみられている。先にふれたようにすくなくとも松本市内田城，塩尻市柿沢東遺跡の資料も同様範囲に入る遺物であるかのように見受けられる。内陸部における玉造りの攻玉工房遺跡として位置づくものであろう。

本来，舞錐は恐らく穿孔用の道具であったと見られるが，今日では竹などの穿孔用として大工職人などの道具であり，神事用の発火具として残っている。その弾み車として慣性モーメントを巧みに利用したものであって，現在木製のものも見られる。しかしこうしたものの起源にかかわるものとして，縄文晩期に攻玉用舞錐の弾み車（勢車）として利用されていたものと言うことができる資料である。中条村宮遺跡も第２号住居址の床面から縄文晩期前半の土器と共に，玉砥石かと思われる有溝砂岩製の関係資料が検出されている。他に類品や関連資料の出土は得られていないが，この縄文晩期前半期の第２号住居址が，玉造り攻玉工房関連遺構であった可能性があるものと理解される。

球状土製品には，瓢形のもの，球形のもの，下ぶくれの台形のもの，円筒形のもの，卵形のもの，紡錐車型のものなどがあり，全体を通して有文のものと無文のものが存在するようである。共通することは真っすぐな８㎜内外の貫通孔である。

硬玉の穿孔は，硬玉の砥糞と言われる研磨材をもって錐の尖端につけ回転，磨りへらして行うものとされている。玉砥石も研磨材との組み合わせで成り立っている。とりわけ穿孔には錐の尖端が存在した例もあって今後の課題である。時期は異なるが第５号住出土の小形無摘の石錐などは舞錐の尖端に装着されていた可能性もある。共々今後の課題である。

山崎　元氏によると翡翠の原石や半研磨品を採集した地点について詳細に図示されていて明らかである。結論的に言えば原位置ではないにしても，遺跡の外郭周辺部に散在しているかに見受ける。工房は集落内部より外郭に存在していた可能性もあって，増々宮遺跡の重要性を高めている。翡翠原産地，一津遺跡，千曲川水系を結ぶ中間地点としても重要である。　（森嶋　稔）



第68図　球状土製品集成（1～15一津，16円光房，17～20宮）

２．宮遺跡の石器群と石器素材の搬入について

宮遺跡の石器組成は狩猟用利器とみられる石鏃，両面加工石器や，土掘り用具的な打製石斧をはじめ調整用具かとみられる扇状石器，周刃石器，また伐採や加工具としての磨製石斧などの生産用具がある。それに加えて加工調整，調理用具かと思われる掻器状石器，磨石，敲石，楔形石器，石錐，石匙，凹石，砥石などあり。そして第二の道具としての石棒，石剣，攻玉製品などがある。石器の種類は17種を数え出土総数は1,052点である。

中部高地における縄文中期の特徴のひとつは，小川村・筏遺跡に代表されるように石器群の非狩猟化現象である。それは大量に検出される打製石斧，磨製石斧，扇状石器に比較して石鏃，尖頭石器はわずかである。こうした中期の生産活動にかかわる石器に対して後～晩期中葉にかけての宮遺跡の石器群は逆にそうした生業にかかわる労働用具としての石器が少なく狩猟攻撃用の石器が，極めてその割合の高いことを教えてくれる。とりわけ，石鏃の量は大変なもので全体の62％も存在する。両面加工石器をも含めた狩猟攻撃用石器は合計727点で全体の69％を占めている。

石鏃を製作する過程での破損品が多い事も本遺跡の特徴のひとつである。検出された石鏃のうち完形品は６％にすぎず他は脚部か先端部を破損しているもので，本遺跡が石鏃等の製作工房址であったことがうかがわせる。頁岩の有柄長身鏃が72点と他の石材より非常に多く，他は青色チャートを好んで使用しており，石鏃全体の36％を占める。

宮遺跡石器群の著しい特徴のひとつとしてあげられるのは，破損品，未製品とともに，剝片・砕片等のいわば石器製作にかかわるものがきわめて多いと言うことである。圧到的な量を示す石鏃，そして石錐，楔形石器，両面加工石器をみても完成品よりも破損品，加工途中の未製品がほとんどであって，それに伴う剝片・砕片と共に遺跡内での製作が行なわれている事を示すものである。

遺跡から出土した石器を素材別に分類してみると第４表のようである。チャートが46％，黒耀石が15％，安山岩が７％，頁岩が29％，蛇紋岩，砂岩，その他の石材が３％で，チャートの石材占有率が半数近くを占めていて，剝片・砕片を含めて圧到的に多い。こうした石器群の石器素材の中で，宮遺跡のある土尻川流域で入手できるものは，わずかに磨石や，凹石，砥石に用いられる黄褐色軟質砂岩のみであって，他の石器素材は全て地域外からの搬入品と思われる。磨製石斧，打製石斧に用いられている蛇紋岩は大町・糸魚川方面から持ち込まれたものである。打製石斧，扇状石器，磨石に用いられている安山岩・花崗岩は犀川流域より搬入されたものである。なお，チャートは第三紀層の礫岩中にあり風化崩壊の上河床礫として土尻川に存在するようである。利器にのみ多用されている黒耀石ははきわめて良質のもので肉眼観察による分類で星ヶ塔産36％，東餅屋産48％，和田峠西・ツチヤ沢産16％と，和田峠周辺産のものを用いている。利器の全てと鈍器の一部や石器の一部に使用されている頁岩，チャートは千曲川流域に多くみられるもので，大きいものはそこからの搬入を考えておきたい。こうした遺跡外から多くの石材を運び込み，積極的に石器製作を行なっている，いわば，日常的母村集落址のあり方を示唆するものであろう。

第4表　宮遺跡の石器点数と石器素材

	石器		数		チャート 青	チャート 赤	黒耀石	安山岩	頁岩	蛇紋岩	砂岩	その他	計
利器	石鏃	未製品	139		65	6	18		50				
		先端部のみ	104		55	2	22		25				
		無柄鏃 三角紡錘	77	178	39	6	18		14				645
			25		12	2	3		8				
			76		38	3	14		19			めのう2	
		有柄鏃 長身三角扶入	179	233	83	6	18		72				
			39		21		7		11				
			15		7	1			7				
	両面加工石器		73		34	5	1	3	30				73
	石刃状剝片		7		2		2	1	2				7
	掻器状石器	側刃掻器	20		9		2		9				44
		先刃掻器	24		13		4		7				
	石匙		2						2				2
	楔形石器		109		31	8	47	1	22				109
	石錐	有摘	32		14	5	1	1	11				
		無摘	23		11		1		10			鉄石英1	55
鈍器	扇状石器		5					5					5
	周刃石器		4		2			1	1				4
	打製石斧		41					35	2	4			41
	磨製石斧		16					1		14		凝灰岩1	16
その他	砥石		3								3		3
	凹石		3								2	花崗岩1	3
	磨石		36					26				花崗岩10	36
	計		1,052		436	44	158	74	302	18	5	15	1,052

宮遺跡の剝片・砕片の素材別点数

剝片・砕片	チャート 青	チャート 赤	黒耀石	安山岩	頁岩	蛇紋岩	砂岩	その他	計
剝片	812	174	1,590	32	252				2,763
砕片	790				635				1,425

黒耀石の産地別内訳

和田峠周辺の黒耀石	無色透明（星ヶ塔）	565	1,590
	黒縞透明（東餅屋）	765	
	漆黒不透明（和田峠西・ツチヤ沢）	260	

（森山公一）

第5章　総　　括

――宮　遺跡の構造と性格の変遷――

1．時間的位置から

包含層資料から各遺跡の時間的位置を確定することは，可能ではなかった。傾向を読みとることは出来得ても確定はできない。その点床面施設の埋甕は，目的や機能の課題と共にその居住空間を専有する一定時間帯の意志を表現している。そこには単なる行為の結果だけが遺存されたもの以上のアクティヴな意図があって，時間的位置を文化化石として表現するものと見てよい。宮遺跡検出の住居址6棟中，4棟（1，2号住を除いて，3～6号住に1～2個体）の床面において埋設土器（埋甕）が確認されている。縄文中期末葉に属するものが3棟（5，3，6号住）に，縄文後期前半に属するものと思われるものが1棟（4号住）の計4棟である。したがって以上の4棟については，おそらくその居住空間が意義を持つ時間帯に埋設意図をそのまま行為として行ったものとして固定できる。その上，その事実を受け入れざるを得ないものとして存在するものである。だがその時間帯は，どの位の長さを持っていたかは明らかになっていない現在，埋甕のしめす時間的位置はその居住空間の専有時間帯とクロスはしても完全に一致することは，絶対的では有り得ないことも考慮せねばならない。その時間帯の埋設行為がどこで行われたか，又多くの場合明らかになっていないからである。しかし今日のところではその埋甕をもって代表させるに大きな矛盾をきたしていない。しかし第5号住のように埋甕2点は縄文中期末葉であるが，その覆土中に含まれているのはほとんどが縄文晩期前半に属する土器群であることが事実であるので，居住空間の再使用，あるいは埋没中の住居凹地に不用物の投げ込みによる結果とも考えられなくもない。まだクロス以上の一致を容認することは難しい。だがすくなくともその時間的クロスがあった事は確実であろう。埋甕の行われていない1，2号住は床面出土の最も新しい量的にまとまる資料をもって代表せざるを得ないことは現段階ではやむを得ないことである。したがって第1号住に縄文後期前半，第2号住に晩期前半を与えることとした。4基の墳墓址と1基の集石址等についても以上のような検討を加えた上で時間的位置を求めた。その結果，第1表のような変遷を認めることができる。縄文中期末葉に属するものは住居址3棟であり，5号住→3号住→6号住と変遷し，同時間帯の共有である可能性が薄いことがわかる。後期前半に属する2棟はやはり1号住→4号住となり，住居址は後半期には未検出である。しかし後半期の良好な資料の存在も見ると，この時期の住居址存在の該然性はきわめて大きいものと思われる。しかし調査範囲からは検出されていない。墳墓址は後期前半（4号墳墓址から）はじまり，後半（2号墳墓址）にも受けつがれ，晩期（3号址→1号址）にまで連続する。後期後半期と晩期後半期の住居址が検出されていないけれど，墳墓址は確認されているのが印象的である。住居空間を予測する事が出来る。したがってこの宮遺跡の時間的位置の変遷からその遺構の変遷をみる

限り，調査範囲からの検出されない住居址や墳墓址の，いわば時間的，空間的な空白部位の存在にもかかわらず，縄文中期末葉から縄文晩期末葉まで宮遺跡の使用は連続していることを教えている。

2．遺跡の構造の変遷から

縄文中期末葉から晩期後半まですくなくとも連続して使用されている宮遺跡は，縄文中期末葉に属する土壙墓址（土壙址，集石土壙址等）はまったく検出されず，後晩期の墳墓址とみられるもののみ検出されているのが，特徴的である。それは調査範囲の限定されたものと共にそこにおける課題として整理しておきたい。

①縄文中期末葉の住居址３棟に対して，中期末葉に属すると思われる土壙墓址が調査範囲からまったく検出されていない。

②縄文後晩期の住居址３棟に対して，墳墓址と把握されるものがおよそ４基識られている。

③縄文中期末葉の住居址は５ｍ内外の空間地帯をもって隣接している。それに対し後晩期の住居址は２～３ｍの範囲で隣接している。

④縄文後晩期の墳墓址は，居住空間よりすくなくとも15mは北域に離れて築造されており，地形的には段丘崖の縁辺に近い位置に墓域をなして集合している。その15m程の範囲は無遺構地帯であるかのようである。

縄文中期末葉の在りようについては俄に明らかにならないが，墳墓的空間を段丘（丘陵）縁辺部位よりも，居住空間より内陸部位に築造する傾向が一般的に認められていることが留意される。宮遺跡にあってもこうした所見を援けるものとなっている可能性が高い。

縄文後晩期の在りようについては調査事例がすくなく一般的とは言いがたいが，居住空間よりへだたった段丘縁返部に墳墓空間が存在するとの構造は，宮遺跡型の遺跡構造と提示することができるかと思われる。

縄文中期末葉をささえた集団と縄文後晩期をささえた集団との間に，すくなくとも同一空間の利用の仕方に差異が存在する。これは単なる利用の仕方にとどまることはない。生産様態，社会構造ひいては基本的な生活様式の差異の課題として後に残されている。

3．抜歯人骨から

宮遺跡第１号人骨の抜歯例は，「上下犬歯４本抜歯」例で，東海型を示唆している。成年男子の成年通過儀礼としての好例であろうか。若年個体である抜歯例の行なわれていない第２号人骨との合葬事例の増加を待ちたいところである。

4．玉造りから

宮遺跡が攻玉工房遺跡ではないか，との予測は当初からあった。むしろその予見にうながされた調査であった。それにふさわしい調査資料の集積は得られなかったけれど，翡翠の原石，半製品，製品が若干得られている。更に穿孔用の道具とみられる球状土製品＝舞錐の弾み車（勢車）を４例加えることができた。翡翠攻玉のルート，おびただしい石器数，石鏃，石錐，石斧等石材のルートと合わせ，宮遺跡が重要な中部高地北部の拠点遺跡であったことは明らかである。　（森嶋　稔）

（付稿）

遺跡で拾った緑の石

――宮遺跡の翡翠――

山　崎　　元（長野市松代町西条
元中条中学校長）

○　まえがき

これは，申すまでもなく，いわゆる考古学専門の人の手になった調査報告書というものではありません。中条中学校に勤務をし，宮遺跡に近い住宅に住み，機会をみつけては，つとめてこの遺跡を尋ね，そして５年間，奇しくも翡翠の原石に巡り合うに至ったその間の拙い経緯を，遺跡保存並に今後研究調査をする人のために提起するあくまで参考の資料であります。

Ⅰ．遺跡調査の一般的傾向と課題

道具を用いた人類の歴史は，数十万年以上もの大昔にさかのぼるといわれております。これにひきかえ，主に遺跡，遺物によってその原始，古代を究める考古学は，実にその日が浅く，殊に神代から始まったといわれてきた「神国日本」にあっては，それだけに遅れてしまったと思われます。その科学的な考古学の研究も約百年前からでありまして，敗戦後の急速な進歩によってこんにちの成果に至ったといわれております。

遺跡や遺物は，日本全国いたる所に，もっとたくさん在るでしょうが，そのほんの一部が偶然何かのきっかけから発見，発掘され，報告されているにすぎません。しかも，その報告も，ややもすれば，時代や型式などを体系づけるにとどまっているようであります。現段階にあっては，それが考古学専門家の，さしあたっての急務ということであるのかもしれません。したがって，一つの遺跡を長期にわたり，しかも詳細に観察記録することをせず，いや計画をしてもできない現実のままに，とり残してしまっているのかもしれません。おそらく遺跡としても，もっと細かく念入れな調査研究が許されますならば，そこにはもっと異った他のことが発見されるのではないでしょうか。

宮遺跡は，こうした課題と取り組むべく，私との出会いが始まったように思えてなりません。

Ⅱ．遍歴から宮遺跡へ

うち続いた満州・上海事変下では，非常時といわれて，考古学などが疎んぜられるのは，まことにやむをえぬことでありました。そうした激動の昭和９年に，私は教員生活を諏訪上社の地で始めました。或る休日に，ひそかに近くの遺跡を尋ねますと，畑の低い石積みの間から，図らずとも完形の石皿を発見しました。これがそもそもの第一歩となりました。その後，帰省の際には，わざわざ黒曜石を求めて，再三和田峠越えをし，期せずして美しい柘榴石（ざくろいし）に慰められるということもありました。また上諏訪では，学校上の茶臼山の高台へ野外授業に行き，たまたま黒曜石の特殊な剝片を拾ったということもありました。拾ってはみましたものの，いつの間にかなくしてしまうということもありました。（その後，昭和27年になって，旧石器時代遺跡として茶臼山遺跡は発掘されました。）やはりむなしい日がより多く過ぎていきました。支那事変はやがて拡大して戦争へと突入し，戦時態

勢はいよいよ強化されました。この緊迫した中で，ようやく郷里に近い北信濃の学校へ転任ができました。ところが，不思議と勤務校のほとんどが，近くに遺跡が在るという恵まれた場所にありました。けれど，決戦下とあっては表面採集するゆとりとてもなく，やがて応召，敗戦，復員となりました。

戦後，昭和23年松代中学校に勤務するようになりましてからは，米山一政先生（県文化財専門委員）の指導のもとに国学院大の稲葉（西条），東京教育大の城之内（屋代）等の遺跡発掘がありました。それは夏休などの長期休業を利用し，毎年のように行なわれました。これにはふるって参加をし，連日汗を流しての奉仕ではありましたが，きわめて得るところが多くありました。それに，この頃から，待ちに待った考古学関係の刊行物も手に入り易くなり，これにより，比較検討の資料として，知人からは北海道十勝石（黒曜石）の石槍を，また，つてを求めて，四国よりは讃岐石（香川県国府台，サヌカイト）と石器を郵送していただき，なお，同僚からは出雲の碧玉（島根県玉造温泉旧採掘坑入口拾集）をいただくなど，逐次資料も整う頼もしい日々となりました。

その後，昭和36年更級埴科地方誌刊行会が発足をし，編集委員として委嘱を受け，その原始古代調査の主任を命ぜられました。又しても米山一政先生の指導を願い，調査専門委員には，森嶋　稔先生（日本考古学協会員）など若手の仲間が張りきって参加し，その豊富な専門的手ほどきを受けました。土曜日，日曜日，祝祭日までも出動しての忙しさで，体力的には苦労ではありましたが，それにも増して，実に楽しい調査や発掘であり，まことに充実した毎日でありました。これがため4年間に，旧埴科，更級二郡全域はもちろん，関係隣接地区にまでわたり，遺跡，遺物をまんべんなく調査することができ，ほんとうに得難い幸せでありました。

さて，昭和41年中条中学校へと転任をしました。ある小春日和のこと，石器時代人が住むには恰好な河岸台地と見てとって，そっと畑に行ってみました。やはりそこには遺物が点在しており，この時，初めて，ここが宮遺跡であることを知りました。しかも，この遺跡で驚ろかされましたことは，過去30年間に遍歴した遺跡のそれとは非常に趣を異にし，この地からは産出しない各種の石の破片，しかもそれがたくさんに包含されているということでありました。早速，明くる日から機会をみては，尋ねてみることにいたしました。

Ⅲ．勾玉と小滝の翡翠

延喜式内社玉依比売命神社（松代町東条）には，御神宝の児玉石（こだまいし）（総数766，昭和28年大場博士調べ）が有りますが，このうち人工玉類はその数582（硬玉製は128）といわれ，一か所にこれ程豊富に有る所は，全国でも非常に珍しいとのことであります。さて，松代中学校在職中，この御神宝について，特に長野県から調査を委ねられておられた大場磐雄博士（国学院大学教授）が来松されました際，私は誘いを受けて同席し，この秘宝の幾つかを親しく手に持って拝することができたことがありました。その時のこの上ない感激と喜びは，格別なものがありました。特にこの中に，大きくてみごとな翡翠の丁字頭勾玉（まがたま）があり，その大きさ，色，重さは生涯忘れることのできないものとなりました。それのみならず，その後，信州文化祭（昭和28年11月真田家別邸・松代小中学校を主会場）が開催

されるにあたり，その陳列委員として委嘱を受け，一般へは初公開というこのご神宝を再度拝観できるという巡り合せに，何かしらの使命が課せられたような気持でありました。しかも，更級埴科地方誌資料調査で，地域出土遺物をくまなく調べては歩きましたものの，これほどにりっぱな玉は，他では全く見ることができませんでした。こうした機縁があって以来，私は翡翠について，できるだけくわしく調べてみることにしました。

美しい翡翠（硬玉）は，数千年前の石器時代（縄文中期）から垂玉などに使用されていたといわれております。この翡翠の原産地につきましては，長い間にわたって学界の課題となっておりまして，はるか南方ビルマ説までもあったようではありますが，最近になって，日本でも数か所から出ることが明らかとなったようであります。なかでも，小滝（新潟県昭和12年発見）の物は，良質でしかも量も多く，そうしたことから，新潟県下からは，翡翠の玉の出土する遺跡が比較的多いともいわれております。

大岡小学校へ転勤をし，おりもよく，隣接の中学校に新潟大学地質学出身の先生がおられました。幸なことに，この翡翠調査の希望をもらしましたところ，早速知人である糸魚川小学校の小林茂樹先生を紹介してくださいました。そして間もなく，しかも突然に，翡翠を受け取りに，即日，大町駅まで出向くようにとの有り難い電話があったという伝言を受けましたが，おり悪しく長野へ出張中のこととて，指定時刻に行くことの不可能を打電し，この切格の好機を逸してしまいました。この話に関心をもった校内の若い有志数人は，休日を利用して，こっそり翡翠を探しに小滝行を決行しました。そして，その報告と共に証拠の品だと言って，採掘専門の人が割って捨てて行った物を拾ってきたのだという灰白色の石と，小さいが純白で一部に緑色の鮮やかな原石とをくれました。これが入手できた初めての翡翠であります。この時に，道順も詳しく聞くことができ，早速にも現地での調査をと願ってはおりましたものの，果し得ずして中条中学校へ転任することとなりました。

ところが，着任をしてみますと，中条中学校は，それこそすぐ近くに宮遺跡が在りました。ここの多種な石片は，ただ単に石鏃など石器加工の時の物ばかりではなくて，ことによると，玉類を造った時の物までも在るのではなかろうかとも考えてみました。ここ中条村は，長野・大町線沿いでもあり，小滝へも出やすい所でもあります。それやこれやで，この際に機会をつくって，宿願の小滝行を果そうとその日を待ちました。その機会がやって来まして，休日を利用し計３回，小滝へと調査に行くことができました。しかし，意に相違して，翡翠公園の天然記念物指定の巨大な数箇の転石は，何れもにぶい灰白色であり，その下流の河原では素人には，それらしい石は一つとして拾えないということも解りました。こうして３度目に諦めての帰途，小滝駅で駅長さんが見せてくださった着用のネクタイピンとカフスボタンの翡翠は，白地に緑が明かるく流れている美しいものでありました。その上，同情をしてくださった駅員さんが，バックル用に切り取ったその残りだとくださった石片は，潤んだ地に薄い黒と暗い緑とがむらにじんだ目立たない石でありました。

註　翡翠は，世界では産出がきわめて少く，硬く（硬玉）て半透明なものと不透明なものとがあり，その多くは白と緑の入り混りである。この透明度の高いものは琅玕と呼ばれ，宝石として珍重されている。しかし，

一般に○○ヒスイの名で言われている物の多くは，硬玉（翡翠）ではなく，したがって宝石としての価値のない物である。中国産は玉であり，ニュージーランド・アラスカ・カリフォルニヤ産は軟玉であり，印度・オーストラリア産は玉髄など石英系であり，なお朝鮮の物は軟かい蛇紋石であって，これ等は何れもその産出量も多い。（崎川範行著書による）

Ⅳ．宮遺跡の石片と翡翠

1．宮遺跡の石片

この遺跡の非常に多種な石材，これを詳細に検討しますれば，おそらく石器時代に利用された石，そのほとんどが解るのではないでしょうか。私の目標はまずなるべく多くの種類の石材を拾集し，類別すること，それに，できることなら，この地に無い石材をどこから運んで来たのか，その入手経路をも考えてみることでありました。

この遺跡は，包含層が比較的浅く，耕されるたびに表面に出易く，その反面，現れた時に拾わないと又土中にまぶされてしまうということであります。又，こうして，長い間の耕作で，石片は傷つき変形もしてしまい，調査資料としての条件が年々損われているということも考慮に入れておくことが必要でありました。

ここが耕地である以上，耕作者のご了解を得て，良心的な拾集でなくてはなりません。常に耕地を踏み固めぬ配慮，それに作物をいためぬよう特に細心な留意が必要であります。こうした点では，中学校長でもあり，なお村の文化財調査委員もしており，その自覚と責任も重いのですから。又それに免じて，ご理解もいただけたことが何より幸せでありました。

表土に出た石片は，色のなるべく鮮かな時，つまり凍みあがりが溶けてもべたつかぬ適当な時，霜が溶け始めた頃あい，雨後であってあまりぬからぬ時，朝露でぬれている時などが採集の好期でありました。しかし，私は勤めの関係から，その多くは朝飯前の早朝1時間ほどでありました。それから時間と労力のむだをはぶき，見落しがないよう効果をあげるためには，広く大ざっぱに調べるよりは，小範囲を綿密に調べ，それを逐次記録して行くことにいたしました。

こうして拾集しえた石片の処理は，まず歯ブラシか束子でていねいに水洗いをし，必要に応じ石鹸をつけ，ぬるま湯に浸してよく洗いました。洗う際には，特に当時の人による打面や研磨面の形跡がうかがえる部分には，よくよく注意をはらい，たとえ一部ではあってもいためぬよう大事によごれを落しました。拾集して，同一種類のものが多くなりますと，比較して良い方だけを保存し，不要な物は，遺跡で次の調査のさまたげにならない所へ返しました。

分類には，標本などとの照合が最もよいのでありますが，手近にありませんでしたので，図鑑などを主とし，不審な物は，念のため研究していられる方に質しました。拾う度に異った物のように見え，あまりにも多種と思えて，学者なら数種類というかもしれませんが，ずいぶんと手まどってしまいました。けれど，当初に予想しておりましたように，石器時代人が使った石鏃，石槍，石匙，石錐，石剣，石斧，石棒などの材料となりました黒耀石，流紋岩，チャート，粘板岩，砂岩，蛇紋岩，結晶片岩などが比較的多く，つまりこの遺跡だけで，一と通りのことが解るということであり

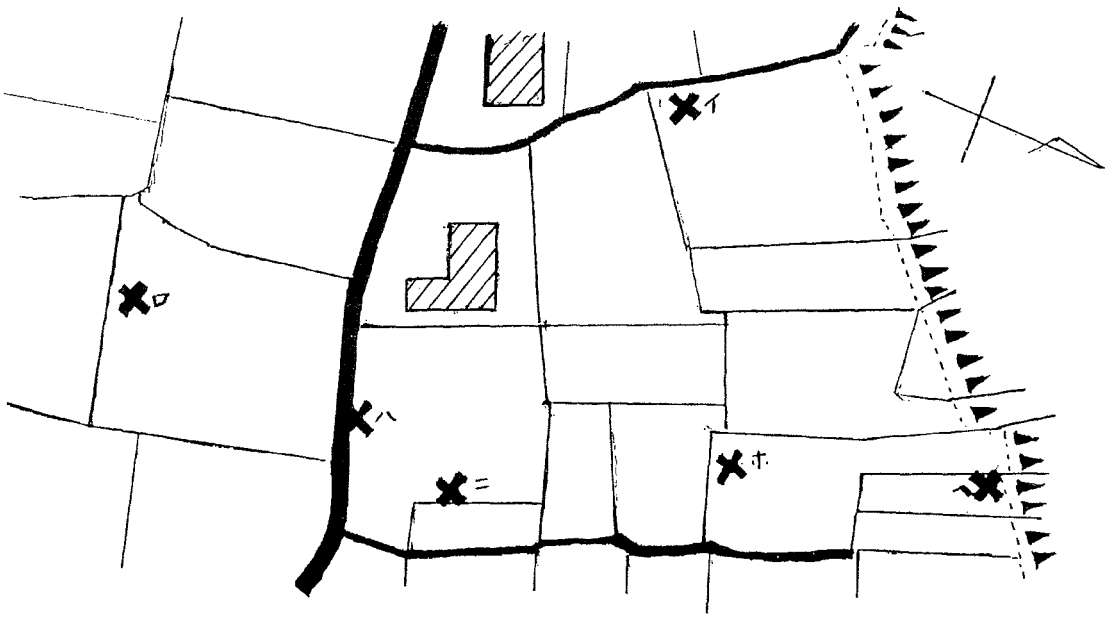
ました。石器よりも石片の数の方がきわめて少く，なお目につきにくい色の物などは，まだまだ見落しがあったことと思われます。

こうした材料である多くの河原石，その入手経路につきましては，念頭にはありましたが，どこから持ってきたのかすぐには答えになりませんでした。それが生活必需物資であるからには，黒曜石は諏訪の和田峠一帯からの如く，かなりの遠方からも運ばれたということは，疑う余地がないことであります。更に研究して行きたいと思っております。

2．宮遺跡の翡翠

教職のかたわら，30余年間にわたって歩んだ多くの遺跡に比して，宮遺跡の特異性の一つは，ただ単に多種な石材がということのみではなく，何に役だてたのか，白っぽく石英質のような石が比較的に多いということでありました。石器時代はその名の如く，道具の材料である石材を，はるか遠方より運んできております。この中の白っぽい硬い質の石は，当時の人にとって，黒曜石の和田峠よりも近い小滝から，翡翠の原石を持って来て，垂玉を造り首などに飾ったであろうことも，新潟県下での翡翠の玉の出土からしても，無理な考ではないと思えてきました。

日本翡翠には，白が最も多くて，それに緑とは限らず，紫，ピンク，オレンジ，黄褐色，黒青なども在るとのことではありますが，原始の人もやはり，白地に緑の物を好んで垂玉に使用したようであります。宮遺跡でも，容易に目につきやすいこの白っぽい石には，ずっと注意してはおりましたが，昭和43年秋ごろから，ごく小さいが緑色めいた半透明の物が見られるようになりました。けれど，当時の人の物か，現代の人が落した物かの疑点も幾分はありました。その後，あちこちでそれらしき石を3点ほども拾い意を強くしました。（拾集地点分布図参照）それのみならず，昭和



付図　宮遺跡緑の石拾集地点分布図

45年の初冬，新に拡張されました農道（8地点）で，側溝のふちに敷かれたフエルトような物の際に，掘り上げられた土にまみれ，ぬれてはっきり緑のうかがえる3糎もある白い石がありました(昭和45.12.17)。数千年土中に在ったにもかかわらず，表面はあまり風化してはいませんでした。硬いので，おりをみては，こん気よく，静かに磨き続けました。緑がみごとに映えてきました。確めのため四面を磨ぎ出しました。それは，まちがいなくりっぱな翡翠の原石でありました。こうして確認をするまでにはずいぶんと手間どり苦心をいたしました。しかし，ともあれ，遺跡で翡翠の原石を発見することは，きわめて珍らしいといわれていますが，それが夢ではなく現実となりました。自信をえて，もっと調査をと考えてはみましたが，雪の冬が到来し，続いて人事多忙の時期ともなり，時間的にも労力的にも制約されまして，残念ながら，もはや調査は不可能となりました。私は翡翠の原石と宮遺跡で出会ったということのみで，退職により遺跡とも別れることとなりました。

今後は，地域の人たちが，長期にわたり，もっとていねいに調査をされましたならば，翡翠の石片はより多くみつかることと思います。また，当然加工された垂玉も拾集できる可能性は充分にあるものと思われます。それに，こんにちでさえ，硬玉の加工は難かしいといわれておりますが，数千年以前の人が加工をし，それにごく小さな穴までもあけえた技術は，今もって詳かではありません。もし，そうした加工の方法の何らかの手がかりが解ったとしますれば，それこそ考古学，いや人類技術進歩の上で大いに貢献するものと存じます。とにかく，この宮遺跡では，加工もされたようであります。さらに一層の探究をと心から願うものであります。

これからは，耕作者や地元の人たちで，協力してその発見に努め，遺跡と共に大事に保存をしていただきたいものであります。この報告によって，むやみに耕地に立ち入り，荒らし，作物をいためるようなことになりますれば，むしろ，この報告が害をなすこととともなります。ご理解いただき，あたたかく見守ってくださった耕作者の方々に，恩を仇で報いる結果となりませんよう，くれぐれも念願するものであります。

○　あとがき

本稿は，結論的には，宮遺跡で翡翠の石材がみつかったということなのではありますが，私が宮遺跡で翡翠に出会うまでの予備知識やそのもとになりました考古学的な歩みを，参考のために併せ記したのであります。30余年間の遍歴の最後に，美しい翡翠と出会え，それはたとえ小さな物ではあったとしましてもほんとうによき記念となり，37年の教職を去ることとなりましたことはまことに幸せと存じております。

あとは，中条村の方々によって，よりよき成果をあげられ，中条村の，いや中条の歴史以前の大昔に1頁を，さらに加えていただきたく存じます。

最後に，中条村での5か年間，勤めのかたわらとは申せ，そうさせてくださった宮尾正徳氏をはじめ耕作者の方はもちろん，地域の各位に対し，厚く御礼を申し上げ，中条村のご発展を心から祈念し，筆をおくことといたします。

（昭和51年3月25日）

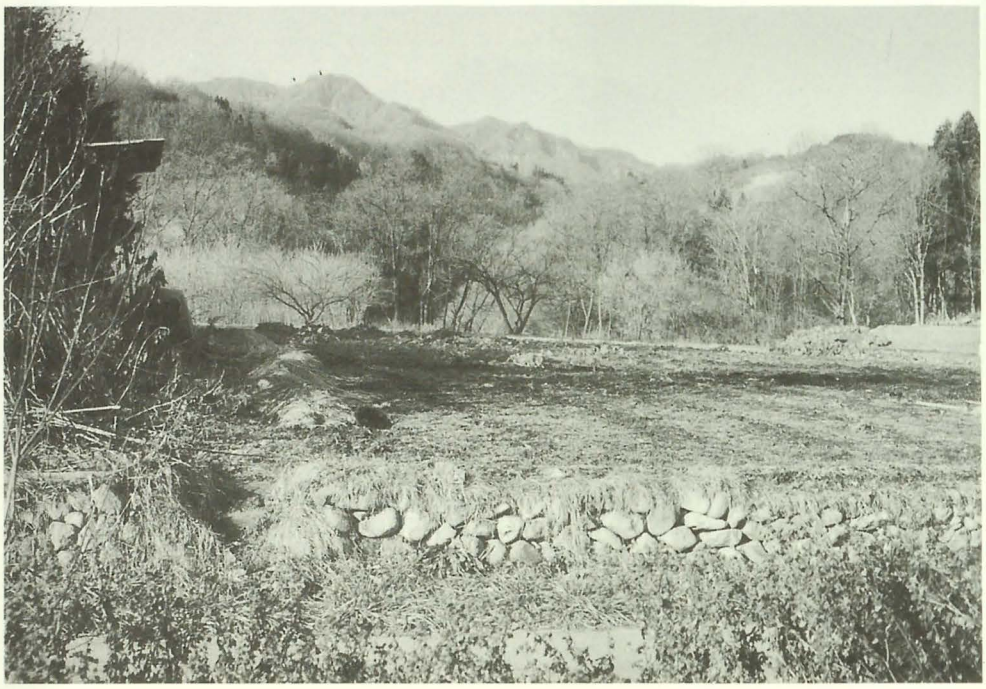
参考文献

藤沢宗平　「長野県西筑摩郡日義村芝垣外遺跡」『日本考古学年報１』(1951)
林　茂樹・本田秀明　「野口墳墓遺跡調査概要」『日本考古学年報15』(1962)
林　茂樹・本田秀明　「野口墳墓遺跡調査概要」『伊那路』６―10（1962)
樋口昇一　「木曽谷明神遺跡」『長野県考古学会連絡紙』No. 2（1962)
樋口昇一　「長野県西筑摩郡大明神遺跡」『日本考古学年報』15（1962)
関　孝一　「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概要」『考古学雑誌』15―３（1965)
関　孝一　「埴科郡坂城町金井保地遺跡の調査」『信濃考古』No. 14（1965)
岩埼卓也他　『生仁』　更埴市生仁遺跡第一次緊急発掘調査報告書（1969）更埴市教育委員会
森嶋　稔他　『更級・埴科地方誌』第２巻　原始・古代・中世編　更級・埴科地方誌刊行会（1978)
渡辺　誠　「日本の抜歯風習と周辺地域との関係」『考古学ジャーナル』10（1967)
春成秀爾　「抜歯の意義Ⅰ，Ⅱ」『考古学研究』20―２・３（1973, 4)
西沢寿晃・小松虔　「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について―人歯牙加工品の出土―」『長野県考古学会誌』31（1978)
塩入秀敏他　『深町』　―深町遺跡緊急発掘調査報告―　小県郡丸子町教育委員会（1979)
原田信之他　『下前沖』　上田市教育委員会（1982)
西沢寿晃　「中部高地諸遺跡出土の抜歯人骨」『中部高地の考古学Ⅱ』長野県考古学会
小林秀夫他　『宮遺跡』　中条村教育委員会（1986)
青木和明他　『宮崎遺跡』　長野市教育委員会（1988)
戸沢充則他　『長野県史・考古資料編』　遺構・遺物　長野県史刊行会（1988)
森嶋　稔他　『円光房遺跡』　戸倉町教育委員会（1990)
島田哲男他　『一津』　大町市教育委員会（1990)
森嶋　稔他　『筏遺跡』　小川村教育委員会（1991)

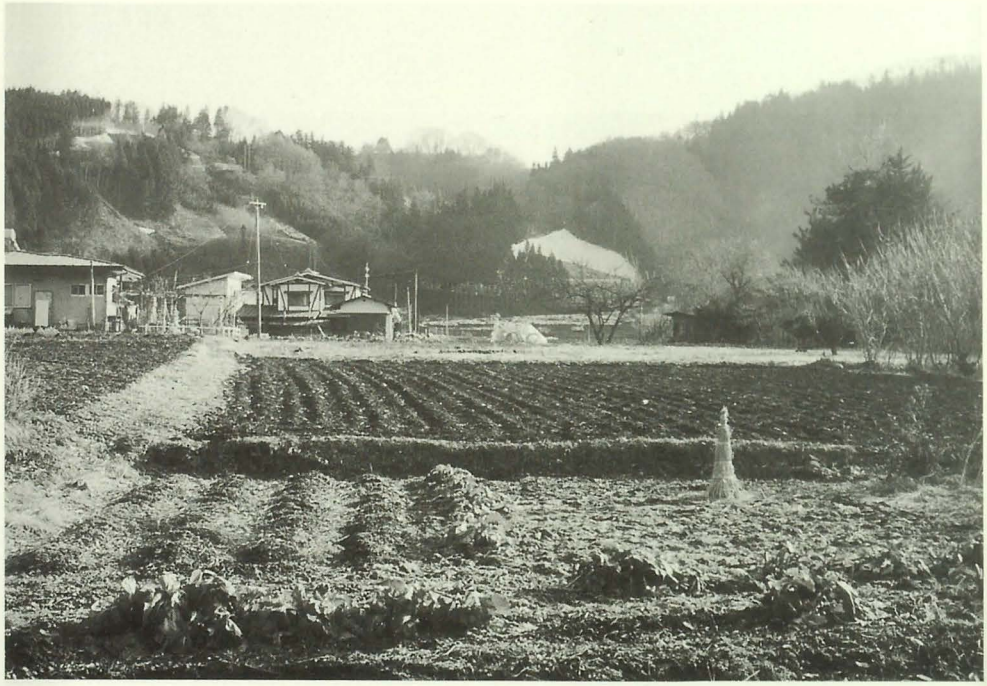
宮遺跡の地形（手前土尻川，遺跡段丘上北方より）

宮遺跡の全景（南方より）

図版二

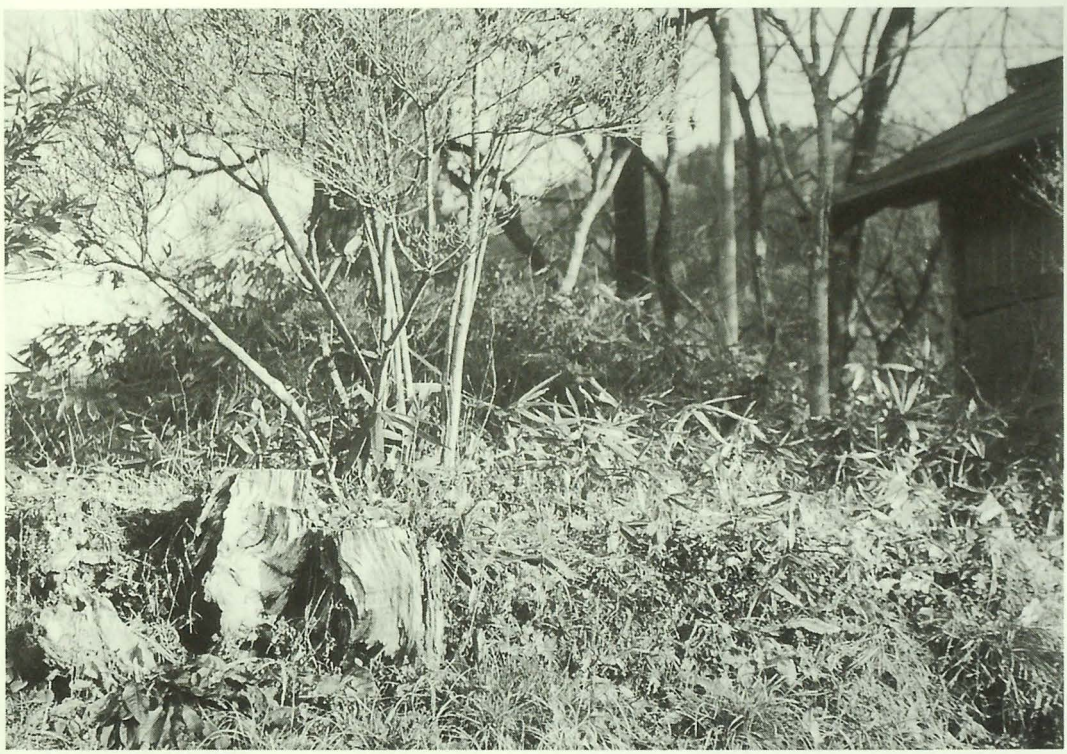


調査地区（南より）



調査地区（北より）

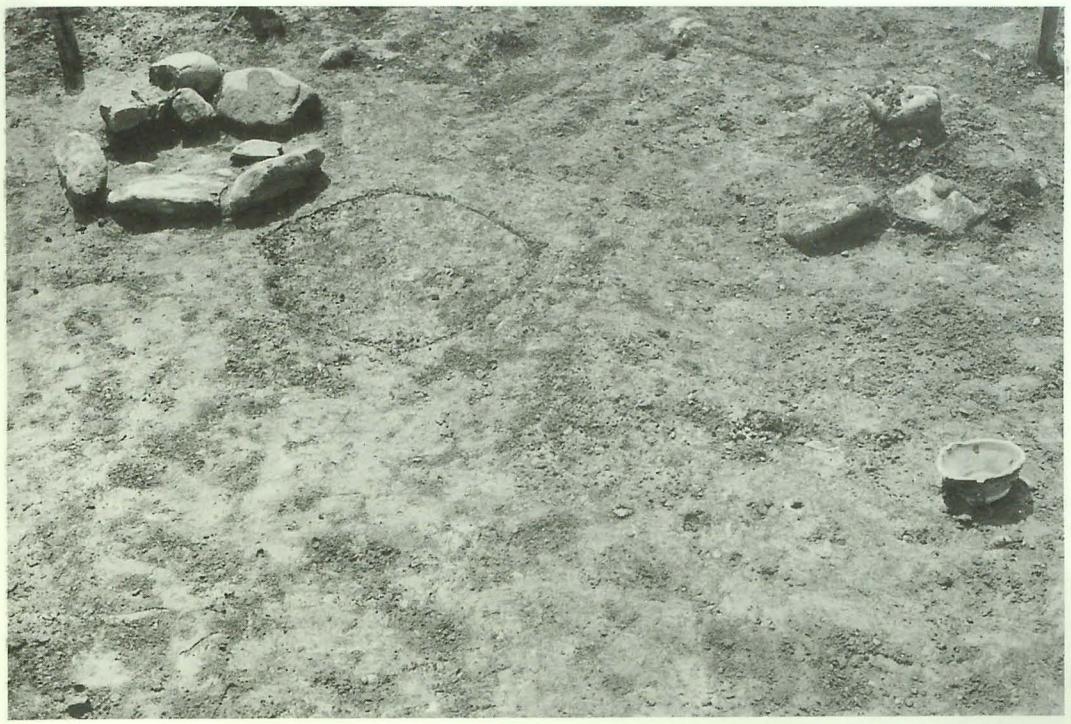
宮遺跡東側丘陵（赤松下，古墳）



東丘陵の宮の古墳（直径3m，高さ1.5m）

図版 四

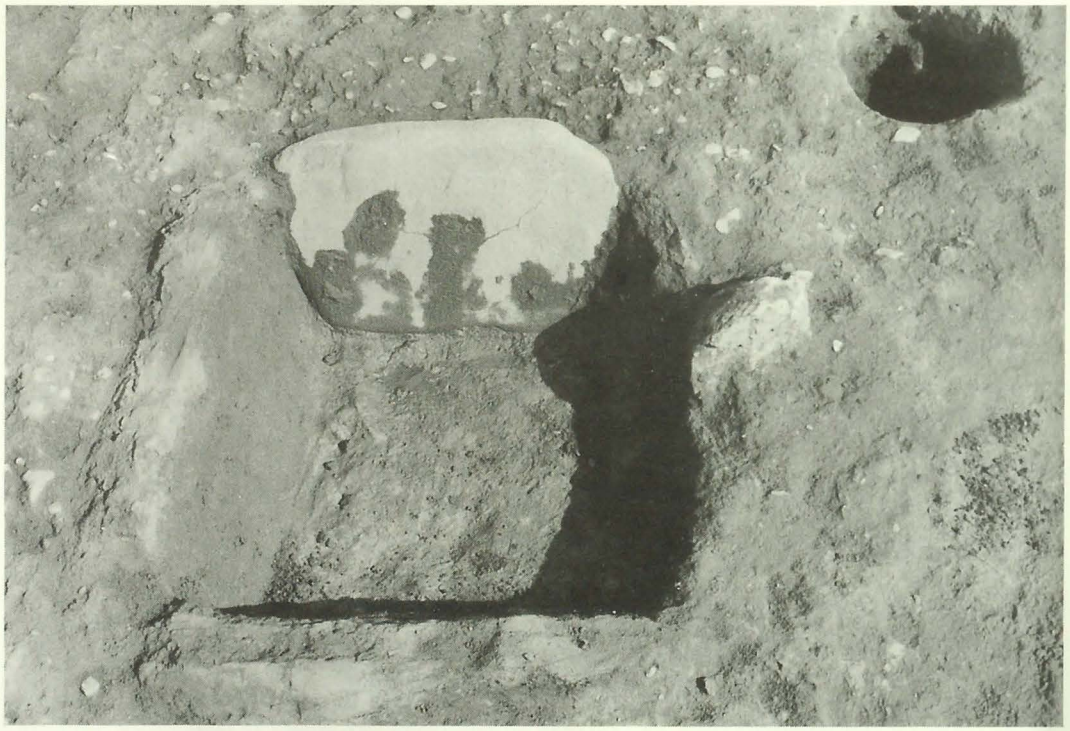
宮遺跡調査区全景　Ⅰ：第1号住居址
Ⅲ：第3号住居址
Ⅳ：第4号住居址
Ⅴ：第4号住居址



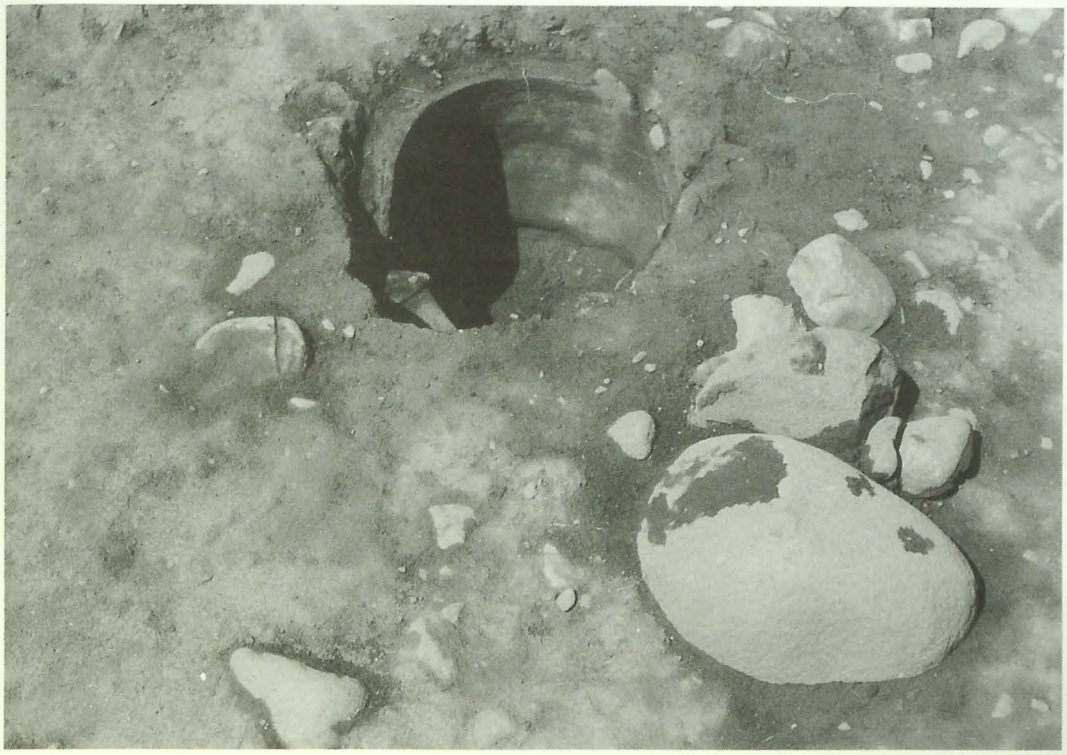
第２号住居址

第２号住居址の石囲炉

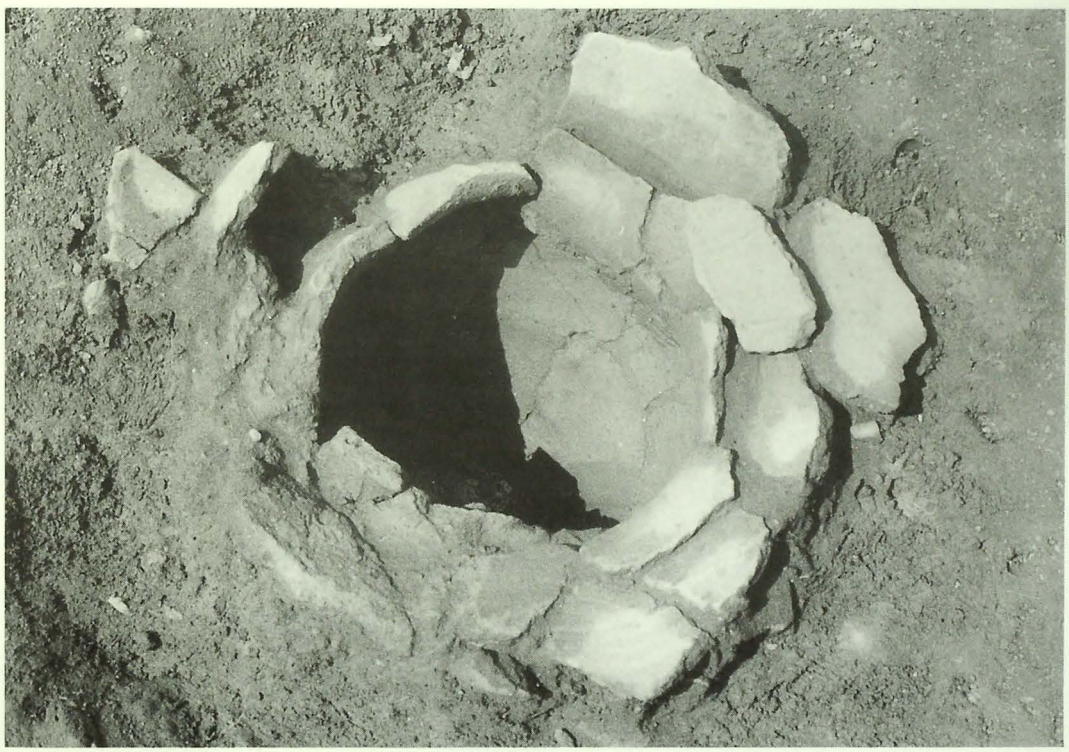
第6号住居址



第6号住居址の石囲炉



第3号住居址の埋甕



第4号住居址の埋甕

第5号住居址の埋甕

第6号住居址の埋甕

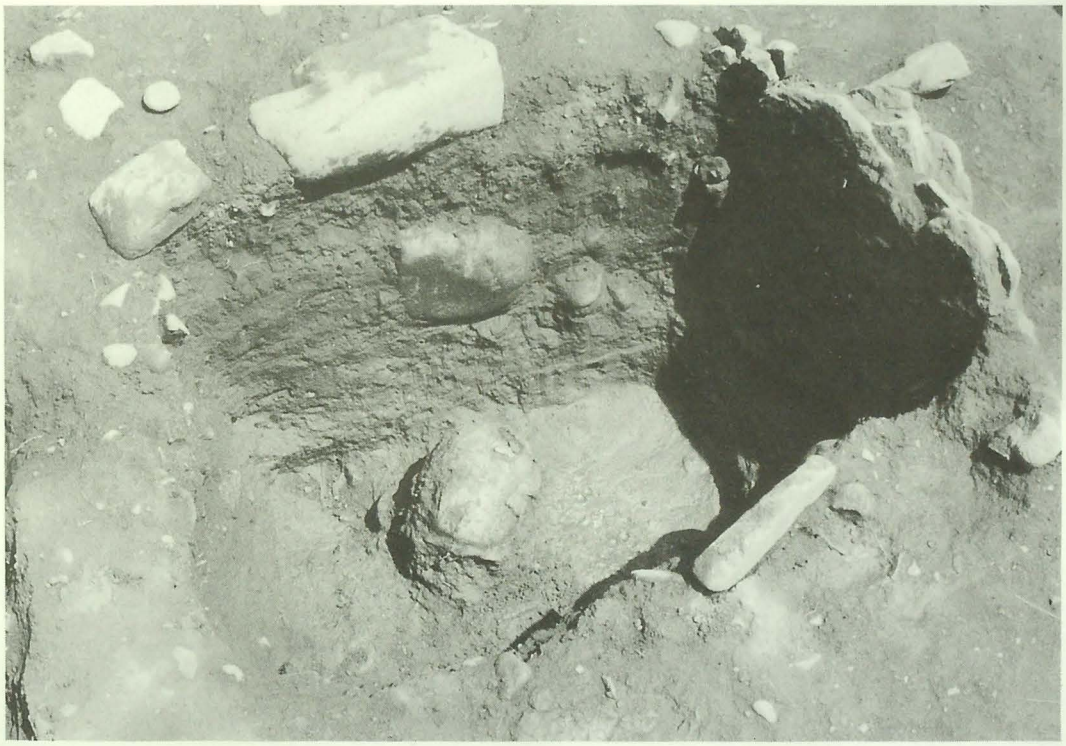
第4号墳墓址の埋甕

第2号住居址出土の土器

第１号墳墓址の調査状況

第１号墳墓址と第１号人骨出土状況

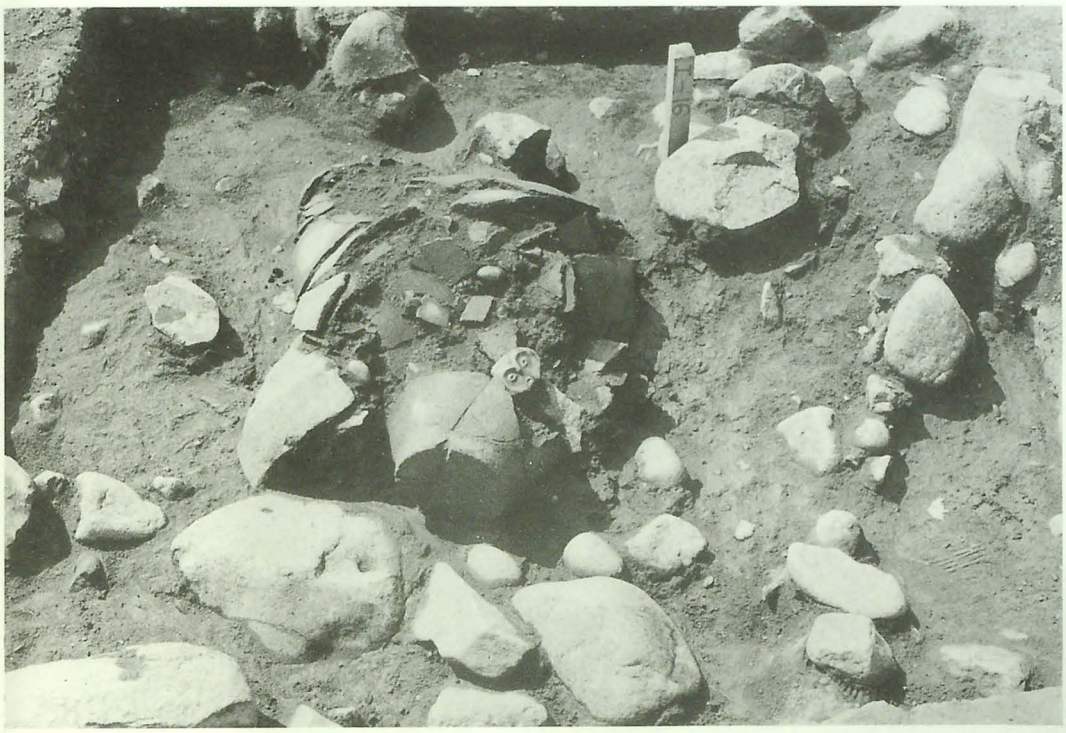
第１号墳墓址の蓋石



第１号墳墓址と第２号人骨出土状況

第1号人骨近影

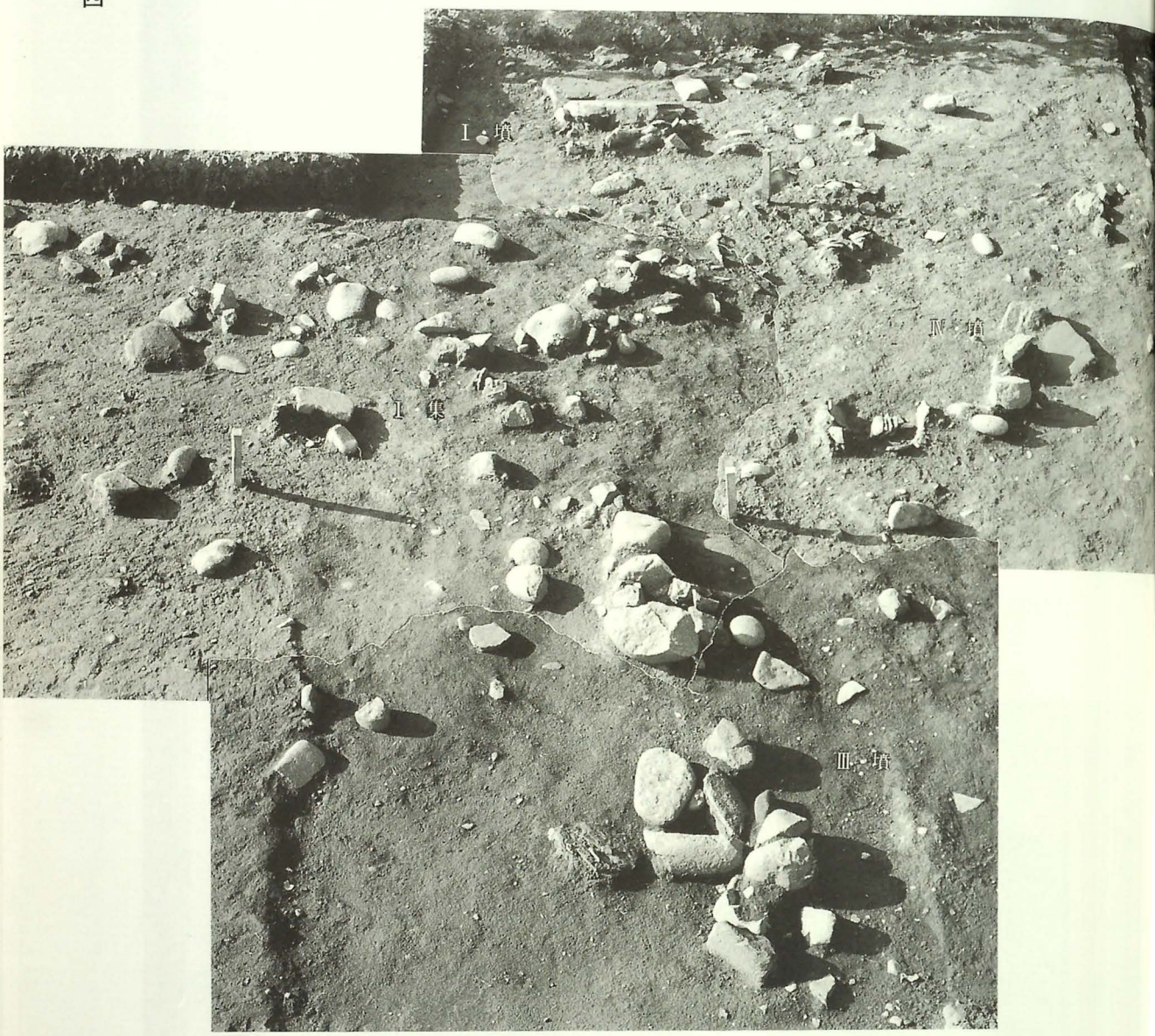
第2号人骨近影



第2号墳墓址

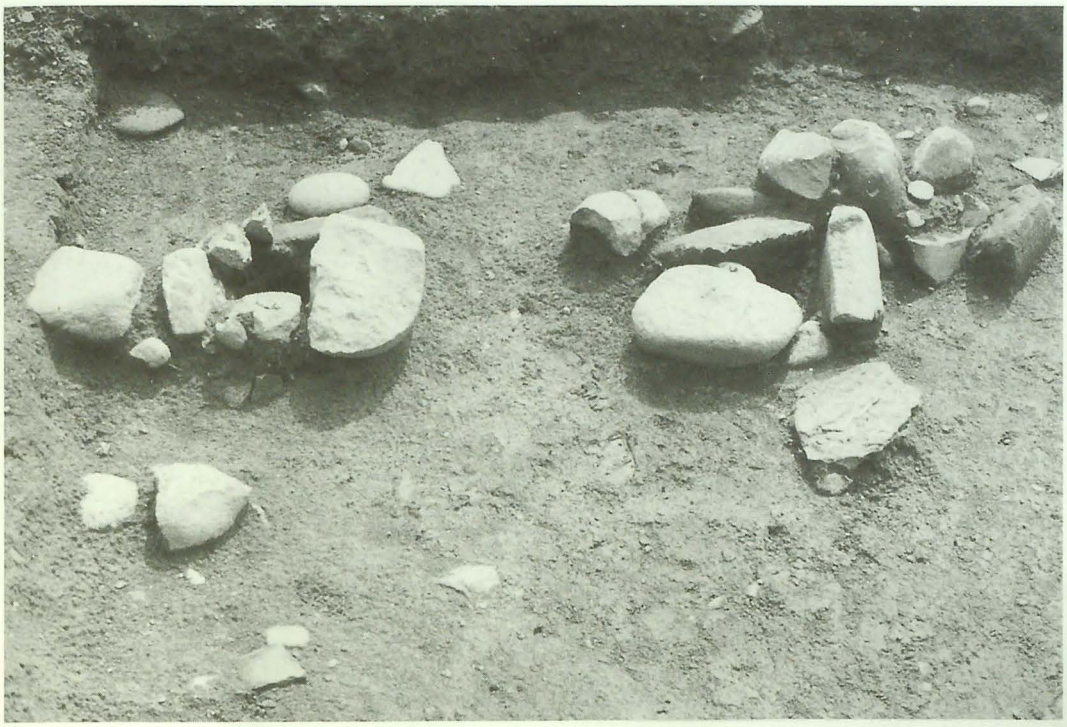
第2号墳墓址の土偶出土状況

図版 十四

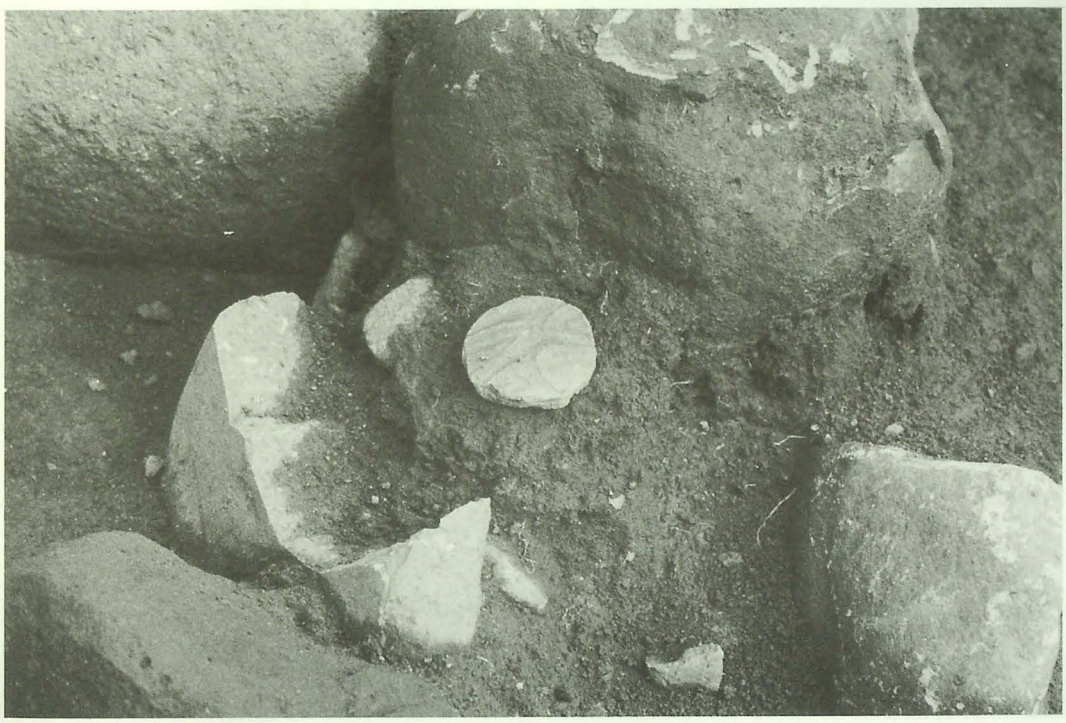


墳墓・集石址群全景　　Ⅰ集：第1号集石址　Ⅲ墳：第3号墳墓址

Ⅳ墳：第4号墳墓址　Ⅴ墳：第1号墳墓址



第3号墳墓址

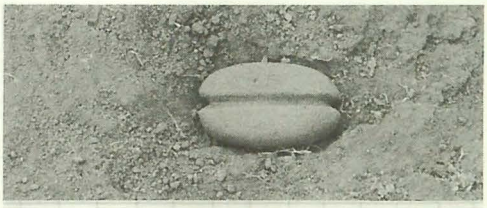


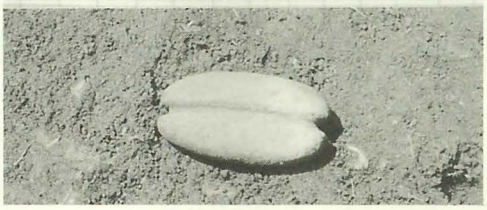
第3号墳墓址の土器円板出土状況

図版 十六

小形土器

石剣

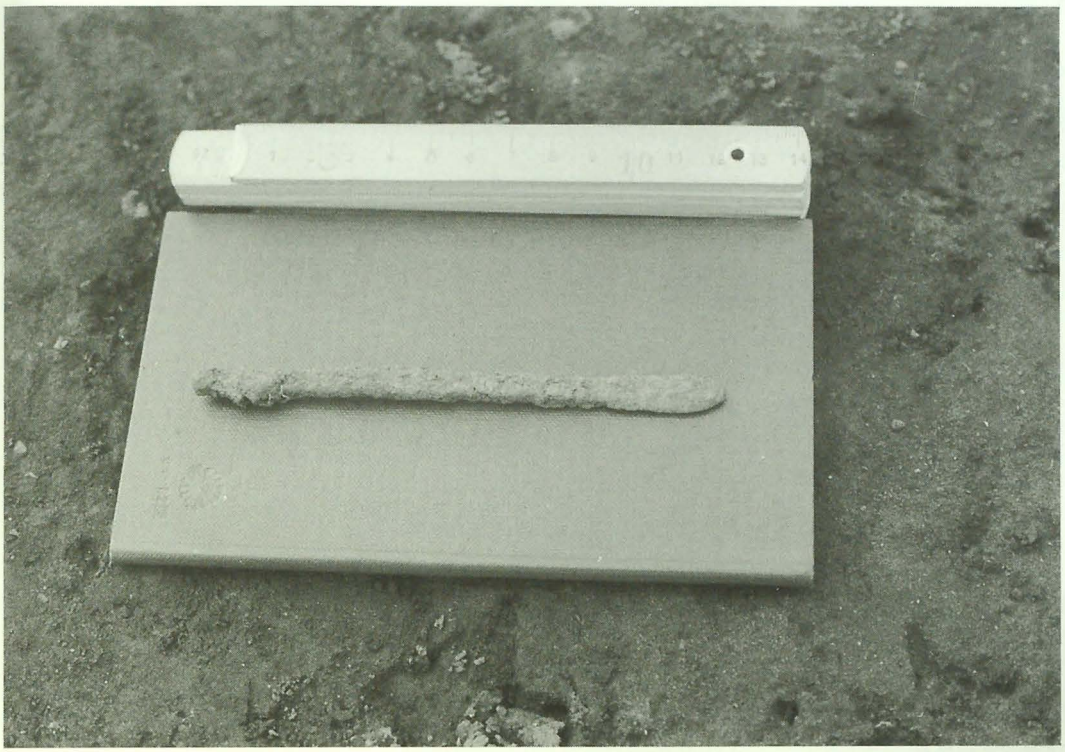




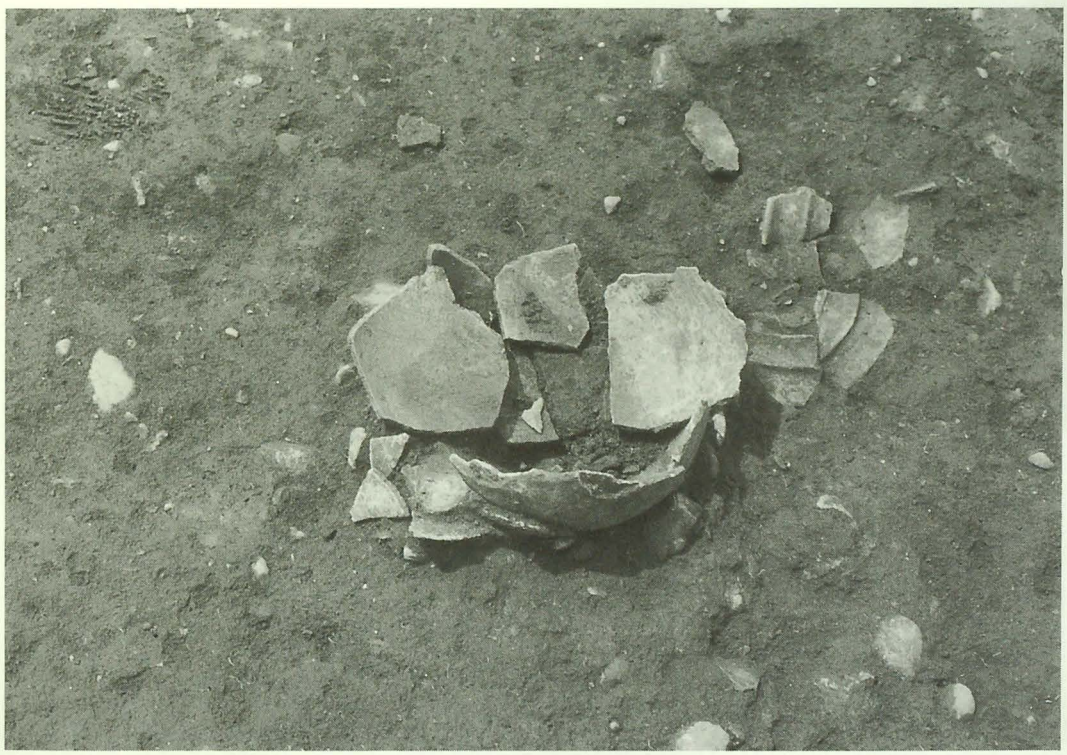
土錘

球状土製品

調 査 風 景



鉄鏃の出土

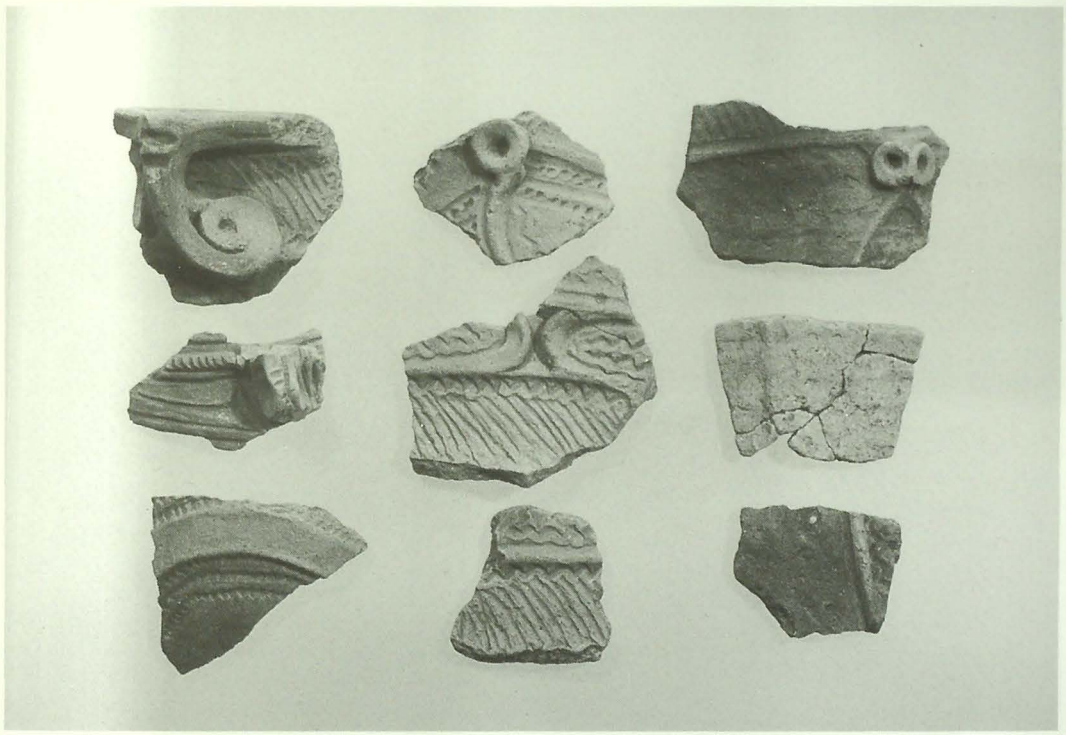


土師器の出土

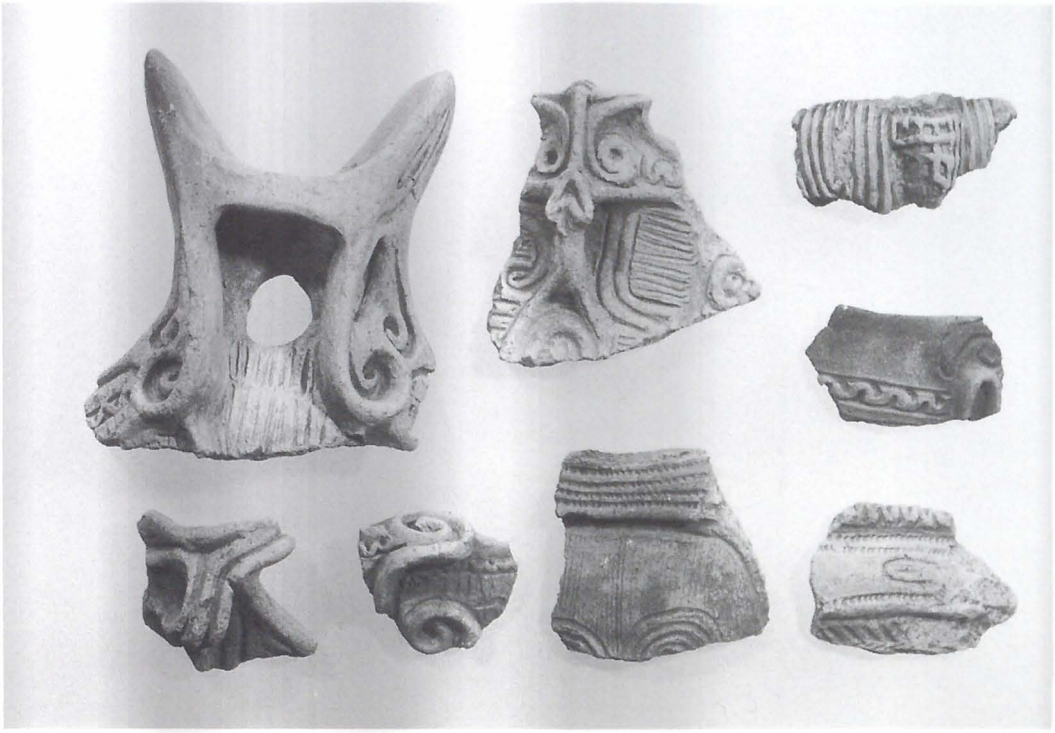
調査開始風景

現地説明会風景（中条小五・六年生）

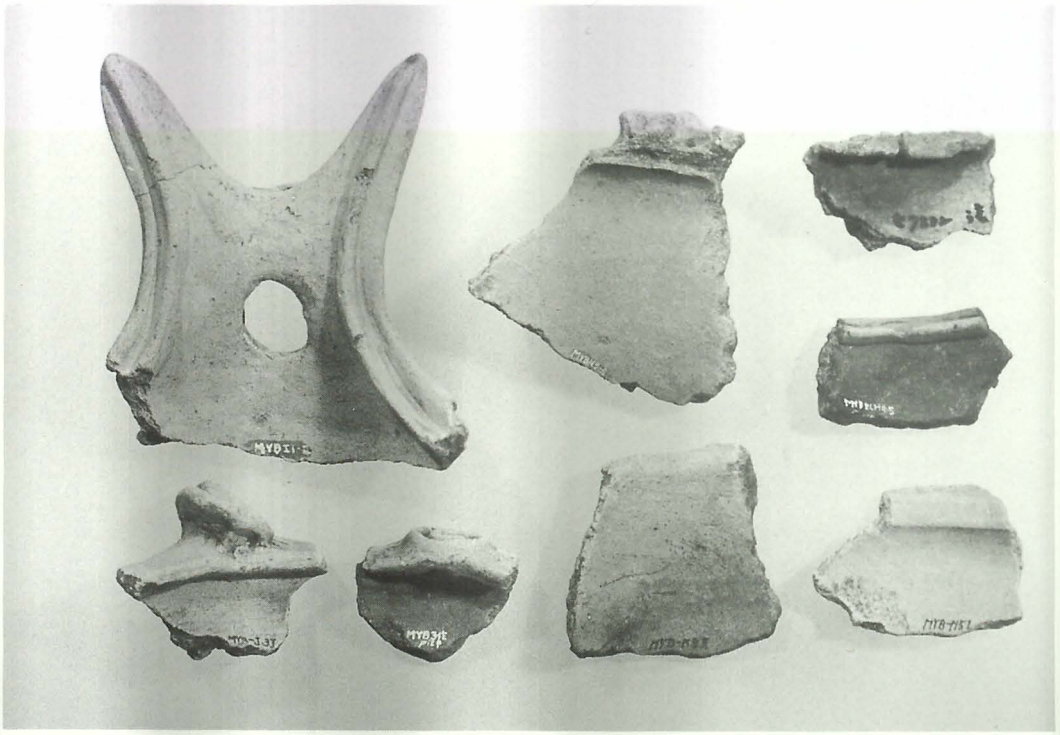
△ 縄文中期初頭の土器



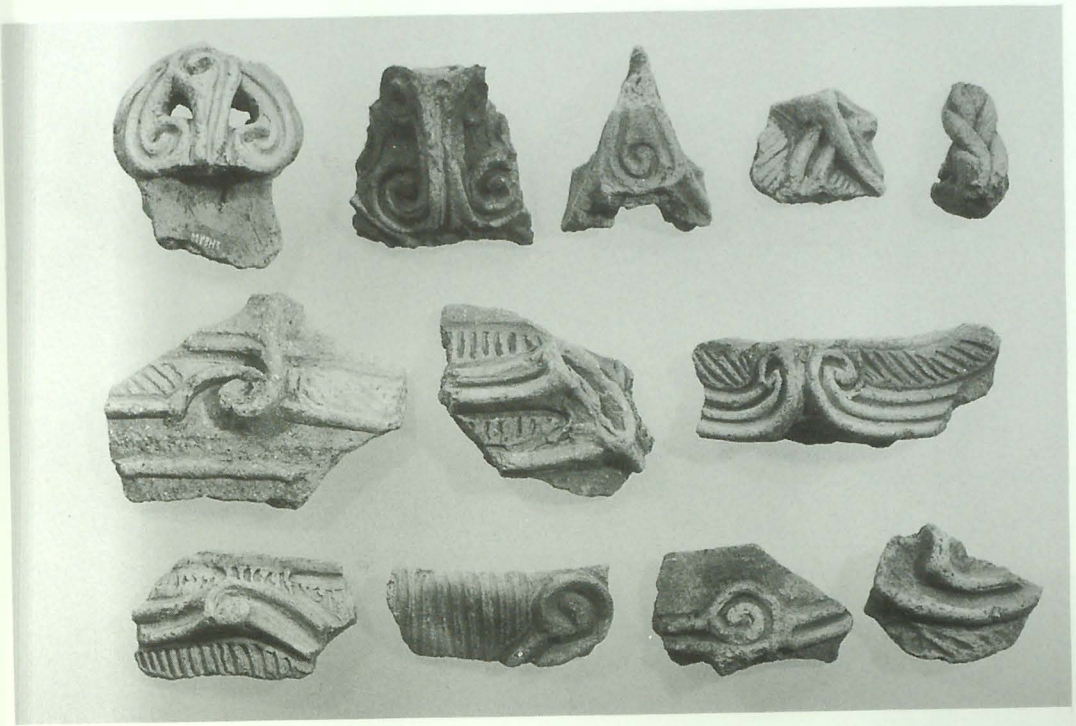
△ 縄文中期中葉の土器



△　縄文中期後葉の土器①（表）

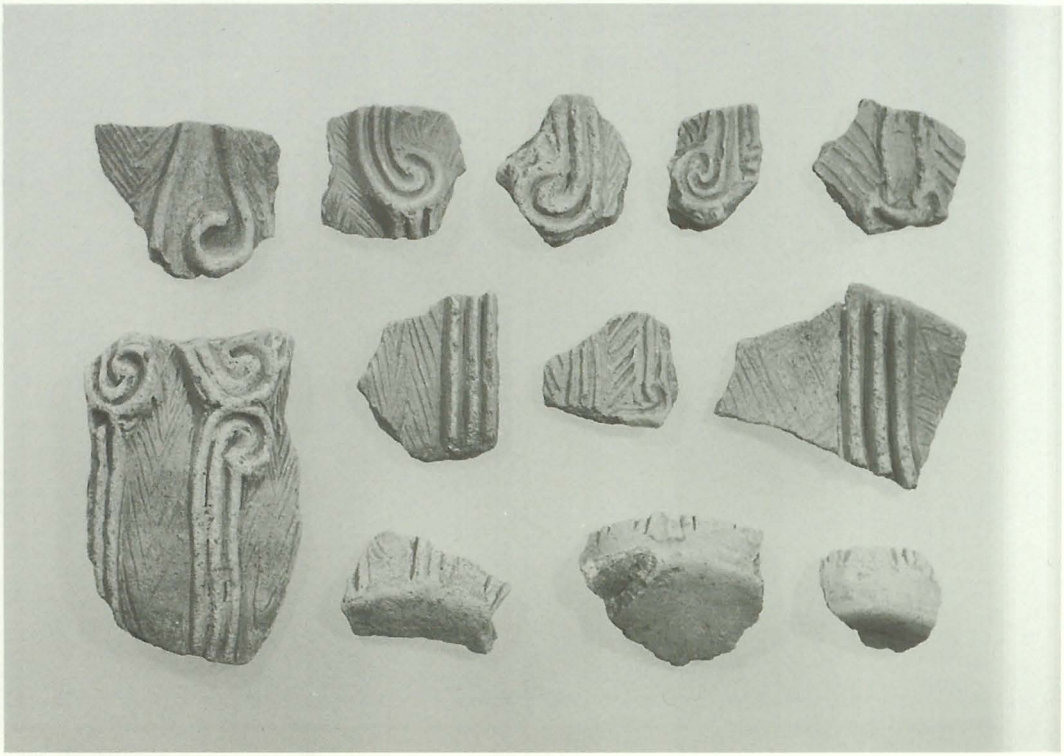


△　縄文中期後葉の土器①（裏）

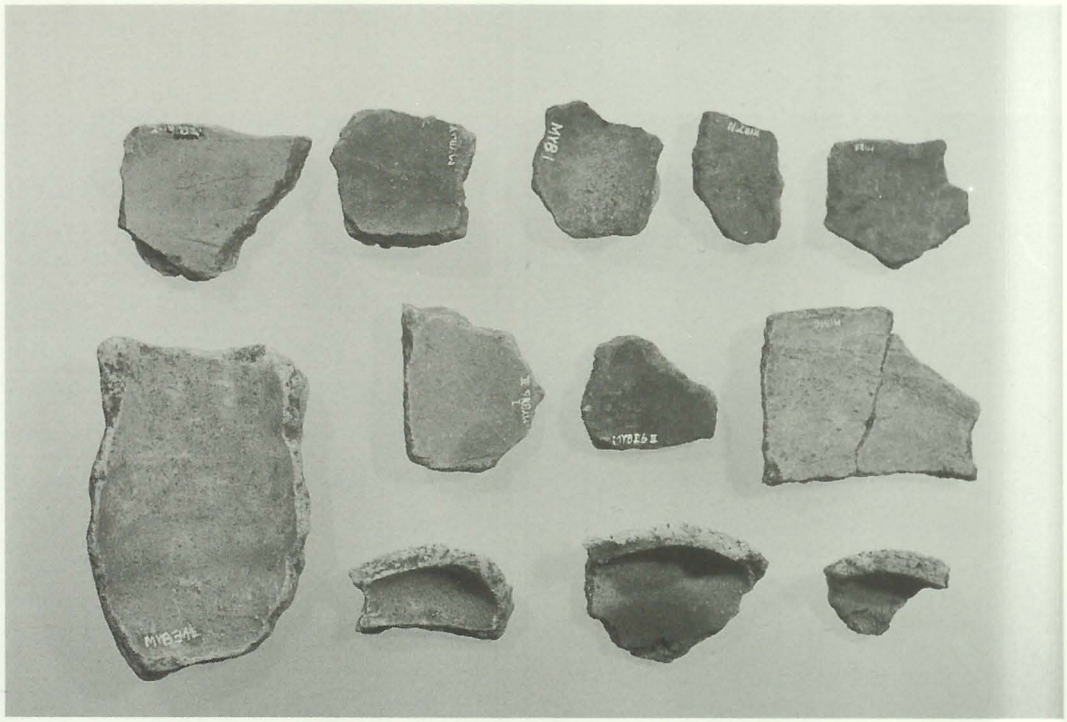


△ 縄文中期後葉の土器②（表）

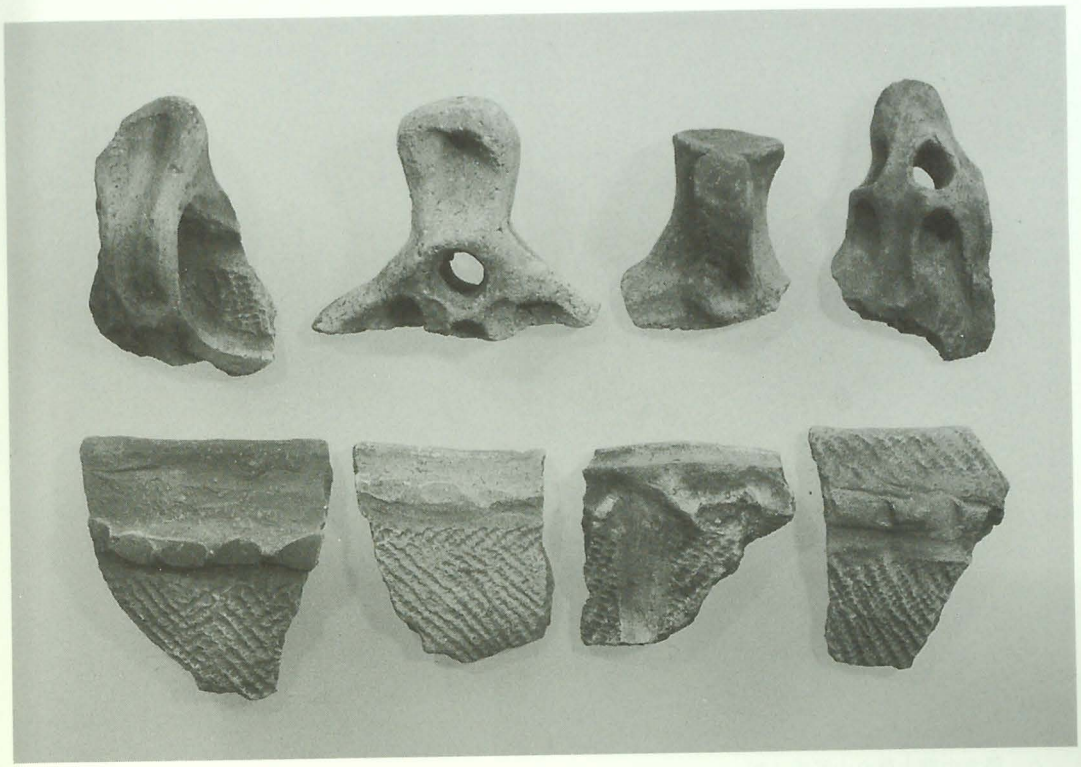
△ 縄文中期後葉の土器②（裏）



△ 縄文中期後葉の土器③（表）

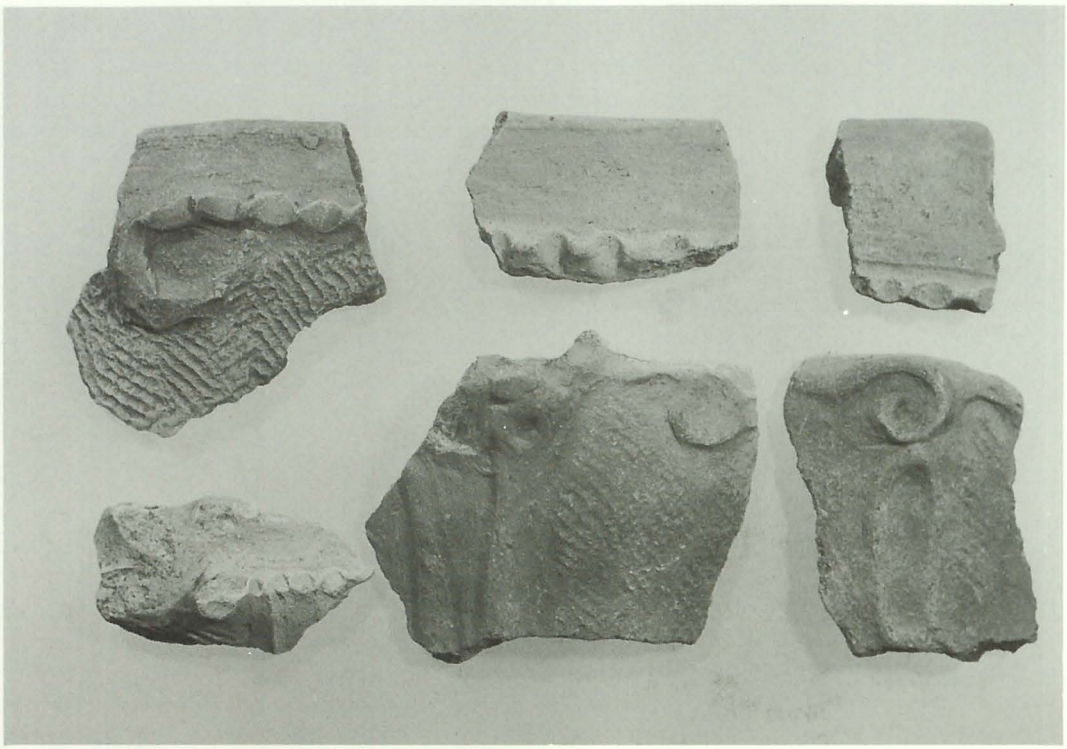


△ 縄文中期後葉の土器③（裏）

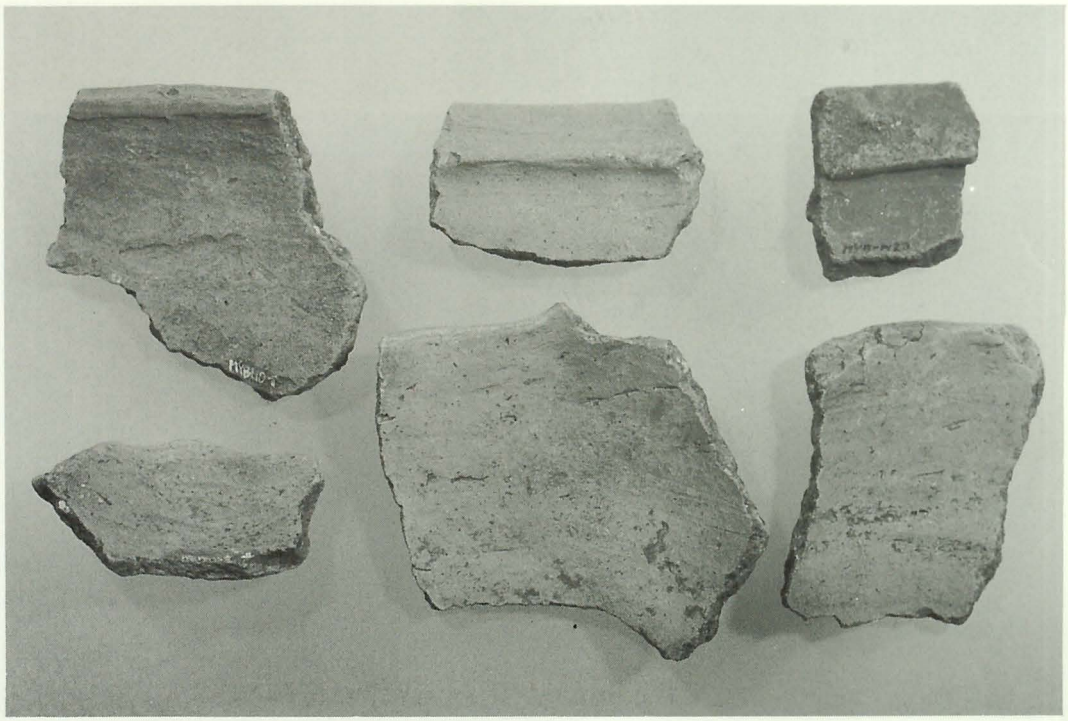


△ 縄文中期末葉の土器①（表）

△ 縄文中期末葉の土器①（裏）

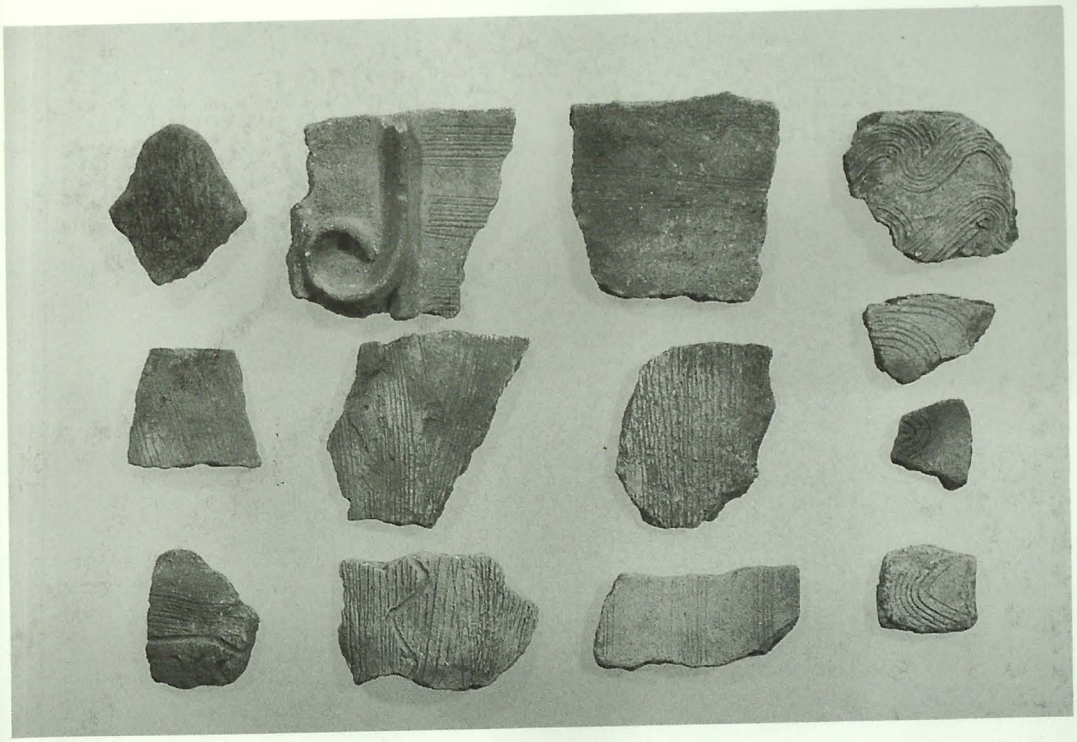


△ 縄文中期末葉の土器②（表）

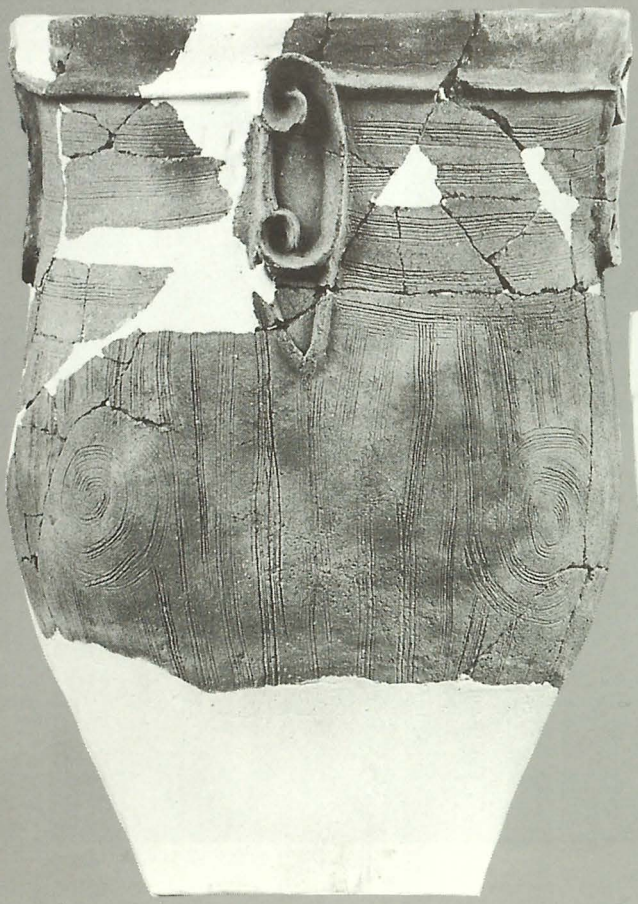


△ 縄文中期末葉の土器②（裏）

△ 縄文中期末葉の土器②

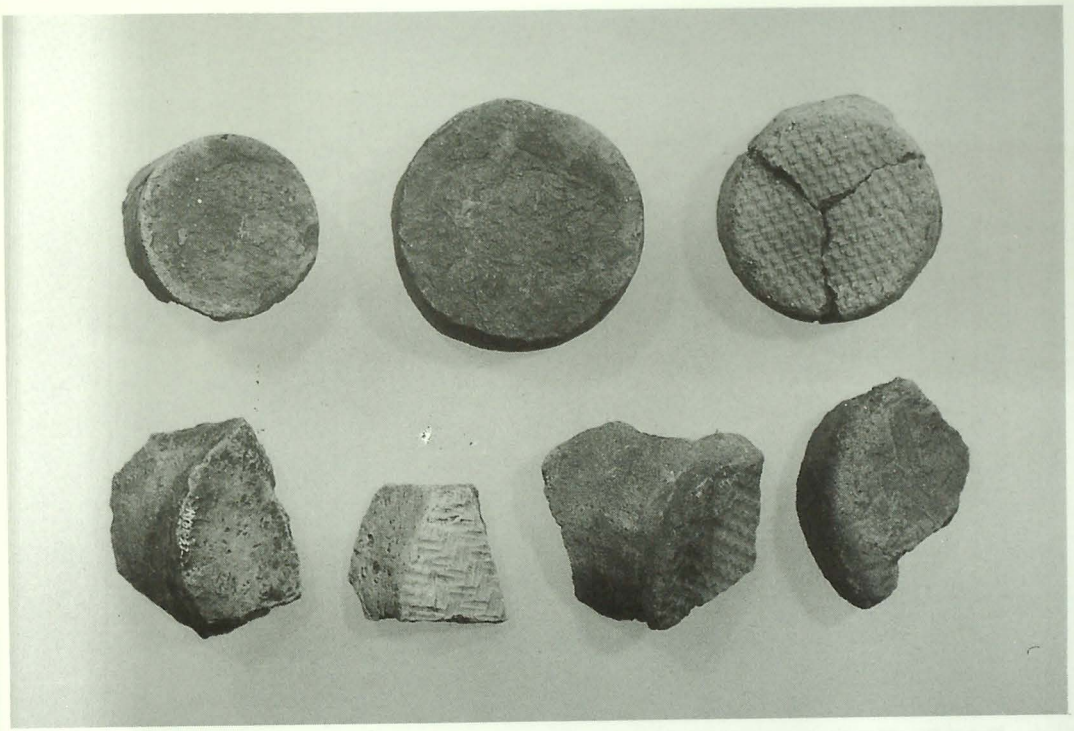


△ 縄文中期末葉の土器②

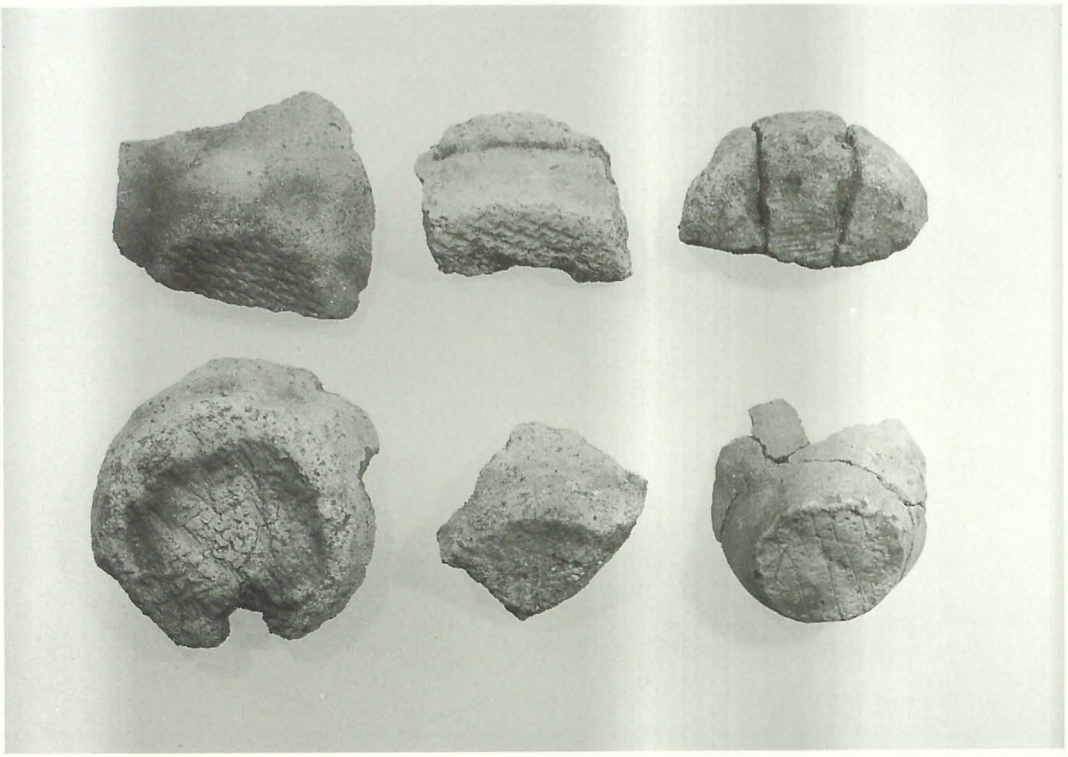


包含層出土の土器（縄文中後期）

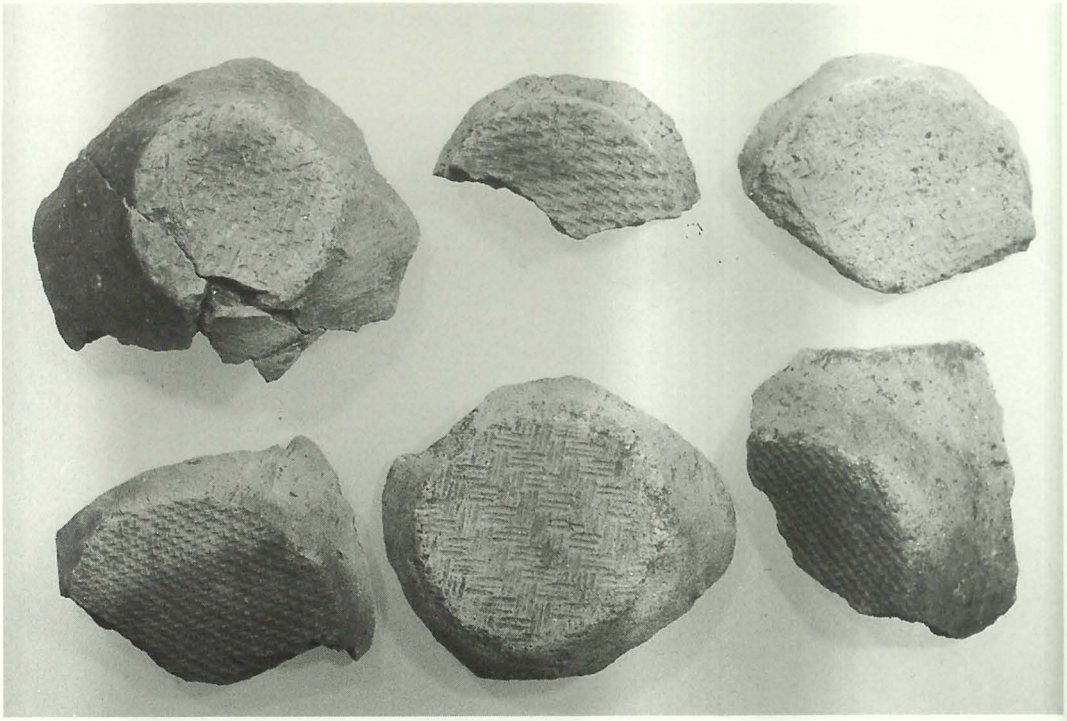
△ 縄文後期・注口土器の注口



△ 縄文後期・網代底



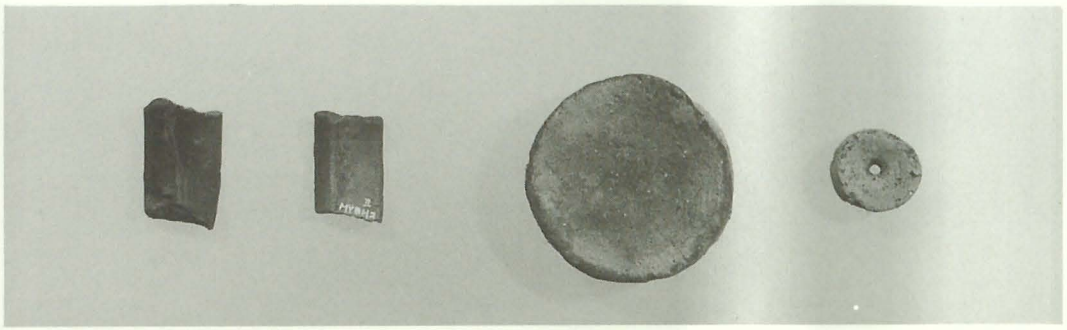
△ 縄文後期・網代底



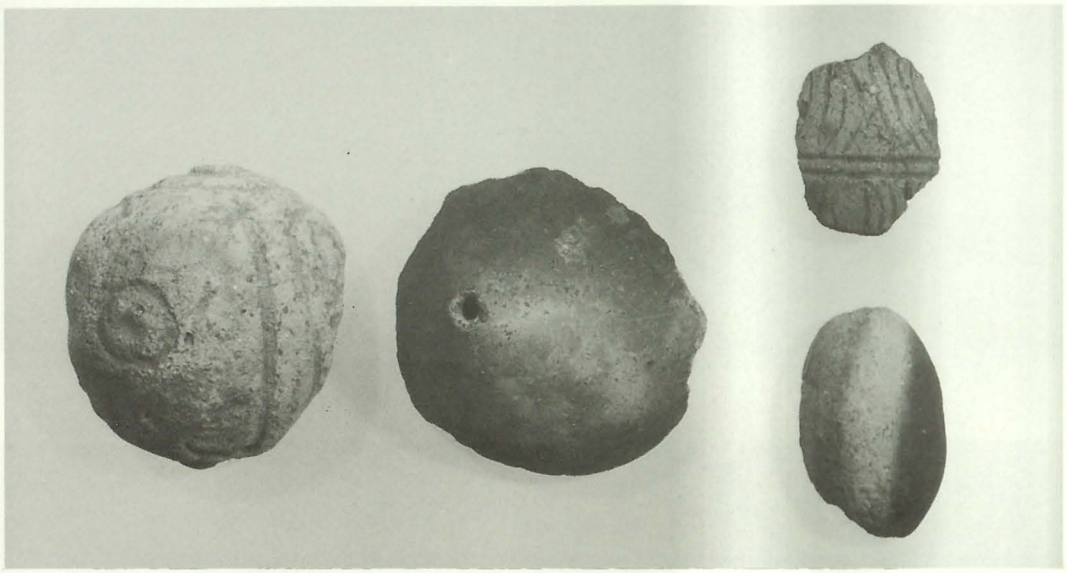
△ 縄文後期・網代底

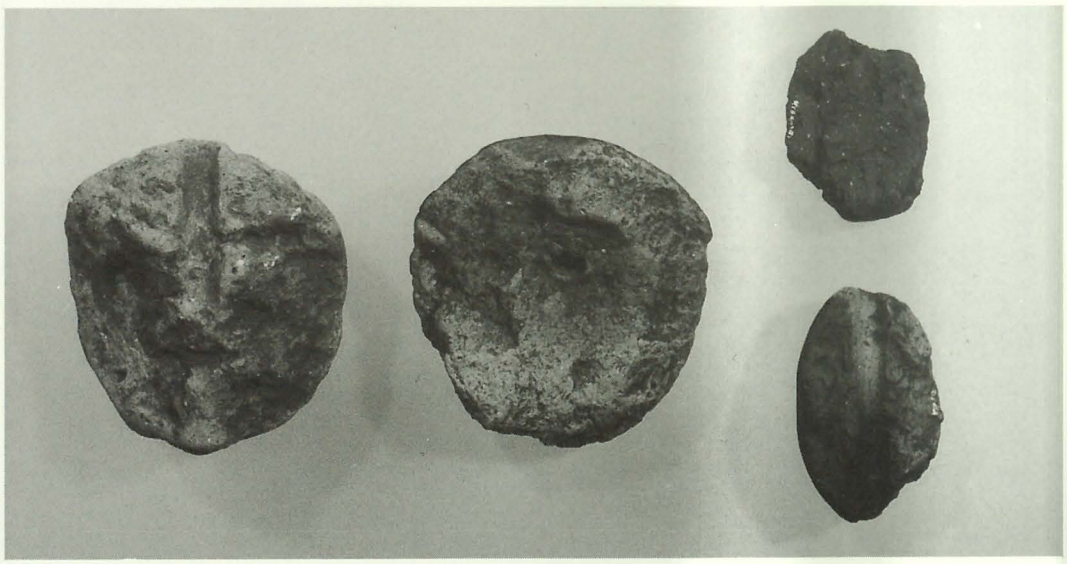
△ 縄文晩期・条痕文土器

△ 弥生後期・箱清水式土器

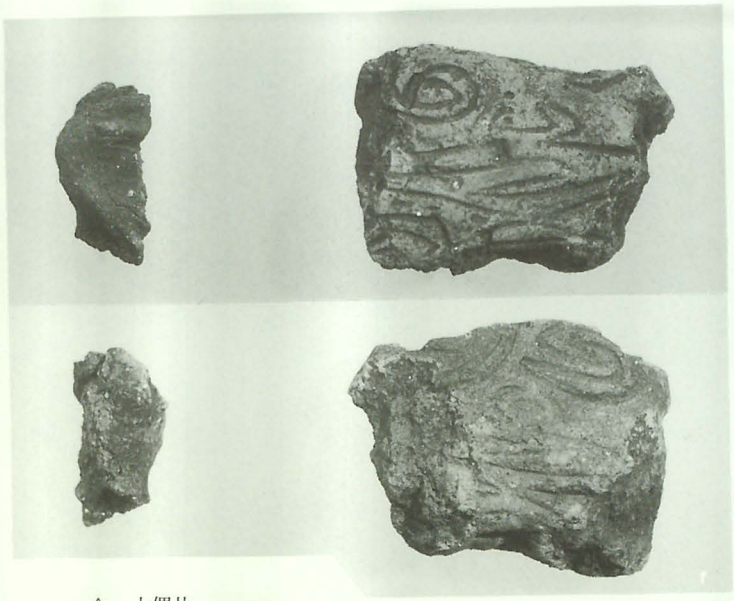


△ 耳飾り





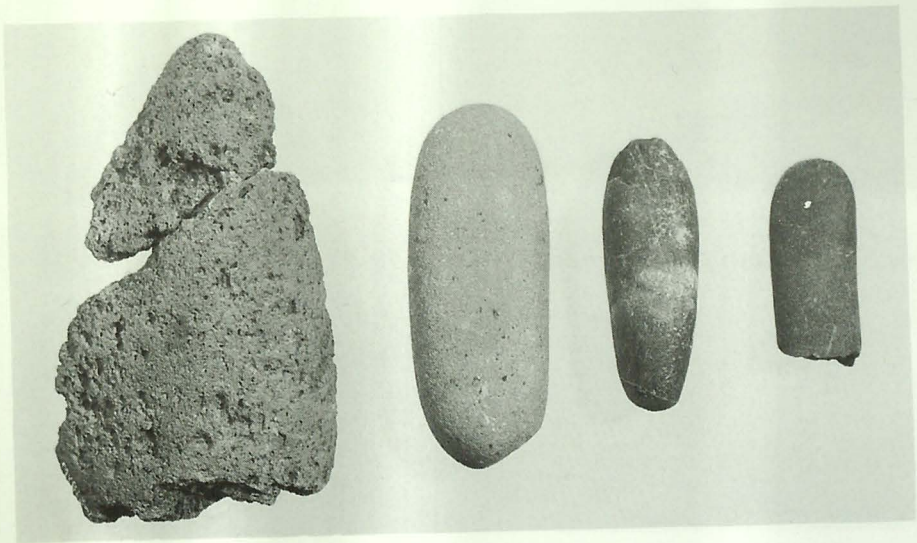
△ 球状土製品



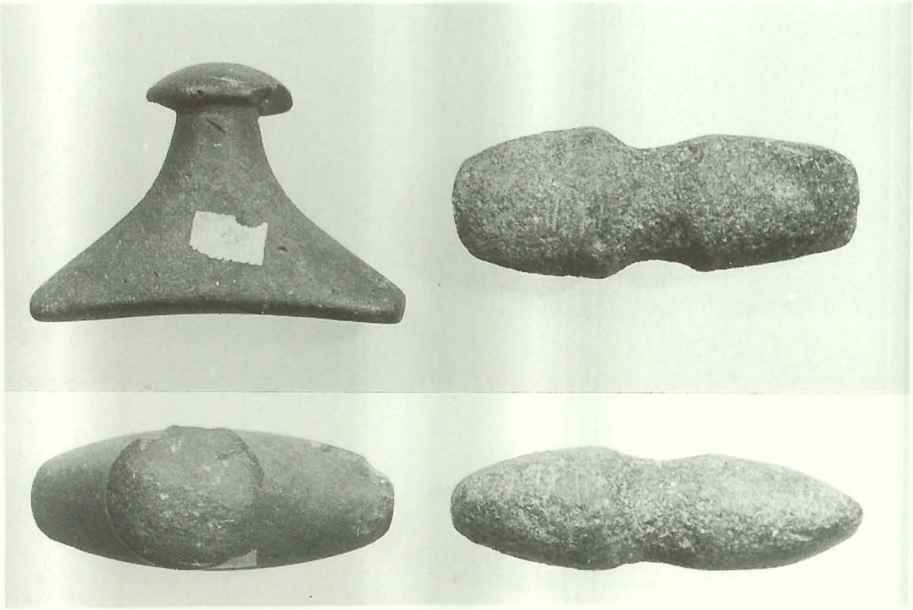
△ 土偶片

△ ミニチア土器

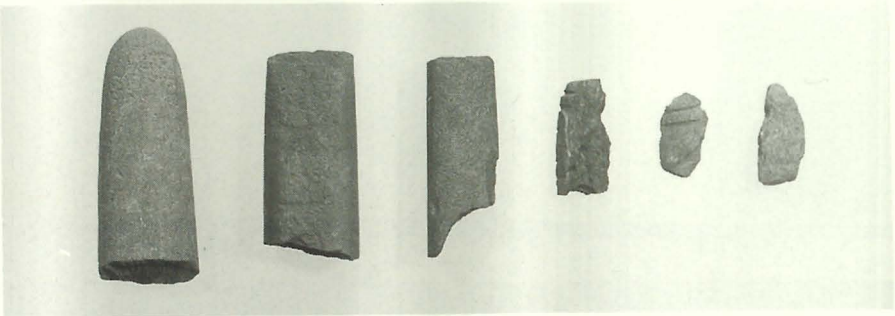
△ 土器片円版



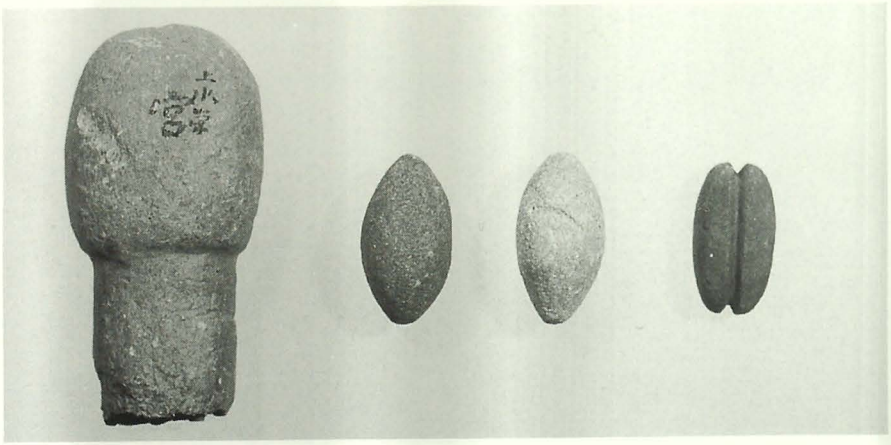
△ 敲石など



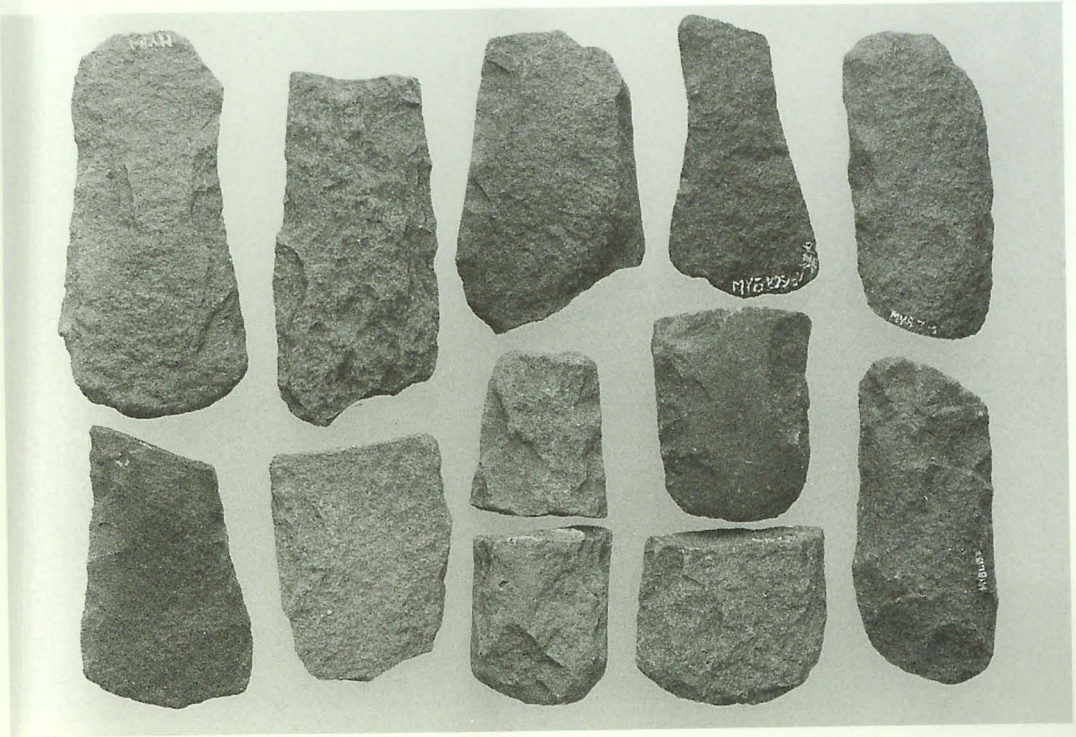
△ 石冠　　△ 独鈷石



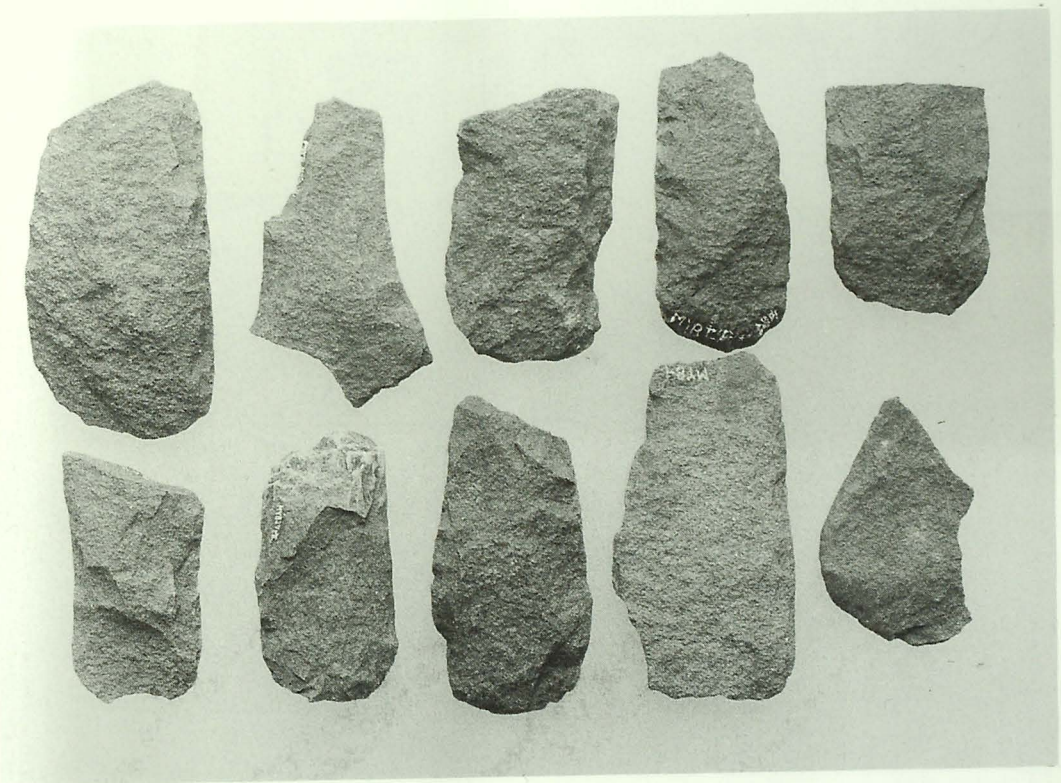
△ 石 剣



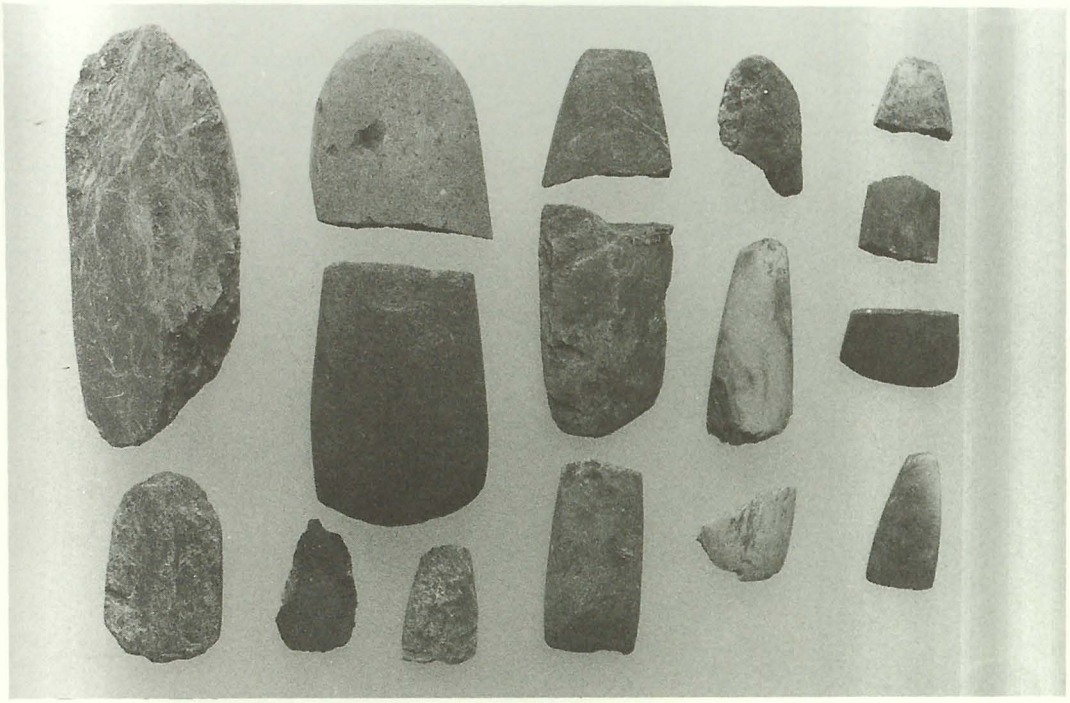
△ 石 棒　　△ 石 弾　　△ 土 錘



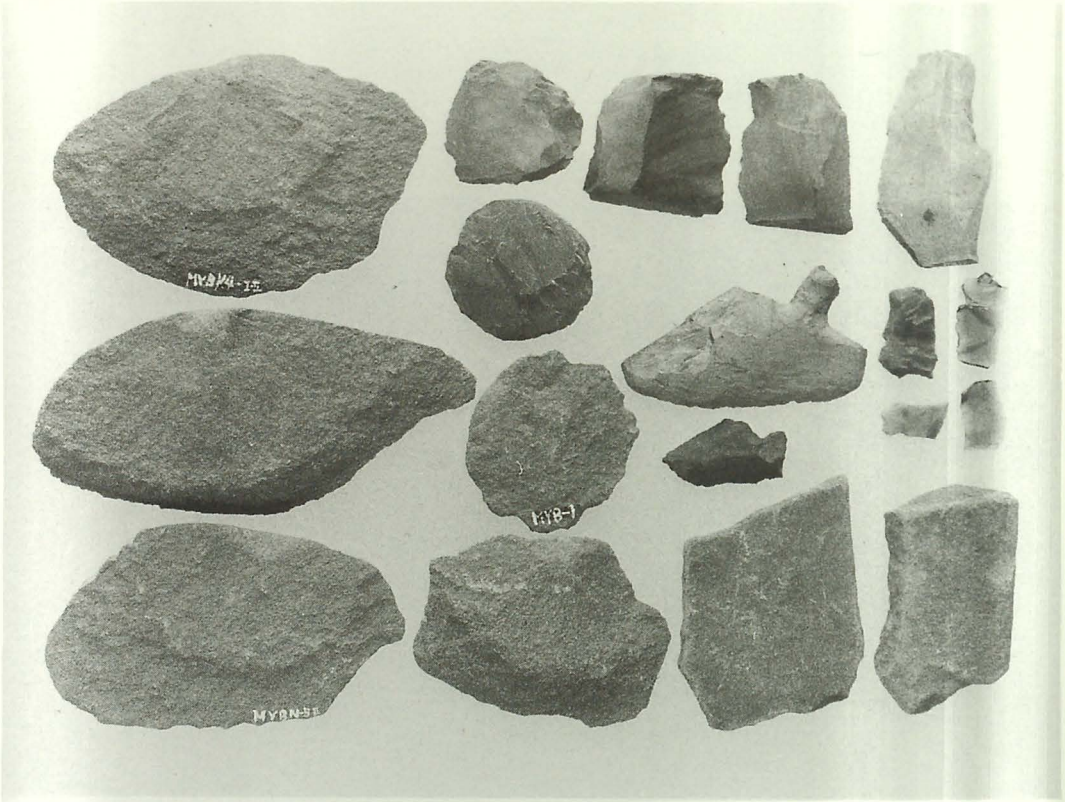
△ 打製石斧①



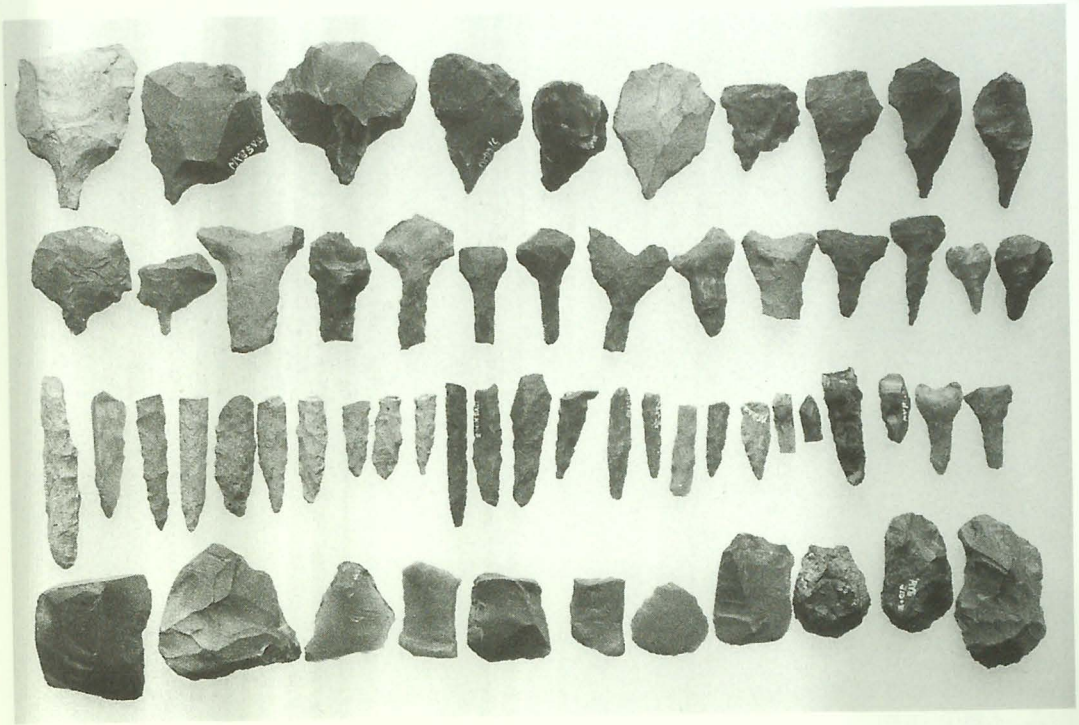
△ 打製石斧②



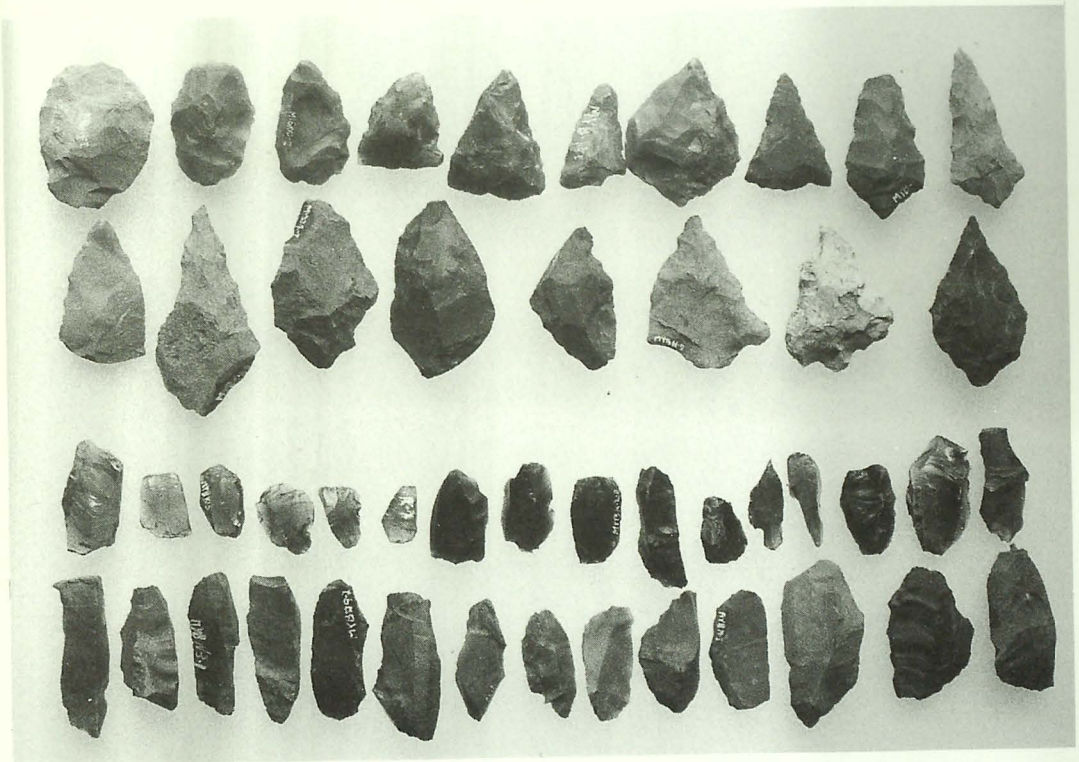
△ 磨製石斧



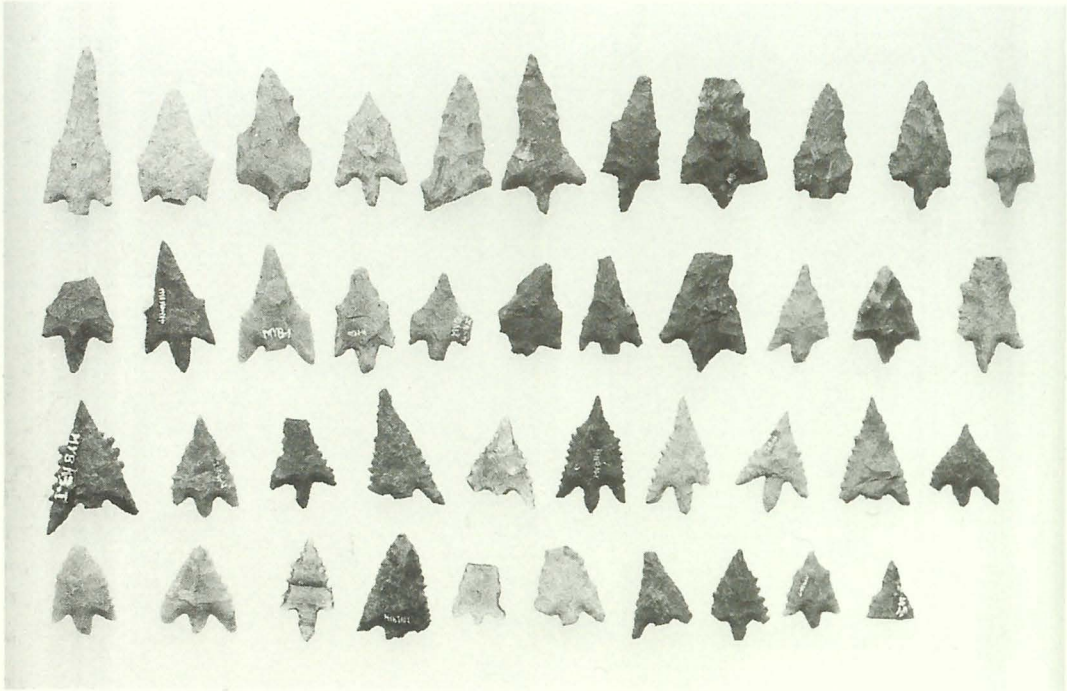
△ 横刃石器，周刃石器，石刃状剝片，石匙，砥石



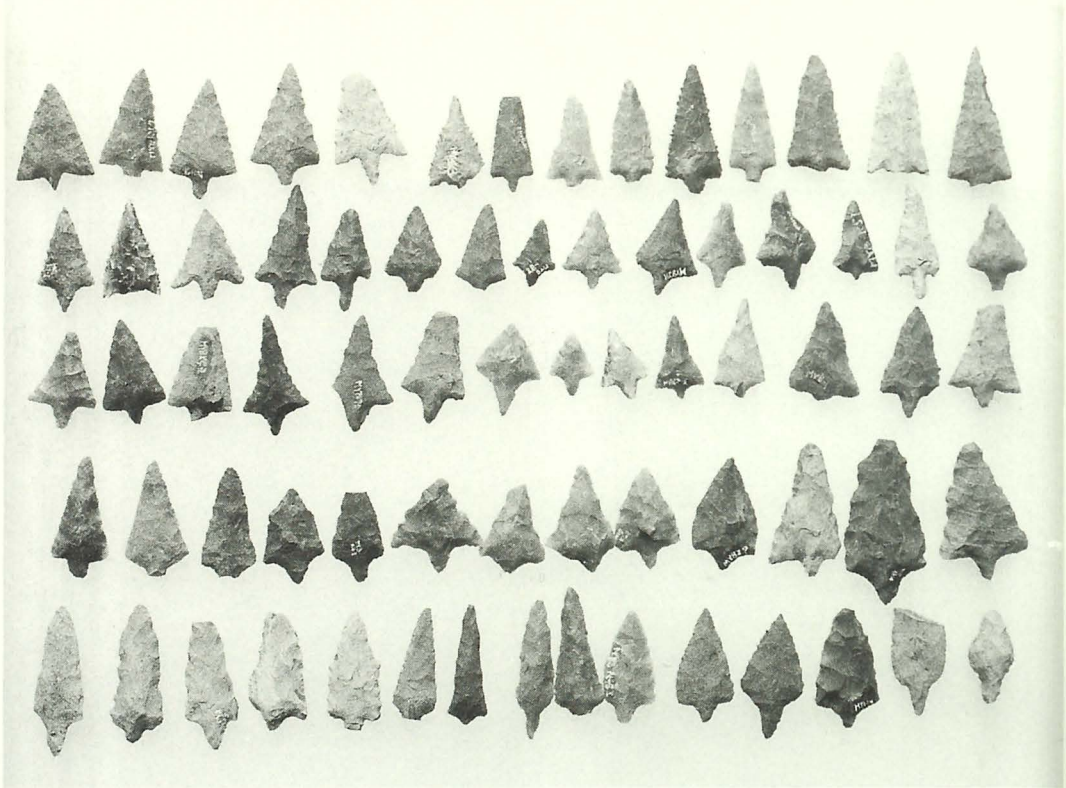
△ 石錐，掻器



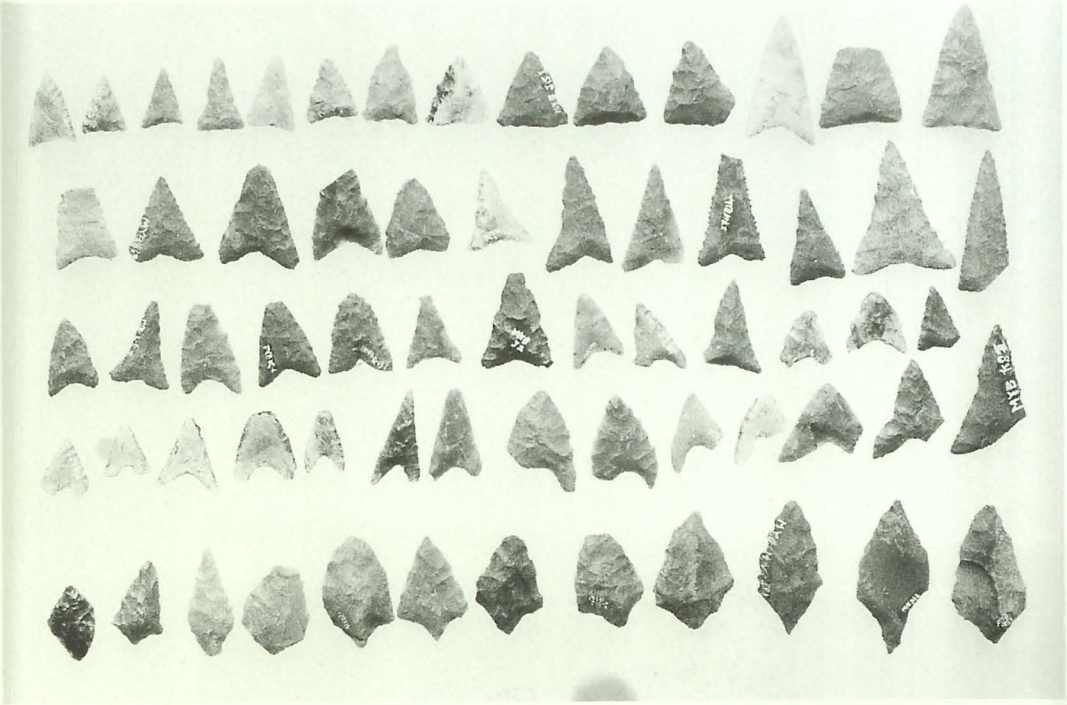
△ 両面加工石器，楔形石器



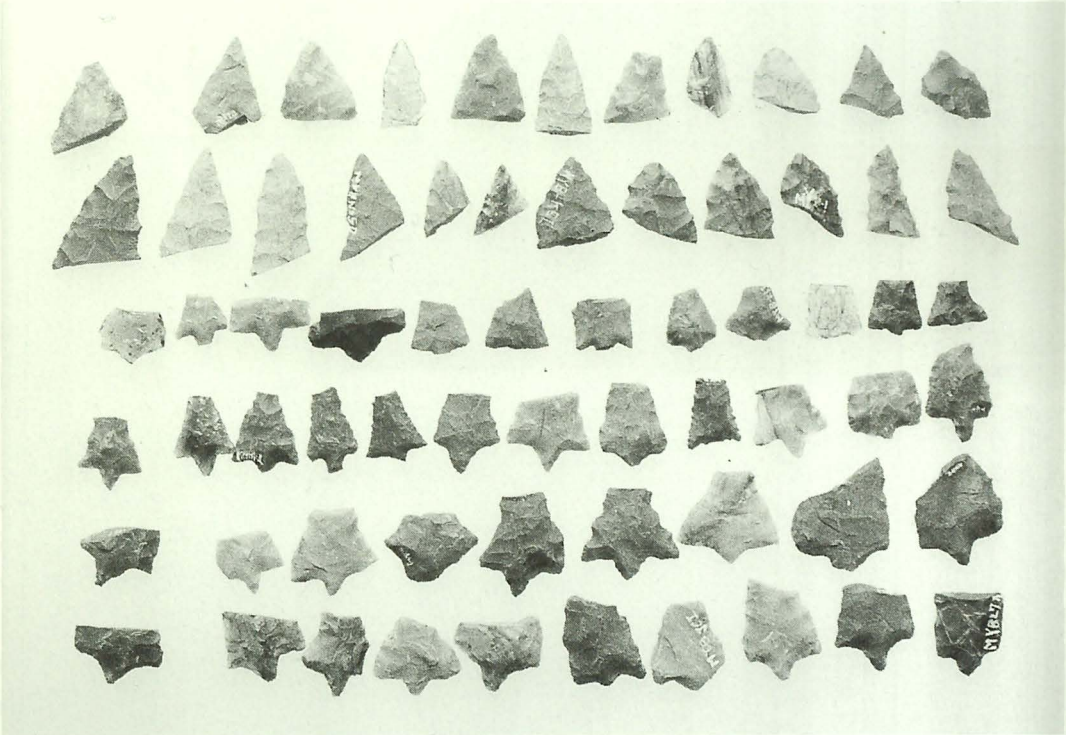
△ 石鏃①（有柄）



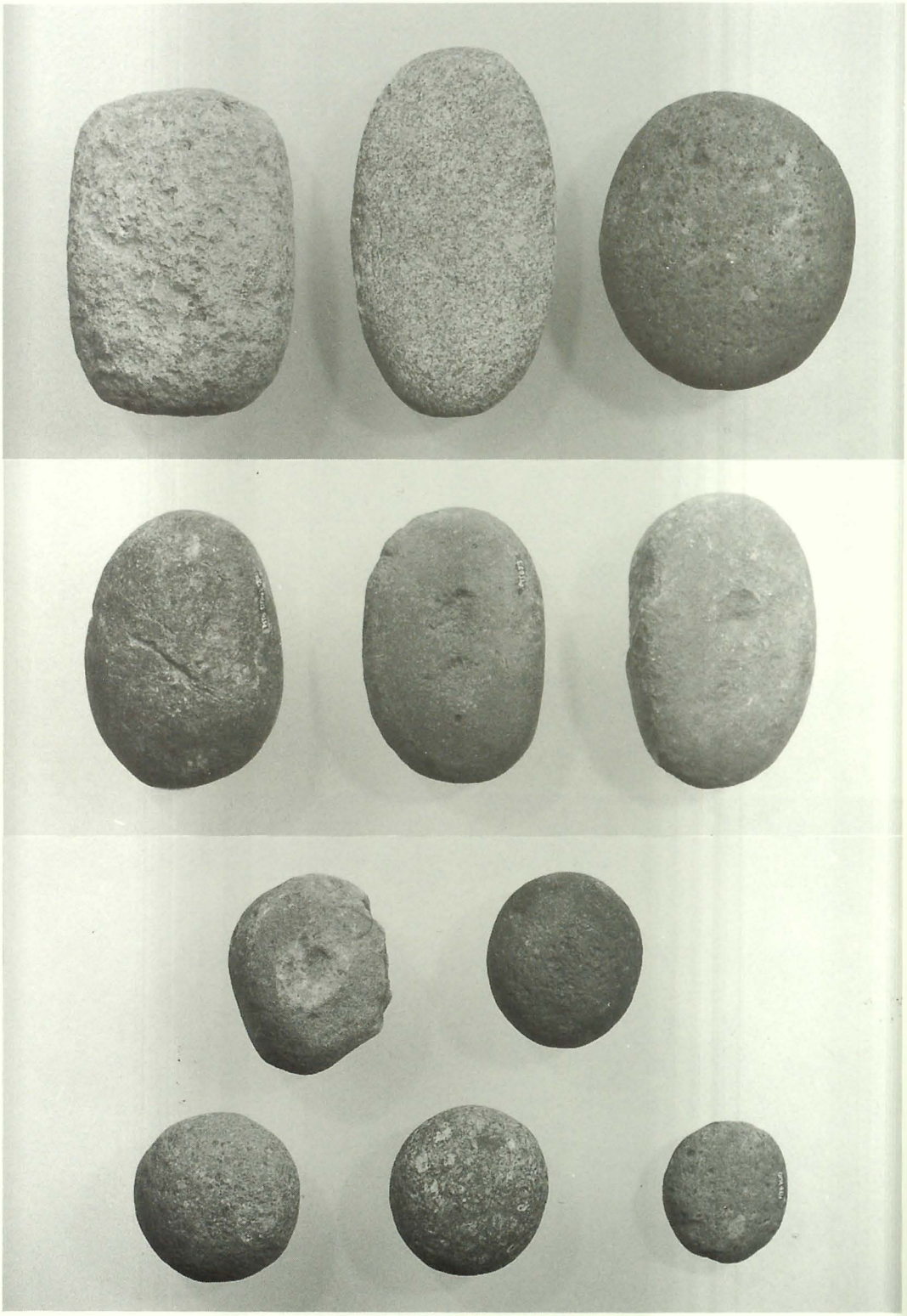
△ 石鏃②（有柄）



△ 石鏃③（無柄）



△ 石鏃④（破損品）



△ 各種磨石

△　翡翠原石など（山崎之氏採集資料）

△　宮尾正徳氏採集晩期資料

第１号墳墓址出土の第１号人骨

宮　遺跡試掘調査報告書

1992・3

中条村教育委員会

Ⅰ　調査に至る経過

この宮地籍は昭和48年に発掘調査が行なわれたが，それ以後甫場整備や住宅建設が行なわれるなど開発が進められてきた。しかしながら前回の発掘で住居址６基，２体の人骨を埋葬した石棺墓等多数の遺構が発見された。さらにいたるところ土器片や石器が見うけられる等埋蔵文化財包蔵地の指定範囲の見直しを図る必要が生じていた。そのような折柄，村有の教員住宅の建設が行われることになり，予定地内の試掘調査を行なうよう，長野県教育委員会文化課より指導があった。協議の上，長野県考古学会員，中条小学校教諭飯島明孝先生を調査主任に依頼し，県埋蔵文化財センター小林秀夫調査部長，県文化課小池幸夫指導主事を調査員として協力いただき，８月８日から３日間の日程で試掘調査を行うこととなった。

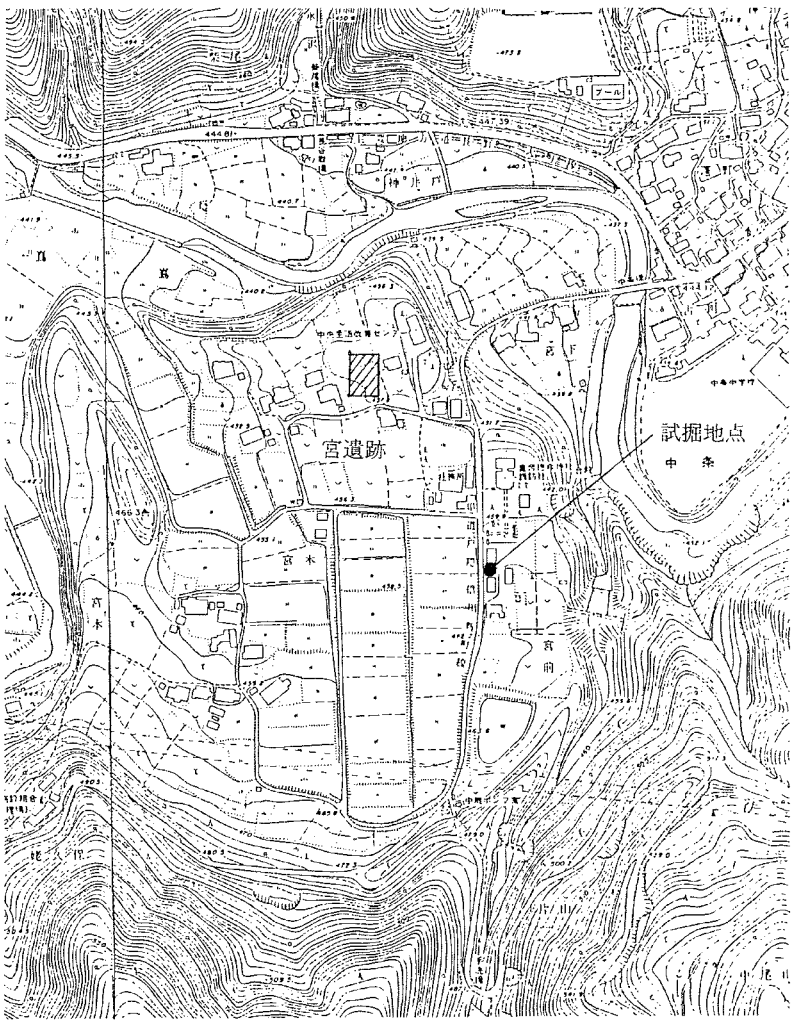
又これを機会に宮遺跡の指定範囲拡大に資することとなった。

Ⅱ　調査の概要

1	遺跡の名称	宮遺跡
2	試掘調査の位置・地番	長野県上水内郡中条村大字中条2,265-1
3	同地の地権者氏名・住所	近藤すぎ子　　長野県上水内郡中条村中条583
4	試掘調査の委託者	中条村
5	試掘調査の受託者	中条村教育委員会
6	試掘調査の実施者	中条村教育委員会
7	調査目的	教員住宅建設のための遺跡試掘調査
8	調査期間	平成３年８月８日より平成３年８月10日の３日間
9	調査面積	30m²
10	調査方法	グリッド割りによるトレンチ平面発掘法
11	調査団の構成	
	団長	石坂秀俊（中条村教育委員教育長）
	調査主任	飯島明孝（長野県考古学会員・中条小学校教諭）
	調査員	小林秀夫（県埋蔵文化財センター　調査部長）
		小池幸夫（県教委文化課埋蔵文化財係指導主事）
	調査協力者	宮尾正徳　宮尾達雄　佐藤甲子博　滝沢五郎
		関崎忠一　中沢保雄　清水袈裟男
	事務局	岩下　勝　北島久三　大内敬之　伊藤昭一
		長崎　明　久保田淳一　岩下　彰　（事務局）

Ⅲ　調査の経過

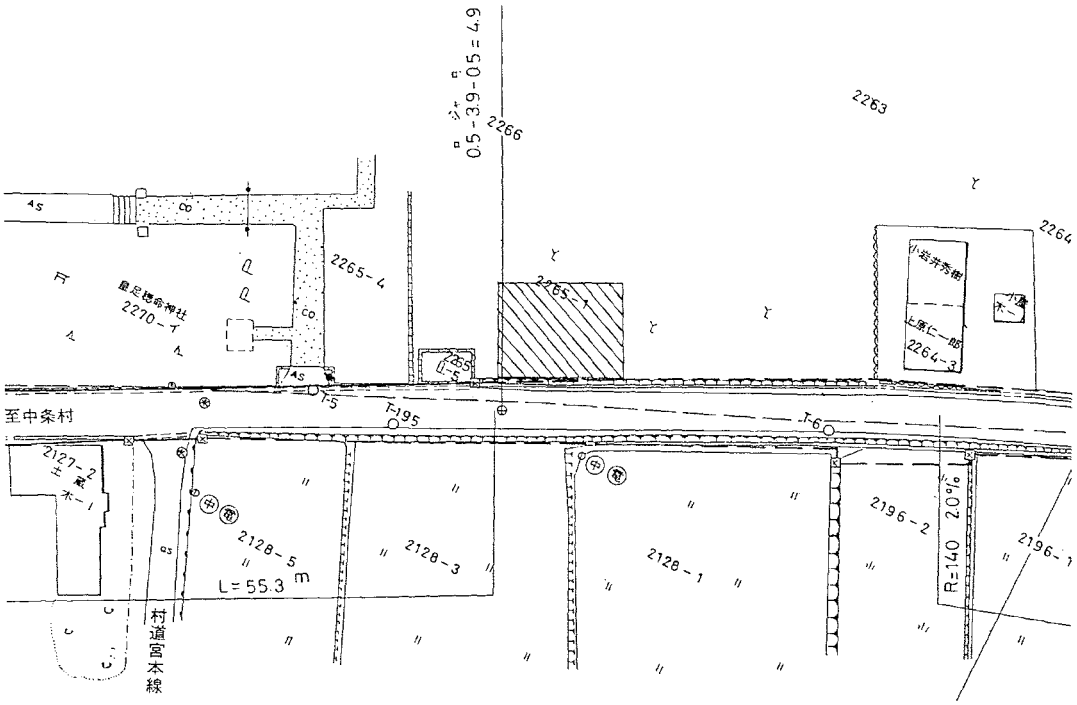
宮遺跡は皇足穂命神社境内の西南にひろがる広大な遺跡である。ここに教員住宅の建築の決定が行われ，その造成がなされることになった。同地点を試掘地点として，記録保存，本格調査のための試掘調査が行われることになった。調査団長に教育長の石坂秀俊がなり，調査主任に飯島明孝を委嘱実施された。遺跡における遺構のひろがりを主目的にして，住宅建築面積，そして直接破壊の及ぶ基礎部分をグリッド設定後，トレンチ状に調査確認することとした。東西に西側からＡ～Ｆ列、南北に北側から１～11番をもってクロスさせてグリッドとした。範囲内の都合から等分にアルファベッド幅1.5m，数字幅1.25mとした。数字列10のみ南北辺を0.65mと変則にわたったが，全域をグリッドによって配列した。その上，Ａ列（西トレンチ）Ｆ列（東トレンチ）１列（北トレンチ）11列（南トレンチ）を，基礎部分による破壊個所として調査することとしたのである。



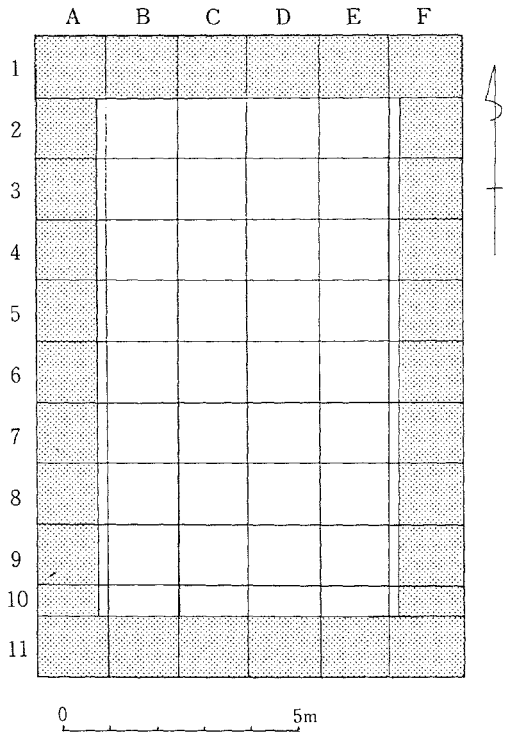
第１図　宮遺跡試掘調査地点

バックホーによる表土除去後，手掘りによる調査を行った。

第１層は盛土層で，ほ場整備事業によるものと理解され，およそ20～30cmの厚さにあることが確められた。オリジナルな自然表土面は第２層の暗褐土層面である。かつての耕作層であり10～30cmに及んでいる。遺物はこの層から出土しはじめ第３層＝黒褐色土層が遺物の包含層である。ここから主として土師器群が出土し，残念ながら一定のまとまりを示すことはなかった。Ｆ―３とＡ―１グリッドに石積みが見られ，遺構かと思われたが，近



第２図　宮遺跡試掘調査位置



第３図　試掘調査グリッド配置

世以降の暗渠であることが判明した。充填されている礫石の中から，縄文中期とされる打製石斧や，染付けの磁器皿片が検出された。上部は明確にならないが，第三層を大きく掘り込み，第二層上部で構築されているものとすることができる。

出土遺物はすべて破片で，土師器も大破片はすくなく小破片以下のものが多かった。又須恵器も同様で完形のものは一点も検出できず，東西南北にめぐらせたトレンチも遺物のの集中区はなく，散布拡散状であった。

Ｆ－５，Ｅ－11に地山の凹凸が観察され，人為的な切り盛りによる遺構かと思わせるものもあったが，積極的に遺構の一部と認めることはできなかった。すべて記録にとどめて重機による埋土の上，遺物に伴う遺構を確認できず終了することとした。　（飯島明孝）

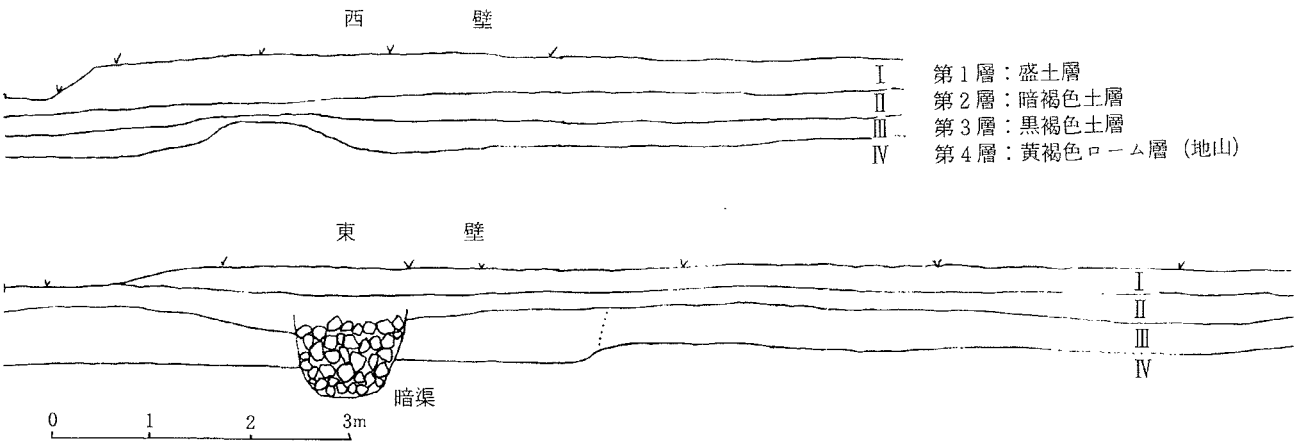
Ⅳ　遺構と遺物

1．遺構及びセクションについて

宮遺跡の所在する土尻川曲流部の台地の基本的な層序は，上部から暗褐色土層（第２層），黒褐色土層（第３層），黄褐色ローム層（第４層＝地山）である。第２層の上に所によっては，甫場整備の際の盛土層（第１層）がのっていて，これは自然堆積層ではない。したがって基本的には３層から成っていて，それぞれはかなり粘土化が進んでいる。第４層の黄褐色ローム層は，単なる風成の火山灰質ローム層でなく，周辺山体の基本的基盤である第三紀末の小川層の砂岩，礫岩の風化土を含んでいる。むしろその方が主体であると言える。この宮遺跡のある宮本地籍全体は，有史以前の地辷り崩落地形であることは勿論であるが，かなり古い時期に形成されたものであり，山間地にあっては稀れな平地となっている。

試掘による遺構は認められなかった。しかし，Ｆ―３グリッドとＡ―１グリッドに暗渠と思われる石積みが見られた。同グリッドの所見によると共に幅１ｍ，深さ１ｍ程のものであって，こぶし大から人頭大の石をわずかに混入したものであって，ほぼ直線状であった。第２層中に検出されたので，その所属時期は近世か近代のものである。又その礫石中に第５図１の打製石斧が１点検出されたが，礫石の一部として混入されたものと見られる。他に遺物は同礫石中からは検出されなかった。その他の遺構は検出されなかったが，東側のＦ外の５と，西側のＥの11に地山の段差が認められるのは注意せねばならない。ここに竪穴状の遺構が認められるかもしれない。

遺物の出土状況を見れば，ほぼ古墳時代末から平安時代初頭に限定されて出土し，ほぼ全域から検出されているので，特定はできなくとも同時期の遺構が存在するか，すくなくとも周辺に存在することを示唆しているものと認識できる。　（飯島明孝）



第４図　試掘坑セクション

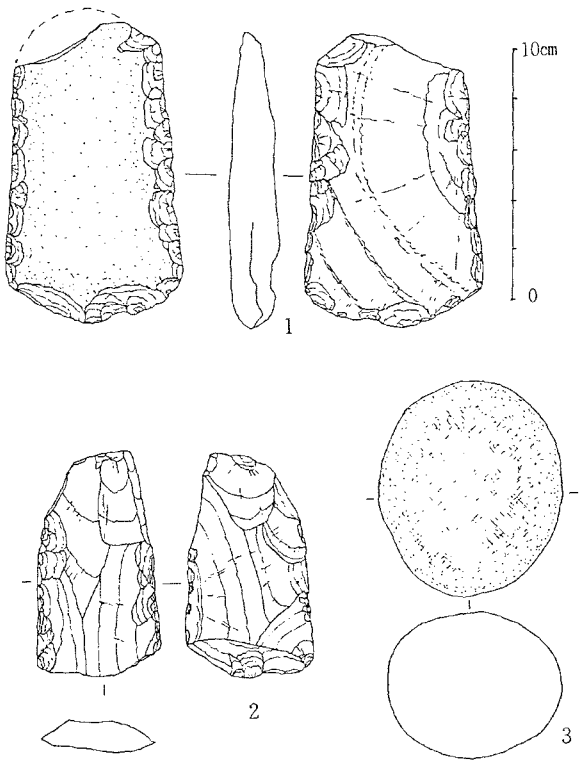
２．遺　　物

(1)　縄文時代の遺物（第５図１～３）

縄文時代の遺物と認められるものは３点のみである。昭和48年（1973）調査地点が縄文後晩期の遺構・遺物を集中したところと対象的である。おそらく，これらの遺物は隣接するそれらの遺跡からの混入か，あるいは土掘り用具と見られる打製石斧２点と磨石１点からすると，ある作業的な生産域かとも見られる。

１は安山岩の転石を剝いだ転石面を残した典型的な犀川中流域に偏在する打製石斧である。縄文中期から後晩期に普遍的に見ることができる。若干の使用磨耗痕があるけれど，比較的にシャープである。２は真岩製の打製石斧で，基部の半欠品である。千曲川流域に多い石材である。３は玢岩製の磨石で，過度の使用による磨耗が全面にみられる。この石材は，第三紀の堆積岩層の堆積後，貫入して来た火成岩であって方々に見られる。土尻川の河床にも転石として見られる硬度の高い石である。石皿状の石器を下石（したいし）とし，磨石類を上石（うわいし）とし使用したものであろう。下石と思われる石皿状の石器，あるいは平石などは検出されていない。

縄文時代の遺物としては以上の３点のみにとどまったが，宮遺跡はすでにふれたように，縄文後晩期の良好な遺跡であることは自明であり，すでに夥しい資料が得られていることが知られている。



第５図　宮遺跡試掘地点出土の資料①

縄文時代中期以降の遺跡構成が，単に単一の竪穴住居址のみというものではなく、母村集落から派生する出作り小屋的遺跡，焼畑的耕作地的遺跡などと多岐にわたって同時に存在使用されていることが判明して来ている。

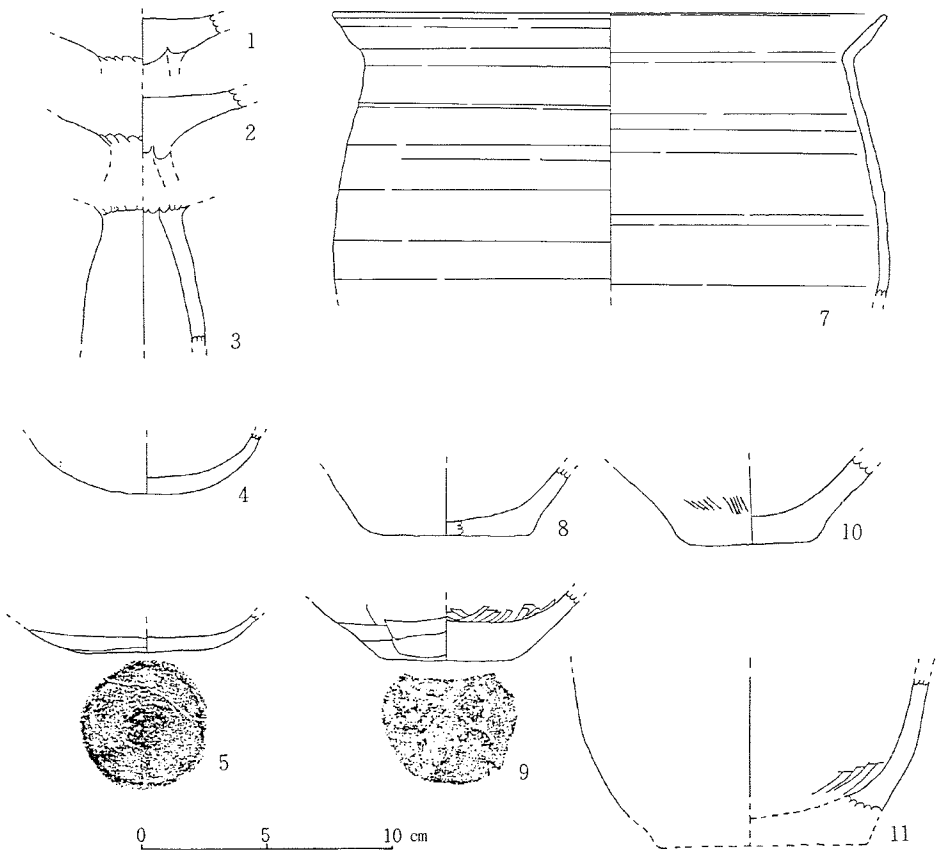
中条村の村内にあっても，集落的遺跡に対して，小遺跡あるいは打製石斧などしか検出できない遺跡が点在していることを知ることができる。本地点も縄文中・後・晩期と生活が営まれた地点を隣接しながら，生産用具のみしか出土しないという性格に重ねて注意を向けておきたい。こうした小地域における遺跡構造上の課題を持つものとして重要であるとすることができる。

(2) 古墳時代末期の遺物（第６図１～４，９，10）

古墳時代末の遺物として，第６図１～４と９，10を摘出する。他に甕片，内黒丸底坏片なども見られるが細片で図示できるものはなかった。

１～３は土師器の高坏で，坏部底，脚部の上部位である。１，２は坏部の内側は共に黒色処理されており，偏平である。脚部との接合の為の出臍状突起が見られる。坏部はやがて段をなして立上がりまとまるがそれほど大ぶりなものではない。脚部も下部を欠いているが，やがてラッパ状に開口してまとまり，ほぼ器形を想定することが可能であるが，土師器の高坏としては終末に位置するものであろう。４は丸底の内黒処理を行った坏である。類品は数点あるが細片で図示できなかった。10は甕の底部である。一部にハケ目が残り，器形は球形胴に近い長胴とみられる。９も同様で，器体外面にケズリ痕が残り底部にバツ印の陰刻がある球形胴に近い長胴形であろう。

７世紀末に属する一群であろうかと思われるが，甕，高坏，坏と器種はかなりそろっていると見てよい。すぐ近くの「宮の古墳」の時間的位置と整合性をもつ生活址にかかわる資料群として注意する必要があろうかと思われる。他地点では更に古い古墳時代資料もあり注目される。

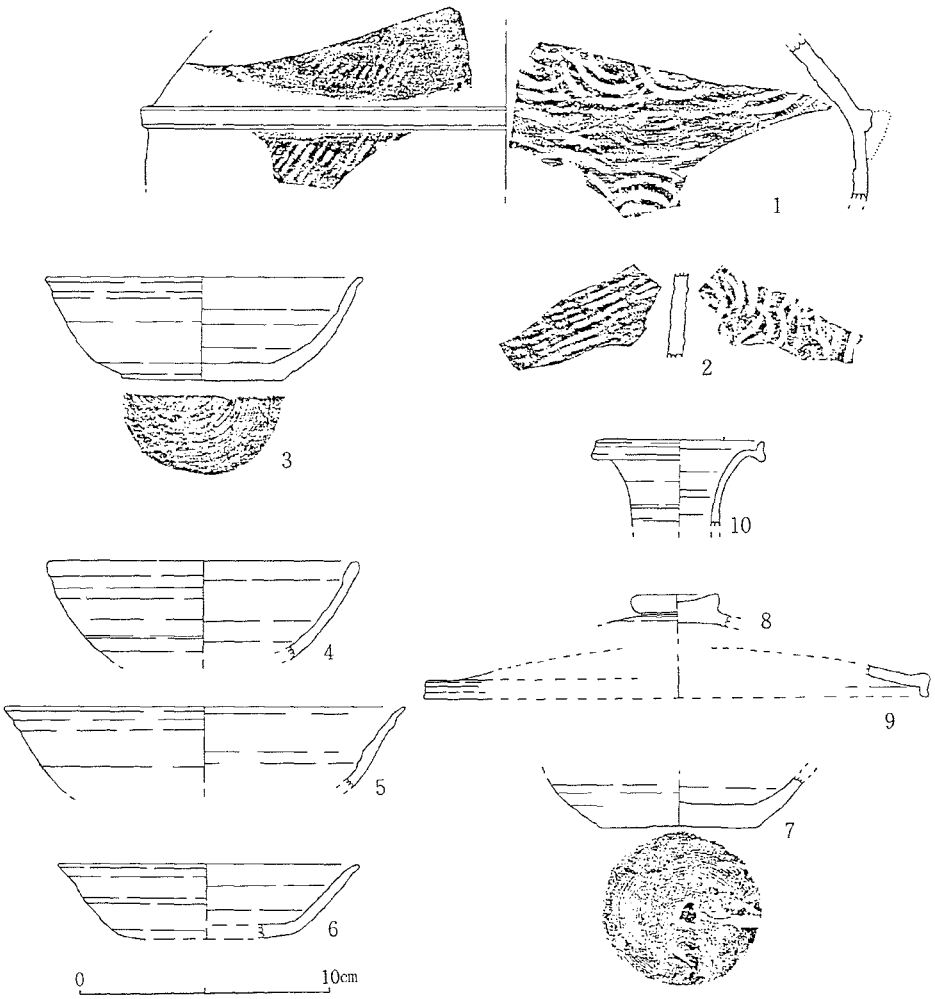


第６図　宮遺跡試掘地点出土の資料②

(3)　奈良時代末期・平安時代初期の遺物（第６図５，７，８，11，第７図）

奈良末期・平安時代初期の資料群を抽出される。第６図７は水だきの甕上半，８，11はその底部である。７，８ともにロクロ成形で，11は若干様子を異にしている。７，８は北信濃から越後の一部に偏在するもののようで，充分にはまだ明らかでない資料である。５は坏の底部で内黒でヘラオコシによる切りはなちの行われた資料である。以上が土師器群である。

第７図は須恵器を集成した。１は四耳壺，３～７は坏，８，９が坏蓋，10は長頸瓶の上部破片である。１は凸帯を肩にめぐらせたタタキ目と内部に同心円文を持つものである。２も同様破片と考えられる。坏群の底部片は図示したもののほか多数あり，糸切痕とヘラオコシ痕のもは４対１程である。３は糸切痕，７はヘラオコシ痕のものである。８，９の坏蓋は多く高台付坏と組成するが，高台付坏も破片の中に数例あったが図示できるものはなかった。長頸瓶の一点は注目される。ともに奈良末から平安初期の資料群であるが，若干下るものもある。　（飯島明孝）



第７図　宮遺跡試掘地点出土の資料③

V まとめ

平成３年（1991）８月８日から10日まで３日間行った宮遺跡の教員住宅建設に伴う試掘調査は，遺物群の出土は見られたが遺構の検出には至らなかった。だが遺構の存在かと推察されるグリッドもあって一応破壊範囲内の慎重な調査を行った。結果的には出土遺物の性格にもかかわらず積極的に遺構として取り上げることは不可能であった。その中で一本暗渠かと思われる遺構を検出したが，江戸期以降の染付磁器が混入されていることが判明したため，それ以上の追究を中止した。近世以降における水田等の開拓あるいは造成のための人為的遺構であることには間違いないところであるが，記録及び写真にとどめて終えた。したがって範囲内のそれ以外の遺構が存在しないものとし試掘調査を完了することとした。

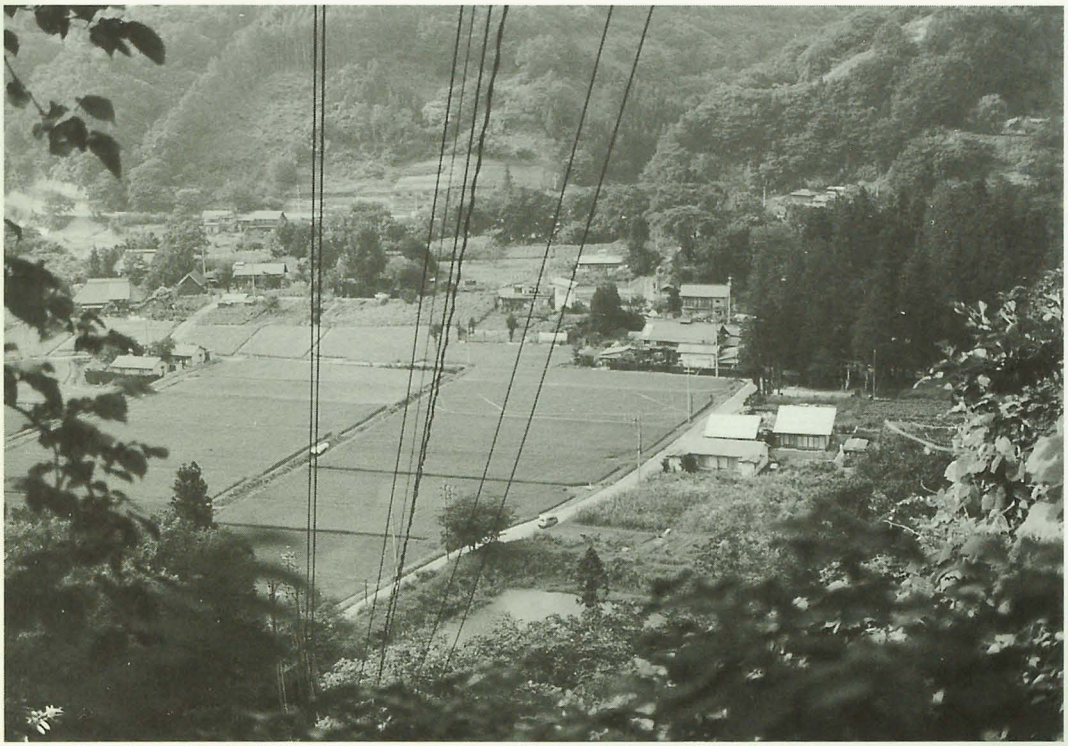
土尻川曲流部の河岸段丘状台地は，基本的には地辷り地形を原形としていたと思われるが，その皇足穂命神社を一角とする宮本地籍は，昭和48年（1973）発掘調査地点である宮遺跡が縄文中期から後晩期の良好な遺跡であるのに対して，この試掘地点は，縄文時代の資料は散見する程度である。中心をなすものは若干の終末期の古墳時代の資料を主としては奈良から平安時代初頭の資料群である。

宮遺跡の東丘陵にある小古墳（？）は，最終末期の円墳かと見られるが，併行関係にある資料とすることができ注目に価するものである。又主として平安初頭かと見られる資料群は，土師器も須恵器も量的に多く，これもこの地域の在り方として注意されるところである。

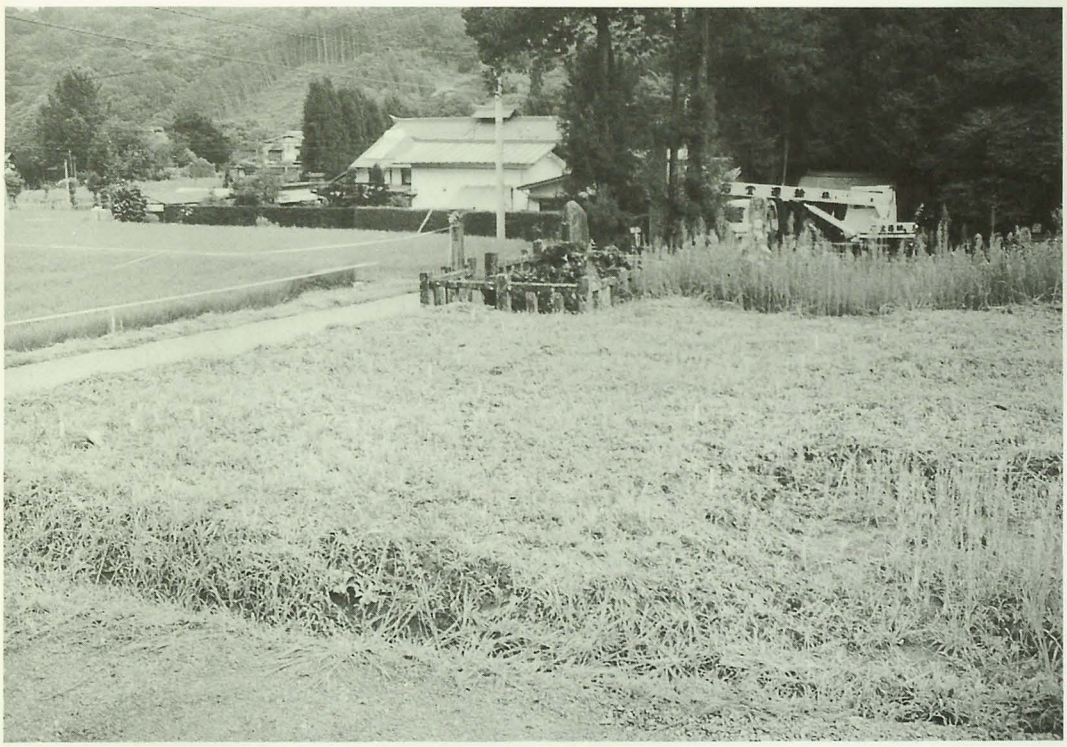
善光寺平周縁部では須恵器の生産が一つの最盛期に達していた時である。それは一つには周辺集落（郷を単位とする地域）の需要のバランスの中にあったのであろうが，その直接の動機は，豪族の氏寺かと思われる寺院の建立と瓦の生産とにあったと考えられるむきもある。須恵器の生産と瓦の生産は無縁ではあり得ない。しかしその内には律令体制の崩壊と地方豪族の台頭があり，律令的「郷」の習合や消滅が内在していると言える。中条村のこの地域が「延喜式」や「倭名鈔」の神社や郷のどの部分に属していたかは明瞭にはならない。しかし、「水内郡」内とすれば，推定できる神社域や郷域は集約されてくる。「小川神社」であり，「芋井郷」であろうか。芋井郷は長野西部及び山地一帯を含んでいて50戸を構成できたものと思われ，小川神社をもって広域をカバーする機能を持っていたかに思える。

その範囲内にこの宮遺跡も存在していたと見ることができる。一集落の規模であったのであろうか。遺跡そのものの範囲はまだかなり広く，昭和48年調査地点南側の隣接地点でも土師器や須恵器の出土が知られているので，皇足穂命神社周辺にまで及ぶ遺跡範囲を想定してよいものと理解できる。平安時代初期における遺跡として，犀川の支流，土尻川流域の歴史時代の幕開けを知るに良好な遺跡である。今後の開発工事等の遺跡破壊に留意されねばならない貴重な遺跡地帯である。

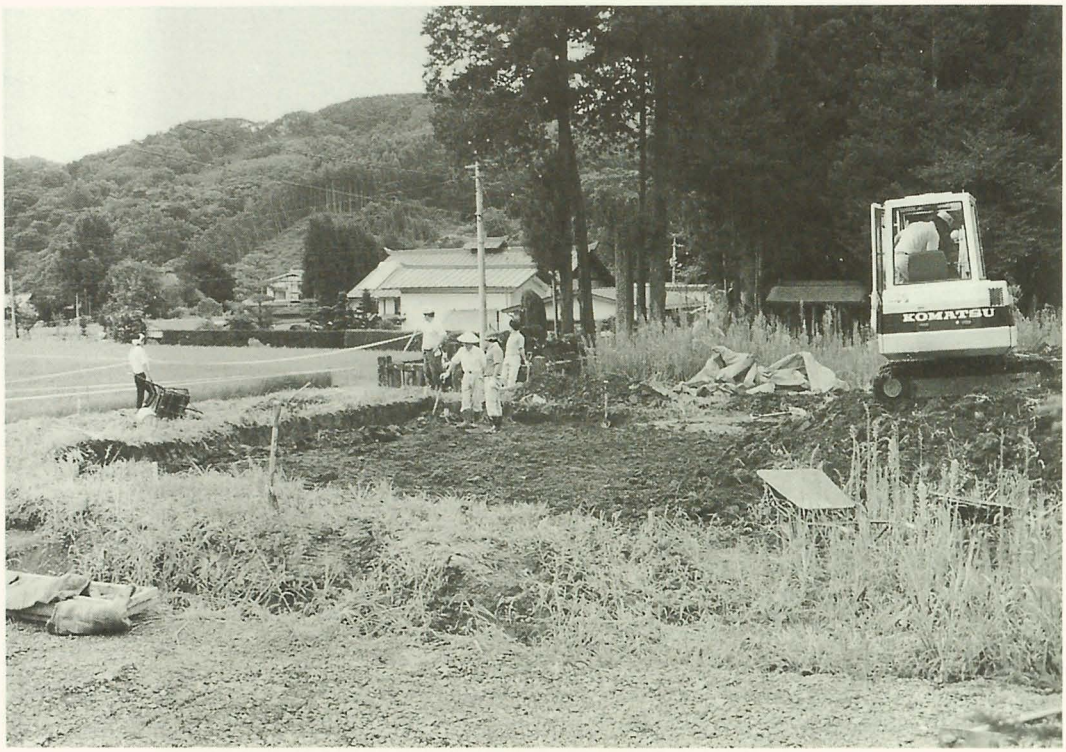
（小林秀夫）



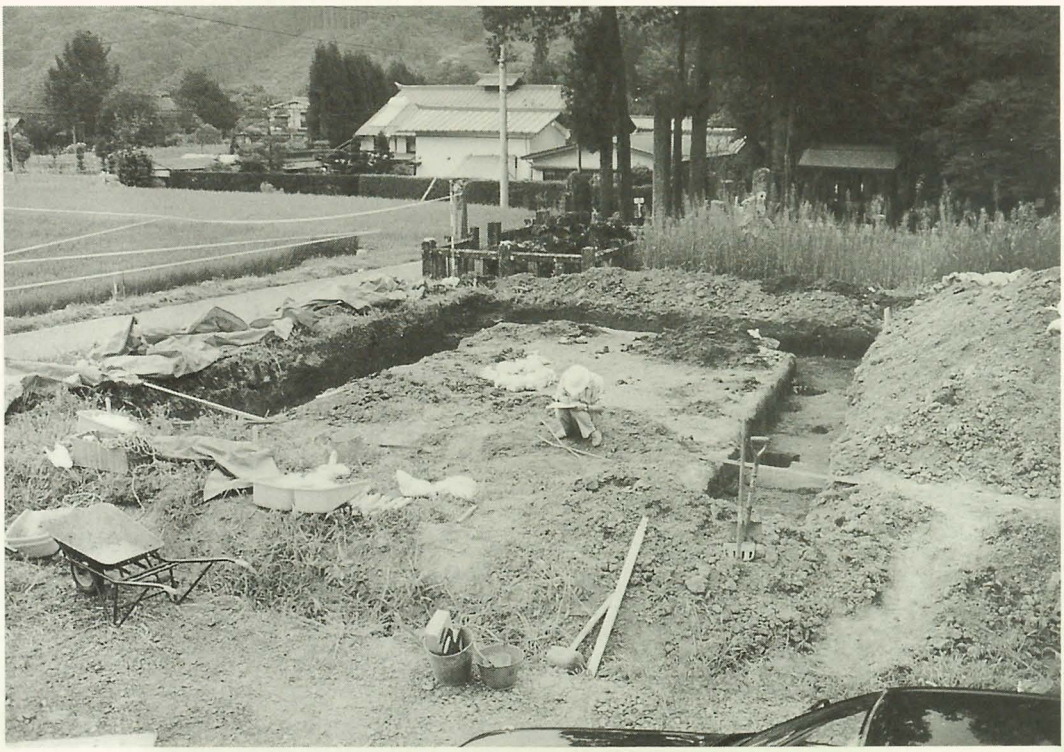
△　試掘地点全景（右中央，白い屋根の北）



△　試掘地点の近影



△　試掘地点表土はぎ

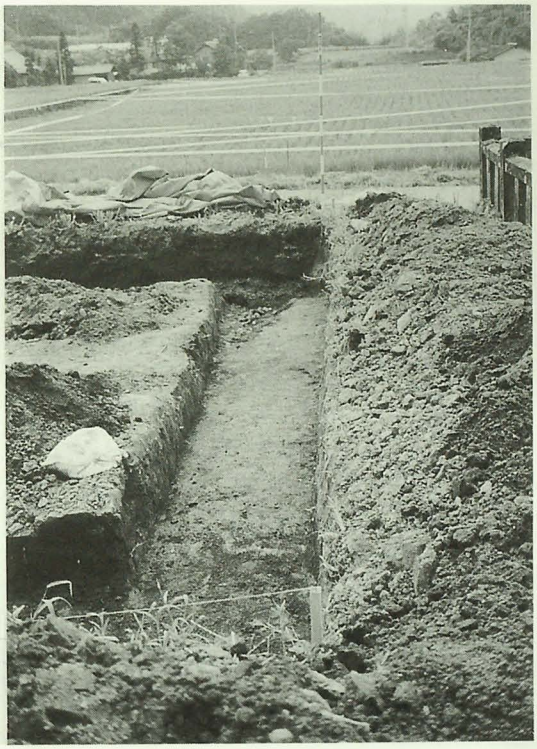


△　試掘完了時全景

△　F列調査状況

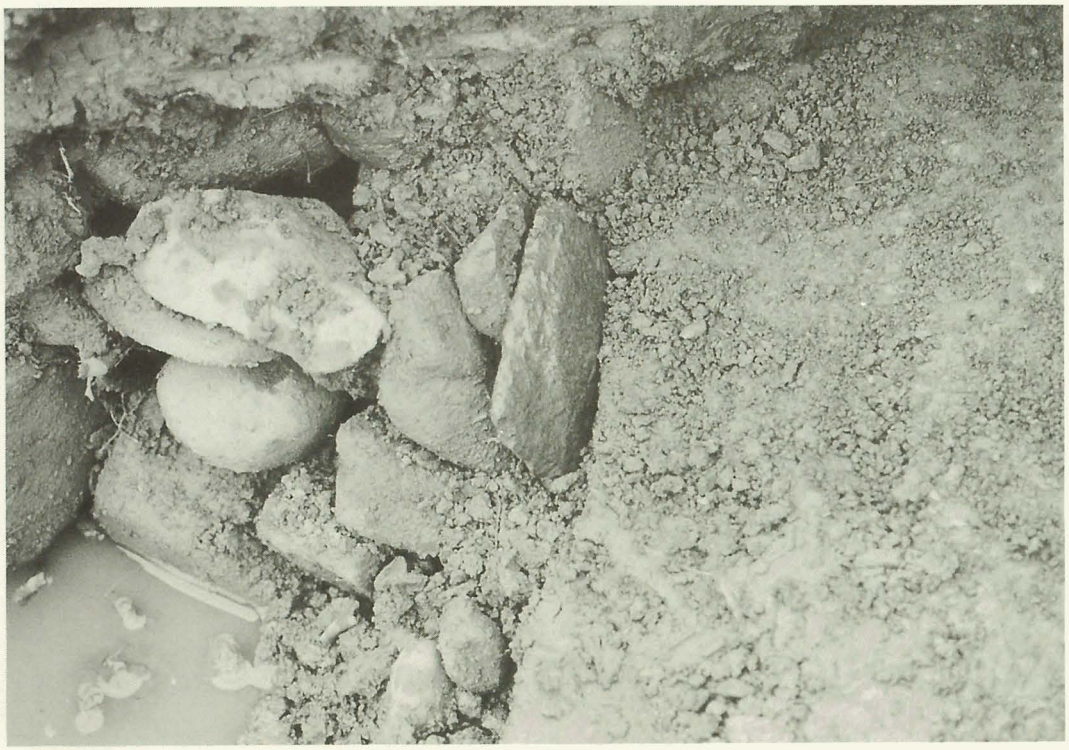
△　A列調査状況

△　11列調査状況



△　1列調査状況

図版 四



△　暗渠中より打製石斧の出土状況

△　須恵器坏出土状況

あとがき

1973年（S．48）夏，若い情熱を宮遺跡に燃やしたことを忘れることはできない。そこに至るには曲折があったけれど，課題性の重さに立ち向おうとする気迫と喜びに充実していた。

金井喜久一郎氏をはじめとして栗岩英治，米山一政，鈴木　誠，松本史，和田亀千代氏など実に多くの研究者がかかわって来た。そのうちにはすでに故人になられてしまった方もおられ，遺跡にとっては，実に記憶のかなたに輝いている。それも地権者の宮尾正徳氏有ってのものである。氏が生徒の頃，中条小学校にあった金井喜久一郎先生との出会いであったと述懐している。それから熱心な採集がはじまっているのである。その土台の上に「上水内郡誌」の調査，宮遺跡の調査はのっていて，先学の努力に頭の下がる思いである。山崎　元氏とは中条中学校長としてより，それ以前の坂城小教頭，大岡中学校長時代からの「更埴郡誌」以来のおつき合いであった。その中から多くのものが生まれ出てきた。先学の皆さんもさることながら，近くの宮尾正徳氏，山崎　元氏など多くの方々があったればこそこの調査になったものと思う。

調査から20年が過ぎようとしている。20年を経て本報告を出すにはあまりにも気恥しい思いにさいなまされる。しかしこれも諸事情が重なり合っての結果であったとしみじみと思いめぐらすのである。それだけに想いは深い。本報告が上梓でき村民の皆様に，お詫びと喜びを申し上げられることを嬉しく思うものである。本当に心から深々と頭をさげたい。

関係の皆様，ありがとうございました。御礼申し上げます。（森嶋稔）

宮 遺跡

——中部高地の縄文晩期抜歯人骨・攻玉工房遺跡の研究——

発行日　1993年３月30日

編集者　千曲川水系古代文化研究所

発行者　上水内郡中条村教育委員会
〒381-32　長野県上水内郡中条村中条
ＴＥＬ　0262（67）2659

制作者　森　出　版
〒381 長野市吉田４－３－４ピアハウス内
ＴＥＬ　0262（43）1201